
正道の系譜

ぎやぎやす子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正道の系譜

【Nコード】

N2369BA

【作者名】

ぎゃぎやす子

【あらすじ】

実の両親を知らない秋月直樹の紆余曲折半生。

裏世界に入るまで・入って後、恋愛や友情、家族、師弟関係等いろいろ…。

各所に暴力描写が入ります。

フィクションでもノンフィクションでもどちらでもお好みで。

某所で連載していたものを加筆・修正したものです。

正道の系譜

この少年は、この地に引つ越してきて今日で5日目。

5日前までは東京で暮らしていたが、両親の仕事の都合でこの関西に移り住むことになった。

14歳のこの少年は、身長がすでに180センチほどある。

ちんちくりんの詰襟の学生服を一番上まで留めて、眼鏡を掛け、ぴっちり横分けのヘアスタイル。

彼の名前は、秋月直樹。

直樹は東京在住の頃、とても偏差値の高い中学に通っていた。

関西に移り住むことになり、学校のランクが落ちたような気がしていたが、彼にはさほど問題はない。

強いて言うならば、この賑やかな街が肌に合わないかもしれない。

5日目でそれくらいの判断をする程度。

要するに、完璧なほどにスクエアなステップを踏みしめる直樹には、それほど問題ではないということだ。

その日家に帰ると、珍しく父親がいた。

「ただいま帰りました。お父さん」

「…うむ」

直樹は幼い頃からこの父が「ああ「うむ」、経営論、教育論以外を口に出しているところを見たことがない。

この家での直樹の立場。

「お父さん」と呼んだこの父は、実の父親ではない。母も。

直樹は3歳の頃、この家に貰われてきた。

父親が経営する不動産・建築関係の会社、これを継ぐべくこの家にやってきたのだ。

義理の父、義理の母というものが本来、養子に対してどのような教育をするのか直樹は知らない。

しかし彼らを『本当の父と母』、そのように思い、この会社を継ぐべく、両親の財力をフルに活用した教育方針・教育理念を一手に引き受け、この家で過ごしている。

この日は珍しく、父も一緒に夕食の席に着いた。

「直樹、今度の学校はどうだ」

そう問う父に対し、

「何の問題ありません」

そう答える直樹。

父の事情は分かっている。

父の会社は今回、この関西に足場を固めるべく進出した。

部下に任せるのではなく、自らがこの進出に関わるということがどれだけ社運を賭けてのものなのか。

それを考えれば、賑やかさが合わない、言葉が合わない、学校のリンクが少し落ちた、などということは直樹にとっては本当に、何の問題もないことなのだ。

母も直樹に言う。

「何か不満があるなら、前の学校に戻ってもいいのよ」

「いえ、大丈夫です。お母さん」

母とする会話はいつもこのようなもので、後付けされるようなものばかり。

それも直樹にとっては、何の問題もない。

お手伝いさんが食事の用意を済ませ、3人で食事をしていると玄関からバタバタと音がした。

バタンツ！と勢いよくドアを開けて入ってきたのは、ドロだらけの弟の慶也。

直樹の3つ年下の弟だ。

慶也は、直樹がこの家に来た翌年に生まれた、両親にとっては本当の息子。

彼は関西に来てすぐにリトルリーグに入り、毎日毎日野球の練習に明け暮れている。

勉強の方かというとそれほど悪くはないのだが、父の設けている高さには到底追いつけない位置にいた。

食堂に入ってきた慶也は父を見て、ハッとして俯いた。

今日も父はいないものと思いついていたのだろう。

「慶也！お前はいつまでそんな下らんことをやっとなんだ！？そんな時間があるなら、塾にでも行きなさい。

野球みたいなものが、将来身を結ぶと思っているのか？

私の息子がクズでは面目が立たんだぞ！？」

こういった言葉も、直樹は聞き慣れている。

しょんぼりとした慶也に母が駆け寄り、

「さ、ごはんがあるから着替えてきなさい」

その遣り取りを横目に、直樹はさつさと食事を済ませ、
「それではお父さん、勉強がありますので失礼します」
「…うむ」

そうして、直樹は2階の自分の部屋へと入っていくのだ。

自室に入ると、直樹にはまずやることがある。

学習机の鍵の掛けられた引き出しを開けて取り出したのは、1冊のノート。

その表紙に書かれているのは、

『正道の系譜』

……僕は本当の両親や祖父、祖母を知らない。
だけど、僕にも間違いなく親はいた。

そこから受け継がれているものが、必ずあるはず。

そう思い、書き始めたこのノート。

日々あったことなどを、書き連ねている。

—— 『お父さん』 『お母さん』

この家はとても裕福です。

きつとこれも、お2人から継承された運なんでしょう。

まだ見ぬお2人のため、僕は一步一步駆け上がります。
見ていてください。

そしておじい様、おばあ様にも、見事に成し遂げる僕の成功を自慢
してください。

僕はやってみせます。――

切欠 1

直樹は知っていると云う。

この世の中はフルイのようになっている、と。

このフルイは下に落ちてはいけないもの。

残ってナンボのもの。

一歩外に出れば、上下左右へとフルイにかけられる。

細すぎれば落ちてしまう。

太りすぎれば潰される。

必ず枠の中に残り、行く末は枠になってみせる、と。

その日も直樹はいつものように、夜中の1時までずっと勉強をしていた。

睡眠時間も大事だと信じている直樹は、必ず6時間は眠るようにしている。

朝7時に起きる彼にとっては、ギリギリの時間。

時計を見、そろそろ寝ようかとベッドに入り掛けたが、その前に水を一杯飲もうと自室を出て台所に向かう。

その途中、父母の寝室から聞こえてきた、声。

「……いいですか、あなた。慶也が本当の息子なんですか？あの子にはもつと頑張ってもらわなきゃいけないじゃないですか。」

今のはのびのびと野球をやらせていますけど、後々はもっと頑張らせます。

だからあの子にも、もっと目を向けてやってください」

「…分かってているが…どうしても要領の良い直樹にばかり目が行ってしまっんだ。

慶也に頑張ってもらわないといかんの、私も分かっている」

「……………」

直樹がこの会話を耳にしたのは、これが初めてではない。
そして、その度に思う。

……僕が一番、分かっています。

今の慶也は直樹にとってダークホースでしかないが、少しの違いで一番のライバルになる。

……競争だろ。
分かっているよ。

しかし直樹にとって、慶也は本当に可愛い弟でもあるのだ。

直樹はそつとその場を離れ、台所には向かわずに自室へと引き返した。

……何の問題もない。
僕が、頑張り続ければいい。

音を立てないようにドアを閉め、布団に潜り込んで息を潜め、……

そして思い出す。

そういえば前にアレを聞いたときも、なかなか寝付けなかったなあ…。

その夜、直樹は最後に3時過ぎを指した時計を見て、眠りに就いた。

この街に移り住み、もう一月が経とうとしている。

一月もあれば慣れるだろうと思っていた街。

しかしその風に、直樹はまだ吹き晒されたまま。

転校先のこの学校は、さすがに進学校。

授業中は水を打ったような静けさで、教師の声と鉛筆を走らせる音のみが耳に入ってくる。

しかしあの、休憩時間の賑やかさ。

みんなの声のデカさ。

登下校の騒ぎっぷり。

これに、直樹はいまだについて行けずにいるのだ。

ギヤーギヤーギヤーギヤーとデカイ声で……

そんなことを思いながら登校している直樹の横を、5〜6人の集団が追い越し、駆け抜けて行く。

「オイッ！何やっとなねん！！早よう来い！

俺らより教室に入るのが遅かったら、ケツキックやぞー！」

振り返ると、すぐ後ろから何人分ものカバンを持たされた同じ学校の生徒が、ヒイヒイ言いながら走って来た。それを見て直樹は眉を顰める。

何だ、イジメか？

この学校にもやっぱりあるのか。

…みんな、ヒマでいいね。

こんな時間のロスに付き合わされないようにしないと。こっちで暮らすのも2、3年の辛抱だろうから。

直樹は標的になっているその彼が、自分のクラスメイトであることも知らない。

他人には全くと言っていいほど興味がないのだ。

と、その時。

直樹の背をバンツ！と叩いて追い越していく人がいた。

「！？」

驚いて顔を見ると、同じクラスの女子。

名前は、久保紀子。

「秋月くん、おはよう！」

彼女は昨日行われた席替えで、直樹の前の席になった子。

「あ、おはよう……」

そう答えながら、何かと自分に話しかけてくる彼女を直樹は密かに

苦手と思い、要注意人物だと自分のリストに載せている。

教室に入ると、直樹は自分の机の上にカバンが置かれていることに気付いた。

「あー、ゴメン。今どけるね」
そのカバンは紀子のもの。

彼女はまた笑顔で直樹に話しかけてきた。

「ねえねえ秋月くん。『ひょうきん族』 見てる？」

テレビを全く見ない直樹は、紀子が何を言っているのかサッパリ分からない。

…ひょうきん族？

何だ？ 暴走族の一種か？

そんなことを考えている。

「アレ？ひょつとして見てないん？私なんか早々にドリフからひょうきん族に乗り換えたんやでえ。」

ブラックデビルがさんまやない時から、高田純次の時から見てねんで！」

「????」

直樹は彼女の言葉がサッパリ理解できない。

「……えつと……今、人と悪魔と魚が出てきたことは分かった。
マンガかな？」

そう聞き返す直樹。

「え~~~~ッ!!マンガとちゃうよ!

土曜の8時からやってんねんで!見てみなよ。
マンガって!」

ちよつと考え、紀子は続けて、

「秋月くん、マンガとか見るの?」

「……マンガを見る?

本屋で置いてあるのを見たことはあるよ」

直樹はこの地方の『見る』『読む』の意味がイマイチつかめていない。

紀子はそんな直樹に、

「あ、そうや!」

と言って、カバンをガサゴソし始めた。

「さっき返ってきたから、コレ貸したげるよ」

直樹の机に置かれたのは『ナイン』というマンガ本。

「コレ全5巻やねん。マンガとか読まへんのやったら、手頃な冊数
やる。」

結構面白いから読んでみて」

「……………」

されるがままの直樹。

え——…そんな時間ねえよ……。

そう思いつつ、言い返せない。

世間はやはり、広い。

そう思った。

切欠 2

直樹はマンガを手に取り、表紙から裏表紙へぐるりと眺めてみた。

マンガなんて、子供の頃に隠れて読んだ『ドラえもん』以来だ……。

そのマンガはどうかやら野球マンガのよう。

直樹は帰り道、本屋で参考書を買うついでに、『野球入門編』という本も買ってみた。

何しろ野球のルールなんて全く知らないのだ。

家に帰ると早速部屋に閉じこもり『野球入門編』を素早く読み、ルールを頭に入れる。

それから、紀子に借りたマンガを読んでみる。

「……………」

そのマンガは、中学まで陸上・柔道のエキスパートだった2人が、高校で野球部に入り、甲子園を目指すという話だった。

最初はナナメ読みくらいにしよう、そう思っていた直樹。

しかし自分でも信じられないくらいに、のめり込む。

ほぼ初めて読むマンガに、夢中になってしまう。

あっと言う間に、一気に5冊全部を読み切ってしまった。

切なくもあるその青春ストーリーに、直樹は今までにない感動を覚えた。

その日の勉強は、終始何となくフワフワとした気分。

直樹はそれを早めに切り上げ、もう一度マンガを全て読んでから、

その日眠りに就いた。

次の日、直樹は朝一番にそのマンガを紀子に返した。

「あ、これ、ありがとう」

「早ッ！ もう読み終わったん？ 急がんでいいのに。どうやった？ 感想は」

え！ と思う直樹。

「感想文、書いた方がいいの？」
その返事を聞いて、笑い転げる紀子。

何か間違えた、と気付いた直樹は、
くそー……人と接するのには、僕にはちょっと限界があるな……
などと思っている。

「感想文なんかいらないよ。面白かった？」

「うん、面白かった」

いつになく、大きめの弾んだ声で返事をする。

「私、マンガいっぱい持つてるから、面白いの貸したげるよ」

「あ、ありがとう」

本当にありがたいと思っているが、あまり貸してもらって時間を取られるのも堪らないあと、冷静に思う直樹もいる。

と、その時、紀子はイキナリ立ち上がり、
「秋月くん、ちょっと立ってみて」

直樹は言われるまま、立ち上がった。

紀子はそんな直樹の正面にピタツとくっつくように立ち、自分の頭頂部に手を当てて、

「ねえ秋月くん、身長何センチあるの？」

「えつと……、こないだ測ったときは確か、180だったかな」

「えー！　そんだけ身長あるんやったら、バレー部に入りなよ！

私の家ってね、その通りの商店街にあるスポーツ用品店やってんねんよ。

親が何か運動せなアカン言うてね。私、バレー部なんやわ。

秋月くんもやりなよ」

直樹はこういう意見に対しては、いつでも意見を持ち合わせている。僕には、娯楽に費やす時間などない。

そう答えようとすると、紀子が続けて言った。

「今日は土曜日だから、2時から体育館で練習してるから。

一回見においで。

そんだけ身長があつたら、何かやらなアカンよ」

「いや、いや、僕は……」

と言い掛けた時、がらりとドアが開き、担任が教室に入ってきた。

「……………」

断りきれなかった直樹。

自分の席の前に座る紀子をじーっと見ながら、

この子は一体何のためにこんな進学校へ通ってるんだ？

成績の方もさぞかし……

巻き込まれちゃダメだ。

そんなことを考えていると、担任の教師が皆を見回しながら大声を張り上げた。

「こないだの実力テストの結果を配るぞー」

自分が何番なのか、今どの辺りにいるのがちゃんと確認せえよー」

それは直樹が待っていた瞬間。

前の学校では常に1番だった直樹。

この学校での自分がどんなものなのか、早く知りたい。

配られたその用紙には、学年全員の点数のみが表になって高い順に並べられていた。

右上には自分の名前と点数。

生徒たちはこの自分の点数と、表の点数を見比べ、自分の順位を知る。

直樹はまず、表の1番上を見してみる。

そして自分の点数と見比べてみる。

直樹は学年で1番だ。

それを確認した直樹はホッとした。

それから冷静に、2番の点数を見してみる。

しかしその点数を見て、直樹はギョツとした。

自分とたったの5点差で、2番についている人間がいるのだ。

……嘘だろ。

あのテスト、結構難しかったぞ！？

くっそー！どこのどいつだ！？

この学校、侮れねえ。

そんな直樹の耳に、前から同じように「くっそー！」と言う声が聞こえてきた。

その声の持ち主である紀子がバツと振り返り、

「ねえ秋月くん、何番？」

直樹はまだ動揺しつつ、一番だったからまあいいか、と紀子に自分の用紙を見せる。

すると、紀子から信じられない言葉が。

「あ！私を抜いたの秋月くんやね！くっそー！ずっと1番やったのに！！」

次は負けへんよ！」

そう言って紀子はニコツと笑った。

「……………」

……何言っただ、この子。

そう思いながら、紀子の用紙を奪い取りその点数を見てみると。

「！！！！」

『成績の方もさぞかし…………』

つい先ほどそう思った彼女が、自分と5点差で2位につけている。

驚いた直樹は思わずガタツと席を立ち上がり、紀子の顔を凝視してしまった。

机上での勝機に危機を感じる前に、
マンガ本をやたらと所有し、クラブ活動までしているこの子が、僕
と5点差……！！？

直樹の心臓はドキドキしている。

直樹はこのドキドキが、自分の戦々恐々とした心境だと思い込んでいるのだ。

そして彼はこの時初めて、紀子が振り返るたびに髪からイイ匂いがすることに気が付いた。

この日は土曜日。

学校の授業は午前中のみ。

直樹の土曜日の昼は本来なら勉強漬け。そしてそうしなければならぬのが直樹のルール。

しかし、この日は昼食を済ませると急いで本屋に駆け込む。

そして購入したのは『バレーボール入門編』

直樹は店を出るとすぐに包装を破り、その場でバレーのルールを頭に入れる。

自分自身、今何をしているのか分かっておらず、そしてそのことに気付いてもいない。

気の向くままに身を任せている、それだけ。

その足で向かった先は、紀子に言われた学校の体育館だ。

中からは大きな声やボールの音がひっきりなしに聞こえてくる。

入口からそつと覗いてみるとそこではバスケット部、バレー部、卓球部が練習しているのが見えた。

バレー部の方を見渡し、集団の中に紀子を見つけた直樹はその場に

立ち尽くし、ただただ紀子のことを見つめている。

今話しかけたら、怒られるよな……

そう思い、タイミングを見計らっている。

1時間ほど経った頃、バレー部員たちが休憩に入った。

今だ！と思い、紀子の元へ駆け寄ろうとした直樹は、しかしその視界に入ってきた光景に足を止める。

紀子が男子バレー部員と仲良く談笑しているのが目に入ったから。

「……………」

ここで、直樹はようやくいつもの自分を取り戻した。

……アレ？

僕は一体何をしているんだろう。

何をしようとしてんだ？

そしておもむろに向きを変え、体育館を後にする。

……チクショウ。

一体何時間ソンしたんだ！？

クソッ！

やっぱり世間は、やたらと広い！

そう考えつつ、モヤモヤとする自分の心境を振り払うように家へと帰る。

遅ればせながらやってきた、本来の土曜の午後。
机に向かい、己を取り戻したと信じ切っている直樹は、自分が何故
今、不貞腐れているのか分からないまま。

パキン

ポキッ

シャーペンの芯が、やけに折れる。

何でこんなにイライラしてるんだよ？

あー、もう！

教科を変えれば多少気分も変わるだろうと本棚に手を伸ばした時、
背後からノックの音がした。

「はい」

直後部屋の中へ飛び込んできたのは、弟の慶也。

「兄さん！コレ見て、コレ見て！！」

慶也がバツと広げて見せたのは、背番号が付いた野球のユニフォーム。
ム。

大きく『5』と書かれた、ユニフォーム。

「兄さん！入ってすぐにレギュラー番号もらっちゃったよ！スゴイ
でしょ！！」

喜び、飛び跳ねるように喋る慶也に、直樹は笑顔で答える。

「おー！スゴイじゃんか！」

そして頭の中を駆け巡らせる。

先日、野球入門の本を読んだばかりだ。

5番ってことは、

- 1、ピッチャー
- 2、キャッチャー
- 3、ファースト

……

「サードだ！サードだろう！？」

そう言った直樹に、慶也は大喜びで

「そう！サード！！」

そう叫ぶ。

「スゲエな。入ってそんなに経ってないのに、もうレギュラーって頑張ったな！」

すると飛び跳ねるのを止めた慶也は、肩を落として俯いた。

「……でもね、入って間もない僕がレギュラー取っちゃって、前のレギュラーの高橋くん、怒ってるんじゃないのかな……。
嫌われたらヤダな……」

それに対し、直樹は即座に返事をする。

「いいか、慶也。そんな気持ちでいるのなら、自分からレギュラーを外してくれって言いなさい。」

野球っていうのは9人でやるスポーツだろう。チームプレーが一番大事なんだよ。（↑『野球入門編』で得た知識）

その高橋くんだって、次はきっと慶也より上に行くよう頑張ってく

るんだよ。

慶也がそんなことを考えていたら、必死で競争した高橋くんにも失礼だろう？

胸を張って、堂々と試合に臨みなさい。

今の慶也にできることは、高橋くんを気遣うことじゃない。全力でチームのためにプレーすることだろ？」

直樹の言葉に、慶也はこくと頷いた。

「うん、分かった。

レギュラーになったご褒美に、お母さんがグローブも買ってくれて言っただ。

僕、頑張るよ」

「うん、それが一番だ」

慶也はにこっと笑うと、そのまま部屋を飛び出して行った。

「……………」

今まで慶也に対して、何度かこういうことを言ったことのある直樹。この後、必ず鬱になる。

……協調性。

それを問われたとき、僕なんかより慶也の方が断然高いレベルで生きている。

僕が言っていることは、全て本で得た知識。

父は直樹に諭すように教え込む。

友など必要ない、と。

…友など、必要ない、と。

しかし直樹は思うのだ。

友人というのは、一生の宝でもあると言いますよ。

……お父さん。

「……………」

こうやって、いつも1時間は頭を抱え込んだまま。

やがてハッと気付いて時計を見ると、すでに時刻は8時前。
その針を見て直樹は思い出した。

……そういえば、久保さんが8時からテレビ見ろって言ってたな。

直樹は悩むのを止めて立ち上がり、そつと階下へと降りていく。
父がいないことを確認し、リビングに行くと、慶也がすでにテレビ
の真ん前を陣取っていた。

「アレ？兄さんテレビ見るの？」

「あー、イヤー、ちよつとー……うーん……ちよつとね……」

要領を得ない答えを返した直樹に、慶也は、

「兄さんも一緒にコレ見ようよ。めちやくちゃ面白いよ」

テレビの画面を見ると、番組のタイトルが出ている。

『オレたちひょうきん族』

あ、コレだ。

直樹はソファに座り、慶也と一緒にその番組を見始めた。
そしてまず、思ったこと。

……暴走族の一種じゃねーんだな……

直樹の目に飛び込んでくるもの。

大人たちが大勢集まり、馬鹿のフリをしながら水浸しになったり、
粉まみれになったりしている。
そんな様。

初めて見るそうだった番組に度肝を抜かれながら、知らず知らずの
うちに腹を抱えて笑っている。

やっぱり世間は
やたらと

広い！

直樹の持つ軸はへし折れないまま、何かに囲われていつているよう
にも見えた。

切欠 3

世の中は自分の思っているものと、何かが違うような気がする。
直樹はそんなことを考え始めた。

マンガで読んだあの、ボールを投げて打って走る野球というものを、
慶也は仲間と一緒にやってるんだよな。
ひよっとして今の僕でも両手を広げて歩いているだけで、向こうか
ら何か引つかかってくるんじゃないか？

楽しいこと。
面白いこと。

アレやコレやと考えながら登校する直樹の背を、今日もバンツ！と
叩き、

「秋月くん、おはよう！今日も大きいね！」
そう言いながら駆け抜けていく、紀子。

先日まで要注意人物だった彼女は、今は直樹の注目の的だ。

ちゃんと遊んで、勉強もして、僕とたったの5点差…。

一度、勉強の仕方を聞いてみようかな。

教室に向かいながらそう考え、先日のバレー部の見学を思い出す。

何だか分からないけど、イライラしたな…
何だよ。

朝から起伏に忙しい直樹。

教室に入り、席に着くと、今日は自分から紀子に話しかけてみた。

「あのね、僕テレビ見たよ。『オレたちひょうきん族』」

「あ、ほんま。面白かったやろ？」

「うん、びつくりした」

こんな他愛のない会話をした経験など、今までなかった。

紀子の仕草一つひとつに直樹もつられ、頭を上下させている。

朝からとても、忙しい。

この日も何事もなく、直樹は全授業を受け、帰宅の途についた。しばらく道を行くと、先の公園から数人が直樹のことをじっと見つめている。

それに気付かず前しか見ていない直樹に、その中の1人が、

「ちよつとー、秋月くん」

直樹が顔を向けると、そこには5、6人の集団＋荷物をたくさん持たされている1人。

「ちよつとコツチへおいでやー」

その言葉を聞いた直樹は、しかし自分は彼たちに用はない、そう判断し、さっさとそこから立ち去ろうとした。

が、

「オイッ！ちよつと待てエ言うつんねん！！」

少し荒くなつた声に、直樹は足を止めて振り返った。

「。。。不動産。。。建設の御曹司さん。

用事がある言うつんねん」

そう言った彼らに、直樹はピクリと反応して歩み寄る。

「……何？」

この状況がどういうものなのか、これまで人と接してきていない直樹にはイマイチよく掴めていない。

そんな直樹に、リーダー格のような男子が言った。

「あんな、秋月くん。こないだの実力テスト、1番やったんやってな。」

スゴイねえ。

僕は君が来るまで、学年でずっと2番やったんよ。

久保には勝てへんのやけどなー」

紀子の名前が出て、ニコツとする直樹。

その男子は続けて、

「何言うてるか分からへん？また2番になりたいなー言うてるんや君、どうしたらいいか分かるやろー？」

しかし、あまり意味が分からない直樹は思った通りを口にする。

「じゃあお互い頑張ろうよ。また3ヵ月後にテストがあるじゃん。今度も負けないよ」

それを聞いた相手の彼は、明らかにイラッとした顔で叫んだ。

「誰がそんなこと言うてんねん！オマエ、アホか！！」

ワザと点数落とせ言うてんのや！！」

「え？そんなことできないよ」

直樹が即答すると、その彼はフツと鼻で笑った。

「昨夜、君のお父さんがウチに来てたよ？」

それを聞き、顔つきの変わった直樹。

すると取り巻きが、

「井本くんのお父さんはね、。。。市の。。。長なんやで？地元の名士
いうヤツや」

…コイツの名前、井本っていうのか。

直樹はその時、紀子以外の同級生の名前を初めて覚えた。
2人目だ。

「そうそう。僕のお父さんと銀行に勤めている叔父さんに、君のお
父さんが頭を下げて来てたんや。昨夜ね。

今度計画中のショッピングモールの話、デパートの話。

あの仕事は君のお父さんの仕事にならないと、困るんちゃうかなー
？」

直樹を見上げながら鼻でモノを言う彼に対し、直樹は完全にスイッ
チが入る。

「……………ねえ、ソレって談合だよな」

それを聞いた井本は、

「だんごう？」

すると周りの取り巻きたちが

「だんごうって何だ？」

とヒソヒソと話し始めた。

「君さあ、そんなこと大きな声で、こんな所で話しちゃって平気な
の？」

ソレって犯罪だよ。

ウチの父を攻撃したら、間違いなく君のお父さんと叔父さんも捕ま
っちゃうよ？」

取り巻きの1人がカバンから辞書を取り出し、『談合』を調べている。

「ここには『相談する』としか書いてないぞ!？」
密かな声。

それを聞いた直樹、『さすがは中学生……』などと思っている。

「知らないのならいいよ。家に帰ってお父さんに言ってみな。今、君が僕に言ったことを。相談に乗ってくれると思うよ?」

そして直樹は、カバンを背負わされている彼をチラリと見た。

「それと君さ。何でこんなことやってんの? アルバイト? 時給いくら?

イジメられてやってるんだったら、今の君は相当なカスだよ。

僕は君のことを、とっても白い目で見てるから。

移るとやだから、僕に話しかけないでね」

そう言い残し、直樹はその場からさっさと立ち去った。

直樹は心の中で拳を作る。

負けてたまるか!!

蹴落とされてたまるか!!

思春期の直樹。

それと同時に、紀子のが頭を過ぎる。

彼女の顔を思い浮かべ、口角を少し上げながら何となく両手を広げ

て家に帰った。

接触

直樹は今日もいつもと同じ時間に登校し、いつものように上履きに履き替えた。

その瞬間、何だか足元が冷たいような気がしたが、考え事をしていた直樹は気に留めることはない。

教室に入り席に着いても、彼はまだ考え事を続けたまま。

「おはよう、秋月くん」

その声にパチツと反応し、考え事を止める。

「おはよう」

ここまで来ても、直樹はまだ紀子の存在が自分にとってどんなものなのか、よく分かっていない。

ただ、彼女と喋ることは楽しい時間であり、そして学業以外に学校に来る意味の一つ。

それくらいのことには、気付き始めている。

紀子と話していると、

…… 大波・小波。

心地良いそよ風が、直樹の心を攫うように撫でて行く。

「ねえ、秋月くん。何でこないだ体育館来なんだん？」

「…行ったよ」

うん。

確かに行った。

「でもやっぱり、僕は運動はちょっと……」

あの時、何故途中で帰ったのか。

その理由を紀子にどう説明していいのか分からない。

直樹は紀子と遣り取りをしながら、カバンから教科書やノートを取り出し、机の中にしまい始めた。

しかし机の中に手を突っ込んだ瞬間、何だか手が濡れたような感覚。

……あれ？

するとその時、紀子が、

「あッ!!」

その声にびっくりして彼女を見ると、

「秋月くん、上履きが真っ黒やん！何コレ！？墨汁ちやうの!？」

え!?!と慌てた直樹が机の中から手を出すと、その勢いで指先から何かがピンツ!と撥ねた。

あれ!？

紀子を見ると、彼女の制服と顔に、黒い斑点。

どうなっているのか分からない直樹は、机の中を覗きこむ。

と、その中は墨汁でヒタヒタに浸かっていた。

……え？

そしてもう一度紀子の顔を見ると、顔に黒い跡。

……墨汁。

机の中に突っ込んだ直樹の手も、真っ黒になっている。

「あ！ごめんなさい！」

直樹は叫んで、ポケットの中から取り出したハンカチで紀子の顔を拭き始めた。

しかし慌てたせいで、直樹はその墨汁の付いた手で紀子の腕を掴んでしまい、彼女の制服は真っ黒になってしまう。

呆気にとられる紀子。

パニックになっている直樹。

そこで、直樹はハッと思い出す。

昨日の帰り道に起こった出来事を。

あいつらだ……！！

「久保さん、ごめんなさい。制服は弁償するし、後でちゃんと謝るから。」

ちよつとごめんね」

直樹はそう言いおき、教室を飛び出した。

上履きをぐじゅぐじゅ言わせながら、廊下に足跡を残しながら走って行く。

そして同じ学年の教室を一つひとつ覗き込みながら、昨日の帰り道に会った井本を探す。

が、どの教室にも彼はいない。

くそー！

まだ登校してねえのか！？

そう考えながらハンカチを濡らして教室に戻ると、紀子は女子に囲まれ、大変なことになっていた。

直樹は彼女の元へ濡れたハンカチを持って駆け寄り、
「本当にごめんなさい。制服とか全部弁償するから。ごめんなさい」
謝る直樹に紀子は、

「いいよ、いいよ」

と、笑顔で言ってくれる。

思わずニヤけてしまいそうな直樹。

しかし、ここは真面目に行かないと、と持ち直す。

紀子は自分が墨汁まみれにも関わらず席を立つと、

「秋月くん、とにかくその手エちゃんと洗って、その上履きと靴下脱ぎなよ」

そう言つて雑巾を2枚、直樹の上履きの下に敷いた。

「こうすれば汚れんやろ？」

そして水場まで、直樹について来てくれる。

水場に着くと紀子は、

「秋月くん、まず手洗いなよ」

言いながら、直樹の上履きと靴下を脱がせた。

「うわー、爪の中まで真っ黒になってるやん」

墨汁が広がって真っ黒な顔の紀子は、しかし自分のことよりも先に直樹の世話をしてくれるのだ。

「習字の授業なんかあったっけ？」

私もあの墨汁のキャップ、ちゃんと締めてなくてカバンの中真っ黒にしたことあるわぁ。ハハハハッ！」

直樹のズボンの裾を捲り上げ、足を石鹸で洗ってくれる紀子。

「……………」

……幼少の頃から、自分の世話をしてくれたのは、お手伝いの土井さんだった。

仕事として自分の世話をしてくれていた土井さんとはまた違うこの状況を、直樹は考え込むようにじっと見つめている。

そして天啓のように、心にひらめくもの。

『どうやら僕は、久保さんが大好きらしい』

そう理解した直樹の顔は、たちまち真っ赤になる。

「……あ、自分でするからいいよ」

そう言う直樹に、紀子は、

「いいから、いいから」

続けて、汚れた直樹の足を洗ってくれた。

……ああ……ああ……墨汁よ、ありがとう………！

………って、

違うよ……！

井本~~~~~~~~ッ………！

が、

「……………」

足元では変わらず紀子がぱしゃぱしゃと静かな音を立てながら、直樹の足を洗ってくれている。

その頬には直樹の指から飛んだ黒い墨汁の跡。

「……………」

『今度は僕が拭いてあげるよ』

とは、恥ずかしくて言えない直樹。

「久保さん、ここにも付いてるよ」

「ここにも付いてるよ」

と、2人で墨汁を落とし合っている。

「先生に言うて、上履き貸してもらおうか」

気遣うような紀子の言葉に、しかしそこで直樹のいつものスイッチが入った。

「いや、結構。これくらいのことは自分で打破しないと。今日はそのまま裸足で過ごす。」

その前に、僕はやることがあるから。

久保さん、本当にごめんね。制服は弁償するから。本当にごめんなさい」

直樹はそう言うて、教室に向かって駆け出した。

教室ではすでにホームルームが始まっており、担任が教壇に立っていた。

「おい、秋月。お前、裸足で何やっとなのや？」

それに対し、直樹は応える。

「あの、久保さんはもう登校してるんですが、僕のせいで少し遅れます」

そして視線を流した直樹の目に、飛び込んできたもの。

……井本。

「ああッー!!」

叫ぶ直樹を、井本はポカンとした顔で見つめている。

「先生、ちょっとすみません。彼と話があります」

直樹はそう言つて、井本の正面に立った。

ガリガリの細身だが、身長が180もある直樹が目の前に立つとそれなりの迫力で相手は怯むのだ。

井本は少したじろぎながら、

「な、何や!？」

そんな彼を直樹は真つ直ぐに見下ろし、口を開いた。

「君、同じクラスだったのか。」

井本くん、よくもやってくれたね。久保さんにまで迷惑掛けて」

まず紀子のことを主張した直樹は少し冷静になり、自分の姿を改めて見てみる。

……この学生服は、つい先日買い換えたもの。

それが、墨汁まみれ。

こつということがあった場合、直樹はお手伝いの土井さんに裏から手を回して報告する必要がある。

直樹の家庭では、とても大変なことなのだ。

制服を買い換えるということよりも、何故墨汁まみれになったのか。それを説明するのが大変なのだ。

直樹は井本の机をバンツ!と叩き、

「君、僕と競争するんじゃないかなかったのか?こんなことしてたら、一生僕には勝てないよ?」

安心してよ。仕返しなんか考えてないから。時間の無駄だからね」
それだけ言つて、直樹は自分の席に着いた。

その様子をじつと見ていた担任は状況が飲み込めず、

「ま、まあ何かよう分からんが、仲良うせえ」

そんなことを言っている。

そこへがらりとドアが開いて、紀子が戻ってきた。

「遅れてすみません」

「あー、秋月から聞いた。何やよう分からんが、早う席に着け」
席に戻った紀子は、直樹を振り返って首を傾げた。

「大変なことになったねえ。制服はもう1枚あるから、気にせんでいいよ」

そしてニコツと笑う。

直樹もエヘツと笑い返す。

直樹は、紀子という波に吞まれっぱなしなのだ。

この日、学校から家への報告が一番怖い直樹は、この墨汁事件を何とか遣り過ぐすことに成功した。

……とんでもない1日だった。

腹が立つわ、嬉しいわ……

何なんだ、コレ。

そう思いつつ、いつもの道を下校していた直樹は、昨日の公園の前を通りがかったところで、10人ほどの集団が固まってこちらを見ていることに気付いた。

その中に、井本の顔が見える。

昨日と違い、今日の直樹は自分からその集団に駆け寄って行った。

「また僕に何か用かい？」

すると井本は直樹に詰め寄り、いきなり突き飛ばすと、

「…秋月くん。君は僕らの中で過ぐすっていうルールを、イマイチ

分かってないみたいやな」

「……………」

直樹は冷静に、集団の人数を数える。

「君が何を言いたいのかわからないけれど、あんな下らないことに時間を費やしている君が可哀想でしようがないよ。」

教科書が全部ダメになっちゃったじゃないか。どうしてくれるんだって言いたいのは、こっちの方だよ」

直樹は『人と揉める』ということがどういことなのか分かっていない。

この人数相手にもメゲはしないのだ。

「僕は何もしてへんって言うてるやろ!!」

叫ぶと同時に、井本くんは直樹にタックルを仕掛け、直樹の体をその場に引き倒した。

ザザザッ!!

間髪入れず10人ほどの彼たちが一斉に直樹を取り囲み、殴る蹴るの暴行を加え始める。

ドカッ!

ドカッ!

ドゴッ!

倒れ込んだと同時に眼鏡が外れてしまった直樹。眼鏡なしでは何も見えない。

暴行なんかより、眼鏡を探すことに必死になる。

というより、何より今自分がどういう状況に置かれているのか、理解できていない。

自分が暴力を振るわれるなど、これまで一度も考えたことがないのだ。

「……ッ」

地面に這わせた掌が、眼鏡に届く。

急いで掛けてみると、彼らの足の隙間から見える、カバンをたくさん背負わされている、彼。

……マズイ。

直樹はようやく状況を理解する。

おどおどとした彼の姿を見ながら、
今度は僕が、ああなるのか……。
そんなことを考える。

そして次に考えること。

これ、怪我になったら、お父さんとお母さんに何て言い訳すればいいんだ！？

今日は一体、何て日なんだ！！

暴力の痛みなどよりも心配事がある直樹は、されるがまま。

しかししばらくの暴行の後、それらの手足がピタッと止まった。

それから、遠くの方から聞こえてくる声。

「おー！ いっぱいおるやんけ！。中のヤツらがこんだけおったら、誰ぞ１人付き合ってくれるやろ、パクウ」

「そつかー？コイツらが俺らなんか相手にしてくれるとは思わへんねんけどな」

すると直樹を取り囲んでいる1人が小声で言った。

「ヤバイで。。。中のヤツらや！」

次の瞬間、彼らは蜘蛛の子を散らすようにその場から走り去って行く。

「おーい！待てエヤ！ちやうつて！絡みに来たんちやうつて！！」
その声とは反対側に遠ざかって行く、たくさんの足音。

やがて、目を閉じたまま体を丸めた直樹の元に、違う足音がだんだんと近づいてきた。

「おーい、タケシ。1人残ってんぞー」

声の持ち主は横たわったままの直樹を引き起こし、地面に座らせてくれた。

そこでやっと目を開けた直樹の目前にいたのは、とうもろこしを乗つけたような頭をした1人と、派手な金髪をオールバックにした1人。

とうもろこしの方には眉毛がない。

袴のような学生ズボンに、普通のものよりボタンの多い学生服。

そんな2人が直樹をじっと見ていた。

直樹はハッと我に返り、

…ひよ、ひようきん…！

いや、暴走族だ…！

それは、直樹とは対極線上で生きてきた人との、初めての出会い。

衝撃 1

「お前、イジメられっ子なんか？」

眉毛のないとうもろこし頭の方が、直樹にそう話しかけてきた。直樹はその言葉を聞いて、ハッと我に返る。

イジメられっ子に見えてんのか！？

…マズイ！！

こういうパターンの打破の仕方……
分らない。

直樹はその場で、大きな声で

「くそッ！」

と叫ぶ。

すると今度は金髪のオールバックの方が、

「お前、。。。中やんなあ？何年生？」

「……2年生」

一言言っただけで直樹は立ち上がり、その場から立ち去ろうと一歩を踏み出した。

しかし、

「おう！ちょっと待てエヤ。

アイツら追い払ってやったんやから、俺らに何かあってもエエんと
ちやうん？」

その言葉に直樹は振り返る。

お礼のことだろうと口を開き、

「あ、どうもありが……」

そこまで言いかけたところで、とうもろこし頭がそれを制した。

「イヤ！あ、ちゃう！ちょっと待てエ！！礼なんか言わんでエエ！」
「……………」

……この暴走族は何を言っているんだ？

直樹には他に考えたいことがあるというのに。

しかし、もちろんそんなことには構わないとうもろこしは、

「お前、。。。中つてことは頭エエよな？ほんで2年いうたら俺らと同級やねん。ちよつと頼みたいことがあんねんけど。
お好み奢るから、ちよつとついてきてくれんか？」

直樹はボーツとしながらその言葉を聞いていたが、

……お好みで何かを奢ってくれる？

その一言に反応する。

「え！それって何でもいってこと！？」

あのさ、ウチの学校のセーラー服がいるんですよ！セーラー服が欲しいんです！！」

「……………」

「……………」

……しばらくの沈黙。

やがて、とうもろこしが隣を向いて金髪にこそつと話しかけた。

「…………おい、パクウ。コイツ、ヤバイんちゃうんか？ヘンタイやぞ？ほんまに頭エエんか？コレ。ほんで、何か標準語喋ってるし」

「あのなあタケシ。お前、何回言うたら分かるんや？コイツが喋ってるのはな、標準語やない。関東語いうんや。

標準語いうのはな、アナウンサーがニュース喋ってる時に使ってるのが標準語いうんや。

前も言うたやろ。ドアホ！」

「どつちでもエエやんけ！」

「良くない！1回言うたら覚えろ」

何やらケンカを始める2人。

直樹は早く先ほどの自分に対する暴力を自身の中で完結させたいのだが、取り合えずはそれを置き、2人の遣り取りが終わるのを待っている。

何しろこの2人はセーラー服を買ってくれるかもしれないのだから。

やがてひとしきり言い合った彼らは、直樹に視線を戻して言った。

「セーラー服は高いからよう買わんけど、お好みじゃアカンのか」

「だから！セーラー服！！」

……噛みあわない両者。

すると金髪が口を開いた。

「何や、もうメンドイ。結果、俺らはお前を助けてやったんや。エ

エから黙ってついて来い」

「……………」

彼の言うように、助けてもらったのは事実だな。

そう思った直樹は、黙って彼らについて行くことにした。

どこへ行くつもりなのか、歩き出した2人の後をついて行きながら、カーブミラーや窓ガラスを覗き込む直樹。

自分の顔に傷がないか心配なのだ。

そんな直樹にとうもろこしが、

「しかしお前、コッチ来て間アないみたいやな。この辺のモンは俺らのことを見たら、ビビッて逃げてまうんやけどな。

なあ、パクウ？俺、コイツ気に入ってたで。

背エもデカイし、ケンカやらせたら実はめっちゃ強いんじゃないか？」

ここで、直樹はまず2人に聞かなければならないことがあったことに気付いた。

「ところで、暴走族の君たちが、僕に何の用ですか？」

すると、その台詞を聞いたとうもろこしは目を剥き、

「んだッ、誰が暴走族や！？いつ俺らが『自分は暴走族です』言うた！？勝手に所属させんなや！全く！！」

「???」

……噛み合わない彼ら。

ワケの分からない直樹を連れ、2人はやがて細い通りにある小さな店へ入った。

その店の中には、大きな鉄板がたくさん並んでいる。

そして、とても香ばしい匂い。

うわー……

何だ、このイイ匂い。

そういえばお腹空いたな……

セーラー服よりも先に、食べ物を買ってもらおうかなあ。

直樹は『お好み焼き』というものを知らない。

直樹がぐると見回した視線の先。

客らしき人が、大きな鉄板の上で何か丸いものを焼いている。

あ、分かった！

パンケーキだ。

パンケーキをご馳走してもらえるんだ。

直樹の家はお小遣いというものがなく、必要なものを買うときだけお金を渡されるシステムになっている。趣味も何もない彼はお金など必要ないため、持ち歩かない。もちろん下校の際に買い食いなどをしたことも、一度もない。

2人が座った席に、遅れて直樹も腰を下ろす。

「おばちゃん！いつものヤツ、3つ！」

そう言っとうもろこしは、近くにある冷蔵庫の中から勝手にジュースを取り出すと、直樹にも1本手渡した。

……この人、自分の家のように動いてるな。

この人の家なのか？

でもさつき『おばちゃん』って言ったよな……。

コレ、勝手に飲んじゃっていいのか？いくらなんだ？

初めての経験に戸惑う直樹。

さつき袋叩きにされたことも合わせ、知らないこの2人についてきた自分自身に翻弄されている。

「なあお前、コツチに引越してきてまだ間がないんか？」

「はい。えっと……一月くらいですかね」

「お前、中2やろ？俺らと同級やから敬語なんか使わんでエエんやで？」

ふーん…そういうものなのか…。

直樹は着実に学習している。

その時、金髪が直樹の肩をぽんと叩き、

「何かゴメンな。急にこんなことになってな。

ところでお前、名前何ていうの？

俺はパク。パク・ヨンジ。日本名もあんなけどな、今は名乗ってないねん」

「……秋月直樹」

「直樹、な。覚えた。

お前、イジメられっ子なんか？」

その問いに、ボケツとしていた直樹は我に返る。

「何で！そう見えた！？僕はイジメられっ子なんかじゃない！」

直樹が少し大きめの声で言い返すと、その声にビックリしたパクは、

「お、おう……。イヤ、お前さっきイジメられてんのか言ったら、何も言わなかったから……。」

えらいツツコミ遅いな」

そんな会話をしていると、やがて3人の前に銀の器に入ったモノが運ばれてきた。

2人はそれを、スプーンのようなものでかき混ぜ始める。

直樹も見よう見真似で、同じようにぐちゃぐちゃとかき混ぜる。

よく見るとその中にはエビやキャベツなどが入っており、直樹が想像するものとは様相が違っていた。

パンケーキにいろんなものが入ってる。

何なんだ、コレ……？

直樹の目の前で、2人は器を傾け、それを鉄板の上に広げた。

直樹も急いで同じ作業をする。

ジュウツと小さくいい音がした。

これから一体何が出来上がるのか、直樹は気になってしょうがない。

直樹が鉄板の上を見つめていると、またとうもろこしが話しかけて

きた。

「あんな、実はな、お願いがあんねん」

「その前にお前、名前くらい言えや」

パクの声に、とうもろこしは、

「あ、そうか。俺、岡崎タケシ。転校してきて知らんやろうけどな、この辺じゃ俺ら2人で……、

何か自己紹介するのって恥ずかしいな……」

それに対し、パクはすぐに、

「それやったら、いらんことは言わんでエエ」

タケシは持っていたカバンの中から小学校の問題集を取り出し、何やら恥ずかしそうに直樹を見た。

「なあ秋月。お前、あの学校に行ってるってことは、メツチャ頭工エんやろ？」

俺に勉強の教え方を教えてくれへんか？」

直樹には、タケシの言っている意味が分からない。

「教え方を教えろって、どういう意味？」

直樹は鉄板で焼かれているモノをチラチラ見ながら、そう返す。

「イヤ、理由は聞かんしてほしいねん。俺が勉強を人に教えたいんや」「うーん……」

悩んでいるフリをする直樹。

話は半分ほどしか聞いていない。

今は鉄板の上の変型パンケーキに夢中で、それどころではないのだ。本当は一瞬たりとも目を離したくはない。

「……要するに僕に勉強を教えてくれってこと？」

するとタケシはすぐに言い換える。

「教え方を教えてくれ言うとんや」

そこでパクが再び口を挟んだ。

「イヤ直樹、お前の言うてる通りでエエ。コイツはな、大分アホやからな、どう説明していいか分からへんのや。」

おいタケシ、もう少し上手いこと説明せんかい。

今、直樹が言うたようにお前が理解せなんたら、人に教えることなんかできへんやろ」

「あ、なるほどな」

パクの言い分を聞いて、タケシは納得したようだった。

しかしそんな会話などに構わず、

「ねえ、コレ、焦げたっぽいニオイがしてくるよ?」

鉄板の上を監視していた直樹が報告する。

「あ、ほんまやな」

そう言つて、2人は大きめのスプーンのようなもので、それをくるツと引つ繰り返した。

「お前もやつてみい」

食べるものを自分で作っている。

そんなことは生まれて初めての直樹は、同じように引つ繰り返そうとしたが、

ぐちゃッ!

直樹の引つ繰り返したものは半分に折れ、千切れてしまった。

「いや、まだ修正は効くでー」

そう言つてタケシは直樹のお好み焼きをぎゅっぎゅっと押し始める。

「ほんまは押したらアカンのやけどな」

見事に丸くなつたお好み焼きを見て、直樹は

「君、スゴいねえ。料理とかするんだね」

感心する直樹に、タケシはまた先ほどの話を始めた。

「なあ、頼むわ。帰る時、1時間でエエんや。俺に付き合ってくれんか？」

そこで直樹はようやく考え始める。

……うーん……1時間か……
1時間か……

そんな時間、ないんだけどな。

そして過去を辿り、先日慶也にした説教を思い出した。

……協調性

お父さんは、友など必要ないと言う。

でもこれを機会に、友ではないところから協調性を学べるんじゃないか？

人の道というのは、大体決まっている。

僕の信念は、これくらいじゃ揺るがない。

たった1時間だ。

直樹はそんなことを考え、しばらく悩んでみた。

衝撃 2

やがて直樹がふと横を見ると、パクは焼き上がったその変形パンケーキに、何かをかけ始めた。

あ、ソースだ。

これはソース。

明らかに、パンケーキとはモノが違う。

先ほどの悩みをスッ飛ばす、最近気が散りやすい直樹。

パクは焼き上がったものを皿に載せることなく、そのままダイレクトに食べ始める。

それを見て行儀が悪いと思う直樹は、しかし思い直すのだ。

でもこういう世界があることを、僕も知ってるよ。

素手で食べた方がおいしいものだってあるんだ。

知ってる、知ってる。

「ねえ、食べていい？」

尋ねた直樹に、タケシは、

「おう、食べて食べて。俺の奢りやで」

その返事に、直樹は同じようにソースをかける。

これは薬味だな。

そう確認しながら青のりをかけ、パクと同じように鉄板の上に置かれたままのソレを1口食べてみた。

瞬間、直樹は度肝を抜かれる。

おいしい……！！

何だ、これは！？

僕はこんなおいしいものに、今まで出合ってなかったのか！！
土井さんは何でこれを避けて僕をここまで大きくしたんだ！？

大袈裟な直樹。

しかし直樹にとっては大変なニュースなのだ。

「なあ、どうや？勉強教えてくれるか？」

タケシのその問いは耳には入ってきているのだが、直樹はそれこそ
それどころじゃない。

未知との遭遇・お好み焼きに無我夢中。

するとその時、店の入口がガラツと開き、同時に大きな声がした。

「あーやつぱりおった！！」

その声に3人は振り返る。

そこには、自分たちと同じ中学生くらいの男子が1人。

タケシと同じように、とうもろこしみたいな頭をしている。

「おーい！マイティー！ここや！やつぱりここにおった！！」

そう叫んで飛び出していく、その男子。

その様子を見て、パクとタケシは立ち上がる。

同時に、パクが言った。

「直樹、バタバタしてごめんな。俺な、お前んトコの学校におるボ
ンボンとか、嫌いやったんやけどな。」

お前、俺ら見てもビビらへんし、俺もお前氣に入っただ。

さっきのタケシの話、OKでエエか？

明日っからお前んトコの学校の校門のトコで待つとるから、よろしく頼むな。

ちよっと俺ら、用事できてん。行かなアカンわ。

アイツらにお前の顔、覚えられたらかなわんからな、お前は裏口から逃げてくれるか」

「おいパクウ！早うせエー！秋月、明日頼むでー！」
タケシが急かし、去ろうとする2人。

直樹は何が起こったのか分からない。

「いや、まだ食べ終わってないよ。途中だよ」

その台詞を聞いたタケシ、

「分かった！お前、天然ボケやる！さっきの状況見て何も分からんのか！

エエから早う裏口から逃げエー！そんなモン、いつでも奢ったる！」

「え！明日も！？」

「あゝゝゝ、もう！明日も！だから早う逃げろー！」

「うん、ありがとう」

直樹のその返事を聞いた2人は、店を飛び出して行く。

ただ直樹は、こんなおいしいものを残していくのは忍びない。自分の分だけでも、と黙々と食べ続けている。

そしてふと、窓から見える光景に気付いた。

少し離れた空き地でパクとタケシ、2人が大勢の学生に囲まれている。

ん？何が始まるんだ？？

直樹の視線の先で、数人がパクとタケシに掴みかかった。

……何だよ、人のことをイジメられっ子呼ばわりして。
イジメられてるのは自分たちじゃないか。

直樹は好み焼きを頬張りながら、その光景をじーっと見つめている。

しかし四角い窓の向こう、多勢に無勢の状況の中、バツタバツタと人を殴り倒していくのはパクとタケシ2人の方。

え！？どうなってんだ！？

次々と大勢いた人数を減らしていく2人。

殴り飛ばされた人たちは、地ベタに転がって悶絶している。
それを見、直樹は今日の自分の姿を思い出した。

「……………」

急いでお好み焼きの最後の一口を口に入れ、2人が言ったように裏口へ向かい、店のおばちゃんに声を掛ける。

「えっと、これ、奢りって言われてるんですけど。僕、今お金持ってないんですけど……」

するとおばちゃんは笑って、

「あー、エエよエエよ。タケシのツケでな。」

アンタ、良い学校行ってんねんから、あんなゴンタクレと付き合ったらアカンで、ほんま。

裏口あそこやから、早よ逃げな。

全く、あんなしてケンカしてるのなんか、いつものことなんや。

アンタみたいな頭のエエ子があんなんとツルんだからアカンのやで？分かった？」

それに対し、直樹は『はい』とは答えない。

「ありがとう」

そう言つて裏口から駆け出す。

……難関に立ち向かうには、いろんな方法がある。
一つじゃない。

あの2人がやっていることも、選択肢の一つ。
僕の知らない道は、まだたくさんある。

直樹は全速力で家へと向かう。
それは決して、逃げているのではない。
早く家に帰つて、今日あったことをまとめてしまいたいから。

直樹は自分の部屋で、いつもの『正道の系譜』に記している。
今日の出来事を。

集団で暴行を受けたことに対する打開策は、まだ見つからない。
殴られた傷は目立つものがこめかみ部分の一つだけだったので、両
面テープで髪の毛と肌を貼り付け、何とか誤魔化すことができた。

……えっと、
彼の名前が、岡崎タケシ。
もう1人が、パク・ヨンジ。

…あ、彼つて外国人なんだ。
そういえば、もう一つ名前があるって言つてたな。
あ、なるほど。在日の人か。
へえ…初めて会つたなあ。

『日本について』の話なんかしてくれるかな。どうだろ…僕は結構右だからなあ。意見が違って言い合いになっちゃうかな……。

そんなことを考えながら、『集団暴行に対する打開策』が見つからないので、ワザと迷宮に入り込む。

今日の墨汁事件のせいで手元に教科書がないから、宿題をすることもできない。

明日には用意しておく、先生が言っていた。

何となく勉強をやる気のない直樹。

先ほど食べた変型パンケーキの姿を思い浮かべ、また早く食べたいかなどと思っている。

そこで彼は、ハッと気付いた。

あの2人が言っていたのは『お好み』で何かを奢ってくれるんじゃないかと、『お好み』を奢ってくれるってことだったんだ。

あの食べ物『お好み』って言うんだ。

そう思った直樹は、そのまま自室を出て慶也の部屋へと向かう。

ノックをして中に入ると、慶也も机に向かい、宿題をしている最中だった。

「ああ、兄さん。何？」

「いや、別に…」

言いながらも、直樹には慶也に何点か確かめたいことがあった。

しかし質問という形にして問いかけると、自分の思う兄の威厳というものに触れるような気がして、慶也に対する問い方を考えている。

棚の上においてあるグローブを取り上げ、手を差し込んでパンパン！と叩いてみる。

それから、どこかで見たことのあるポーズを試してみた。

しばらくそんなことを続け、それからやつと慶也に話しかけた。

「……慶也さあ、お前、お好みって知ってるか？」

『知らねーだろ。うめエんだぞ』

この返事を用意していた直樹に対し、

「えー、お好み？お好み焼きでしょ？知ってるよ」

慶也は宿題を進めながら、こつちを振り向きもせずに返事をした。

直樹といえば、

え！？

『焼き』！？

『お好み焼き』！？

この時、彼は初めて『お好み』の本名を知る。

直樹の驚愕にも気付かず、慶也は続けて言う。

「こつちに来てもう何回も食べたよ？」

ほら、こないだ話したじゃん。あれから高橋くんと仲良くってさ。

高橋くん家ってお好み焼き屋なんだよね。

何度も遊びに行ったから、何度かご馳走になったんだ。

おいしいよね、お好み焼き。もんじゃとは一味違うよ。僕はお好み

焼き派かな」

「……………」

直樹はただただ沈黙を守る。

こう来た時にはこう返す、その想定をしていなかった直樹は、先ほどの決め事を破り、慶也に質問することにした。

「……あのさ、慶也。高橋くんとは友達なのか？こっちに来て、友達できたのか？」

慶也は相変わらず振り返ることもせず、

「うん。もう何人もいるよ。」

こないだも高橋くん家で人生ゲームやってさ。

暗くなっちゃって、帰ったらお母さんに怒られちゃった」

「じ、人生ゲーム！？何だソレ！！」

『人生ゲーム』

その名前を聞いて、とっても重く受け止めている直樹。

「ああ、スゴロクだよ、スゴロク。スゴロクをグレードアップした感じ。」

結婚したり、子供ができたり、お金を稼いでいくゲームなんだ。面白いよ。

お母さんに言って、僕も買ってもらおうかなあ」

双六で結婚で子供でお金儲け！？

何だ！？

何だソレ！！

「……………」

直樹はもう何にも言わずにグローブを手から外し、無言のまま棚に戻し、押し黙ったまま慶也の部屋を出る。

パタン。

ドアを閉めたと同時に、何となくグローブを嵌めていた手を匂ってみた。

臭エ！ 何だコレ！！

部屋に戻り、ドアに鍵を掛けてベッドに横になり、天井を見上げて小さな溜息。

グローブを手に着けると、こんなニオイがするのか。

……無知は罪なんだぞ？

その日、直樹はそのまま眠ってしまった。

衝撃 3

翌朝、直樹は登校しながら悩んでいる。

…昨日みたいに、集団で来られたらどうしよう。

タケシとパクのように殴るなんて犯罪だ。僕にはできない。
というより、僕では勝てない。

うーん……

そして校内に入った頃、一つ気付いた。

今日は紀子が追い抜いて行かない。

何か寂しいなあ…。

いつもはいろんなことのシミュレーションを終えてから眠りに就く
直樹。

昨日はいろんなことがありすぎて、何の準備もできていない。

直樹はそれだけで落ち込んでしまう。

階段をぼちぼちと登り、教室を目の前にした廊下に差し掛かった時、

「秋月くん！」

入口のドアから顔を出した紀子が直樹を呼んだ。

直樹は落ち込みから一瞬にして持ち直し、紀子に駆け寄る。

「え、何？何？」

紀子は神妙な顔で、

「ちよつとこつちに来て」

そう言つて、直樹を理科室へと連れて行った。

「……………」

紀子は喋らない。

直樹も口を開けない。

ヤベー……

きつとあの学生服のことを、ご両親に怒られたんだ。
僕だって言えなかったもんな…

今日の直樹は、元のちんちくりんの学生服姿。

「……………」

俯き加減の紀子の後を、完全に俯いた直樹がとぼとぼとついて行く。
そして2人で理科室に入ったとき、まず直樹が謝ろうと、

「ごめん……………」

そう言いかけたところで、紀子が口を挟んだ。

「秋月くんね、ひよっとしてイジメられてる？」

その台詞に直樹は、

久保さんにまでそう言われた……

と、更に落ち込む。

「あのね、今日私、バレエ部の関係で、朝早くに来たんやんか。
ほしたらね、見てしもうたんよ」

言いながら、彼女はカバンの中から何かを取り出し、机の上に広げた。

それは直樹の体操服。

何故か刃物で切られたように、ギタギタのボロボロ。

それを見た瞬間、直樹は『井本！！！！』と心の中で叫ぶ。

「教室に戻ろうと思ってね。覗いたら、菅井くんが秋月くんの机をゴソゴソやってるから、隠れて見てたんやんか。

ほしたら、その場でカッターでね、……ごめんね、何もよう言わなんだ。

私、ちゃんと証人になるから、先生に言おうよ」

その言葉を最後まで聞いた直樹、駆け出したい気持ちを抑えながら、「久保さん、ありがとう。でも事情があつて先生には言えないんだ」

……父親の顔が、頭を過ぎる。

これは、僕1人で何とかしなきゃいけないんだ。
そうだ、何とかしなきゃいけないんだ。

「久保さんにはいろいろ迷惑掛けちゃったね。本当にごめんなさい。そしてもう一つ、お願い。今回のことは黙っておいて。絶対に先生に言わないで。

そしてもう一つ付け足すと、僕は断じてイジメられてなんかない！
……くっそー！井本め……！

井も……井本……？

……アレ？……菅井？

久保さん、今、何て言った？誰がやったって？」

「え？ 井本くんじゃないよ。菅井くんがやってた」

「……菅井って誰だ？」

直樹はまだクラスメイトの名前を、紀子と井本しか覚えていないのだ。

「えー、ちょっとー。まだクラスメイトの名前、覚えてへんの！？
しゃあないね。秋月くん、冷たすぎるで、ソレ」
そう言われ、またシュンとなる直樹。

教室に戻る紀子の後を、スゴスゴとついて行く。

教室の入口まで来ると紀子は、

「秋月くん、あの人が菅井くん。

絶対ケンカしたらダメやで？」

紀子が指差した先にいたのは、直樹が『イジメられっ子』と表していた、例のカバン持ちだった。

「！？」

近頃の直樹は、見るもの見るものに衝撃を受けやすい。
今回ももれなく驚愕してしまう。

直樹は教室に入ると、ビリビリの体操服を手に、菅井くんの正面に
立った。

「ねえ君。コレ、君がやったの？」

ビクツとする菅井。

「……イヤ、僕じゃないよ」

その反応に、ここでは言いにくいだろうと思った直樹は、彼を廊下
に連れ出した。

足元に視線を落とした菅井に、直樹が問う。

「そんな返事はどうだっていいんだよ。ねえコレ、どういうこと？

井本くんに命令されたの？」

言い寄る直樹に、菅井は語気を強めて

「僕じゃないって！」

「だから、そんなのはいいって言ってるじゃん。

分かった。じゃあこれは警察に持って行って、指紋を調べてもらおう。君もついて来てよ。この体操服に君の指紋、君の手にこの体操服の繊維が付いてたら、間違いないからさ。

器物破損って言ってるね、これは立派な犯罪なんだよ」

「……………」

やがて俯いた菅井は腹を決めたのか、ぼそぼそと喋り始めた。

「…………ごめん。僕がやった…………。」

昨日の件で、イジメが僕から秋月くんに行けばいいと思って、やってしもうた…………ごめんなさい」

それに対し、直樹は尋ねる。

「じゃあこれは、君が単独でやったことなの？」

「…………うん。」

昨日墨汁やったら、秋月くんがうまいこと井本くと揉めてくれたから、このままうまいこと行くなあと思った…………」

直樹は体操服をぎゅっと握り締めたまま、俯いている。

すると近くにいた紀子が、菅井に向かって口を開いた。

「でもそれってどうなん？イジメられっ子からイジメっ子に鞍替えするってこと？」

菅井くんは、

そこで直樹は

「久保さん、ちょっと待って！」

紀子を制し、突然教室の中へ駆け込んだ。

向かったのは、井本のところ。

そして今度は、井本の正面に仁王立ち。

今朝も、朝から直樹にビックリさせられた井本は、座っていた椅子から落ちそうなほどに体を仰け反らせる。

「な、何や!？」

そう言つて直樹を睨みつけるが、そんな彼に直樹は言った。

「井本くん、ごめんなさい。」

昨日の墨汁は君がやったんじゃないか。僕が決め付けただけだった。

ちゃんと確認もせずに決め付けて、本当にごめんなさい。

謝るくらいじゃ許してくれないかな……」

そう言つたと同時に井本の両肩をワシツと掴み、さらにキツ!と睨む。

これでは許してほしいのか何なんだか分からないが、直樹はそんなことには気づかない。

相当引き気味の井本、

「イヤ……分かつたんやつたら、もう別にエエよ……」

直樹の迫力に負け、そう返事をした。

よし、許してもらつた。

それを確認した直樹は、また菅井の元へ駆け出して行く。

そして今度は菅井の肩にバンツ!と手を置き、目を輝かせて言つた。

「菅井くん!君、スゲエな!!」

僕、昨夜イジメに対する打開策を少しだけ考えたんだけど、見つからなかつたんだよ。

君、よくこんな方法を思いついたね!君、天才だよ!!」

言いながら、バンバン!と菅井くんの背中を勢い良く叩く直樹。

「久保さんはああ言つたけどさ、僕は君の方法、間違っているとは思わない。」

僕の前の学校にもイジメはあつた。

きつと世の中、競争なんだよ。

よし、今度は僕が考えなきゃいけない番なんだね!

君が見つけたように、きっと何か良い方法があるハズだよ！
君はスゴイ！スゴイよ！！」

直樹の言葉に、口を開けたままの菅井と紀子。
やがて紀子は笑い出す。

「アハハハハッ！！秋月くん、私はスゴイのはアンタやと思うよ！
秋月くんはさ、イジメられっ子で終わらんと思うわ！

ほんま、笑わせてくれる！！」

ひとしきり笑った後、紀子は付け足した。

「秋月くん、アンタ純度100%、混じりツ気ナシの天然ボケやね
！」

それに対し、

「イヤ……アハハハハハ！」
と返す直樹。

『天然ボケ』の意味が分からず、褒められたと思っているのだ。

直樹はその場で決める。

世の中、学ぶことが多すぎる。

1人じゃ手に負えねえ。

僕も友達を作るぞ！

まずはタケシとパクだ！

……天然ボケの直樹、そこで強く、そう誓った。

社交性
協調性

これらを学ぶ。

まず、慶也に追いつかないと。

この日の直樹は授業に集中できず、窓から校門の方ばかりを見ている。

迎えに来るって言ってたよな。
放課後だよな。

そんな事ばかり考えている。

ボーッとしたまま帰りのホームルームを終えた直樹は、終わると同時に教室を飛び出した。

早く早くと階段を駆け降りながら、しかしハッと気付く。

…何だか僕、えらくガッツいてるな。
もう少し、仰け反った感じで対応した方がいいな。

そう考え、走るのを止めて歩いて校門に向かった。
校門を出たところで周りを見渡すが、あの2人はいない。

……あれ？

確かに迎えに行くって言ってたよな。
聞き間違いか？

迎えに来たって言っただのかな？

そんなことを考えていると、いつもの井本グループがそこを通りがあった。

「ねえ井本くん。昨日帰りに会った2人いるじゃん」

それを聞いてビクツとする井本。

「あの2人ってどこの中学にいるの？何中学？」

すると井本は顔を引き攣らせながら返事をした。

「……秋月くん、昨日は悪かったよ。まさか君が。。。中のヤツらとツレてるなんて思わなんだ。

だから勘弁してや」

勘弁って何だよ？

直樹がふと後ろを見ると、菅井がいつものようにたくさんのカバンを持って立っている。

「ねえ井本くん、イジメられっ子は僕に交代だろ？何で菅井くんがこんなことやってんだ？自分で持ちなよ。

僕はこの後用事があるからさ、持ってあげられないけど」

……ド天然な直樹。

次のカバン持ちは自分だと、外れたところで張り切っている。

直樹のその言葉を聞いた井本は、

「あーもう！分かった！もう止めるよ！」

そう言いながら、菅井からカバンを取り上げた。

他の連中も次々と、それぞれのカバンを菅井から奪うようにして、さっさと帰って行く。

どうしたんだ？ 急に。

直樹には彼らの行動がよく分からない。

その時、1人残った菅井が直樹に駆け寄り、

「ほんまにごめんね！ありがとう！！」

そう言つて、彼は井本とは違う方向に走つて行つてしまった。
「????」

よく分からないけど、最近他人からよく褒められるなあ。
そう思つたが、思考はすぐ次に移る。

井本から聞き出した、あの2人の学校。

。。中学校……

うーん

……知るワケないな。

そう思つた直樹は、今度は職員室へと向かう。

ドアから覗くと、担任の教師が座っているのが見えた。

「失礼します。先生、今からちょっと。。中学校に行きたいんですが、道を教えてもらえますか？」

驚いたのは担任。

「え!?!。中!?!お前、アソコに何の用事や!?!」

「あの学校に2人、トモダチがいます」

鼻息荒くそう答えた直樹。

……確信は持てないけど、まあ、トモダチだよな。

担任は机の上に置いてあつた地図を広げて指でなぞりながら、直樹に言つた。

「……秋月、お前な、こつち来たばかりやから分かつてへんのか
もしれんけど……まあ全員が全員じゃないんやけどな、この学校の
ヤツらは評判悪いぞー」。

友達を選ばなアカンで。

俺らなんか、この学校に転勤になるってのは、左遷って意味やからな。

……ほら、ココや。この地図見て分かるか？」

地図上では、それほど離れているようには見えないその学校。

直樹がいつも行く本屋の近くにある。

「あ、ここなら分かります。ありがとうございます。

ところで先生、さっきの話ですが、友達を選べって言われましたけど、友達を選ぶって誰が選んで決めることなんですか？」

天然の直樹、他意など全くない。

しかしその問いにギクリとした担任は、

「……あー、いやー、…ま、まあそうやな。お前の言う通りや。

スマンスマン。ただ俺は、巻き込まれて悪さするなよっていうことが言いたかったんや」

直樹にとってその答えはQに対するAではなかったが、今はとにかく急いでいる。

ここでゆっくりと論じている時間などない。

「分かりました。ありがとうございます」

それだけ言って早々に切り上げ、直樹はその足でタケシとパクのいる。。中に向かった。

衝撃 4

直樹はバスに乗り、目的地を目指す。

バス停で降りて周りを見渡すといつもの本屋、そしてタケシとパクの学校は視界に入る場所にあった。

直樹はそこへ走り出す。

到着したその学校を見て、直樹はまず驚いた。

塀には赤や黒のスプレーで落書きがされている。

校舎の窓には、ガラスの代わりにダンボールが張られている。

それは直樹が初めて見るタイプの校舎。

……何か、ゴミだらけで汚え学校だなあ

そんなことを思いながら、直樹は堂々と校庭へと足を踏み入れた。

そこで1人の男子生徒を見つけ、話しかけてみる。

「あの、すみません。この学校のタケシとパクに会いたいんですけど、どこにいるか知りませんか？」

僕、2人のトモダチなんだ」

それを聞いた彼は、

「し、知りません！」

と、慌てて逃げ去って行く。

……何だ？

噂では、コッチの人は道を聞くと親切に教えてくれるっていうことだったけど。

随分冷たいな……。

直樹は更に周りを見渡してみる。

すると、今度はタケシと同じような頭をしたグループが、こちらに向かって歩いて来た。

あ！2人と同じ、暴走族の人たちだ！

彼たちなら知っているはず！

そう思い、直樹はそのグループに駆け寄って行く。

「あの、すみません」

直樹が声を掛けると、中の1人が目を吊り上げて睨みつけてきた。

「何じゃワレエツ！？お前、その制服ドコ中や！？高校生か？ウチに何の用事や！？」

そんな威嚇をされても、直樹はへっちゃらだ。

「この学校に、パクとタケシがいるはずなんですけど」

その言葉に、グループ全員が少したじろいだ。

「あ、あの2人に何の用事やねん！？」

直樹は胸を張って答える。

「トモダチだから、会いに来たんです」

「！！！！？」

それを聞いた彼らの態度は、次の瞬間急変した。

「え、えつとねー、アソコに体育館があるやんかー。あの裏にあると思うよ？」

さっき。中のヤツらと裏へ回って行っただから、まだおると思う。こっち側からピーツと行ったら、近いよ？」

……何だ。

コッチの人たちは、暴走族の人たちの方が親切じゃないか。

「ありがとう！」

笑顔で言い残し、直樹は体育館の裏に全速力で駆けていく。

教えてもらった近道から裏手に回ると、果たして2人はそこにいた。パクとタケシ。

それと対峙するように、違う制服を着た2人が立っている。

何やら険悪なムードなのは直樹にも察しがついたが、そんなことは直樹には関係ない。

誰に聞かせたいんだという程の大きな声で、

「おい！パクウー！タケシー！僕から来たよー！！」

振り返った2人に、直樹は駆け寄る。

タケシはそれどころじゃないようで一瞬視線を寄こしただけだったが、パクは直樹を見て驚いたように叫んだ。

「ハアッ！？直樹か！？お前、何でこんなトコにおんねん！？」

「2人が遅いからだよ。遅刻っていうのは一番ダメなんだよ？社会じゃ通用しないんだよ？」

「あ、ああ、ゴメンゴメン。すぐ行こう思ったんやけど、ホラ、お客が来とんねん」

そう言つて、パクは他校の生徒を指差す。

そこで相手の1人が怒鳴った。

「おいお前ら！今日は2対2の約束やったやないか！キタナイやんけ！！」

しかしパクは構わずに直樹に向かい、

「直樹、お前、ようこの学校へ堂々として来れたなあ。しかも1人で。」

お前はヒョロッヒョロのくせに、変に根性があるみたいやな。俺は昨日から、お前のその辺を見切つとったよ。

ところで何や、そのちんちくりんの制服は」

他校の生徒と対峙しながらも、何やらパクは余裕の態度。

相手の男子生徒に親指を向け、直樹にニヤリと笑い掛けた。

「なあ直樹。アイツおるやん。○○中のマイティーって言うねん。何でマイティーって言うか、分かるか？」

「マイティーって、昨日誰かが言ってたよね？」

名前じゃないの？ミドルネーム？」

「あ、いや、そんなややこしいモンとちゃうで？」

コイツな、苗字が鈴木で、下の名前がな、漢字で『私』『茶』って書いて、『しいちゃ』って言うんよ。

『私』に、お茶の『茶』で、『マイティー』ってあだ名付けられとんねん。笑えるやろ？」

それを聞いた直樹、頭の中でまとめ始める。

『私』！？

お茶の『茶』！？

それでマイ・ティー！？

マイティー……！！

「ブフ——ッ！！

ア~~~~ハハハハッ！ヒヤ~~~~！！ギャーッハハハハハハッ！！！！

それ、よく考えたね！」

ダジャレに大爆笑の直樹。

マイティーを指差しながら、大笑いしている。

「お、お前ら~~~~！！」

「な？ 笑けるやろ？」

「ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤ~~~~ッ！！アハハハハハッ！！ヒィ~~~~ッ！！」

「……………」
「……………」

やがて、

「……おい直樹、笑いすぎや。その辺で止めときや」

直樹の大爆笑に引き気味のパクが窘める。

そこでようやくタケシが口を開いた。

「……おい、何や、緊張感ないな！。」

秋月、もう顔知られてしもうたなあ。しょうがないわ。あっちで座って見とつてくれ。すぐに済ますから」

それを聞いたパク、

「タケシ、この後もつと大事な用事あるなあ、そういえば。直樹待たせてもアカンしな、今日は止めとこーや。

おい、マイティー！今日は止めといた方がエエンちゃうかー？」

するとマイティーが叫んだ。

「そがいなヒョウロク玉が加わったところで関係ないわ！今日こそ決めたるさかいな！早よせんかい！！」

「おいおい……ヒョウロク玉って誰のことや？」

コイツが無駄に背エ高いと思うたら大間違いやぞ？コイツはな、俺らの秘密兵器や」

パクは直樹を指差し、続けて言う。

「コイツはこないだ、道端で見つけたアンドレ・ザ・ジャイアント（プロレスラー）のケツを蹴り上げて、『アイタ~~~~！』言わせたほどの男や。

このちんちくりんの学生服とペットリした髪型……これはついさっきまで俺に打たれとつたんや。

ほいで、このメガネはな……これはまー、コイツが目が悪いんじや。知らんぞー？アンドレに思わず日本語で『アイタ~~~~！』言わせたんやからなあ」

それに対しマイティーは即座に言い返す。

「う、嘔吐け!!」

「嘘やと思うんなら試してみい。エエか、アンドレが『アイタ〜』
!』言うたんや。」

蹴り飛ばした後、コイツの靴の先にはアンドレのババが付いた
んやからな!」

話は聞いているが、彼らが何を言っているのかサッパリ分らない
直樹。

取り合えず、パクがマイティーに自分のことを説明してくれている
という意識しかない。

ポカンとした顔で、2人の遣り取りを見つめている。

するとマイティー、

「チツ!!何か萎えてしもうたな…。今日は止めとく。また来るか
らな!」

そう言っただけであつたスクーターに2人で跨り、あっという間に
走り去って行った。

納得がいけないのはタケシ。

「おい!ちよい待てエ!!逃げんな!!俺はやる気マンマンやぞ
ー!!!オーイ!!!」

パクはそんなタケシに、

「まーまー、せつかく直樹が来てくれたんやから、今日はエエやな
いか。」

今は取り合えず勉強の方が大事やないか」

「……まあ、そやな」

そこまでの遣り取りを見学し、直樹は口を開いた。

「ねえ、パクウとタケシはいつもこんなことしてんの?

いつもやってるんだとしたら、相当なバカだよね?暴力って犯罪な
んだよ?

でもスゴイよねえ。人を殴りつけて、それで問題が解決するんなら、それもまた一つ。

スゴイと思うよ、君たち！」

それを聞いて、タケシは微妙な顔で隣を見遣る。

「……なあパクウ。コイツ今、俺らのことを褒めたんか？けなしたんか？ドツチャ？」

「……よう分からん」

直樹はそんな2人の肩をグツと掴んで、

「何言ってるんだよ！僕たち3人、トモダチだろう！！」

直樹の言葉を聞いた2人はしばらく沈黙していた。

が、やがてタケシが、

「お前、気色の悪いこと言うな！」

彼はそう言っ、カバンを拾い歩き出す。

そうして、5歩ほど歩いたところで直樹を振り返った。

「じゃあ秋月、ちょっとお願いやわ。今からやったらパクウの家へ行こう。」

なあ秋月、パクウの家行ったら焼肉食えるぞ」

……ヤキニク

また知らないものの名前が飛び出した。

「何でウチが、銭にもならんお前らに焼肉食わせなアカンねん。アホか。」

でもまあエエわ。じゃあウチへ行こうか」

そう返して、パクも歩き出す。

2人が歩いていく方向へ、直樹もそこについて行く。

……何だ。お好み焼きじゃないのか。

そう思いつつ、

また新しい出会いが……

その予感に胸をときめかせる。

途中2人は自転車置き場へ寄り、それぞれ自転車に乗って直樹の元へやってきた。

パクが直樹に向かって自転車の後ろを指差し、

「よし直樹、後ろへ乗れ。ちょっと遠いからな、チャリで行くで」

直樹は言われるがまま、パクの自転車の後ろに跨る。

「あー、腹減った!!」

そう叫びながら、タケシは先々行ってしまう。

直樹は自転車の後ろで、初めての感覚に戸惑い、そしてハッと気付いた。

「あ、ダメだパクウ！僕、降りて歩くよ」

「ハア？何でや？遠い言うたやんけ」

「自転車の2人乗りはダメなんだよ？」

降りしてくれという直樹に、パクは笑いながら返す。

「ハハハハッ！心配すんな。俺はな、大型自転車免許持つとんねん。捕まりやせんよ」

「嘘だ！自転車に免許証なんかないよ」

するとパクはひとしきり面白そうに笑って、自転車のスピードを上げた。

「あんな直樹。お前、そんなに型にハマッていてオモロイか？」

俺らはな、こういうのがアホやっていうのも承知や。

お前の場合、理屈が邪魔してどもならんか？

聞いたことないか？『考えるんじゃない。感じるんだ』っちゅーて

ね」

「……………」

アホは承知。

考えるな。感じる。

自分では考えたことのない、思いつきもしなかったその言葉。

直樹はその余韻に浸りながら、耳のすぐ傍で風の音を聞いている。

自転車は直樹を乗せたまま、どんどん走って行く。

やがて、目の前に少し急な下り坂が見えてきた。

「あんなー、俺の肩、ガーツ握ってもエエから、そこへ立ってみい」

「そこってどこ？」

「お前の座つとるソコへよ。立ってみ？」

直樹は言われた通り、走っている自転車の後部に恐る恐る立ち上がってみる。

……………うわ！怖い！！

膝がガクガク震える。

直樹はパクの肩を力いっぱい握り締めた。

「直樹、怖いんやろー？」

冷やかすように言うパくに、素直に、

「うん、怖い！」

そう答える直樹。

パクが言う。

「お前、さっき俺らに『トモダチやる』言つたよなあ？」

今、お前の目線の高さは、普通にチャリを立ちこぎした位置とよけ

エ変わらん。

せやのに怖いのは、チャリの運転を俺がしとるからや。

直樹。人とツれるってこういうことやで？」

「……………」

パクの言っていることは、今の直樹にはちょっと難しい。

「ほんでなー、ビビッて怖いから思いつきし握つとるこの肩。これもまたツれるつちゅーこつちゃ」

パクの言葉を聞いている直樹、これはまた家へ帰ってまとめる必要がある、と考えている。

「パクウは何だか頭が良さそうだね。言ってることが教師みたいじゃない」

「ひゃひゃひゃひゃひゃーッ！誰が教師やねん！あんなモンと一緒にすんな。

こんなモン、全部受け売りや！

兄貴に言われたんよ。……まあ、あんまり気にすな」
「ふーん」

2人乗りの自転車は、坂道を長く真っ直ぐに下って行く。随分先に行く、タケシを追いかけながら。

坂を下ると、今度は上り坂。

直樹は自転車を降り、走ってパクを追いかける。

タケシは遙か先に行ってしまったて、既に姿が見えない。

知らない道。

直樹は何だか楽しく、ドキドキしている。

上り坂が終わると直樹は再びパクの後ろへ乗り、しばらく走った。

「俺ン家、ココやで」

パクが自転車を止めた場所は、何やら先日見たお好み焼き屋のような小さなお店だった。

…またイイ匂いがする。

うーん……こないだとは違っぞ。

でもイイ匂いだ……。

「店から入ったら怒られるからな。コッチや、コッチ」

パクについて店の裏手に回ると、そこは民家。

これがパクウの家か……。

「早よ来いや！」

先に着いていたタケシがそう言いながら、縁側からズカズカと家の中へ上がり込んで行く。

「何しよんねん、早よ上がれや」

パクも直樹に声を掛ける。

直樹と言えば、縁側から上がり込む2人を見て、

これが玄関！？

驚きつつも2人に倣って靴を脱ぎ、2階へと上がって行く。

部屋に入ると、タケシは早速力バンから小学校の問題集を取り出して机の上に広げ始めた。

「秋月、頼むで。分かりやすう教えてや」

「う、うん……」

これまで友達などいなかった直樹。

同じ世代の子の部屋を見る・部屋に入るなど初めてのことに。

キヨロキヨロと落ち着かない。

僕の部屋とは違って、随分いろんなものがあるなあ。

そう思いながら、直樹はタケシの問題集を手に取りページを捲った。

「まずタケシの実力を知らなきゃいけないからさ。今から僕が○を付ける問題、解いてみてよ。

じゃあ今日は算数をやるよ」

直樹は算数の問題集に○を付けていく。

20個ほど付けて、

「タケシがこの問題を全て正解できたら、タケシはこの問題集を全部理解できてるってことになるからね。

あとは、教えなきゃなんないんでしょ？口頭でどう説明できるか、何でこの答えになるのか、後で僕が聞くよ。

やってみて」

直樹の言葉を聞いた2人は、

「おお〜！」

と感心した声を上げる。

パクはうんうん、と頷きながら、

「やっぱりエライもんやな。今日びの話、俺はコイツより勉強はできるんやけど、教え方教える言われてもワケが分からんなあ。

ほいで一週間張り込んで、ようやくお前が引つかかったんよ。

なるほど、そういう風に教えりゃエエんやな」

「よっしゃー！やるぞ！」

タケシはそう言って問題を解き始めた。

その間、時間を持て余した直樹は、また辺りをキヨロキヨロし始める。

そんな直樹に向かって、パクはずっと気になっていたのか、口を開

いた。

「直樹、お前今日何でそんなちんくりんな学生服着とんねん。座ったらソレ、ほぼ半袖半ズボンやないか。しかもソレ、どこの制服やねん」

直樹はこれまでの経緯を、全てパクに話して聞かせた。

それを聞いたパクは大笑いする。

「お前はじゃあ何や、そのイジメられとったヤツから、イジメの行為をバトンタッチされたいいうワケやな!？」

「そう! そうなんだよ。放課後はさあ、これからしばらく2人と会うだろ? だからカバン持ちはできないんだよね。朝はできるとしてもさあ……」

とにかく直樹はやる気なのだ。

その時、2人の会話をじつと聞いていたタケシが口を開いた。

「……お前……お前、ホンマのアホやな。ソレ、マジメに言うてるんやったら、アタマに何か湧いとるぞ?

そんなモン、無視してまえ。というか、そんなヤツ、ボテくり回したれ!

これやからボンボンは、陰湿でかなわん!」

パクも言う。

「まあ、でもイジメの解決策って難しいよな。

よっしゃ、エエ考えがある。アイツら俺らとこないだ会うつるやないか。

『僕のことをイジメたらあの2人が出てくるぞ』言うたれ。それでイジメられんよ」

「そうや、言うたれ言うたれ!」

同調するタケシに、直樹は言い返す。

「何だよソレ。何で2人と友達って言うだけで、イジメられなくなるのさ?」

「……え? そりゃー……何かお前相手にしよったら一から十まで説

明せにやアカンから、コツチが恥ずかしなるわ!」

するとパクが立ち上がり

「よっしゃ直樹。口で説明するのは難しいからな。お前にイイもんあげるわ。」

虎の威を借る何ちゃらかんちゃら言うやないか」

そう言つて部屋を出て行くパク。

やがて戻つて来た彼は、手に持っていたものを直樹の目の前でバツと広げて見せた。

それは、直樹の学校の学生服。

衝撃 5

「それでもお前にはちよつと小っちゃいかもしれんけどな。俺の兄貴がお前と同じ中学やってん。これ着てみ？」

「え！くれるの！？」

「おう、お下がりやけどな」

その遣り取りを見ていたタケシが、心配そうに声を掛ける。

「……おいパクウ、ソレあげてエエんか？」

「おう、エエねん」

直樹は早速、その学生服を試着してみた。

少しウエストがきつくて小さいような気がするが、ちんちくりんの学生服よりは断然マシだ。

「うわー！助かったよ！お父さんにさ、学生服買ってって言えなくてさ。どうしようかと思ってたんだ。

……しかしこのズボン、何でこんなにブカブカなんだ？上着も肩幅の割りには何だかすごく短いな。

何だか普通のと違うね」

「ハハッ！それが虎の威を借るつちゅーヤツよ。虎の皮被ったキリンいうことにしとけ。

明日ソレで学校行ったら、すぐ分かるって」

「ほんとかよ。スゲー……」

ついでにさ、女子用の制服はない？」

「……お前、ちよいちよいソレ言うな。……ないわ！」

そんな会話をしていると、下からトントントンと階段を上ってくる足音が聞こえてきた。

いきなりガラッとドアが開くと、お盆を持ったおばさんが顔を覗か

せる。

「ありゃッ！？タケシ！お前何やつとんや！？勉強やつとんか！？こりゃゝ明日は雨通り越して、鉄砲の弾降ってくるな」

「おいコラ、ババアッ！勝手に入ってくんな！！」

パクの怒声に直樹は驚く。

ババア！？

誰だこの人！？

「そやでゝオカン。俺、勉強してんねん。スゴイやる？」

オカン！？

誰だこの人！？

そのおばさんは直樹にぴたりと視線を当てた。

「何か知らん子おるな。アンタ、ドコの子や？」

「あ、こんにちは。秋月と言います」

直樹の態度におばさんは目を見開いて、

「まあ！こんな行儀エエ子もおるんかいな！！

お腹空いたやろ？これ食べ」

言いながらおばさんがガシャン！とテーブルの上に置いたお盆の上には、井に入ったごはんを皿に盛られた、直樹にとっては何か分からないモノ。

それを見たタケシは叫ぶ。

「あ！オカン、てっちゃんしかないやん！肉は！？」

「何でお前らに商売モン食わせなアカンねん！1円にもならん。ソレ食うとったらエエねん！」

「エエから早よ出てけ!!」

パクの声におばさんは一言、

「悪さすんなよ!」

そう言って部屋を出て行った。

それを見送って、直樹はパクに尋ねる。

「ねえ、さっきのおばさん誰?」

「あー、ありやウチのオバハンや。お前風で言えば、お母さんよ」

お母さん!?

直樹は驚愕する。

「な!!お母さんに何て口の利き方するんだよ!?!」

すると、その言い分に驚いたパク、

「……あ、ああ、ゴメンゴメン。これからお前の前では気をつけるわ」

向かいでは、相変わらず問題を必死で解いているタケシ。

直樹は先ほどパクのお母さんが持ってきてくれたお盆の上のものが、
気になってしょうがない。

じつと無言で凝視している。

……僕はね、もうびっくりしないぞ。

これもきつと、おいしいものなんだよ。

下に敷かれているのは……キャベツだな。

上にのってるのは……

……食べてから当てよう。

そんな、一点凝視の直樹に気付かざるを得なかったパクが口を開い

た。

「何やお前、腹減ってんのか。じゃあ冷えたらアカンから、先に食うてしまおうや」

「うん、そうしよう！」

直樹は元気に即答する。

しかし直樹はすぐには手を出さない。

2人がどうやって食べるのかをじっと見つめている。

彼らはキャベツと、よく分からないその物体と一緒にごはんの上にのせ、一気に掻き込んだ。

よし、そうやって食べればいいんだな？

確認した直樹も、同じように食してみる。

先日のお好み焼きは、目からウロコだった直樹。
今回も目からウロコだ。

な、何だ、コレは……！？

マ……マ……

マズイ……！！！！

何だ、このゴムみたいなモノは！？

ガツガツがつついていてる2人をチラチラ見ながら、
このゴムみたいなの、一体いつ飲み込めばいいんだよ！？

そんなことを考えながら、しかしさすがの直樹もここで『マズイ』
とは言えない。

2人にバレないようキャベツだけを取り、2人と同じようにごはん

を掻き込む。

ただ一つ、分かったこと。

白いお米は箸で、丼で、こんな風に掻き込むとまた違う味がおいしい。

……だけど、このゴムはマズイ。

直樹のお腹は、ほぼ白いごはんで満たされた。

この『てっちゃん』ってヤツ、これはさすがに慶也には自慢できねーな……。

そう考えている直樹の横で

「できた！」

とタケシは全ての問題を解き終えた。

「うん、どれどれ？」

タケシの解いた問題を見ると、なかなかのもの。

20問中19問が正解している。

「秋月よう、お前、俺がただけアホや思うとるか知らんけど、俺は小学校の時、成績はまあまあやったんや。

これくらいでいいか！」

ふんぞり返っているタケシの態度を、直樹は見えていない。

「……タケシさ、何でココができてるのに、コッチは間違ってるのさ？おかしいだろ。」

算数・数学は一つのミスで全部がガタガタになっちゃうんだよ。合ってるこっちが偶然なのか、間違ってるココを理解できてないのか、今から言ってもらってからね」

「……………」

急変する直樹の態度。

ここは直樹のフィールドだ。

「だから！さっき言ったじゃん！コッチができるのに、何でコッチの簡単なのができないのさ！？コッチを応用するんだよ！忘れるんならちゃんとメモを取りなよ！！」

スバルタ直樹。

暴走族相手でも容赦はしない。

「ぐッ！コッチから頼んでるだけに、コイツの態度にムカつくこともできんわ！」

ブツブツ言いつつも、大人しく直樹に従うタケシ。

そうして1時間ほど勉強した頃、隣で静かにしていたパクが口を開いた。

「おい直樹。お前の家、門限あるんちゃうか？遅うなったら親父さんとかに怒られるんちゃうん？」

その問いに、直樹は余裕で答える。

「お父さんは今日から長野県に出張なんだ。一週間はいいんだよ。だから平気」

懸命に問題を解いているタケシの隣で、2人は会話を始める。

「お前、さっき俺らのこと、トモダチやろー言ったやん。

同じ学校にツレとかおらんのか。俺らみたいなんとツレる必要ないんちゃうん？」

「イヤ、ダメだよ。彼らは勉強での競争相手なんだ。

きつと僕と一緒に知識が偏ってるハズ。だからあまり意味がないんだよ。

君たちみたいな暴走族じゃないと、新しい知識は得られない」

「…お前、それもちよいちよい言っな。俺ら、暴走族には入ってへんぞ？」

ヤンキー・不良と暴走族が一緒になつとんやな。……まあエエけど

な。

せやけど、俺らとツレるいうたら、お前の良心が耐えられるかな。
おい直樹、今から来い！言ったら来なアカンのやぞ？できるんか？」

その時、直樹の脳裏に過ぎったのは、慶也の顔。

「できる！」

そう答えるのと同時に、タケシが問題を終えた。

「よし！大体分かったぞ！これで俺も説明できるわ！今日はこんなくらいにしようか」

タケシの声にパクは立ち上がり、

「よっしゃ。ほなら今日はもうアガリやな。俺も見たいテレビあるし。」

直樹、明日もお願いできるか？」

「うん、いいよ」

辺りはもう暗い。

パクに見送られ、直樹はタケシの自転車の後ろに乗り、先ほど通った道に戻って行く。

「ねえタケシ、君は人生ゲーム持ってる？」

「え、イヤ持ってたへん」

「パクウは持ってる？」

「イヤ、知らんで」

パクと一緒にいるときは違い、あまり喋ってくれないタケシ。すぐに沈黙が落ちる。

「僕は明日も平気だからね。勉強教えられるよ」

「うん、スマンな」

すぐに会話が途切れてしまう。

やがて、

「……なあ、秋月」

タケシが話し始めた。

「俺はな、正直お前が友達やろ言うたの、信用できんでおるよ。

まあ、昨日も言っただように、お前のことは気に入ったけどな。でもまだ日が浅い。

…パクウがお前にあげたその学生服も、どうも理解できへんねん」

直樹は、パクウからもらった学生服を着たままの格好で帰っている。タケシは少しの間沈黙し、再び口を開いた。

「……その制服な、アイツの死んだ兄貴のヤツなんや。交通事故で死んだんよ」

「え！？形見の品なの！？」

「ま、そんな大袈裟なモンちゃうやろうけど」

直樹は少し考え、そして、

「……分かった。僕、コレ大事に着るよ。そして卒業したらパクウに返すよ、コレ」

それを聞いたタケシ、立ちこぎをしてスピードを上げる。

「おおー？今からすぐ返しに行くって言わなんだな！

パクウが簡単にあげたとは思わへんねん。

すぐには返さへんのやな？それやったらエエわ！

もう墨汁まみれにすんなよ？」

タケシはそう言って、すごいスピードで走り出す。

「お前、道分からんやろうから、バス停まで乗せてったるわ」

直樹は道は覚えていたが、歩くのが大変そうだったので甘えることにした。

途中、タケシはある家を指差し、

「アレ、俺ン家やで」
そう説明してくれる。

やがて2人を乗せた自転車は、直樹がいつも行く本屋の前のバス停に着いた。

別れ際、

「明日は俺から行くからよ、また頼むわ」

そう言つて去つて行こうとするタケシに、直樹は尋ねる。

「……ねえ、亡くなったパクウのお兄さんって、本当に血の繋がったお兄さんだよな」

何故このタイミングでこの質問なのか、直樹にも分からない。

「ええ？そうやるフツウ」

その返事に、俯いてしまふ直樹。

「……………」

「それとな秋月。お前、そのな、自分のこと『僕』って言つて止めるや。俺らとツルむ言つんやつたら『俺』もしくは『ワシ』って言つてくれ。こしよばゆつてしょーがない」

直樹は顔を上げ、

「うん、分かった。そうするよ」

そう答えると、タケシは、

「ほしたらな」

手を振つて自転車で走つて行つた。

その後姿に手を振り返す直樹。

……人に手を振るなんて、物心ついてから初めてだろ。
悪くねえや。

そんなことを思いながら、直樹はバスには乗らずに歩き始める。

少し考え事をしたかった。

しばらく歩くと、父親の経営する会社の看板が目に入った。

『。。。建設』

かなりの広範囲で工事されている、その場所。

こないだお父さんが言っていたデパートが、ここにできるんだな…。

シートで覆われたビルを見上げ、再び目を戻すと、先の方にベンツが停まっていることに気付いた。

ナンバーを見ると、父親のもの。

その車に、まさに今乗り込もうとしているのは、直樹の父。

あれ？

まだ長野に行つてなかったのかな。

そう考えた直樹、駆け寄って父親の元に近づこうと思ったが、今まで外で両親に会ったことのない彼は果たしてそれが可なのか不可なのかも考えてしまう。

…あ、ダメだよ。

こんなトコでウロウロしてたら、怒られちゃう。

そう思い、直樹はスツと身を隠す。

父は仕事とは思えない、ラフな格好をしていた。すると、その車にもう1人、乗り込む人が。

……女性。

次の瞬間その彼女が発した言葉は、直樹の耳にはつきりと聞こえてきた。

「グアムかあ……。本当に、久しぶり……」

その言葉を残し、車はエンジン音を響かせて発進した。直樹はベンツの後ろ姿を、瞬きもせずに見送る。

「……………」

……お父さん。

何をやっているんですか？

——
グアム

……愛人ですか？

新聞、経営に関する本などにはよく目を通す直樹。

『外に出れば敵だらけの男。愛人の1人や2人……』
そういう文字を、目にしたことがある。

……やっぱり、愛人なのか。

つらつらとそんなことを考えながら、歩き出した。

そこへ、ちょうど自宅方面へと向かうバスが通りかかり、直樹は歩
くのを止めてそのバスに乗り込む。

今日はお小遣いをもらっというて、良かったよ。

そう考え、先ほどのまでの思考を止めようとするが、おさまらない。

お母さん

慶也

僕

……いや、俺。

少なくともこの3人は、あなたを信じていますよ、……お父さん。
要素を加味した上で、俺はほざいているんですか。
何だか悔しいですよ。

……お父さん。

やがて、バスは直樹の家の近所で止まった。
降りると同時に、直樹は走って自宅へと向かう。

「ただいま」

言いながら玄関のドアを開けると、そこには丁度母親が立っていた。
「あら？直樹さん、今日は随分遅いですね。何してたの？」

『そんなことより、お母さん！』

……とは、言えない。

「学校の行事があつたんです。しばらく遅いかもしれませんが」

「あら、そう。夕飯があるから食べてください」

そう言つて、奥へ行つてしまう母。

「……………」

今日、この制服をもらったこと。

別に報告しようとも思つてなかったよ。

まあ、やっぱり気付かないよね、……そりゃ。

このズボン、ダボダボでスースーするなあ。

……皆が信じていますよ。
お父さん。

お腹が一杯の直樹はこの日、夕食を摂らずに自室へと入って行った。

変化 1

—— 栄光と表するものは、人それぞれでしょう。

それは、程良く遠いほど良い。
遠すぎると、人は諦めてしまっんだ。

だけど、遠すぎるものは他よりもずっと良い筈。
毎日毎日塵を重ね、見上げるものを作れば、遥か彼方向ここの地平線もちよつと近くに見える筈。

半人前の俺がまず手に入れるべきものは、一丁前なのか、一人前なのか。

一定不変のこの俺を、一旦終了させるべきだろう。

雨後の筍のごとく、めくるめく現れる近日を目の前に、このタイミングを俺は見計らっていたのではないか。

寡聞の俺と謙遜で表してきた俺は、本当の世間知らず。
ヴィヴァルディを聞きながら摂る朝食は俺の常識であって、多分からは漏れるのだろう。

可普及ではなく、バランスを取りながらゆっくり歩く。

今。

たった今。

今日の俺は混濁していて、色では表せない。

ある程度混成できれば、罵声であれ、一丁前と表されるんだろう。

次の日から、直樹はパクにもらったダボダボのズボンに短ランで学校に通い始めた。

登校前、慶也だけが

「何だよ、その学生服。スゴイの持ってんじゃん」

と触れたのみで、母は直樹の学生服の変化に気付かない。

直樹には、これが変型学生服であるという意識はない。

ただ友達からプレゼントされたそれを、どこかで自慢したい気分だったのだ。

その学生服で登校すると、何故かみんなの冷ややかな視線。

それに気付く直樹。

何でだろう？

みんなと違うからかな？

そう思いながらも何となく、異質を放っている自分にゾクゾクする感覚も覚えていく。

学校に来て、この学生服に唯一触れてくれたのは、やはり紀子だった。

「なにになに？秋月くん、その学生服！ヤンキーみたいやんか」

「え？ヤンキー？えっと、これはね、友達から譲り受けたんだ」

「この学校の生徒で、そんな学生服持つとる人おるんやねえ」

「うっん、違うよ。○○中の生徒で、お兄さんがこの学校に来てたんだ。そのお兄さんの制服をもらったんだよ」

「へえ！じゃあ今度は汚さんようにせなね。アハハハハ！」

そして、直樹は思い出す。

「久保さん、俺だけ制服新しいのになっちゃってごめんね。絶対お小遣い貯めて、こないだ汚しちゃったの弁償するからね」

「ああ、だからいいって！ほら、もう1枚持ってたんだから。」

でもアレだね、秋月くん背エ高いから、そういうのも似合うやん。良かったねえ！」

直樹は笑顔で受け答えしている。

こぼれそうな『ムフフフフ』という声を抑えるのに必死だ。

やっぱり、久保さんだけは褒めてくれた。

さすが、俺の大好きな人だよ！！

と、そんなことを考えている。

しかしその時突然、直樹の頭に昨夜の父親の顔が現れた。

「……………」

楽しいと思った瞬間、何故か嫌だったことが頭の中でフラッシュバックする。

それは、直樹の癖。

……お父さんは、この学生服に気付くんだろうか。

気付いたとしても、何も言わないかな……。

無意味と思っていた、人付き合い。

必要と感じた、人付き合い。

後者に賛同するようになり、直樹は何気ないこと・皆が普通に蓄え

ていったことを、駆け足で吸収していく。

数日後、6時間目の授業が半分ほど終わったところで、直樹が何となく校門の方を見ると、そこにはパクとタケシが立っていた。

アレ？

随分早いな。

直樹はソワソワしながら授業が終わるのを待ち、帰りのホームルームが終わるとすぐに校門まで走って行く。

「随分早いじゃない。どうしたのさ？」

「……………」

何やら神妙な面持ちの2人。

タケシが直樹の肩を掴んで言った。

「……………おい、秋月。今日お前、何時まで大丈夫や？8時くらいまでOKか？」

一週間ほど出張だと言っていた父。

あれから10日ほど経っているが、家にはまだ帰って来ていない。

……………あの時見た、これまで一度も見たことがないような父の笑顔を思い出す。

それを打ち消すように、直樹は答えた。

「大丈夫だよ。何かあるの？」

するとタケシはよし！と大きく頷き、

「後で発表する。今日も頼むで」

そして3人はいつものようにパクの家へと向かい、勉強を始めた。

やがて、時計の針が7時前を指した頃。

パクとタケシは顔を見合わせ、

「……よし。そろそろ行くぞ」

そう言つて立ち上がる。

「どこへ行くのさ？」

すると、タケシがまたまた神妙な面持ちで答えた。

その目はららんと血走っている。

「今からするのは完全な犯罪や。そら分かつとる。だけど欲には勝てん！」

エエからついて来い！」

犯罪と聞きながらも、

そんなワケない。

何が起こるんだ！？

ワクワクしながら、黙つてついて行く直樹。

3人が進むのは道なき道。

もちろん直樹はそんな探検など初めて。

藪の中を通り抜け、塀を乗り越えて辿り着いたのは、ある敷地の中だった。

少し先を進んでいたタケシが後ろを振り返り、ヒソヒソと直樹に話しかけてくる。

「おい秋月。お前、まさか彼女なんかおらんよな！？」

「や、彼女なんかいないよ。今、とても大好きな人はいるんだけどさ……」

素直な直樹。

「そつか。彼女はおらんのやな？な！？」

しつこいタケシ。

彼は続けて言った。

「よし。今からお前と俺は同志や！童貞同志とも言っ！」

「童貞！？もちろんそうだよ」

……素直な直樹。

「そつか」。

実はな、この建物はある会社の女子寮なんや。

ほんでな、秋月。コレ見てみい！」

タケシが指差した先には、壁にガムテープで貼られたダンボール紙。彼がそれをパリッと捲ると、そこには穴。

「この先にはな、風呂場があるんや。

お前、ダイレクトに女の裸なんか見たことないやろ？」

俺はな、お前のためを思って、この1ヶ月間、コツコツコツコツこへ穴を開けたんや」

「1ヶ月って、1ヶ月前は俺たち、まだ会ってないじゃないか」

それに対し、タケシは、

「そんなツツコミはどうでもエエ！！俺ら、同志やろっが！！」

直樹は当然、思春期真っ只中。

紀子に興味を持った辺りから、悶々とするものは抱いている。

……でもこれって犯罪だろ？

タケシが言うように、完全に犯罪だ。

直樹の中で、激しい葛藤が巡り、回り、巡り巡る。

そんな直樹に、タケシはパクを指差すと、

「秋月、エエか。ここにもう1人、オマケのようにくっついて来て

るコイツおるやろ。コイツにはな、彼女がおる」

それを聞いた直樹は大声で、

「ええッ！？パクウって彼女いるの！？」

「シッ、シッ、シ——ッ！！アホウ！声デカインじゃッ！！」

……そうや。このパクウいう輩は、俺らの敵や！

そうや。よう考えたらパクウ、何でお前まで来とんや！？お前には
必要ないやろ！」

責められながら、パクは何か言いたそうに2人を見ている。

それに気付かず、チラリと時計に目をやったタケシは目をぎらりと
光らせた。

「入浴時間は7時からやからな。ぼちぼち入ってくるで。

今日の昼に完成したからまだ覗きはしてないんや。

……エエか、秋月。ビクリしてでかい声出すなよ？」

さつきまでめくるめく葛藤していた直樹、それすらすでに忘れたの
か、

「うん」

と素直に返事をする。

ここでもうやくパクが口を開いた。

「……あのう……」

「何や！？お前は必要ない、もう帰れ！！」

するとパクが小さな声で、

「カツコ悪うて、よう言わへんかったんやけど……あの女には3日
でフラれてしもつたんや。

だから俺には今、女なんかおらへん」

「……」

黙——ってパクを見つめる、タケシと直樹。

やがてタケシ、

「……その3日でお前は、俺らが飛び越えてないカベを飛び越えた

んか、どうなんや」

「ナニ一つ飛び越えてません。ガッツリ童貞です」

その答えに、タケシは2人の首を掴み寄せ、がっちりとスクラムを組む。

「よし！俺ら3人同盟や！パクウ、よう正直に言つた！何も恥ずかしくない！ちよっぴり背伸びしただけなんやな？そうなんやな？！」
完全に意気投合する3人。

「よし、ここからは一言も喋るな」

タケシのその命令に従い、静かな、かつ緊張感漂う時間が流れ始める。

何分ほど経ったのか。

その穴からざわざわと声が聞こえてきた。

来た！！

声には出さない号令。

タケシが本当に小さな声で、直樹に言う。

「よっしゃー！まず隊長！お前から行け！」

いつの間にか隊長になっている直樹。

その穴から、そつと中を覗いてみた。

「「「……………」」」

しかしそこは真っ白い世界。
よく見えない。

アレ？

何も見えない……

アレ??

直樹は自分のメガネが湯気で曇っていることに気づかない。

「何も見えないよ?」

そんな直樹の後ろでやきもきしている2人。

報告する直樹の頭をパシパシと叩きつつ、パクは

「早よせエ!早よせエ!」

その時、完全にイラ立ったタケシが、直樹を引っ張り起こし、

「もうエエ!代われ!!」

そう言つて、そのまま突き飛ばした。

その勢いで、直樹は建物を囲っていた垣根に、

バキバキバキバキバキ——ツ!!!

思いつきり、突っ込む。

「「「!!!」」」

同時に、3人は一切の動きを止めた。

取り合えず、呼吸するのも止めてみる3人。

「「「……………」」」

何の声もしない。

誰も来ない。

その確認をして、タケシが一喝した。

「大きな音出すな!」

「何言つてんだよ！タケシが突き飛ばしたんだろ！」

「ウツサイ！！お前が鈍臭いことしとるからじゃ！！」

2人の遣り取りを尻目に、1人でちゃっかり穴を覗き込んでいるパク。

「あー！パクウ！次は俺やぞ！」

「やゝ…何や、コレ。あんまよう見えへん。人影は見えるんやけどなあ」

押しのけ合いをしている3人は、そのせいで後ろからガサツと音がしたことに気付かない。

よく見えもしないその穴に夢中だ。

その時突然、野太い声が辺りに響き渡った。

「コラアアッ！！ワレら、何しさらしとんじゃ——ッ！！？」

「！！？」

バツと振り返ると、そこには大人2人が立っている。

次の瞬間、声を出すこともなく、垣根に飛び込むタケシとパクが、直樹は逃げ遅れる。

——
ザザザザッ！！

大人たちは即座に直樹に飛びかかり、しっかりと押さえ込んだ瞬間、直樹は自分の中でいろんなモノが崩壊していく音を聞く。

「あー！待って！置いてかないで！！」

直樹が叫ぶと、パクとタケシはすぐさま垣根の中からこちらに飛び出してきた。

押さえ込まれている直樹の目の前で、2人はその大人たちの顔面に蹴りを入れる。

ドゴッ！！

後ろに転がりコケたのは、1人。

押さえ込んでいるのが1人になり、何とか立ち上がった直樹が後ろを振り返ると、今度はパクが2人に押さえつけられている。

そして大人1人の背中に飛び乗っている、タケシ。

パクは押さえつけられながら、直樹に向かって叫んだ。

「直樹！お前は早よ逃げろ！早う！早う逃げエー！」

その言葉を聞いた直樹は、先ほど頭の中で崩れ落ちたナニかを、すぐに組み立て直し、

直後、

「アア——ッ！——！」

叫びながら、大人2人に思いっきり体当たり！

ドカンッ！！

その全力タックルで尻餅をついた2人は、顔を押さえながら、

「このクソガキら————ッ！！」

「早よ警察呼べエー！！」

3人はその隙に垣根を抜け、猛ダッシュでその場から逃げる。3人とも全速力だ。

「このクソガキ————ッ！！警察や！早よ警察呼べー！！」
背後で罵声が轟く。

そんな言葉を投げかけられたのは、もちろん初めての直樹。
ふと、鉄格子の中で膝を抱えている自分が頭に浮かび、何だか笑えてきた。

「クククッ！アーツハツハツハツハ！！」

それに合わせて、パクも笑い出す。

「アハハハハッ！ヒヤーツヒヤッヒヤッヒヤッヒヤ！！」

そんな2人を見てタケシは、

「お前ら、ナニ笑るとんねん！！ナニが面白いんじゃ！？収穫ゼロやないか！まったく！」

俺はこの同盟から抜けさせてもらっ！！」

「アハハハハッ！何やタケシ！お前1人、マジやな！」

何や、それはロンリ―童貞になるいうことか？勝手にやっつけ！！」

直樹は笑いながら走り続ける。

とにかく、楽しい！

とにかく、楽しい！！

これで何回目だ？

世間って、

やたらと、

—— 広い！！！！

変化 2

この日は日曜。

昼食を済ませた直樹は部屋で、退屈だなあと伸びをする。

これまでの自分なら、退屈だななどと考えている時間はなかったハズ。

今日はタケシともパクとも会う約束をしていない。

紀子にも会えない。

それを退屈と表している。

ベッドの上でゴロゴロしていると、1階から「ただいまー!」という慶也の声が聞こえてきた。

その声に、退屈な直樹は下に下りて行く。

慶也は風呂場で、ドロだらけの野球のユニフォームを脱いでいた。

「今日は野球だったのか」

「うん、今日は試合だったんだ。今日僕ね、4 - 3だよ。4打点。スゴイでしょ!」

ユニフォームを脱ぎながら答える慶也。

4 - 3、4打点の意味が、直樹には分からない。

「う、うん、スゲーじゃん」

と一応答えてみる。

「スパイクのヒモが切れちゃってさ。予備がないから買いに行かないきゃ。」

あ!そういうえばお母さんの言ってた新しいグローブもまだ買ってもらってない!

お母さん!お母さ——ん!—!」

そんな慶也を見ながら、直樹は一つひらめいた。

……久保さん家って、確かスポーツ用品店だ。

直樹は慶也に寄って行き、

「なあ慶也。だったら今から買いに行こうぜ。俺がグローブ買うの、付き合ってやるよ」

すると慶也、

「えゝゝ、何で？ いいよ、一人で行くから。今日は、今から見たいテレビもあるしさ」

「何だよソレ！ テレビなんかいつでも見れるじゃん！

なあなあゝ、頼むよ慶也ゝ。俺も一緒に連れてってくれよゝ！」

スルツと立場が入れ替わるこの兄弟。

「…もう、しょうがないな。じゃあごはん食べたらね」

そう言って、慶也はリビングの方に向かっていく。

よし！ 確か、あの通りだよな…。

買い物に行くんだ。文句はないよな……うん、うん。

紀子に会えるかも、とソワソワし始める直樹。

よし、俺も参考書を買おう。

そう考え、

「参考書を買いたいのでお金頂いていいですか、お母さん」
そうして母からお金を受け取る。

慶也も母親にしがみ付き、グローブのおねだりをしている。

その様子を見ながら、直樹は一旦2階に上がり、ベッドに横になった。

そうしながら、慶也の食事が終わるのを待っている。

しばらくすると下から、

「行つて来まーす！」

という声。

びっくりした直樹、窓から大きく突っ込んだ。

「おいッ！！」

慌てて階段を駆け降り、外に飛び出す。

「何だよ慶也！！先に行くんじゃねーよ！置いてかないでくれよ！！
まったく！どういうつもりだよ！？」

マジギレの直樹に慶也は引き気味で、

「…あ、ごめん、冗談、冗談だよ」

「まったく！そんな冗談、ドコで覚えて来るんだよ！」

直樹は必死だ。

2人は自転車に乗り、直樹は慶也の前を走りながら、以前紀子から説明を受けた商店街に向かう。

「えー、兄さん、そんな遠くまで行かなくても、近くにあるよ？」

「うるさいッ！黙ってついて来い！！」

……さつき置いて行かれそうになったことにキレているのか、計画を潰されることがコワイのか。

直樹は熱い。

商店街に着き、一軒一軒店を確認しながら、直樹たちはゆっくり進んで行く。

その内、ショーケースの中に野球のバットやサッカーボールが展示されている店を見つけた。

看板を見ると、

『久保スポーッ』

ここだ！！

直樹は慶也に説明することなくさっさと自転車を止め、慌てて店内へと入って行く。

それに、急いでついて行く慶也。

「ハイ、いらつしゃーい」

その声とともに中から出てきたのは、おじさん。

きつと久保さんのお父さんだ！

背筋をピンと伸ばし、

「こんにちは！」

と見事な90度の挨拶で返す直樹。

「ほら！慶也も挨拶して！」

言われた慶也も、直樹と同じような挨拶をする。

「こんにちは」

「エライ行儀のエエ兄ちゃんらやな。今日は何の用事？」

「アレ？何の用事だっけ？？」と悩む直樹の隣から、慶也が素早く答えた。

「硬式用のグローブを買いに来たんだ。あと、スパイクのヒモ。いいのある？」

おいおい慶也！敬語使えよ！！

そんなことを考える直樹を放っておいて、

「それならこつちや」

と、2人は店の奥へと行ってしまった。

1人になった直樹は商品を手に取りながら、店の奥ばかりを見ている。

久保さんが出てこないかな……と。

やがて、表へ戻って来たおじさんが直樹に話しかけてきた。

「お兄ちゃんの方は何の用事や 何かいるん？」

ビツクリした直樹、咄嗟に、

「はい、参考書を買いに」

「ハア？」

その返事に戸惑いながら何と答えようか逡巡していると、慶也が2つのグローブを手に戻って来た。

「どっちがいいかなあ？青のが欲しいんだけど、この茶色の方がしっくりくるんだよな」

そんなことを言われても、直樹にはよく分からない。

「だったら両方買っちゃえばいいじゃん」

すると慶也が驚いたように、

「何言つてんだよ！1個1万円くらいすんだよ！？そんなにお金もらつてないよ！」

「え！？こんな臭いモノが1万円もすんの！？」

失礼な直樹。

おじさんにジロツと睨まれる。

2つを見比べ、交互に手に嵌めて迷っている慶也が、おじさんに尋ねた。

「ねえおじさん。このグローブ、ちょっと使ってみてもいい？」

それに対し、おじさんは快く、

「ああ、エエよ。じゃあちよつと待って」

そう応えようと、

「おーい！おーい！紀子ー！？」

店の奥へと入って行きながら、大きな声で叫んだ。

…え！え！？紀子！？

ドキドキと胸を高鳴らせる直樹。

紀子って、久保さんだよな！？な！？

するとすぐに、

「はい！」

返事をしながら出てきたのは、やはり紀子。

「ワシ、ちょっと店見とかなアカンから、お前ちよつとこの子とキヤッチボールしたってくれ。

グローブ決めかねとんねん」

「ああ、エエよ」

直樹の前に現れたのは、今まで直樹が見たことのない私服の紀子。

……ああ……！やつぱり正解だ……！！
来て良かった！！

などと思っている直樹の前で、

「よし、じゃあ私とキャッチボールしてみようか」

そうして外に出て行ってしまう、紀子と慶也。

「……………」

存在していることにも気付いてもらえない、直樹。

仕方なくひよこひよこ後をついて行く。

店の隣の駐車場でキャッチボールを始めた2人を、直樹は何故かひっそりと隠れるようにして見つめている。

何度かキャッチボールを繰り返してから、やがて慶也は

「よし！僕、こっちの青い方にする！」

それに対し、紀子が笑顔で言った。

「ソレ内野手用やから、内野守る機会が多いんやったらソツチの方がエエよ、やっぱり」

「うん！お姉ちゃん、ありがとう！」

そんな遣り取りをしながら、2人は店の方へ戻ってくる。

そうして看板を通り過ぎようとしたそこで、紀子はようやくその前に亡霊のように突っ立っている直樹に気付いた。

「わぁッ！ビックリした！秋月くん！？何してんの！？」

気付いてもらえなかったことに落ち込んでいる直樹。

「……ああ、……彼、俺の弟です……」

沈みきつてそう答える。

「へえ！弟くんは野球やってんねや！秋月くんもせっかく身長あるんやから、何かやった方がエエで？」

そして慶也の腕を握りながら、

「ホラ、弟くんなんかまだ小っちゃいのに、腕力チカチヤン」

そう言つて、今度は直樹の腕も握り、

「ホラ、身長差こんなにあるのに、腕の太さあんまり変わらへんでやっぱり秋月くんも、ちよつと鍛えた方がエエんちゃう？」

「……………」

ズブズブと、更に沈んでいく直樹。

紀子は言うだけ言つて、再び店の奥へと消えて行つた。

「……はあ……あ……」

安息日だからって言つて、溜息が絶えないなんて、どんな日だよ……。

帰り道、直樹の後ろを走りながら、慶也は揚々としている。

「帰ったら早速ワックスかけなきゃ！兄さん、ありがとうね。普通のお店では新品のグローブを、あんなにして使わせてくれないんだ

よ。いいお店だったね！」

足取り軽い慶也に比べ、直樹の踏み締めるペダルはひたすら重い。

「ああ！そう！！良かったんじゃないの！？」

「????」

帰りも不機嫌な直樹。

その自転車のカゴには参考書ではなく、鉄アレイが2個積まれている。
た。

直樹は就寝前に、紀子の店で購入したその鉄アレイで1時間筋力トレーニングをすることを決めた。

寝るのを遅くするのではなく、勉強時間を1時間削ったのトレーニング。

他の誰かに言われたのならまだしも、紀子にああ言われた自分が許せない。

直樹が初めて持った、異性へのプライド。

次の朝、目を覚ました直樹が食卓に向かうと、そこには父の姿があった。

昨夜遅く帰宅したようだ。

「おはようございます、お父さん」

「……うむ」

いつもの会話。

違うのは、直樹が抱いている父への違和感のみ。

ただ、違和感を覚えたのは直樹だけではなかった。

父は直樹の姿を見て、目を見開く。

「直樹！お前、何だ、その制服は！何て格好をしとるんだ！？ちよつとそこへ立ってみなさい！」

驚いた直樹はその言葉に即座に反応し、立ち上がる。

「お前、その制服はどうしたんだ！？何でそんなダボダボのズボンを穿いとる！？」

そして隣の母に目を遣り、

「お前が買ってやったのか！？」

それには直樹が答えた。

「いえ、お父さん。これは僕がもらったものです。

以前買っていたいただいた制服は、手違いで墨汁をこぼしてしまつてダメにしてしまつたので」

「もらっただと！？誰にだ！！」

すごい剣幕の父に、直樹は落ち着いて受け答える。

「はい、友人からいただきました。別の中学に通っている人たちですが、お兄さんが僕と一緒にの学校に通っていたらしくて、お下がりをいただきました」

「友人だと！？しかもそんな不良みたいな学生服を拾ってきおつて！！

何でお前はそんなゴミと付き合つとるんだ！！」

父は続けて母を責め始めた。

「私は忙しいんだ！何故お前は、こいつらの面倒をちゃんと見ていない！？

直樹がゴミに感化されていたら、どうするつもりだ！？」

激昂する父の顔を見ながら、直樹はふと思ひ出す。

…あの時一緒にいた女性に見せていた、父の笑顔を。

今まで一度も見たとこない、父の顔。

あれ以来、自分の中でモヤモヤしていたものが父に対する怒りであることに、この時直樹は初めて気付いた。

「……お父さん、彼らはゴミではありません。こんな僕に情を抱いてくれ、無条件でこの制服を僕に譲ってくれたんです。今すぐ、さっき言ったことを撤回してもらえませんか」

この日、直樹は初めて父に反抗した。

じっと睨みつけるような姿勢を取っている直樹に、父は逆上する。

「直樹！お前は以前、私が言ったことを忘れたのか！最下層の草や虫に習うことはない！これが全てだ！

私はお前にライオンになれと言った筈だ！お前はあれを理解できていなかったのか！

いいか、直樹。一時の雑音に惑わされるな。お前はライオンになるんだろー！」

怒りがおさまっていないのは、直樹も同じだ。

「お父さん、僕たちは草食動物でも、肉食動物でもありません。人間です。

彼らの言っていることは雑音なんかじゃありません。ちゃんとした響きです。

僕のお腹の中には、いろいろなものが残っています。

お父さんの言っていることというのは、間違っていますか？何かから逃げているんじゃないんですか？

それは何ですか？

生きるために逃げているんですか。逃げるために生きているんですか。

教えてください」

全身を震わせながら、そこまで直樹の言葉を聞いていた父は、

「とにかく、私は許さん！！」

そう言い残し、自室へと戻って行った。

「……………」
「……………」

呆気にとられている母。

俯いてしまっている慶也。

そんな彼を見て、

「……………慶也、ごめんな」

一言声を掛け、直樹も学校へと向かった。

登校中、直樹は考える。

最近の俺は、気が散っているのか。

……………いや、違う。

覚えなきゃいけないことが、たくさんあるだけなんだ。

お父さんは間違っている。

俺は泥棒したわけじゃない。

何も盗ってない。

その日の授業が終わると、直樹はタケシとパクの迎えを待ち、一緒にパクの家へと向かった。

いつものように。

そして一緒に勉強をする。

それは直樹にとっての楽しい時間。

しかし直樹は今日1日、今この時間も、まだ言い足りない父への発言を繰り返シミュレーションしていた。

まだ、2人をゴミと言ったあの言葉を撤回してもらっていない。

帰宅した直樹は、机に向かいながら父の帰りを待っているが、いつもの時間になっても、父は帰って来ない。

……何だ。今日は残業か。
じゃあまた朝に話そう。

そう考え、床に就いた。

次の朝、直樹はいつものように目覚め、着替えようとクローゼットを開けた。

しかしすぐに気付く。

パクから譲ってもらった、あの学生服がないのだ。

あれ？

不思議に思っただけで部屋を見回すと、机の上に学生服が畳まれて置いてある。

……あれ、寝ぼけたかな。

直樹はその学生服に袖を通して、……そして違和感。
ズボンにいつものダボダボ感がない。

「!？」

制服は直樹が寝ている間に、新しいものになっていた。
直樹はそこでハッと気付く。

走って階段を降り、リビングのドアをバンツと開けると、そこには母がいた。

「お母さん！お父さんはどこですか！」

「お父さんなら今日はもう出勤しましたよ？どうしたんですか、直樹さん」

その言葉を聞いた直樹、今度はキッチンにいるお手伝いの土井さんに駆け寄る。

「土井さん！何かお父さんに頼まれたんじゃないやありませんか！？僕の学生服がないんです！知りませんか！？」

土井さんの両肩を掴み、すごい剣幕で捲くし立てる。

そんな直樹に、土井さんは言い難そうに口を開いた。

「……申し訳ございません、直樹さん。お父様に申し付けられました……」

そう言いながら、玄関の方をチラチラ見ている。

「…………ツ」

直樹は裸足のまま玄関を飛び出し、ゴミ置き場へと走った。
全速力で。

そこで見つけたのは、紙の包み。

バリバリバリツ！！

急いで破り開けると、中にはパクからもらった学生服が押し込まれている。

「……」

それを抱きしめ、直樹は吼えた。

「ちくしょう！！！！」

その言葉は、父に対するもの。

直樹は学生服を持って部屋へと戻り、それに着替えた。

……俺はもう、これから朝食を食べずに登校する。
お父さんとは、しばらく顔を合わせない！

その日の夜から、直樹は学生服を抱いて眠るようになった。
それが今の直樹にできる、唯一の抵抗。
今の直樹は、父から逃げることしかできないのだ。

成長 1

直樹が『楽しい』と表する日々は続く。

これまでの人生、

『楽しい』

『嫌なこと』

…そんな風に考えたことなどなかったのに。

今日から3連休だというのに、その初日に外は雨。

これまでの直樹にとって、休日の雨など眺めることも考えることもなかった。

しかし今の直樹は、自分の部屋から眺める雨が少しばかり憂鬱。数ヶ月前まで『ここにいるのも2〜3年だ』、これを辛抱だとしていた直樹が、今はこの地の休日の雨を憂鬱に思うのだ。

直樹は自室に籠り、本を読んでいる。

片方で本を持ち、もう片方には鉄アレイ。

暇さえあれば、自分の腕にグツと力を入れてみる。

太くなつたんじゃないの？

スゴイんじゃないの？

そんなことを考えている。

とその時、階下で電話が鳴った。

電話などには出たことのない直樹は、それを無視する。しかしいつまで経っても、誰も出ない。

あれ？

不思議に思っ、階段の上から1階を覗き込む。
やがて電話は切れてしまった。

土井さんはいないのかなあ？

すると、また電話が鳴り始めた。

直樹は駆け足で階段を降り、受話器を取る。

「はい、もしもし。秋月です」

「……あ、あのー、すいません。直樹くん、いますか？」

これまでの人生で、直樹個人に電話がかかってきたなんてことはなかった。

直樹は驚く。

「直樹は僕だ！誰だ！？」

そう答えると、受話器の向こうの声が少し柔らいだ。

「おー、直樹か。良かった。お前んトコのオトンやオカンが出たら何か怖そうやから、切ろう思ってたんや。

俺や。パクや」

直樹は先日、パクに自宅の電話番号を教えたことを思い出した。

「おー、何だよ！パクウかよ！俺はまた強盗か何かかと思つたよ！
なにに？俺に電話なんかしてきてさ！1時間くらいなら話してもいいぜ」

初めての自分への電話にテンション上がり気味の直樹。

「……。イヤ、そがいに話さんでも構へん。お前なあ、明後日何か用事あるか？」

今のこんな直樹に用事などない。

「何もないよ」

『実はな、ウチの店の客がプロレスのチケットくれてん。3枚あんなんよ。お前も行くか?』

そのパクの言葉に、直樹は歓声に近い声を上げる。

「プロレスだって!? ホントかよ!? 俺さ、プロレスなら知ってんだよ!」

直樹がまだ幼い頃、唯一見ていたテレビアニメ。

それは夕方放送されていた『タイガーマスク』

直樹は親の居ぬ間を見計らい、そのアニメを夢中で見ていたものだ。

「パクウ! アレだろ! タイガーマスクだろ!? 虎の穴から来たヤツらのあのプロレスだろ!」

その大声にビックリしたパクは、

『お、おう。そうやで。タイガーマスクや。新日やで。猪木も来るで』

「え? 猪木??」

不思議そうな直樹の声を聞いてパクは言った。

『虎の穴まで知っとって猪木知らんなんで、お前ワケ分からんなまー、とにかく明後日5時に。。。会館の時計前で待ち合わせや。入場料はいらんけど、メシ食う金くらい持って来いよ?』

「うん、分かった!」

直樹がそう答えると、パクはそのまま電話を切ってしまった。

ツー、ツー、ツー……

「あれ? パクウ? もしもしー? もしもしー?」

仕方なく受話器を置いた直樹。

まだ5分も話してねえぞ？
パクウは気が早いなあ……。

直樹は再び2階へと上がって行く。

でも、タイガーマスクはマンガだからなあ。
実際にはいないんだろうなあ。

そんなことをつらつらと考えていると、直樹は今の退屈さが堪らなくなってしまうた。

よし！今からパクウん家に遊びに行こう！

直樹は机の引き出しを開け、参考書などを買ったときのお釣りをかき集める。

もう外は寒いだろうなあ。

そう思い、ジャンパーを羽織って下に降り、リビングを覗くと母の姿があつた。

あれ？いたんだ。

「お母さん。ちょっと図書館まで行ってきます。少し遅くなるかもしれないません」

「……………」

ヘッドホンを付けている。

音楽を聴いているのだろう。母からの返事はない。

直樹は構わず、外へ出た。

空を見上げると、霧雨。

傘の持参を少し迷い、ふと明後日の約束のことを思った直樹は、傘を差してバス停まで歩いて行く。

休日に予定があるって、なかなかいいもんだな。

風が吹くともう冷たい季節。

先ほどまで憂鬱だった雨も、あつと言う間に楽しさの一つになる。

直樹はバスに乗り込み、窓から外の景色を眺めた。

過ぎ行く家々。

通り過ぎる人。車。犬に猫。

飛んでいくビニール袋。

雨。

途中一度バスを乗り換え、直樹は再び傘を差してパクの家へ向かって歩く。

パクの家へ着くと、まずはお母さんに挨拶をしようと店を覗いた。

「こんにちは」

仕込みをしていたパクのお母さんは直樹を見て、

「あら、秋月くん。いらっしやい！1人で来たんかいな」

「はい」

「あの子、今家におらんで。またタケシとどっか行つとるんとちゃうかー？帰ってくるまで上がって待つといてエエで」

パクが留守だと聞いてがっかりする直樹。

「…あ、そうですか。じゃあ、また来ます」

店の扉を閉めて向かいの道路を見ると、先ほどまでと違い、雨が強く打ち付けている。

「……………」

また憂鬱になつてしまつた直樹、とぼとぼ歩きながら、今日はもう家に帰ろうかなあ……

そういえば、お母さんに図書館に行くつて言つたな。

最近の俺は、お母さんによく嘘を吐くな……

この辺はちゃんと元に戻さないと。

そうやって考え事をしながら歩いていると、いつの間にかバス停を過ぎていた。

あれ？

ここ、どこだ？

周りをキョロキョロ見回すと、それは以前見たことのある景色。

……あれ。

ここ、どこだっけ？

もう一度辺りをぐるりと見渡すと、直樹の視線の先に一軒の家がある。

……あ、そくだ！

道路沿いの、土手になつてゐるその先にある建物は、以前タケシと自転車で2人乗りをしたときに彼が教えてくれた自宅。

あれって、タケシン家だよな。

直樹はパクの家には何度も行つてゐるが、これまで一度もタケシの家には行つたことがない。

前に一度、タケシの家に遊びに行こうと提案したとき、

「ウチには何もないからアカン」
そう断られたことがあった。

ひよっとして2人はタケシの家にいるかもしれない。
直樹は土手を登るようにして、タケシの家へと向かう。

やがて土手に上った直樹の目前に広がったのは、敷地内というよりも、広い場所にぼつんと建っているように見える、家。
周りには草がぼうぼうに生えている。
真つ黒の木造の家は、お世辞にも大きいとは言えない。

表札も掛かっていない玄関の引き戸を、直樹はノックしてみた。
ガチャン、ガチャン、ガチャン！

「こんにちはー！タケシくんいますかー？」

……返事はない。

引き戸に手を掛けてみると、鍵はかかっておらず、直樹はそれをガラガラと開けて、

「こんにちはー」

もう一度声を掛ける。

すると奥から足音が聞こえてきて、

「はい」

出てきたのは、パジャマ姿の女の子。

「あの、岡崎くんのお宅ですか？」

そう尋ねた直樹に、その女の子が応えた。

「うん。…あ！お兄ちゃんの友達や！ウチへ初めて遊びに来た！
お兄ちゃん、出掛けてて今おらへんねん」

その子は小学生くらいの女の子。

どうやらタケシの妹のようだ。

「1人でお留守番？風邪引いてるみたいだけど、留守番なんてえら

いね」

「私、風邪なんて引いてないよ。心臓が病気やから、いつもこうやって寝てんねん」

その言葉を聞き、直樹はこれまで読んだ本の記憶を辿る。

狭心症

心房中隔欠損症

心臓弁膜症

……

何にしても大変じゃないか！

「……あ、ごめんね。お兄ちゃんいないんだったら、また来るよ。

僕はいいからさ、寝てて」

女の子は直樹の言葉を聞き、

「お兄ちゃん、もうすぐ帰って来るかもしらへんから、待ってたらいいやんか」

「……………」

人の家に勝手に上がり込んで、待たせてもらう。

今の直樹には抵抗はないけれど、少し遠慮してしまう。

……でも今日は寒いし、2人で居た方が部屋はあったかいかもしれないな。

誰かが帰ってくるまで、一緒に待ってあげようか……

そう考え、直樹は言った。

「それじゃ、お邪魔します」

女の子は嬉しそうに直樹を部屋まで通してくれる。

そこはとにかく小さな家。

台所と茶の間、この2部屋しかない。

床を踏むと、きしみて沈んでいく感覚。

「……ねえ、お父さんとお母さんは？」

「お母さんはお仕事。お父さんはね、私が小さいときにいなくなつたから、知らへんの」

「……………」

直樹はここで考える。

今まで自分は、タケシとパクに対して友達だという感情を持ち合わせていた。

でもこれは、一方的なものだったんじゃないか。

……考えてみたら、俺はタケシのことを何も知らない。

女の子は押入れの中から座布団を1枚出して、

「どうぞ」

と直樹に差し出してくれた。

茶の間には布団が一組敷いてあり、ちゃぶ台が一つ、そしてテレビと箆笥。

外で強い風が吹くたびにピューツという音が鳴り、どこからか冷たいすきま風が入ってくる。

「俺のことはいいからさ、君は布団に入っててよ。冷えちゃダメだよ」

すると女の子は直樹の言ったとおり布団に入り、うつ伏せて何かを書き始めた。

直樹がそっとそれを覗き込むと、それは漢字のドリル。

「ああ、宿題やってんだね」

「私、学校行けてへんから宿題なんかないねん。」

これはねえ、最近お兄ちゃんが勉強見てくれるから、帰るまでにやってるんよ」

「学校に行つてないって、どういうこと？」

「発作が起こったらアカンから、学校から来んといてって言われてん」

「……………」

直樹は次の言葉が見つからない。

タケシが何故自分に、勉強の教え方を教えろと言ったのか。

何故、と聞いたとき、

「まあ、それはエエやないか」

そんな返事が返ってきて、それ以降何も聞こうとしなかった自分。どこか目指す高校でもあるんだろうと、そうやって自己完結させ、タケシのこのことに関する興味をそれ以上にしていなかった。

…………… タケシは、この子に勉強させてあげたかったんだ。

「…………… ねえ、病院には行つてるの？」

「ウチなあ、貧乏やからなあ、病院には行かれへんねん。お母さんがお薬だけもらつてくる」

「……………」

また、直樹は次の言葉が見つからない。

「…………… 勉強、何か分からないトコない？俺さ、学校ではまあまあ成績良い方なんだよ。分からないトコあつたら見れるよ？」

「えー、ほんまに？じゃあねえ、えつとねえ、お兄ちゃんの説明だつたら分からへんトコがあつたんや。」

算数なんやけどな」

「うん、いいよ。どれどれ？俺が見るよ」

この2人の空間で直樹ができることはこれしかなかった。

他に何も考えないようにするために、直樹は目の前のドリルと彼女の表情のみに集中している。

「名前は何ていうんだい？」

「美奈子」

「何歳？」

「9歳」

会話といえば他愛の無いもので精一杯。

するとその途中で、美奈子が大きな咳をし始めた。

ゴホッ！ゴホッゴホッ！！

ゲホゲホゲホッ！！

えずきを交えながらの重い咳。

ゴホッゴホッゴホッ！！

咳はなかなか止まらず、しばらく続く。

直樹は周りを見回してティッシュを探すが、見当たらない。

急いでポケットからハンカチを取り出し、美奈子の口元へと持って行った。

ゲホゲホゲホッ！

ゴホゴホッ！

しばらくしてやっと咳が治まったとき、直樹はそのハンカチを見て思わず引いてしまった。

……血が付いている。

と、吐血!?

「ねえ! 口の中、切ったんじゃないよね!？」

その問いに、美奈子はあつさりと返事をした。

「こんなのいつもやねん。薬飲んだら治まるから平気なんや」

そう言っただけで起き上がり、筆筒の引出しを開けてごそごそし始める。

「ちょっと待って! 君、ごはん何時に食べた!？」

「11時半」

時計を見ると、3時を過ぎている。

「ちょっと待ってよ。3時間以上経ってるから、もう胃の中に何もない状態だよ」

直樹は台所へ行き、冷蔵庫を開けてみた。

しかし、中には何も入っていない。

「いいかい、まだ飲んじゃダメだよ。薬はちょっと待ってて。俺、何か買ってくるから。」

これは食べちゃいけないって物ない? お医者さんから何か言われてない?」

「生卵と力二とかエビとか、アカンて言われてる」

……そっか、甲殻類アレルギーか。

「10分だけ待ってて。そのスーパーで何か買ってくるから」

直樹は外に出、傘も差さずにスーパーへと走る。

そして牛乳・はちみつ・ロールケーキを買って、急いでタケシの家に戻った。

直樹が風邪を引いたとき、いつも土井さんが作ってくれるはちみつ入りのホットミルク。

自分で作ったことなどないが、この時の直樹に『俺が作れるのか?』

という自問自答はない。

……血が出てるってことは喉のどこかが悪いか、
もしかすると胃潰瘍なのか……？

直樹は家に入ると、生まれて初めて台所に立った。

鍋で牛乳を沸かし、その中にはちみつを溶かし込んでいく。

ロールケーキを包丁でカットして、ホットミルクと一緒に美奈子の元へと運んだ。

「安物のケーキだけど、食べないよりいいからさ。」

牛乳で胃に膜を張ってから、薬を飲む方がいいんだよ」

ロールケーキを目の前に、美奈子は大喜びだ。

「ありがとう！あゝ！この牛乳めちやくちやおいしい！何で！？」

「はちみつを入れてるだけだよ。お母さんに作ってもらいなよ」

ロールケーキを2切れ食べ、牛乳を飲んだ美奈子は、薬を飲んでまた布団の中に入った。

「薬を飲んだ後はちゃんと睡眠をとった方がいいんだ。俺がちゃんと留守番してるからさ、寝ちやいなよ」

「うん」

嬉しそうに返事をした美奈子は、すぐに寝入ってしまった。

……おい、タケシ。

一体どうなってんだよ。

俺にお好み焼きを奢ってる場合か？

冷蔵庫の中が空っぽじゃないか。

何のための冷蔵庫なんだよ。

直樹はタケシの家の現実を見ながら、イライラしている。

自分の日常を紐解き、思い返すが、直樹の中にこういう光景は一秒

たりとも映っていない。

「……………」

寒い家。

吹きこんでくる隙間風。

冷たい畳の感触。

そして、青白い頬をした9歳の少女。

逃げ出したい気持ちを抑えながら、直樹はただ時間が経つのを待っていた。

しばらくすると玄関からガサゴソと物音がして、ガラス戸に人影が立つのが見えた。

ガラガラという音と共に入ってきたのは、ずぶ濡れになった女性。タケシのお母さんのようだ。

突然の家族の登場に慌てた直樹から出たのは、言い訳がましい言葉。「あ、いや、違っんです。えっと、僕はタケシくんの友達で、えっと……………」

「あら、珍しいね。タケシが友達連れてくるなんて。

あれ？でもあの子、おらんやんか」

「あ、はい。帰るのを待たせてもらってました」

「ふーん……………」

言いながらこちらに背を向け、タオルでわしゃわしゃと髪を拭いているタケシのお母さんに、

「あの、妹さんが咳き込んだじゃったんで、薬を飲む前にホットミルクとロールケーキをあげちゃったんですけど、大丈夫だったですかね？」

直樹の言葉に彼女は振り返り、

「ああ、そう。何か悪かったねえ」

そして置いてあった牛乳をラッパ飲みしながら、直樹に言った。

「タケシやったら、。。。町のゲームセンターでタム口ってんちゃうか？待ってるより行った方が早いと思うで」

「あ、そうですか。じゃあ今から行ってみます。

お邪魔しました」

直樹は腰を上げ、玄関に向かう。

最後にもう一度挨拶しようと振り返ると、タケシのお母さんは直樹が美奈子のために買ってきたロールケーキに、包丁を入れることもなくそのまま齧り付いていた。

それを見て何も言わずに視線を元に戻し、外に出る直樹。

静かに玄関のドアを閉めると、雨の中を走り出す。

……何か、分からない。

何故だか、分からない。

だけど、何だか湿っぽい。

バス停に着いたところで、傘をタケシの家に忘れてきたことに気づいたが、もう取りには戻らない。

……タケシか、美奈子ちゃんが使ってくれればいいな。

そう思い、雨に濡れながらバスが来るのを待った。

すっかりこの街に慣れた直樹。

。。。町のゲーセンと言われれば、すぐにどの辺りか分かる。

直樹はバスに乗り、タケシがいるであろうゲーセンに向かう。

……マズイなあ。

街に出るときは、制服着用が校則で決まってるんだけどなあ。

何となく先ほどのことを思い出したくないと思い、かき消そうとする直樹は別のことに頭を寄せる。

直樹はこれまでの人生、ゲーセンなどに入ったことはない。

おぼろげな印象として、そこは不良の溜まり場だという認識でいる。

学校の関係者に見つかりませんように。

そう思いながら、外からでも十分騒がしいゲーセンの中に入っていく。

中は非常にタバコ臭い。

そしてとにかくうるさい。

……よく好き好んでこんな所へ来るよな。

絶対馴染めないよ。

そんなことを考えつつ、直樹はきよろきよろとタケシの姿を探す。

まず、タケシの学校の制服を探そう。

そう思った直樹だが、みんな私服姿で分からない。

…髪型がタケシみたいな奴に、片っ端から聞いて行こうか。

直樹はゲーセンの中を1周、2周……ぐるぐるうろろし続ける。

と、トイレの看板の前に、見たことのある顔がちらりと見えた。

周りの騒音でよく聞こえないが、誰かに向かって怒鳴りつけているような様子だ。

直樹はじつと、そちらを見る。

そこには3人の男子がこちらに背を向けて立っていた。

その中の2人の横顔に、何だか見覚えがあるような気がする……。

……アレ？

アレ、誰だったかな……。

うーん……

思い出せない。

直樹は彼らに近づき、後ろから声を掛けようと口を開きかけた。

しかしその直後、3人の隙間から見えるその向こうに、1人へたり込んでいる人に気づく。

覗き込むと、それはタケシ。

……あ！！

直樹は3人を掻き分け、タケシに近づいた。

「タケシ！ 探したぞー！！」

話し掛けた直樹に、タケシは、

「へへッ！へへッ！へへへへへへッ！へへッ！へへへへへへッ！

……おう、秋月やないかい。お前何や？何でこんなトコにおるんや」
タケシの目は何だか虚ろで、様子がおかしい。

「何だ？この3人にやられたのか？怪我したのか？大丈夫か、タケシ」

両肩を掴んで揺さぶる直樹にタケシは無抵抗で、首がガクンガクンと前後に揺れる。

見たところ、タケシの体に流血している様子はない。

成長 2

直樹は立ち上がり、後ろを振り返った。

タケシを取り囲んでいた3人の顔を、もう一度よく見てみる。

すると、

「あ！お前、マイティーだ！マイティーだろ！？」

指を差しながらそう叫んだ直樹の顔を見て、相手も気づいたようだった。

「…ああ、お前、こないだの」

直樹はマイティーの言葉に耳を貸さない。

「3対1なんて卑怯だろ！卑怯だろ、マイティー！！」

言いながら、やる気でメガネを外す直樹。

……しかし、

アレ、やっぱり何も見えない……

そう気づき、再びメガネを掛け直す。

「自慢じゃないけど、俺はケンカなんて馬鹿馬鹿しいと思ってるし、やったこともない。」

ただどこれで3対2になったぞ！

このまま警察に行くか？！ケンカするか、謝るか、どれか選べ！！」

最近鉄アレイで鍛えている直樹は、少し自信を持ってしまっている。

選択肢が一つ多い。

するとその言葉を聞いたマイティー、呆れながら溜息交じりに直樹に返した。

「ワレなあ、どういいうつもりか知らへんけど、ツレなんやったらもつとコイツのこと見張っとけ！」

そしてマイティーが直樹に向かって突き出した手の中には、ビニール袋。

「何だ、ソレは。お前たちのような卑怯者に罵倒される覚えはない！！」

直樹が叫ぶと、マイティーの隣にいた仲間の一人が口を挟んだ。

「お前、ちよつとソコ、足元見てみい」

指差された方向を見ると、そこには茶色い小さなビンが転がっている。

直樹にはこれが何なのか、分からない。

マイティーはそんな直樹に近づき、持っていたビニール袋を直樹に差し出した。

「あのな、俺はな、こういうのが大嫌いなんや。ここでラリツとるコイツがどうなるうが知ったこっちゃないがな。俺は見つけたら張っ倒すんじゃ！」

「タケシが何か悪いことをしたのか？」

「アンパンやつとったんじゃ、コイツ。便所に隠れてよう！」

「アンパン？アンパン食べて何が悪い！！俺を煙に巻こうとしてるな！？」

直樹の言葉は、3人を短い沈黙に陥れる。

「……誰がパンの話しとんじゃ！シンナーじゃ、シンナー！！コレ見てみい！！」

マイティーが広げたビニール袋には、透明な液体が入っていた。それに顔を近付けて覗き込むと、接着剤のようなきついニオイ。

直樹はシンナーを吸うという行為がどういう事かは知っていた。新聞で読んだことがあったから。

そしてその後どういいう症状が出るか、それも勉強済み。

マイティーはそのビニール袋の口をぎゅっと結び、ごみ箱の中へズボッ！と投げ捨てる。

それから直樹に向かって言った。

「お前相手にしとったら何や、ム力つきが無くなってまっわ。後はもうお前に任すわ」

「……………」

……怒りで体が震える直樹。

耳まで赤くなるのが分かる。

「マイティー、ありがとう！」

ゲーセンを出て行くマイティーの後ろ姿に一言叫び、直樹はタケシを振り返る。

地べたに横たわったまま、ヘラヘラ笑っているタケシ。

……我慢ができなかった。

「馬鹿野郎！！」

怒鳴りながら、横たわるタケシに飛びつき馬乗りになる。

そしてタケシの横っ面に向かって、直樹は大きく手を振り上げた。

ビタンッ！！

ビタン！ビタン！

何度も何度も殴りつけて、

「タケシィッ！お前一体何やってんだよ！？」

……初めて人を殴る、感触。
気持ちが悪い。

「妹さあ！一人だけ置いて、お前一体何やってんだよ！..」

バシンッ！

ビタンッ！

何度も何度も引っ叩く。

泣けてくるのを抑えながら、何度も何度も。

「.....イタイイタイ.....イタイイタイ」

引っ叩かれながらもヘラヘラしているタケシを見て、直樹は思い出す。

シンナーを吸った後、しばらくこの状態が続くことを。

取りあえず、何か食べさせた方がいいだろう。

そう考え、タケシの腕を肩に抱き、立ち上がりさせてゲーセンを出た。外に出てタクシーを拾おうとする直樹は、雨に打たれながらパクのことばかりを考える。

パクに助けてもらいたい。

ヘラヘラと笑いながら、

「さむいゝ、さむいゝ.....寒いぞ、秋月。.....傘や.....かさ」

一人でブツブツ言っているタケシに向かい、

「うるせー馬鹿！！傘ならお前の妹にやったよ！！..」

タクシーで向かおうとしているのは、パクの家。

直樹はこの怒りがどういう種類のものなのか、どっちを向いているのか分らない。

タケシに向いているのならば、このままタケシを放って帰ればいい。

何でこんなにムカついてるんだ!?

ザンザンと降って来る雨に濡れながら、直樹はタケシを抱え込み、タクシーが来るのを待っている。

やがて来たタクシーに乗り込み、2人はパクの家へと向かった。

何とかタケシのことを隠してしまいたい直樹は、パクが留守だろうが関係ない。

タクシーで乗り付け、ズカズカとパクの部屋に上がり込んでいく。部屋の扉をガラツと開けると、パクは帰って来ていた。

「うわッ!―何やねん、ビックリした〜!」

「おいパクウ!―一体コイツ、どうなってるんだよ!?!」

叫んで、パクのベッドの上にタケシを突き飛ばす直樹。

ドサッ!

ゴロンッ!

勢いに任せて、タケシはベッドに寝転がる。

「……何やコイツ。コレ、ラリツとるんか」

まだヘラヘラしているタケシを見て、パクはすぐに理解した。

「あー、ビシヨビシヨやんけ!―先に服脱がせろや。直樹、お前もソレ脱げエ!」

パクに慌てる様子はない。

直樹はゆつくりと座りながら、

「……なあパクウ。タケシっていつもシンナーなんか吸ってんのか? タバコ吸ってんのは知ってたけどさ」

「おっかしいなあ。コイツ、シンナーなんかやってへんのやけどな」

それを聞き、直樹は今回のことは初犯だと自分に言い聞かせる。
そうして、先ほどの出来事をパクに話した。

直樹の話を聞いたパクは、

「ハハッ！お前、タケシの家行ったんやな……。」

マイティーはああ見えて、エエ奴やからなあ」

「そんな感じに見えたよ。」

俺はマイティーは2人の敵だと思ってた」

「まー、敵っちゃー敵やけど……ただのケンカ相手やな。

……そっかー……シンナーか」

「「……………」」

しばらくの沈黙の後、パクが口を開いた。

「なあ直樹。コイツの家、酷かったやろ。もう床抜けるくらいのボ

口家や。……………なあ」

「そつ。それと病気の妹がいた」

「……あんなあ、一つお願いがあんねん。

多分な、コイツ、家へ帰ったら美奈子からお前の話聞くやろつ。せ
やけどな、お前からコイツの家行ったんやでつて、言わんといたつ
てくれ。」

コイツから話し出すまで、お前からは一言も言わんといたつてくれ」
「……ソレって何だよ」

その時、ベッドに横たわっていたタケシがいきなり、

「ウア————ッ——！」

大声を上げて、暴れ出した。

「ウルツサイのう！よっしゃ！ちよつと待つとれ」

言い置いて、部屋を飛び出すパク。

そしてすぐに戻ってきた彼の手には、瓶ビールが握られていた。

「直樹、よう見とけよ。コイツは滅法酒に弱い。ちよつと飲むだけですぐに寝てしまいよんねや」

パクは、口の開いたそのビールを無理やりタケシにラッパ飲みさせる。

「ちよ、ちよつとパクウー！シンナー吸った後つていうのは、気分が高揚してて睡眠なんかとらねーよ！

それに急性アルコール中毒になったらどうすんだよ！」

「ハハハッ！マジメやな。そんなモノ、お前の中でボンヤリさせとけ。死にゃあせんわ」

タケシは喉が渴いていたのか、そのビールをあつという間に飲み干し、すぐにベッドに横になる。

もう、さっきのような奇声は出さない。

その様子を見て、パクは直樹に向き直った。

「えつと、何の話やったかな。……あ、せやな、コイツのプライドの話や。」

お前には分らんかもしらんけど、一応俺らにもプライドっちゅーのがあんねん。

コイツはこう見えて、自分がアホで貧乏なんを恥じとる。

更に言うことやな、俺らはな、悪さばかりしてるけど、カツアゲとかな、窃盗とか、そういうことはせえへんのや。

ホンマはな、コイツに関しちゃうカツアゲも泥棒も悪さのついでにしたいハズやねん。

でも、せえへんのや。俺らはな」

「パクウン家も貧乏なのか？」

「イヤー！ウチは親父はガラス工場の一応社長やしな。オカンはあやつて店やつとるし、普通ちゃうか。まー、お前ントコよりは貧乏やけどな。」

……どうや、直樹。俺らに合わせるの、しんどいんちゃうか？大体が真逆やからな」

「そんなことねーよ」

直樹は返事をしながら、タケシの家の光景を思い出す。
そしてもう一度、感じてみる。

「……な、パクウ。パクウの日本名、何ていうんだよ？なあ、何でソツチの名前を名乗ってんだ？教えてくれよ」

「ああ、もう一個の名前か。大林健や。」

何でコツチの名前を名乗つとるかっちゅーて、……うん、ソッコーで聞かしたら、親父が可哀想やからや。

何が聞きたい？俺は日本人や」

「じゃあどっちかっていうと、右か？」

直樹の台詞に、パクは面白そうに口の端を上げる。

「ほっほー…：ようやく喋りよったな。直樹は勉強やつとるから、その辺気になつとるやろう思うとったわ。

右や！

せやけどな、直樹。タケシはな、そんなこと関係ないねん。というより知らんのや。何回も言うけど、コイツは大分アホやからな。

ほんで高校へも行かれへん。頭ナイ金ナイ、でな」

「タケシのことはタケシから聞くよ！

パクウ！お前はどうかんだよ！？まだ隠し事があるのか！？」

「……そんなモン、あるよ。そんな中には別に隠してへんこともある。お前にだつてあるやろ。

そんなモンや。そんなモンやねん」

直樹は覚えている。

初めて父と母に会った日のことを。

『今日からこの人がお父さんとお母さんだよ』
そう紹介された日のことを。

パクは続けて言う。

「何か今イチ分かってへんみたいやな。お前を黙らすには説得が必要みたいや。

えつとなー、そうやなー……。

例えばな、市販されてる本がここにあるとしよう。コレをパーツと読んどる。

そしたらな、読みよる途中で誤字脱字に気づくんや。

俺はここで、人間は2種類に分かれると思うとる。

直樹、お前は頭がエエ。ソコで何の躊躇もなあ自分を信じて『何やこの本。字間違うとるやん』って思うやろ。

でもな、2種類おる内の2種類目の人は、『アレ？コレ間違つとるんちゃうん？でもなー、コレ普通に売られとる本やんなあ。本がこう書いてるってことは俺が間違えて覚えとったんやなあ』ってなつてな。今まで正しかった知識を間違ったものにすり替えるんや。コイツがドツチ分かるやろ？

『タケシのことはタケシに聞くよ！』言われても、コイツは意固地に黙り込むだけなんや。な？

俺らは働き出すまでに、さっき言った頭のエエ方に向かって行けばエエ思うつとる」

パクの説明を聞き、直樹は感嘆の声を上げる。

「パクウはスゲエな！今のはスゲエ分かりやすかったよ！

うん、分かった。俺は、もっと2人のことを知らなきゃいけないと思っただ。でも違うんだな」

「そんなモン、誤魔化しとけ！あんまりマジメに考えるな！」

パクの言葉を聞いているのかいないのか、直樹の思考は間髪入れずに次へ飛ぶ。

「なあパクウ、2人はホントにケンカが強いのか？」

「自分で言うのも何やけど、…まあな」

「ケンカって面白いか？」

「おう。血が騒いでしゃーない」

「今度俺にケンカ教えてくれよ」

「何や、そら。さつきマイティー、シバいたたら良かったんや」

「いや、それはダメでしょう。マイティーはいい奴だよ」

「……せやな。アイツはエエ奴やわ」

今日はタケシをここに泊めるという話を聞き、直樹は安心して帰途に就いた。

タクシーでお金を全て使ってしまい、バスに乗れない直樹。雨が上がった冷たい、暗い道を歩いて帰る。

明日は何もねーけど、明後日は俺、プロレスだよ。

2人と一緒に。

そう思ったら、先ほどまでの喧騒が少し遠ざかった気がした。

三連休最後の日。

直樹は約束の時間より1時間も早く、待ち合わせ場所に到着した。

『メシくらい食って帰ろう』

パクのその言葉があったので、直樹はまた母親に嘘を吐き、お金をもらって来ている。

………すいません、お母さん。

勉強はちゃんします。

直樹はその場所でボーツと2人を待っている。

それから15分も経った頃、直樹は前の道路を歩いている2人を見つけた。

「おーい！」

声を掛けると2人は直樹の方を振り返り、こちらへ走ってきた。

「アレ？ひよつとしてお前、もう来てたん？めっちゃ早いやんけ！開場までにまだ1時間以上あるぞ。」

時間あるから茶店にでも行こう言つてたとこやねん」

そう言うパクの隣で、気まずそうにしているタケシ。

それに気づいた直樹は、

「……なあパクウ。俺の判断でこれはタケシに言ってもいいって思つてんだよ。いいよな？」

なあタケシ。俺に何か言うことないか？」

俯き加減のタケシは、直樹の声に顔を上げた。

「……あ、ああ……ワリかった。この前はありがとう。助かったわ」

そのタケシの言葉に直樹は、

「そうじゃねーよ！お礼なんかいらねえよ！もう二度とやんねーんだな！？」

「おう、二度とやらん。こないだはな、アレをたまたま便所で拾うたんや。もうやらん」

「……よし。じゃあ俺も一緒に茶店に行くよ」

それからもう、タケシの、直樹の、いつものタイミング。

昨日、直樹がシミュレーションしたものは少し展開が違っていたが、二度とやらないのであればそれはもうどうでもいいこと。

3人は並んで歩き始める。

その時、気になっていたのだろう。パクが直樹に言った。

「ところで直樹、お前何や、そのカッコ。ちゃんと私服持つて来て

んねやるな？」

……そう。

今日の直樹の格好は、全身登校ルック。

「はあ？何言つてんだよ。持ってねえよ。休日でも街に出るときは制服って、お前らの学校でも決まってるだろ？」

「お前、ソレ言うんやったらな、保護者ナシで夜の町ブラついとつてエエんか？ウロついとるのに制服着とつたら余計マズイやろが。しかもお前、今日のプロレス、多分テレビ中継あるぞ？映つとつたらどないすんねん。」

お前がこのまま制服である方が、問題山積みやと思うけどな」

「……ッ」

問題点を考慮し、ショックを受けている直樹。

パクの言う通りだ。

……ヤベーよ。どうしよう。

もう帰ってる時間なんかねえよ。

泣きそうな心境だ。

「直樹、お前晩メシ代言うて、いくら貰うてきたんや？晩メシは俺が奢つたるとして、服買えるだけないか？」

直樹は自分の財布をポケットから取り出しながらも、今日持っている金額が果たして服を買いえる金額なのか分からない。その財布の中には、3万円ほど入っている。

それを見せると、パクは素っ頓狂な声で、

「ハアッ！？お前、小遣いいうて3万も貰えるんか！？」

「イヤ、違うよ。コレは辞書買うって言って、嘔吐いちゃったんだよ……」

直樹の言い分など聞いていないパクは、隣のタケシに向かって言う。
「エエか、タケシ。コイツにタカるなよ？コイツはやっぱ俺らが
見たことないくらいのボンボンや！」

辞書買う言うだけで3万もくれよんのか……。
ま、それだけありや服なんざ余裕で買えるで。
よし！茶店はナシじゃ！服買いに行くぞ！」

そうして3人が向かったのは、パク行きつけのお店。

直樹はソコで、2人にされるがままに服を見立ててもらふ。

ダボダボのズボン

タートルネックの赤い長袖シャツ

Vネックのベージュのカーディガン

直樹は見る見る間に、見事なヤンキーに生まれ変わっていく……。

「おー！何だか2人と同じような格好になったな！」

そう言つて喜ぶ無邪気な直樹に、追い討ちをかけるパク。

「よっしゃ！ついでや！この近くに俺がいつも行つてる散髪屋がある。」

髪型も変えるで！カットせずに髪型まで作ってもらおうや！」

「うん」

直樹は素直に、されるがまま。

やがて直樹は散髪屋から、見事なリーゼントヘアになって出てきた。
その格好は、直樹がいつも掛けている心持ち分厚いレンズのメガネ
まで、彼をイカつく見せている。

「……ヤバイな。こんな前から歩いてきたら、勝てる気がせえへんぞ。」

おいパクウ、エエんか、こんなにしてもうて。相当イカついぞ、コレ」

「エエやないか。今日は遊びに来たんや。なあ、直樹」
「うん！」

鼻から大きく息を吐き出し、ご満悦の直樹。

少し自分の体が大きくなったような、そんな気すらしている。

3人で会場に向かいながら、カーブミラーに映る自分を見てみた。
少し立ち止まり、その姿をマジマジと見て、……何故か父の顔を思い出す。

「……ウルセエ。関係ねーだろ」
小声でそう呟き、直樹は2人の元に駆け寄った。

子供の頃に憧れた、あの虎の穴の人たちがやっていたプロレスを見るんだ。

楽しいに決まってるんだろ！

……ですよ？

『お父さん』

『お母さん』

―― 医者言うことは聞かないくせに、病院にはしょっちゅう現れる。

そんな人には、俺はなりたくないんです。

人の言葉は香気と捉える。
交歓しながら、前へ進む。

彼も高校へは行きたい筈なんだ。
以前の状態を据え置きながらではなく、両方を思い、進む。

文武両道と言えはいいのかな。

彼の状態を眇めるようなことはしない。

彼の悩みは俺なんかより、数等上にあるんです。

暗雲を彷徨い、暗雲に乗り上げ、上空には更に暗雲がある。

……忘れておきたいことばかりでしょう。

自分がどれだけ煌々とした光の中、

走るでもなく、

迷うでもなく、

しゃがみ込むでもなく、

これまで来れたのかを知りました。

精気を養うべくタケシを救いたいのではなく、私情としてそうしたい。

枢要は何処にあるんだ。

核が分裂できれば、俺も見ることくらいはできるだろう。

……おい、

頭を下げるなんて、容易いぞ。

垂り穂の如く礼をとり、思うんだ。

成功したい、と。

それは、走る作業。

これを助走とし、情力を生かし、

そのまま飛べ！

やってみせろよ。

君の胆力を信じて。

と、俺は思うんだ。

その会場はまるでお祭りのよう。

ガヤガヤではなく、皆が叫んでいる声。

大声。

2人との会話も、顔を寄せ合わないで成り立たない。

そんな騒ぎの中に、直樹は身を置いている。

「おい、パクウ！アレ、タイガーマスクじゃねーのか！？」

直樹の声に、パクはその方向を見遣る。

「おい、そうや。タイガーマスクや！」

「何でいるんだよ！？アレってマンガだったろ！？スゲー！実際にいるのかよ！！」

目の前でバク転や空中回転を繰り返しているそのタイガーマスクに、直樹は見惚れている。

マンガと一緒にだ！

虎の穴からの使者だ！

その大喧騒の中に直樹は没頭し、客観的な視線は持てなくなっている。

その時、タケシが直樹の肩をグイッと引っ張って叫んだ。

「おい秋月！次はアンドレが来るからな！2階へ行くぞ！」

「何で2階に行くんだよ？」

「これをぶつけてやんねん！」

タケシがそう言って、大事そうに持っていた巾着袋を見せる。
中には卵。

「何だよ、そんなのぶつけたら怒られるだろ！」

「チツ！ノリが悪いなー！パクウ、来い！」

「俺は行かん」

パクの返事を聞き、タケシはそのまま人を掻き分け掻き分け、どこかへ行ってしまった。

そうこうしていると、会場には今まで直樹が見たことのないような大きな人が姿を現した。

「この人がアンドレ！？」

「そうや。一応猪木を困らす悪モンやねん」

「スゲエッ！！」

感心している直樹の前を、その巨人は悠々と通り過ぎて行く。
そのモジャモジャの頭、……後頭部を見ると、卵の殻が付いている。

「……おいパクウ、アレ、タケシがやったんじゃないのか？」

「へハッ！！せやるな！」

タケシの行為とアンドレの間抜けな後頭部に、2人で大爆笑する。

その後の会場は静まることなく、強烈な熱気に包まれた。

「イーノーキー！イーノーキー！イーノーキー！」

直樹は猪木が誰なのかも知らず、皆と同じように右腕を上げながら猪木コールを連呼している。

……そのひとときは、いろんなことを忘れるには、最高の時間。

全試合が終わり、3人は会場を出た。

出口を出たところに売店のようなものがあるのに気付いた直樹は、

先々と歩いている2人を気にしつつ寄り道をする。

そこにはいろんなものが並んでいた。

中でも一際直樹の目を引くもの。

キラキラと輝く、それはタイガーマスクのマスク。

ちらりと値札を見て、一度驚く直樹。

……でも、グローブだって1万円くらいするだろ？

俺だって、いいよな？

……いいだろ？

そう自分に言い聞かせ、辞書を買うと言って貰ったあの3万円からそのマスクを購入する。

完全に調子に乗っている自分を知りながら、冷静ではられない。

下らないモノ買ったよ。

そう思わないようにする。

そしてその場でマスクを被り、2人を驚かそうと追いかけた。

成長 3

直樹はそのマスクを被って、2人の隣に立った。
驚いたタケシが、

「ううわッ！何や！？お前ソレ買ったんか！？」

…… エエなー……」

「いいだろう！でも目が見えねえ……」

そんな直樹にパクが、

「直樹、お前なあ、そんな無駄遣いしよってエエんか。ソレ高かったやろ。母ちゃんに何て言うんや」

「いいんだよ！俺、今までおもちやなんか買ったことねーもん。」

でもコレ、耳が上に付いてるからメガネかけられなくて不便だな」

タケシはそれを聞き、ポケットをゴソゴソして何か紐のようなものを取り出した。

そしてその紐を、直樹のメガネの両方のつるに縛りつけ、輪を作る。

「これでイけるんちゃうか」

そう言つて、タケシはタイガーマスクを被った状態の直樹の頭の上から、スポツとそのメガネをかぶせた。

「「ギャハハハハッ！！」」

大笑いしている2人を見て、にわかに想像できる今の自分を思い、直樹も一緒に笑い出す。

「ギャーハハハハハッ！！」

楽しい！！

ひとしきり笑うと、涙を拭いながらパクが

「よし、もう買つてもうたモン仕方ない。メシ食って帰ろうや」

人混みをすり抜けながら、3人は歩いて行く。

その内、さっきまでの興奮が冷めやらぬ直樹とタケシがいきなり走り出した。

道路には昨日までの雨で、そこら中に水溜りができている。
直樹は走りながら、思いつきりその水溜りを踏みつけた。

バシャンッ！！

直後、

「冷たッ！」

その声に、相手を見ることもなく直樹はすぐに謝った。

「あ、ごめんなさい！」

するとその相手はドスの効いた声で、

「ごめんなさいちゃうやろワレ！コレ濡れてしもったやないか！ど
ないしてくれるんじゃ！？」

そこで直樹はようやく、相手がどういう人なのかを確認した。

タケシやパクと同じような格好をした3人。

ガタイからして高校生か。

「本当にごめんなさい」

「せやからごめんなさいちゃうやろ？！クリーニング出さにゃコレ、
どうもならへんぞ！？」

人混みの中での遣り取り。

直樹は早くタケシとパクと一緒に食事に行きたくて、ソワソワして
いる。

この人の言っていること。

……正論だ。

クリーニング代だよな？

そう思い、直樹はポケットから財布を取り出した。

この状況に恐怖しているわけではないが、
楽しい時間を少しでも削られること

その方が直樹にとっては重要なのだ。

財布をモゾモゾしている横を、その時突然の風がブワツ！と通り過ぎて行った。

次の瞬間、ゴーンツ！という音。

直樹にお金を要求していた彼は、道路脇の標識にぶつかって尻餅をつく。

直樹がハツと顔を上げたときには、すでにその状況。

……タケシだ。

「おー、ゴラ！一発じゃ足らへんか！？ドコ見てモノ言つとんじやワレー！」

尻餅をついたその高校生に、何度も何度も蹴りを入れるタケシ。堪らず倒れ込んでしまった高校生の頭を踏みつけ、更にぐりぐりと水溜りの中へ顔を蹴り込む。

「おいコラ！！何がクリーニング代じゃ！！立派な舌が付いとるやないか！ソレでペロペロやつとけ！！」

そこまで見て、直樹はハツと我に返った。

悪いのは自分だ、と。

「タケシ、やめろ！！」

叫んで、タケシを後ろから羽交い絞めにするが、タケシは直樹を見ることがなくその腕を大きく振り払った。

ドンツ！！

尻餅をついた直樹、今度はパクに縋りつく。

「パクウ！！何とかしろよ！無茶苦茶じゃないか！！」

言いながら見上げたパクの顔は、いつもの冷静な彼ではなかった。目尻が釣り上がったように見える、その形相。

……プロレス観戦の後、血が踊っていたのは直樹とタケシだけではない。

パクももれなく、だったのだ……。

「直樹。ちょうど3対3やぞ。お前はどつする。

フハハハハッ!!」

そう言い残し、高校生2人に飛びかかるパク。

「……ッ!」

人混みの中、自分の踏んだ水溜りによって大惨事が繰り広げられているのを、直樹は呆けて見つめていた。

ここ何日かの直樹。

父と一緒に車に乗り込んだ、あの女の顔を忘れることができない。

……家に帰りたくない。

そう考える日々を送りながら、いつの間にかそれに慣れ始めていた。その慣れてしまった日々を、数時間でも削除できる。

今回の夜遊びは、直樹にとって特別なものだったのだ。

「やーめーろー!ーごーはーん!ーごーはーん!ー!」

自分でも何を言っているのか分からない。

ただ大きな声を張り上げている直樹。

この状況に、被っているタイガーマスクを脱ぐのも忘れるほどだ。

タケシの方に目を遣る。

タケシに蹴り続けられている高校生はされるがまま、道路に横たわっている。

パクの方に目を遣る。

…とその時、高校生の一人がポケットから何か取り出したのを、直樹は見逃さなかった。

しかし次の瞬間までの時間はなかった。

「あッ!ー!」

短いパクの叫び声。

屍餅をついて後転する。

そして、……

「……………」

目を見開いて一部始終を見ていた直樹は、呆然としながら慌てるでもなくパクに歩み寄り、確認する。

体を丸め、倒れているパク。

ズボンの裾からは夥しい量の血液。

白い靴下は片方だけ、真っ赤に染まっている。

「……………」

直樹はゆっくりと顔を上げ、その高校生を見上げた。

先ほどポケットから取り出したもの。

それが握られている、右手。

……ナイフだな。

あのナイフに血は付いてないけど、

あのナイフで切ったんだな。

やがて道路にまで血が流れ出した頃、周りに集まっていた人たちが騒ぎ始めた。

しかし直樹に、その騒ぎは聞こえない。

ただ、もう一人いた高校生が血まみれのパクを見て、慌てて逃げ出したことのみを確認する。

直樹の頭の中では、キ——…ンという音が鳴っている。

「……………」

直樹は立ち上がり、ナイフを持った高校生に近寄った。

そして利き腕の拳をギュッと握り締め、その彼目掛けて振り上げる。

ガンッ！！

側頭部に命中させた、その拳。

その高校生は、道端にパタッと倒れ込む。

力いっぱい殴りつけた覚えはない。

ただ、大きく振りかぶっただけ。

先日、タケシを殴りつけた時の気持ち悪い感覚は覚えはない。
ただ、痛いだけだ。

この人が知らない人だからか…？

そう思い、まずはその横たわった高校生に跨る。

俺が、ちょっと悪かったただけだよな…？

そう思い、馬乗りになる。

あの女、どこに住んでんだ

膝でその高校生の両腕を押さえつけた。

お父さん

出張は……？

右拳を顔面目掛けて振り下ろす。
ガッツ！

急がないとパクが出血多量になって……

今度は左手を振り下ろす。

ゴッツ！

しかし、右腕のようにつまく狙ったところに届かない。

埃を踏んだかのように、あっちこっちに思考を飛ばしながら、

右・右

右左

左・左・左

右右右

右

左左左

右・右・左

顔面目掛けて拳を振り下ろす。
何度も何度も。

……シューベルトの交響曲第3番が聞こえるなあ。

このリズムだな。

気持ち悪くない。

痛いだけだ。

いつの間にか2対2になったこのケンカは、タケシ・パク・直樹の
圧勝。

パクを気にしながら馬乗り状態の直樹。
笛の音が鳴り響いたことに気づかない。

パクは必死で傷口を手で押さえつけながら、人が刷けていくのを見ている。

パクを傷つけたこの人の罪は、まだ癒えてないのかもしれない。
あと何発必要だろう…？

そう思い、振り上げた腕を、どこからともなく現れた手が引つ掴む。
直樹が見上げたそこに立っていたのは、警察官。

「……まだ足りないんだよッ!!」

胸の内で絶叫してグツと力を込めるが、その掴まれた腕は振り下ろすことができない。

「お前ら、何やっとなじゃ——ッ!？」
その怒号に、一瞬時間が止まった気がした。
もう一度、頭の中でキ——ンという音。
直樹はようやく確認する。

「……あ。

警察官だ。

直樹はタケシとパクを振り返る。
2人とも自分と同じように、それぞれ腕を後ろに取られ、捕まっていた。

その顔は観念しているかのよう。

……逮捕なのか？

そう思う直樹を、警察官はパトカーに押し込んだ。
生まれて初めて乗るパトカー。

乗り心地は悪くない。

そんなことを考えながら直樹は頭の中で、倒し、転がり落ちてしま
ったものを組み立て直す。

結果、

両親への思い…… 4分の1

学校へのこと…… 4分の1

俺の責任で2人が…… 半分

項垂れる思いで、前を走るタケシとパクを乗せたパトカーの様子を
伺う。

パクは背筋を伸ばして座り、タケシは警察官と何やら言い合いをし
ているようだった。

……ビン、としているように見えた。

よし、俺も堂々としていよう。

いつものように、直樹は背筋を伸ばす。

そんな直樹に、隣の警察官が話し掛けてきた。

「おい兄ちゃん。エエ加減ソレ外して、おっちゃんに素顔見せてく
れや」

ハッと気づく直樹。

タイガーマスクを被っていたことをすっかり忘れていた。

急いで後頭部の紐を外し、マスクを外し、

「すいません！」

そしてまた、猫背に戻ってしまふ。

「……………」

俯いた直樹は、膝に置いた自分の手に意識を向けた。

ここに来て、じんじんと更に痛みを増した両手。

今まで味わったことのない痛み。

直樹は拳を見つめながら、先ほどの情景を思い出し、考える。

明らかに、虚無感はなかった。

ただあの時、空っぽだった。

暴力なんて最低だと思っていた自分が、パクの傷を見て何の躊躇もなく、それを遂行する。

いや、

……した。

俺は誰かに自慢したいのかもしれない。

痛む両手の比較をし、右手の方が痛い、左手でぎゅっと握り締める。

やがてパトカーは警察署に到着した。

入口ではタケシが大きな声で、

「イッタイのう！放せや！！おいコラ、クソポリ！！」

そのタケシを横目に、パクは

「めっちゃ足が痛いんですわぁ。これは先に治療でしょう」

平然として、タケシの後について中に入って行く。

右手に握っていたタイガーマスクをポケットの中に押し込み、直樹も2人の後を追うように警察署の中に入る。

そして連行された3人が、まず警察官に言われたこと。

「おいお前ら、これは別に逮捕とちゃうからな。補導や。こっちも仕事やからのう。優しゅうしたるから、正直に答えや！」

3人は長椅子に並んで座り、警察官の話を聞く。

直樹は未成年の自分に喜んでいた。

それからずっと、パクの足の傷が気になっている。

「あの、すいません。足、切られてるんです。先に病院に連れてってくれませんか」

それを聞いたパクは、

「イヤイヤ、もう血は止まっとんねん。俺もビックリしてもうて大袈裟にしてもうたけど、傷はそんなに深かないねん。

それより直樹、お前ゴツツイヤんけ。マスク被つとるからタイガーマスクか！めっちゃビックリしたでー？」

すると後ろに立っていた警察官が、私語をするなとばかりに2人の頭をバシンツ！と引つ叩いた。

頭など殴られたことのない直樹はムカツとしたが、自分の今の状況を思い出して押し黙る。

「お前らどこの学校や。学生証持ってないんか」

その問いに、直樹は慌ててポケットから学生証を取り出す。しかし2人は

「そんなモン、持ってへんわ！」

そんな2人のリアクションに、再び慌てる直樹。

……ついていけない。

2人と同じようにしようとしたが、今の直樹にとって一体どちらが馬鹿なのか分からない。

仕方なく、取り出してしまった学生証を警察官に渡す。

直樹のソレをじーっと見つめ、しばらく黙る警察官。

「……キミはアレか。。。中学校か」

「はい」

「お前ら2人は！？」

「誰が言つかッ！！ポケット！！死ね！！」

そう答えたタケシをじっと見て、その警察官はタケシの胸倉を引っ掴み、引き寄せた。

「ワレ、この辺でその野ヅラは。。中やろ！！」

あの傷口見たら刃物飛び出しとるみたいやからな。お前ら刑事課に回してもエエんやぞ!？」

そしてその警察官はタケシの横っ面に思いつきり、バシーンツ!と張り手を食らわす。

ガタンツ!!

吹っ飛ぶタケシ。

それを見て、直樹は少しではない恐怖感を感じている。

やがて、2人の目の前に用紙が置かれた。

「この空欄に名前・住所、書いてあるのを全部書け」

2秒ほど静止していた直樹の横で、パクがそれに書き始める。

それに倣い、直樹も同じようにペンを走らせる。

タケシは1人、違う部屋に連れて行かれながら、

「秋月!ワリかったな!巻き込んで!」

それを聞いて、直樹は手の震えを止める。

全てを書き終えた後、その書類を持って部屋を出て行く警察官。
硬直した時間が流れた。

直樹は目の前の壁に掛けられた時計を眺めつつ、こんな秒針の動きが遅く感じる、そんな体験をしたことがない。

1.....2.....3.....

4.....5.....

まだ5秒しか経たない。

そんなことを思っている。

30分後、部屋の扉が開き、先ほどの警察官が入ってきた。

「秋月くん、ルールやからな。一応ご両親には電話した。

何や、キミは。。。グループ社長の息子さんか。早う言ってくれんと!

キミはもう帰ってエエぞ。お父さんが今、迎えに来よるわ」

「……」

当然のようにさらりと言われたその『お父さんが今、迎えに来よるわ』という言葉。

タケシとパクが自分を許してくれるのであれば、次に来る恐れというのはそこしかない。

八方塞がりの直樹、『しばらくここに残してください』とも言えず、小さく頷く。

「おい大林。お前は帰られへんぞ。電話してもお前んトコ、誰も出よらんやないか！

一体どないな育て方されよんのや。おーコラ！」

固まっている直樹の横で、パクのした対応。

それは直樹にとって、随分と大人のもののように見えた。

「イヤイヤ、今、親は仕事で忙しい時間やから。

ねえお巡りさん。臍負・差別はアカンでしょー。俺も帰らせてくれないかー？」

ホラ、俺って被害者でしょ。ナニもしてませんよー？」

その遣り取りを、固まり、俯いたまま耳でのみ処理している直樹。今は自分のことで手一杯だ。

やがて直樹は俯いたまま、パクに話しかけた。

「……パクウ、ほんとにごめんな」

「え？何を謝つとんねん。謝るな。

ハハッ！まさかお前が人ドツくとは思わなんだよ。ほんまにビックリしたわ。

メシは食いに行けなんだけど、今日はまあ面白かったなあ？」

そう言つて、パクは直樹の肩をぽんぽんと叩いた。

「……………」

……いや、違うんだ。

俺はさっき、キミは帰っていいって言われたとき、少し安心したんだ。

俺だけは帰してくれ、そういう風に思っていたのかもしれない。

ああ見えて、さっきのは誠心誠意の謝罪なんだよ……。

直樹はそう思いながら、パクの顔が見れないでいる。

それからどのくらいの時間が経ったのか。

いきなりその部屋のドアが勢い良く開いた。

バンッ！

振り返ると、そこに立っているのは父。

きつと怒鳴られる！

そう思い、僅かに首を竦める直樹。

しかし父は怒鳴らなかった。

父は直樹を一瞥することなくスツと横切り、正面にいた警察官の元へと歩いて行った。

そうして握手をしながら、2人で話し始める。

「いや、まさか秋月社長のご子息とは知らんで……知ってたらすぐに戻ってもらってたんですけどね」

直樹が何度も見たことのある光景。

父はこの後、必ず

「イヤイヤイヤ！とんでもない！」

……こう答える。

中の中のド真ん中。

普通中の普通。

その遣り取りを済ませた父は、今度は直樹の正面に立った。

俯いている直樹の耳に、間違いなく「チッ！」という舌打ちの音。

……顔を、上げられない。

すると隣でパクが立ち上がり、父に向かって言った。

「こんにちは」

まず挨拶しながら頭を下げ、続ける。

「あのお、今回は僕らが無茶苦茶してしもつてから、こんなことになつてしもつて……」。

直樹くん巻き込んでしもつて、ほんまにすいませんでした。ごめんなさい」

俯いている直樹にも見えるほどの、深いお辞儀。

パクは直樹を庇い、そして直樹よりもまず先に謝ってくれた。

泣きそうになるくらいの感動を覚えている直樹だが、彼は泣かない。自分が覚えている限り、泣いたことなど一度もない直樹は、泣くという行為がどういうものなのか分かっていないのだ。

だから、ただその光景をじっと全身で見つめている。

深々と頭を下げたパクを、父が見ているのかどうかは分からない。が、直樹の耳に入ってきたのは、再びの「チッ！」という舌打ちの音だった。

疑いようもない、父のもの。

しかし今の直樹は間違いなく後列に立ち、人影からものを言う状態。そういう存在であると自戒してしまい、それに対して意見を述べることができない。

「帰るぞ」

低く言われた言葉に、父の後をすこすことついて行く。

……帰りたくない。

また両手がじんじんし始めた。

足も怪我してんじゃねえか？

歩きにくくてしょうがねえ。

タケシとパクを思い、

『やっぱり俺も、2人が帰れるまで一緒にいます』
そう、言えばいい。

言え！

言え！！

「……………」

父の背中目は目の前にある。

聞こえないはずはない。

言え！！

それはまるで、これまで何百回と練習したかのように躓くことなく、
頭の中で何度も何度も繰り返される。

しかし、そんな直樹の口から出た言葉は、

「……………パクウ、ごめんよ。先に帰るね」

後ろを振り返りそう言った直樹に、パクもこちらを見て手を振った。

出た言葉が、あれかよ！！

そう思ったが、……………言ってしまった。

直樹は父の後をついて行き、車に乗り込む。

「……………」

「……………」

一言も喋らない父の態度に、こっちの方が楽かもしれないと、そう
感じ始めている。

でもひよつとしたら、怒鳴りつけられた方が楽なのか？
そんなことを考えてみるが、答えが出るはずもない。
車はどんどん家へと向かって走る。

……明日は学校。

タケシとパクはいつものように、迎えに来てくれるのだろうか。
苛立ちのみで何も言おうとしない父親をまず置いておいて、2人の
ことを考える直樹。

この時、父は怒鳴りつけもしなかった。

そのことに、直樹はもっと重きを置くべきだったのかもしれない
――。

罰 1

次の日。

直樹はいつものように学校で授業を受けているが、集中できずにいる。

昨日思ったこと、考えたこと。

全て、自分の中で自問自答したこと。

それを2人が知る由もないことは分かっている。

教師の声を微かに耳にしながら、昨日の自分を思い、やり直したいと考えている。

巻き戻ってやり直したい、と。

今日の帰り、2人は待っていてくれるのだろうか。

それもまた心配だ。

更にこの日に限ってタイミングが悪いのか、紀子とも会話できていない。

……昨日のアレなんて、天文学的確率じゃねえのか？

たまたま前の日まで雨が降っていて、

たまたまあの時間、あの道を通りがかって、

たまたま水溜りを踏んで、

たまたまそれが人にかかって……

悔やんでも悔やみきれないことも、分かっている。

昨夜は怖くて、パクの家に電話することもできなかった。

長い長い6時間目までが、長く長く過ぎていく。

やっと最後の授業が終わり、帰りのホームルームが終わると、直樹は教室を飛び出した。

今週、掃除当番の直樹。

忘れていたことにしよう

そう自分に言い聞かせ、ダッシュする。

校門を出て周りを見渡すと、通行人はいるがああ2人はいなかった。

…大きなため息がひとつ。

それと同時に泣きそうになる。

しかし直樹は泣かない。

…我が事ながら、今の溜息デカかったな。

頑張れば、飛んで家へ帰れるんじゃないのか？

そんなことを考え、自分を煙に巻き、直樹はとぼとぼと家路を辿り始める。

やっぱり昨日の俺は、どう見たって俺が悪いよな…。

プロレスは楽しかった。

チンタラやってないで、キビキビ動けば良かった。

…この制服は、やっぱり俺から返しに行かないとマズイよな……。

直樹はこれまで、特に人嫌いというわけではなかった。

今回、そんなものは必要ないと、叱りを受けた気持ちがあった。

それは洗脳のように、直樹の中に浸透していたのだ。

社交性云々。

人とのわだかまり。

関係。

そついったものを学ばず、たったの14年ほど生きてきた。

しかしこの時感じた虚無感は、それら全てを振り払う。

ここ最近ずっと、何となく、特別でもなく、放課後を共に過ごした2人がいないことに、ただ寂しいと感じる。

とぼとぼと歩く直樹。

俯き加減ながら、毎日と変わらぬこの道を家へと向かう。

途中小さな下り坂に差し掛かったとき、坂の向こうから声が聞こえてきた。

「おいコラッ！上り坂くらい降りて歩け！乗っけて上がるの無理やろーがッ！！」

「足が痛いんやからしゃーないやろ！せめて抜糸が済むまで俺のと可愛がれ！！」

最近よく聞く声。

直樹は早歩きで歩を進める。

そして見えたのは、タケシとパクの2人。

坂の途中で何やら揉めている。

視線の先で、2人はすぐに直樹に気づき、

「おー！」

と声を掛けてきた。

……いつもと変わらない。

さっきまで俺が考えていたことは、この2人には恐るるに足りないことなのかもしれない。

よし、また巻き込まれてみよう。

直樹は笑顔で2人に駆け寄る。

恐るるに足りないのであれば、もう謝るのは止そう。
そう思った。

「パクウ、足大丈夫か？」

「それがやな、大した事ない思ってたなら10針も縫うハメになつてん。

お前こそ大丈夫やったか？お前んトコのおっちゃん、想像してたままやったよ。めっちゃ怖いやんけ。

それよりコイツの顔、見たってくれ」

パクはそう言つてタケシを指差した。

タケシの顔は半分が1・3倍増に膨れ上がっている。

「プツ！！えらく腫れてるじゃないか」

「くそー！あのポリ！いつかやり返したる！！」

3人は昨日のことについての話を、何となくこの辺で止めておいた。再び歩き始めながら、パクが口を開く。

「今日もまた今からウチやなー。」

俺、足こんなんやからチャリ乗られへんねん。タケシ、お前はチャリで先に行け。俺と直樹はバスで行く。

頼むでー、直樹。実は俺、1人でバスによう乗らんねん」

「え？足が痛いのか？」

「ちやうよ。乗ったことないから乗り方分からへんねん」

「嘘だろ！どんな弱点だよ！」

タケシは先に自転車でパクの家へと向かい、直樹とパクはバス停まで歩いて行く。

「今日はお前、えらい学校出てくるの早かったな。前から思ってたんだけど、何でお前の学校、俺らの学校より終わるの30分も遅いんや？」

「6時間目が終わった後に、いろいろ模試とかの説明があるんだよ」
「へー」

他愛のない会話。

でもそれで、それが良かった。

クリアしなければいけないことを、紙にくるんで置いてあるような気がする。

でも今はこれでいい。

直樹は笑顔でパクと話しながら、つらつらと考える。

できればこの2人と同じ高校へ。

できれば久保さんも。

……お、余裕が出てきた。

でも、同じ高校は無理なのかな。

タケシだってこうやって毎日勉強やってれば、絶対どっかの高校に入れるようになるさ。

お金のこと？

何とかなるさ。

その辺は曖昧に考えるしかねえな。

俺が決めて、俺が進んでんだ。

正道で間違いない。

系譜として記されるに、違いない。

……このリズム。

シヨパンの雨だれ。

螺旋もあれば、山も谷もある。

直線もある。

直樹は過ごすのはこんな日々。

毎日毎日、飽きもしない愛すべき日々。

やがて春になり、彼らはもれなく中学3年生になる。

確実に、以前よりも楽しい毎日。

3年のクラス替えでは、また紀子と同じクラスになった。

それだけでも良いのだが、放課後には楽しみがある。

直樹はあの件以降、父とあまり顔を合わせていないことを気にも留めていない。

……最近、何だかこの制服が小さくなった気がする。

直樹は自分の部屋の柱に背を張り付かせるようにして立ち、頭頂部に手を置いて柱に傷を付ける。

その傷をメジャーで測ってみると、約186センチ。

また5センチくらい伸びてるよ…。

でも最近鍛えてるからな。

筋肉も付いてきた。

貫禄が付いてきたに違いない。

15歳の直樹が、何故貫禄などに拘っているか。

この日は直樹にとって、特別な日なのだ。

大人たちに、自分をお披露目する日。

子供の頃から行われてきた行事。

父の会社が建てたデパートの完成披露パーティーが今日、あるのだ。

直樹は放課後、遊び回っているが、決して成績を下げてはいない。

一度紀子に校内1位を奪われたが、次の試験では抜き返した。

いくら紀子でも、こればかりは譲れない。

直樹は間違いなく、あの件以降も勉強に重点を置いて生きてきた。

自分が自分で在る限り、決して折れることのない城壁であると信じていた。

それはまた、父も同じ。
そう、信じていたのだ。

これまで何度かあったそのパーティーには父と直樹、いつも2人で出掛ける。

母と弟の慶也は常に留守番。

何度も何度もあった、直樹が揺るがないで済む行事。

前日にタケシとパクには、明日は会えないと断りを入れている。

この日、直樹は授業を終えるとまっすぐに家へと帰った。

いつもの我が家の庭を見て何か違和感を感じたが、そのまま気にも留めずに自室へと向かう。

呼ばれるまで待っていよう。

今回に限り、父とは何の打ち合わせもしていないが、今日パーティーがあることは間違いない。

恒例の行事を信じて止まない直樹は、部屋で声が掛かるのを待っている。

本を読んで時間を潰しながらふと時計を見ると、時刻は19時半。

……今回はえらく遅い時間から始まるんだな。

その時、内線のインターフォンが鳴った。

あ、時間かな。

受話器を取ると、相手は土井さん。

『直樹さん、夕飯の支度ができましたよ』

「いや、土井さん。今日は俺、夕飯はいらないよ。外で済ますんだから」

『え？今からお出掛けですか？』

「出掛けるよ。お父さん、何も言っただけじゃなかった？お父さんは？」

『お父様は今日、直樹さんが帰られる前に、慶也さんとパーティーにお出掛けになりましたよ』

「……！」

直樹の膝は俄かに笑い出す。

「……は……ッ」

何度も何度もシミュレーションしていた、その中の最悪の事態。

決して折れることのない、城壁 —— ……

考えるより先に動き出す直樹。

引き出しの中のお金を掻き集めてポケットに押し込み、家を飛び出す。

…… 帰宅した時に感じた、庭の違和感。

お父さんの車がなかったんだ。

だから、広く感じたんだ。

…… しまった。

誰にも何も言わずに出てきちゃった。

そういえば俺、相当お腹が空いてるなあ……。

そんな、後で考えればいいようなことばかりを考える。

直樹が向かったのは当然パーティー会場だが、現実から逃げたい頭と体が、右と左を向いている。

警察沙汰を起こしたから、今回は俺ではなく慶也なのか？

まずそう考えなければならぬ直樹は、しかしまず自分の空腹の心配をするのだ。

通りに出てタクシーを拾い、会場に向かう。
車内で半分目を閉じ、ダラリと座りながら、直樹はようやく順を追って考え始めた。

……俺はやっぱり、間違えたのか。
だとしたら、どの辺りから？

知っていたような、知らなかったような、そんな気がするよ。

楽しさにかまけて、何かを怠ったわけじゃない。
ちゃんとやっていたぞ。

誰かが何かをチクツたのか？

……浅ましい。

クズだ！

誰のせいでもねえよ！！

直樹の膝が笑う感覚は、やがて怒りへと変わっていく。

俺へのものか。

……それもそうだよ。

お父さんへのものか。

……着くまでに考えよう。

慶也へのものか。

……あいつはいい奴だ。

慶也はいつの日か知らないけれど、ドロップアウトをしていた。
用心しながらも、80%がそういう考えで頭を占めていた。

コースに戻っても、ワックスを敷き詰めてやる。
そう思っていた。

しかし慶也はまだ、直樹の立つコースの中に残っていたのだ。
ダークホースと評するには軽々しすぎた。

……でも慶也はいい奴だ。

直樹は手のひらに爪の痕が残るほどに力み、震えている。
ほんの数分前まで最悪と表していた今回の出来事に、怒と哀を感じながら。

やがてタクシーはパーティー会場に到着した。
お金を払い、直樹は慌ててタクシーを降りる。
何も考えず、ただ我武者羅に入口へと走る。

大きなガラス張りのドア。
煌びやかなシャンデリア。
そこを潜るべき人間。

これまでそんなものに威圧されたことはない。感懷を覚えたことも、
怖れを抱いたことも、悲しみも悔しさも……ただの一度すら。

……あの向こう側で、
あの向こう側に行ければ、俺だって自慢できるんだ！！

俺は捨て子だ。
だけど、いい気になれるんだ！！

恐れず奮い立ち突っ走る直樹の行く手を、入口に立っていたガード
マンが邪魔する。

羽交い絞めにされながら、直樹は大声で怒鳴り散らした。

「おい離せ！！誰に手エ上げてんだ！俺は社長の息子だぞ！」

「証明するものがないと通せません！」

そう言つて腕を離さないガードマンに、直樹は続けて喚く。

「どこのガードマンか知らないけどクビだ、クビ！！名前言うてみる！お父さんに言つてやるぞ！」

最悪だ！！！！

カスだ！カス！！！！

今の俺は！カスから零れ落ちたカスだ！！

右を向いている思考に対し、左を向いている直樹の体力。

怒号を轟かせながら、ガードマン3人を相手に大暴れしている。

「俺は秋月直樹なんだよッ！！」

とても悲しみながら、そう叫んだ。

直樹は蚊帳の外に放り出され、パーティーに参加できないどころか、会場の中にすら入れてもらえない。

隙あらば……

もうそんなことは考えていない。

しかしその場所にドンと腰を据えて、直樹はまだそこに居る。

……お父さんと慶也の前で、どんな顔をしているのか分からない。だけど、会えば分かる。

俺が今、どんな顔をしているのか。

直樹はその場で、ただ2人が出てくるのを待っている。

どのくらい経ったのか。

時計を持つていない直樹は、それが分からない。

ガヤガヤと中から声が聞こえ始めてきた。

人混みの声。

会場の前にはたくさんのタクシーが停まり始めている。

今の直樹はとても冷静だ。

……そう言えば、パーティーにお母さんが呼ばれているのも見たことがないな。

ついと言っては何だが、そんなことも考えている。

次々とタクシーに乗り込む人たち。

目を眇めて、その顔を一人ひとり確認する。

やがて残り少なくなった招待客の中に、見覚えのある顔を見つけた。

……さあ、俺は一体、どんな顔をするんだ？

駐車場にある段差に腰を掛けていた直樹は、その場にすくつと立ち上がる。

「……アレ？ 兄さん」

声を掛けてきたのは、慶也の方だった。

……俺は一体、どんな顔をする？

「兄さん、来てたのかよ。中に入ったら良かったやん」

「あ、ああ」

わざと低い声で答えてみた。

慶也は無邪気に微笑みながら、

「何かさあ、ごっつい退屈やったー。何を話してるんかよく分からないし。」

でも僕ももう6年生やから、今回はお父さん、僕を連れて来てくれたんやろうねえ。

「だけど、もういいや。退屈すぎる」

「……………」

今回のことが直樹にとってどういう意味なのか、どういう事なのか知らないでいる慶也を、直樹は愛おしく思う。

……よし、こんな顔でいよう。

「ところで慶也さあ、お父さんは？」

「まだ中にいるよ。せっかく来たんだから会って行けば？」

兄さん、これ見てよ」

慶也はポケットから1万円札を取り出して、直樹に見せた。

「タクシーに乗って先に帰ってなさいって、1万円もくれた。

お父さんからお金もらったの初めてや。

退屈やったけど、これだけでも良かったかなー？

僕、コレお小遣いに取っておいて、走って帰ろう思うてただけど、兄さんも帰るならタクシーで帰るよ」

直樹はこの場で、父に会わせる顔がある。

「いや、俺はお父さんと帰るよ。

でも遅いから、ちゃんとタクシーで帰った方がいいぞ」

今、何時か知らない直樹。

夜も遅いなどと、どこかで聞いたような言葉で慶也に余裕を見せる。

この顔で行こう。

そう決めていたから。

「そうだね。あ、まだタクシーいるやん。
もったいないけど、じゃあタクシーで帰るよ、先帰ってるね」
「うん、そうしなよ」

直樹の返事を聞いて、慶也はタクシーに乗り込み、家へと帰って行った。

一抹の不安というよりは、どこかで慶也に罵声を浴びせる自分を想像していた。

今回の出来事、そうでもなかったような気がしてくる……。

どこかで自分に言い聞かせたい。

慶也の言う通りなのかもしれない。

ただ単に、慶也の順番だったのかもしれない……と。

……白々しくねえか、俺。

でも、そうだとすればとても便利だ。

ガードマンもいなくなった頃、直樹は再び会場へと向かった。

出口は皆、必ずここを通るはず。

まだ父の姿を見ていない。

まだ帰っていない。

深呼吸をすることで落ち着こうとしたが、意味がない。

この鼓動はとっても嬉しくない。

父に会わせる顔。

それを決めた直樹。

今話さないと、意味がない。

そう思う直樹。

父を探しながら会場の中に入ると、レストラン関係者だろう、大勢の人たちが食器類などの後片付けをしていた。

その中を、首を伸ばしてキョロキョロしながら歩き回る直樹。いくら探しても姿は見えない。

もう父はいないようだ。

直樹は作業している人に、

「あの、すみません。社長の息子なんですが、父がどこに行ったか知りませんか？」

「えーっと…」

返事をしながら、その人もキョロキョロと辺りを見回す。

「…あ、そうや。パーティーの前に控え室にコーヒー持って行ったな…。」

そこ出て真っ直ぐ行つて、右曲がったところに控え室があるよ。そこにおるんちゃうかなあ？」

「ありがとうございます」

直樹は一言言つて、駆け出した。

言われた通り通路を走り、父の控え室であろう部屋に向かう。着いたその部屋のドアには、父の名前の張り紙がされていた。

コンコン

ドアをノックするが、返事がない。

どの顔で行くかというと、この顔しかない。

そう決めていた直樹。

ある程度の覚悟、腹は決まっている。

そつとノブに手を掛け、ドアを力チャリと開いた。

しかし中は真っ暗。

誰もいない。

諦めて引き返そうとした時、窓の外から車のエンジン音が聞こえてきた。

聞き慣れた音だ。

直樹はその暗い部屋に駆け込み、机とソファを踏みつけ飛び越え、窓を開け放つ。

そこには今まさに駐車場から出ようとしている父の車があった。

直樹は慌ててその窓から外へ飛び出す。

植木の中に落ちてしまった直樹はすごい勢いで地面に打ち付けられたが、痛みは感じない。

障害物を飛び越えながら、その車に走り寄る。

そして徐行している車の前に、いきなり飛び出した。

キッ！！

車は急ブレーキの音をさせ、その場に止まる。

直樹の目にはヘッドライトが眩しくて、車内の様子は見えない。

お父さんには俺の姿が見えている。

そう信じ、しばらくその場に立ち止まる。

「……………」

……車のドア、もしくは窓。

それが開き、父から自分に話しかけてくれると信じて、待っている。しかししばらく待ってもアイドリングの音が低く響くだけで、直樹のイメージしたその光景は見えてこない。

それどころか、父は車をバックし始めた。

直樹は慌てる。

運転席に近寄り、窓を小さく何度も何度もノックする。

前を向いたまま、こちらを見ない父親。

まさか、このまま俺を無視して走り出そうとしないよな……？

そう思う直樹の目に、飛び込んできたもの。

父の隣。

助手席にもう一人、人が乗っていた。

直樹が見間違うはずはない。

それは、あの時見た、女——。

罰 2

直樹は思わず両手を広げ、窓をバンツ！と叩いた。
そこでようやく父はドアを開け、降りてくる。

慶也に見せた余裕の顔を振舞おう。

こういう時のための、とっておきの音楽が俺にはあるんだ。
そう思っていた直樹だが、一瞬でそれは覆され、とっておきの音楽
は蒸気のように消えていく。

「……お父さん、まず聞きたいことがあります。
今回何故、僕ではなく慶也を？ たまたまですか？」

「……………」
父は相変わらず背筋を伸ばし、ビンとした姿勢で立っているが、こ
ちらを見ない。

「僕は今、2人しかいないと思って話しています。 答えてはくれない
んですか」

「……………」
黙ったままの父。

…ヤケになったつもりはなかった。

しかし、思わず言ってしまった。

「その隣に乗っている人は誰ですか？ お母さんは知っているんです
か？」

どうしてこんな遅い時間に、慶也を一人でタクシーなんかで帰した
んですか？

その隣にいる人が原因ですか？」

そこまでを聞いて、父はスーツのポケットから財布を取り出し、そ
れを開いた。

そうして取り出したお金を、黙ったまま直樹の胸に押し付ける。
父の手と直樹の胸に挟まれているのは、5千円札。

しかし直樹は姿勢を変えない。
受け取るうとはしない。

『これで帰りなさい』なのか。
『黙っている』なのか。

直樹の中に浮かぶ選択肢は、その2つしかなかった。

「……………」
「……………」

何秒ほどそのままだったのか。

やがて父は直樹に当てていた手を離れた。

ハラリと落ちていく5千円札。

父は一度も直樹と目を合わせることなく、再び車へと乗り込む。

エンジン音を響かせ、直樹の横をすり抜けたベントの後ろ姿はみる
みるうちに小さく、あっという間に視界から消えていく。

父と、あの女性を乗せて。

「くそ——ッ!!」

地面に落ちた5千円札を踏みつけてやろうと思ったが、思いとどま
る。

直樹はそれを拾い上げ、パツパツとはたいてポケットの中にしまい
込んだ。

暗闇の中、車の去って行った方向を遠く見つめながら、直樹は考え
る。

……この場合。

慶也が1万で、直樹は5千。

そこも重要ではあったが、それは5番目6番目。

この5千円を拾い上げたのは、俺だ。

誰だってそうなんだぞ。

皆、この地球に重力でへばりついてるんだ。

皆、忘れているのか、知らねえのか。

……あなただって、その一点にすぎないんですよ。

お母さんはこのことを知っているのだろうか。

ひよっとして、慶也も知ってるんじゃないのか。

……お父さんに、女がいることを。

知らないのは、俺だけなのか？

このまま、あの家で長い年月を過ごす。

そんな俺をイメージしてみよう。

ひよっとして、俺に対する俺のこの評価は、俺だけのものではないか？

…… 3 対 1

これが俺の知らないところで組まれた、本当の勝負なのか？

勝負ではないとするならば、こうなった今、

俺は、完全な、蛇足。

きっと、幼い頃から父の屏風に描かれている俺の絵には、口がないのだろう。

蛇足ならば、まだいいのかもしれない。

…… ひよっすると、眉毛から上も描かれていないのかもしれない。

悔しくて悔しくて、しょうがなかった。

しかし今の直樹には何もできない。

先ほど拾い上げ、せっかく埃を払い落とした5千円札をポケットの中で強く握り締める。

—— 父 母 慶也 俺

今となつては、この順序で評するのが妥当なんだろう。土井さんはこの家には住んでないから、少し違う。

……できれば顔を合わせたくないんだ。
でも、俺には術がない。

エネルギーがここで補充し、休みをとり、この家で英気を養つ。
この家にお金があつても、それは俺のものじゃない。
そんなことは、ずっと幼い頃から知っている。

逃げ出したいと表するには、あまりにもおこがましい、
……小者。

もしこの世にカスという物体があるのであれば、俺はその物体の一片にしかすぎない。

カスという実。

皮が付いているとするならば、その皮が不要なものならば、俺はきつとそのカスの実の皮なんだろう。

……一応、頑張るさ。

もうすぐ受験だからな。

受験に成功しなければ、この家にいる価値がないのは、元からのこと。

『お父さん』

『お母さん』

知っていますよ。

昔からと、これからも、ずっと――

この日、学校では何枚かの束になったプリントが配られた。

それは5月にある修学旅行の資料。

3泊4日で行く、関東地方への旅行。

スケジュールを見てみると、2日目の昼から夕方までは浅草での自由時間だった。

「ねえ、久保さん」

1学期は直樹の隣に紀子の席がある。

「ええ？なに？」

……その笑顔を見て、

昨夜のことは忘れよう。

いや、忘れるんじゃない、

いったん置いておこう。

直樹はそう思う。

「この自由時間があるやん。浅草ってねえ、俺の庭なんやで」

今日から少しずつ、関西弁を覚えていこう。

「えー、そうなん？雷門のあるトコやろ？」

「そう。俺、この辺に住んでたんだ」

……嘘だ。

直樹は浅草に行ったことなど、一度もない。

捨てるものが何もなくなった気がした。

そんな直樹は軽快に、紀子の気を引くべく饒舌に話しかける。

「良かったら案内するよ」

「えー、ほんま！？助かるわ。楽しみやねえ！」

とってもいい返事をもらった。

一気に修学旅行が楽しみになった。

修学旅行が終わったら、次は何を楽しみに……

そんなことを考えたいが、それを押し潰す。

……修学旅行が楽しみだ。

放課後は、いつものようにタケシとパクに会う。

タケシの勉強も大事だが、今日の直樹には一つやりたいことがあった。

「なあパクウ。パクウみたいな髪型にはどうやってすればいいんだ？」

こないだの床屋さんでは任せつきりで、よく覚えなかったん」

「え？こんな髪型にしたいんかいな。」

お前、ほんでもお父ちゃんに怒られるんちゃうか？」

「……いいんや」

「何か変な関西弁使ってるし……」

やりたいんやったら教えるけど」

「だったら俺みたいにせえや！コレ、パーマやってるから簡単にできるぞ？」

そう言ったタケシの頭をチラリと見て、直樹は

「とうもろこし頭はイヤやわあ」

即答する。

その言葉に落ち込むタケシを放っておいて、パクは言った。

「じゃあ今日はまず散髪屋やな。またこないだの店、行こうや」

3人はちょうど来たバスに乗り込んだ。

先日行った店に入ると、幸い客はいない。

「あんなあ、おっちゃん。こいつ、リーゼントにしたいんやって。簡単にできる方法あるかな？」

パクの言葉を聞き、店の主人が答える。

「それならアイパーがエエやろ。髪洗うても、乾かしたらその形になるからな。」

あとはポマード付けてコームで馴染ませれば、簡単に出来上がるよ」

「直樹、それでエエか？」

パクの問いに、直樹は返事をする。

「うん、いいよ」

……どうでもいいよ。

本当は。

「前髪切つてもうたら、オッサンみたいになるからな。前髪は長めにしてアイパーかけるぞ」

店の主人の作業はどんどん進んでいく。

「今日はさあ、お金結構あるから、2人も切ってもらえよ」
そう言う直樹。

いろんな部分で、やけっぱちが顔を覗かせる。

やがて、散髪を終えた3人は店を出た。

「しかし直樹、お前そうやってるとほんまにイカついな」。

エエんか、ほんまに。怒られへんか？」

今日のパクはいつもより、えらく常識人に見える。

しつこいな!!

そう思った。

「……今日はな、悪いんやけど俺、このまま帰るわ。
ごめんな、タケシ」

「お……おう」

いつもと様子の違う直樹に、2人は戸惑っている。

しかしそんな彼らに気づかない直樹は、先々とバスに乗り込み、次の目的地へと向かった。

この地に引越してから通っている、メガネ屋だ。

そしてメガネ屋から出てきた直樹は、あの黒縁の分厚いメガネを外していた。

コンタクトに変えたのだ。

何だかスースーするなあ。

直樹の癖だった、人差し指でメガネの真ん中をクイツと上げる仕草。スースーする違和感から、メガネもないのに眉間の辺りをクイツと押してしまう。

まあ、そのうち慣れるやろ。

気兼ねがなくなったわけではないが、これがこの日の直樹。
お腹が空いたので、あの家へと帰った。

……俺は、父のあの浮気に対して、嫌悪感を抱いたのか。
男がそういうことをする。

それは何となく知っていた。

特に財を持つ者は、余裕でそういうことをする。

それを、知っていたはずなんだ。

なのに今回の一件、何故俺はこんなに腹を立てた？
逆鱗の境界線を、土足で踏みつけられた感覚。

……きつと、他にある。

『きつと』が、確信に変わった気がする。
……順番、だ。

こうなった今、家族の中の順位というもの。
俺は土井さんの後なのかもしれない。

あの女が我々の段差・格差・順番に、したり顔でランクインすることに対しての、嫌悪感だったのではないか。
きつと、ではなく、確信めいたもの。
ということは、俺自身もやはりよっぽどの奴なのか。
それとも、これは極めて極普通のことなのか。

あの日から、直樹は父とは会話を交わしていない。
家の中にいると、3回ほど目が合った。
忘れない。

3回だ。

2週間後に控えている修学旅行がとても楽しみで、頭の中で旅行のシミュレーションをした後、必ず考えてしまうこと。
その後は、一体何が楽しみになるんだろう……。

高校受験？

頑張っても、いいんだよね……？

その日、直樹は登校前に母に言った。

「お母さん、塾に通いたいんですが、いいですか？」

「ええ？でも直樹さんは塾なんか行かなくても平気でしょう？」

「流石に、受験まであと1年と思うと少し不安があるんです」
直樹はそう言つて、自分のことを試してみる。

……不安を感じている。

自分の受験を、頑張つてもいいんだよね……？

そんな思いで、直樹は自分の立場を試している。

「いいですよ。いつから行くの？月謝がいるわよね。

これをお持ちなさい」

そう言つて母が財布から出した金額は5万。

「……………」

……随分と、小者に見えた。

この人はきつとあの女が存在を知らない。

何て暢気なんだ。

名前を『秋月ノンキ』に変えた方がいいよ。もしくは、ズッコケ。
目の前にバナナの皮を置いてやったら、真っ先に転ぶタイプだ。

……今、『この人』って思つちやつたな。

でも、いいや。

直樹はお金を受け取り、

「ありがとうございます。頑張ります」

いつもの調子でそう言つて、外へ出た。

家を出た直樹、しめしめとは思わない。

先ほど母に話したこと、あれは嘘。

だが、このお金は本当に要るのだ。

直樹の目的は他にある。

放課後、タケシとパクに会い、直樹はまたいつもより早い時間に2人と別れた。

直樹が向かったのは、以前から気になっていた場所。

我流のトレーニングに限界を感じてたんだよな…。

見上げた先にあるのは、ボクシングジム。

直樹は何の躊躇もなく入口をノックして、中へと入っていく。

中は異様な雰囲気包まれ、ミット打ちやその他いろんな音で、声を出しても響かない状態。

直樹は、そうやって汗を流している人たちの間をすり抜け、ズカズカと奥へ進む。

そして1人の男性を捕まえ、話しかけた。

「あの、すみません。この辺にプロレスのジムってありますか？」

「は？」

「プロレスのジムです」

「プ…プロレス？ここ、ボクシングジムですけど……」

「そんなこと、あなたに言われなくても知ってます。」

同じスポーツジムなら、プロレスジムも知ってるかなと思って聞いてるんです」

直樹に問われたその男性の顔は、明らかに『何やコイツ』

「……ちよつと待っててね」

男性は奥に入っていく、年配の男性と話をしている。

直樹はそこで漸く、周りの風景を眺めてみた。

そして、思う。

あつちでもこつちでも、鍛えればいい。

……勝てる人間になろう。

グツと拳を握り、自分の上腕二頭筋を見える。

これじゃ、今は勝てないんだ。

……勝てる人間に、なろう。

その時、その年配の男性が近づいてきた。

「おいおいおい兄ちゃん！この辺にプロレス団体なんて聞いたことないぞ？」

何や、プロレスラーになるんか？」

喧騒に埋もれることのない、その声。

近くにいた生徒が、彼のことを『会長』と呼んでいる。

このジムの一番偉い人だ。

直樹はそう判断した。

「兄ちゃん、身長ナンボあるんや？」

「185です」

「体重は？」

「えっと…確か65kgです」

「ウエルターか…。日本人でウエルターってどうやるな。兄ちゃん、腕ちよつとピツと伸ばしてみ」

直樹は言われるまま、腕を前に伸ばす。

「メチャメチャ長いな！！兄ちゃん、プロレスなんか止めて、ボクシングやれ。ここへ通え！」

直樹は、できればプロレスと思っていただけで、特に拘りはなかった。

何でも良かったのだ。

今思う強みというものを拵え、蓄えることができるのであれば。

「はあ、別にいいですよ」

「よっしゃー！決まりや！ワシらとチャンピオン目指そうやないか
！！」

…チャンピオン？

この人、頭大丈夫か？

俺はそんなもの、目指さない。

会長は直樹が15歳ということを知り、契約書とは別の用紙を用意した。

それは保護者が記入するもの。

月々2万5千円。

直樹はお金を稼がないが、その用紙に関しても、2万5千円に関しても、余裕だった。

手に持っていた5万円を一度に支払い、2ヶ月分の月謝にしたのだ。家に帰ると母がいるにも関わらず、直樹は両親の寝室に入り、印鑑を取り出し、用紙に捺印した。

筆跡を少し変え、必要事項をサラサラと埋めていく。

まだまだまだまだ、これからだぞ。

こんなことに手が震える必要はない。

お母さんを論破するなんて、容易いんだろう。

お父さん相手だと最悪、……アレもコレも必要だろう。

世間はやたらと広いんだから。

次の日から、直樹はこれまでの時間を清算しようと巻き返しをはかる。

無知で罪な俺。
ボンボンな俺。

慶也が野球を使い、心身を鍛えるのを見て見ぬフリをしてきた俺。
阿呆な俺。

その日、直樹は帰りがけに紀子に声を掛けた。

「久保さん、今日クラブは？」

「今日は休み」

「じゃあ途中まで一緒に帰ろう」

「ええッ！？どうしたん！？」

「……どうもせんよ」

「どうもせんって……その髪型からして、どうもせんワケないやん。
何かあった？帰るのはエエんやけど」

何かあったに決まってるだろ。

感情に任せてそう言おうかとも思った。

だけど、これはただの八つ当たり。

今日は途中まで久保さんと帰って、その後パクウの家に行こう。

……何かあったに、決まってるだろ……

直樹はバス停まで、紀子を送って行くことにした。

その間話したのは、勉強のこと、修学旅行のこと、紀子のバレーのこと。

この時ばかりは、直樹のイライラは制御できている。

ただ、やけっぱちになっていることに関しては、自分でも驚いていた。

その気になれば、何だってできるんじゃないか。
いや、違った。

何でもできるんじゃないか。

ネイティブな関西弁。

これも、きっとできるよ。

自慢やないけど、俺は頭がいいハズなんや。

考え事を変えながら、紀子と2人で歩いている。
楽しかった。

——
認めよう

喪失したんだ
——

あれから2週間。

このボクシングジムは2万5千円さえ支払っておけば、休みである
水曜日以外、いつ行っても構わない。

直樹は毎日のように通い、汗を流している。

会長に自分の視力が悪いことを知られ、それじゃあ大成できないと
教えられた。

別にボクシングで大成なんてしなくていい。

筋肉を付けて、体を大きくしたい。

そう言うのと、日本人でウェルター以上の階級なんてあり得ないと教
えられた。

階級なんかどうでもいい。
あり得なくて構わない。

毎日毎日サンドバッグを叩き、縄跳びをし、ロードワークをこなし、それに励んでいる。

体を動かすということがこんなに良いものだとは、知らなかった。
とにかく気持ちがいい。

疲れて帰ると、遅くまで起きていられない。

寝る時間が1時間早くなった。

ジムにいる時間と合わせて3〜4時間、勉強の時間を削った。

サンドバッグを打つ手を止めると、考え事をしてしまう。

……今頃久保さんは、東京だろうな。

直樹は修学旅行に行かず、この町にいた。

何となく…何となくやが、分かってたような気がするんや。
気づかないようにしておったんだろう。

確かに、小学校の修学旅行には行かなかった。

俺もお父さんと一緒に、意味がないと思ったからだ。

今回は意味を見出し、行く理由があったんや。

意味もあった。

お母さんにはちゃんと、「修学旅行は行きますから」
そう伝えた。

小学校の修学旅行に行っていないから。

その流れで今回も、なのか。

父の意見の元、俺の希望が剥奪されたのか。

……聞かないから、分からへん。
後者だと、信じてしまう。

最近ジムを終え、帰って一人で食べる夕食が、たまらなく美味しいんや。

後者だと信じ、認めよう。

……喪失したんや。

全ては1から始まる。

……俺はそう思う。

幻想から始まるもの。

……それもまた1。

思想から始まるもの。

……それもまた、1。

俺がゼロなら諦めよう。

でも、まだ生きています。

それらを網羅するのなら、以前考えた『勝てる人間』の前に、『闘える人間』にならなきゃいけない。

……いや、ならなアカン。

ここまでシミュレーションできた。

直樹はシューズを履き替え、ロードワークを始める。
手が動いていないために、シミュレーションが止められない。

これからはある程度、好きに生きよう。

……ん？

好きに……？

俺はこれまでも、好きに生きてきたな。

好きで、ああ生きていたな。

父親の、何たらかんたら、ああやって、こうやって、そうやって、
こう。

あれは俺にとって、拘束具でも何でもなかった。

直樹は決まったコースを走りながら、思う。

……負担でもなかった。

汗が滴り落ちる。

血液が循環していることを知る。

疲れてはいるが、脳は足を前へ前へと命令する。

これまでの俺に関して、その点において考えたとき。
感情は360度円を描いて、戻ってきた。

……ありがとう、言つべきなんだろう。
お父さんには。

でも、まだ言わねえ。

……まだ、言わへん。

……そろそろスイッチを切り替えなアカンな。
こうなると、何もかもを楽しまないと損をする。

直樹は街中を走りながら大声で、
「ンガ——ッ！！！」
と、吼えてみる。

今ので、デカ目のスイッチが入っただろう。
こりゃ、なかなか戻って来ねえぞ。

帰ったら、もう一度久保さんに謝ろう。
約束破っちゃったからな。

……久保さんに会いたいなあ
久保さんに会いたいなあ
久保さんに会いたいなあ

4歩進む間に、紀子のことを思う。

…お、いい感じで調子に乗れてきたぞ。
その調子！

今回嵌め込んだスイッチ。
これもきつと、大事なモンだ。
いや、大事なモンや。

直樹はいつものコースを走りながら、そんな風に思っている。
そしてまたコースを戻り、ジムへと帰る。

修学旅行に行けなかった。
その大きな落胆から、抜けようとしていた。

告白 1

紀子からもらった修学旅行のお土産は、直径5センチほどの丸いキーホルダー。

それには金色の文字で『四角形』と書かれている。

直樹は「ありがとう」と言ったと同時に考える。

この人は俺を笑わせようとしているのか。

丸の中に『四角形』

それともマジで、俺が喜ぶと思ってこれをくれたのか。

……分からない。

でも自分のことを覚えて、お土産まで買ってきてくれたことに、素直に喜びを感じた。

「浅草を案内するって言ったのに、ごめんね。ほんまにごめん」
それに対しての紀子の返事は

「エエよ、エエよ。しょうがないよ」
という笑顔。

最近俺は、よく『ありがとう』と『ごめん』を口にする。

その日の帰り、直樹はタケシとパクにそのキーホルダーを見せた。
大笑いしている2人。

パクは笑いながら、

「一体どがいなセンスの土産や！オモロすぎるやろソレ。何の目的のキーホルダーや！」

「だろー？笑えるやろー！」

そう答えて、直樹も一緒に笑う。

笑われてしまったけれど、これは俺にとって大事なものだから大事にしよう。

そう思い、常日頃から持ち歩いている財布に、そのキーホルダーを付けた。

もうすぐ夏休みが始まる。

直樹はいつもと違う感覚に陥っている。

これまで覚えたことのない感覚。

受験を控えた最後の長い休みである、だからいつもと違うのは当然のことだが、それとはまた違う感覚だ。

一体こんな長い休みの期間、どうやって過ごせばいいんだ。
そんな風に考えた。

紀子に夏休みの予定を聞いてみると、バレーの最後の大会があるということと、田舎のおばあちゃんの家に行くということ。

タケシとパクにも同じ質問をしてみると、

「別にどうもせんよ。毎日グダグダするだけ」

そんな答えが返ってきた。

……夏休みって、退屈なものなのかもしれないな。

それに気づいた気がする。

最近じゃ、周りの皆のことが何となく気になるんだ。

3年生になり、今直樹はクラス全員一人ひとりの名前を覚えていた。
この学校へ来て1年。

ようやくその気になったのだ。

皆は一体どうやって過ごすんだ？

勉強はもちろんだろ。

その他は？

きっと皆、退屈だろう。

違うのか？

……心配せんでエエ。

俺も一緒やで。

『皆と一緒に』

これが少しばかり自分に安堵をもたらすということを知り、文字通りほっとする。

夏休みは根を詰めて勉強する。

そう思い込んでいた自分。

これも、皆一緒だと思っていた自分。

……そこに安心感はなかったな。

そんなことを考えていると、ふと関東に住んでいた頃のことを思い出した。

離れてたった1年ほどだが、懐かしいと思った。

よし、2週間だけまたあそこに申し込もう。

俺も暇だしな。

……いや、暇やからな。

休みに入ると、直樹は単身関東に向かった。

小学校時代からずっと参加していた勉強合宿、それに参加するために。

ホテル暮らしをしながら、そのセミナーに通うのだ。
今回の参加には、いろんな目的があった。

あいつらは、今の俺を見てどういう風に思っんやろ。
それも1つ。

俺は勉強で、あいつらに遅れをとったのかな。
それも1つ。

そこに行くと、あの頃のメンバーとほとんど変わらない面子が揃っていた。

参加者たちの、自分に向けられる目。

『こいつ、何だよ』

一目で分かる。

どうだ。

俺、結構変わったやろ。

そう言ってやりたいが我慢する。

君たちと違って、いろんなことを覚えてきたんだ。
厚みが増したはずだよ。

いつもとは違う姿勢。

少しふんぞり返ったように、直樹は席に座っている。

そこに近づいてきたのは、以前の学校の同級生だった男子。

「ねえ、秋月くんだろ？ どうしちゃったんだよ。随分風貌が変わっちゃってさあ。向こうに行ってから何かあったのかい？」

こないだの全国模試、どうだった？ 僕はさ、都で6番だったよ。まあまあかな。

木村っていただろ。。。中の。あいつはノイローゼになっちゃってさ。ハイ、一人脱落ってカンジだよ。

あとは。。。中の……」

「……………」

直樹は黙ったまま、彼をじーっと見つめている。

……こいつ、こんなにヤな奴だったか？

知らなかった。

とてつもなく鬱陶しい。

でも以前は俺も、こういった会話に平気で参加していた。

それを知りながらも、

こいつ、こんな奴だったか？

そう感じた、一部始終。

……刮目するんだ。

変わったのは俺だ。

彼の言っていることがしょうもないと感じている俺。

何かを変更した俺が、間違いなく生きている。

変わらず話を続けている彼は、

「まったく、イイ気味だよな。そう思わないかい？アーツハハハハ

ハ……」

「……………」

……とつても、耳障りやな。

直樹はその彼の顔を、いきなりバツと握ってやる。

「ムぎゅッ！」

「……しょーもない話しとるのう。ところでお前、名前何やったっけ？」

「……………」

直樹に顔を握られながら、体が震え始める彼。

ニヤけてしまう直樹。

そのうち彼はそそくさと、その場を去って行ってしまった。

路線を変更して正解だったと思う。

あんな話は楽しくない。

今の俺は、以前のような焦りがないんやから。

以前から知っている顔が、１ミリもズレることなくズラツと列をなしているように見えた。

この場において、異端なのは俺。

つまる・つまらないの以前に、人種が変わってしまったんだな。

自分を思い、いろんなことで今楽しんでいる自分は、ここに顔を並べている皆よりも勝っているんじゃないか。

……勝っている？

こういう考えはまだ抜け切れてねえな。

ここで過ごす時間は直樹にとって、また落ち着きを取り戻すために良き場所だったのかもしれない。

１週間で過ぎた頃、直樹が注目せざるを得ない同級生がこのセミナーに途中参加してきた。

直樹はこのセミナー内で行われるテストで、いつも２位だった。

それはいつも変わらず直樹の上を行き、１位を取る彼がいたから。

堀井。

この名前だけは忘れない。

彼はずっと陸上をやっており、１０００ｍ走、幅跳びでいつもすごい記録を出していた。

その上、顔立ちも端正。

直樹は彼を凝視するたびに、いつも歯が痛くなっていたものだ。見つめるたびに歯を食いしばっていたからだろう。

こいつにだけは会いたくなかったな。
こいつを見ていると、それまで考えたことのなかった、自分に対し
てのコンプレックスが滲み出てくる。
運動で勝てない俺が、勉強でも勝てなかった。
その彼に、また会ってしまった……。

「……アレ？秋月くんだよ？どうしたんだよ。随分雰囲気変わったね」

その言葉に、直樹はムカツとする。
コンプレックスの本体に、コンプレックスのコートを羽織らせたよ
うな気持ち。

お前に分かるか！！

まったく、人のことを『あいつはノイローゼでリタイアした』なん
て言わない辺り、やっぱり余裕だな。

あと残り1週間。

俺も間違はなく、大人の対応をしてやる。

直樹は以前の自分と寸分変わらず、堀井の一挙手一投足に釘付けだ。
それに気付き、

……アレ？

俺、何かおかしくないか？

人のことなんか気にならねえ。

そう思ってたのに。

俺は以前から、人のことをたっぷり気にしてたんだな。
忘れていた。

物まねでも何でも、構わない。

人を巻き込みながら、人の言葉・行動、そういったものに起伏を乱している。

そんな俺は、取って付けたものではなかったんだ。

良かったような気がする。

こいつに対する、この嫉妬。

……俺は人間だったな。

そんなことを考えていると、どんどんいろんなことが気になり始めた。

過去の記憶を捲りながら、自分はデンと構えていようと思った。しかしそれをすぐに覆し、言ってしまう。

「堀井くん。前回の全国模試、どうだった？何番やった？」

……言ってしまった。

「あー、ダメダメ。ダメだよ、全然ダメ。いろいろ忙しくてさ。前みたいに勉強ばっかやってないんだよね。」

えーっと……全国で、えー……230番台」

「ええッ！？何でそんなに順位落としてんだよ！？悪くても20番台にいただろ！？」

「ま、いろいろ忙しくてさ」

この、中学3年生ごときが見せている余裕と笑み。憎たらしくもありながら、大人に見えてしまった。

……忙しいって何だよ。

じゃ、じゃあ俺だって忙しい！

直樹はそう思う。

以前と同じように、負けていけないのだ。

その日の講義を終えると、直樹は真つ直ぐホテルへと戻った。
食事を終えた後は、予習・復讐と大変なはずなのだが、退屈だなあ
などと考えている。

ゴロゴロしているのも何なので、パクに電話を試みることにした。

『おい直樹。お前、いつまでソツチにおんねん。明後日、花火大会
あんねんぞ？早よ帰って来い』

「花火大会？何だソレ。優勝を決めたりすんのか？」

『……トーナメント方式のモンではありません！

お前、ほんまに花火大会も知らんのか？勉強も大事やと思うけど、
明後日いつぺん帰って来いや。遊ぼうや』

そんな会話を10分ほどして、電話を切る。

帰って来いって言われてもなあ。

途中で抜けるってのは心外だ。

……花火の大会って一体何なんだよ？

直樹は再びホテルを出て、本屋へと向かう。

花火大会について、調べるためだ。

数分後、ある本を閉じながら、直樹はなるほど、と思った。

恋人同士で行くんだな。

場所取りなんかして。

花見みたいなもんだな。

理解したで〜。

だけど、恋人同士で行くんだろ？

パクウは何で俺を誘うんだ？

……

……深く考えんところ。

選択する本を間違ったのか。

直樹は花火大会について一部誤解をしているが、ソレがある箇所では、拍車を掛けることになる。

次の日の朝、直樹はまたいつものようにセミナーに向かっていた。道路の前方に見つけたのは、堀井の姿。

直樹は、彼が何故あんなに順位を落としたのか、知りたくて仕方なかった。

全国模試。

見上げるばかりだった彼が、知らない間に自分よりも下にいる。彼に何があつたのか、知りたくて仕方がなかったのだ。

そんなことを考えていると、前を歩く堀井に駆け寄る人がいた。堀井と腕を組むようにして歩く、女子。

「！！？」

……衝撃だった。

直樹は何も考えずに堀井に駆け寄る。

イチヤイチヤとくつついて歩いている2人の間を裂くように割り込む直樹。

空気を読む術など、彼は知らない。

「堀井くん！！」

大きめの声で話しかけた直樹に、堀井は少し驚いたように振り返った。

「その人、誰なんだ！？もしかして、彼女なんか？君ら付き合っているのか！？」

なあ、ひよつとして君が成績落としたのは、この子と付き合ってるからなのか！？

どうなんだよ？俺に分かるように説明しろよ！」

それを聞いた堀井は、少しムツとした表情で足を止めた。

「失礼な奴だな！そんなんじゃないよ。」

もし彼女と付き合ってるので成績落としたんだったら、ソレはソレで構わないし」

失敬な言葉を投げかけた直樹、堀井の言葉は途中から聞いていない。

……ショックだった。

全てにおいて自分より上だと、そう認めていた彼。

俺は彼を抜いてやった。

その余韻に浸ったのは、一晩だけのこと。

堀井に彼女がいる。

また彼は、俺にとって強靱な壁になった……！！

直樹はその後、一言も発することなく方向を変え、ホテルへと戻った。

そして歩きながら、思う。

堀井の彼女……

久保さんの方が美人だ。

更に言うと、性格も久保さんの方が絶対良い。

……あの子の性格は知らないけど。

何キツカケのどういう思考がフル回転したのか、自分でもよく分からない。

が、直樹はセミナーを途中で止め、帰ることに決めた。
紀子に会うために。

論点をズラすなよ。

別に勝った負けたの話はしてへん。

奴に彼女がいたとか、そんなことは関係ない。

ただ、俺だってああやって女子と歩いて構わないんだな。

……知っていたけど、もう一度認めよう。

堀井くん、君はやっぱりデカかった……！！

もう二度と君と会わないことを、俺は願うよ。

直樹は帰り支度をしながら、紀子のことばかりを考えていた。

一人でする妄想・シミュレーションの中に、久保さんが出てくるって俺、苦手なんだよな。

何か知らんけど、……泣けてくる。

久保さんのことを考えると、俺のいろんな部分が浮き彫りになるんや。

親に見捨てられかけてる俺って、どう？

弟に抜かれてしもうたって思ってる俺って、どう？

タケシとパクウの真似ばかりしている俺って、どう？

テストの成績で久保さんに負けたくないって思ってる俺って、どう？

捨て子な俺って、……どう？

大人になってしまえばどうってことないだろうという体験。
現状。

現在の多感であろう俺には、身に沁みすぎる。

俺って、恥ずかしい奴だろ？

そう言って笑えばいいのか。

真顔で言えればいいのか。

我が身が重過ぎるような気がする。

だから、久保さんを思うと泣けてきてしまっんだ。

明日は花火大会。

恋人のための大会。

何をしたいのか分からへんけど、俺はセミナーを途中で止めて、新幹線に乗るぞ。

そうして直樹は、今の地元へと帰って行った。

数時間の後、自宅に着いた直樹、

「あら、もうセミナーは終わったの？」

という母の声に、

「はい、終わりました」

と答えた。

荷物を部屋に置き、すぐにパクに電話をかけたが誰も出ない。

この場合、どうすればいいんだ？

直樹は何も考えず、手が遊ぶまま電話帳をパラパラと捲る。

久保さんのお父さんの名前は分からない。

だけど、あそこは商売をしている。

商業ページで名前を探すと、紀子の家の電話番号はすぐに見つかった。

た。

直樹は何の迷いもなく、その番号に電話を掛けてみる。
ただボタンから指が離れたと同時に、これまで味わったことのない
緊張感が直樹を襲う。

ドクドクドクドクする。

それにしても、暑いな……。

雨でも降ってくれりや、ちよつとは涼しゅうなるんちゃうか？

……いや、雨が降るとマズイ。

花火大会が中止になる。

受話器の向こうのコール音を聞きながら、その場で足踏みをして緊張感を誤魔化そうとしている。

『はい、久保スポーツです』

明らかに紀子とは違う、女性の声。

「あ、あの、す、すみません、秋月と申しますけれども、紀子さんが在宅になりますでしょうか？」

『あー、ちよつと待ってね。紀子〜！』

電話番号探しからここまで、意外と簡単だった。

緊張感を抑えるための足踏みが止まらない。

滴り出る汗を拭いながら、紀子が電話に出るのを待つ。

『もしもし、秋月くん？どないしたん？』

久しぶりの紀子の声に緊張感が吹っ飛ぶが、自分の中で突っ走っている鼓動の速さは止まらない。

「あ、久保さん？あのね、明日何してる？」

『え？明日？何で？』

……早速嫌がられたか……

「明日、花火大会があるでしょ。一緒に……行かへんかなーと思う

て……」

……急にこんなこと言われても、困るよな……

『花火大会？え……私、人混み苦手なんやあ』

「ええッ！？やな理由が人混み！？人混みなんかどつてことねえよ！ーじゃん、行こう！人混みが嫌なら、俺がずっと肩車してやるよ！」

『ハア！？何じゃソレ！ハハハハッ！』

「……………」

『……………』

それからしばらく沈黙が続いた。

この間、直樹は念じ続ける。

OKと言ってくれ！

OKしてくれ！！

頼むからOKしてくれ！！

やがて、紀子の返事は

『んー……分かった、じゃあ行くよ』

その答えに、直樹は脱皮したような感覚を覚えた。

生まれ変わった……！！

最近自分が行動を起こすと、その見返りに嫌なことばかりが起こっていた。

そんな気がしていた。

俺は一石投じてやったんだ。

その俺のド真ん中に、命中したんだ。

「今、とっても幸せです……！！」
『はあ？』

紀子の声に、直樹は知らない間に今の心境を口にしてしまっていることに気づく。

慌てて誤魔化しながら、待ち合わせ場所と時間を決めた。

紀子の指示した場所がどこなのかよく分からなかったが、行けば分かる。

直樹らしからぬ安易な思考は、浮き足立っているせい。

電話を切った直樹、ここに来て重大なことに思い当たった。

そうだ、デートなんかしたことがねえ！

どうやったらいいのか分からへん！

どうすればいいんだ！？

そんな本、どこにも売ってねえぞ！？

ソワソワウロウロ落ち着かない。

直樹は、やはりパクに聞くしかない。

そう決める。

どうかどうか、間違っていないように！

そう思いながら、もう一度パクの家に電話をする。

頼むから出てくれ！

『はい、もしもし？』

出た！

しかもパクウの声！

「おいパクウ！俺だ、直樹だよ。

相談がある！パクウにしか聞けないことやねん！」

『お、おう、何や？』

「あのな、告白ってどうやりゃいいんだ！？俺、全然分かんねーんだよ」

『告白？何の？』

直樹はここで少し我に返る。

アレ？

何だか恥ずかしいぞ……

「…あ、いやあ、例えば、例えばやなあ。女の人に告白する場合、何て言えがいいの？どうやって言うん？」

『えー…そんなの分からへんぞ。』

例えばお前がする場合と、俺がする場合はまた違うやろしな。十人十色ちゃうん？

て、直樹、今お前どこにおんねん』

「いやー、家だよ。帰って来てん」

『あ、そうか。じゃあ明日大丈夫やな？6時にいつものトコで待ち合わせやぞ。』

俺、ちよつと用事あるから、ほなな』

「あ——ッ！——ちよつと待って！違うッ！——」

バツッ！

ッー・ッー・ッー……

「……ッ」

電話が切れてしまった。

もう一度かけてみるが、誰も出ない。

おいおいおいおい、どうなってんだよ！？

収穫ゼロな上に、約束までされちゃったじゃないか！

……アカン。

久保さんにもう一度電話する勇気がない……。

直樹らしからぬ行動。

完全に浮き足立っていた。

告白 2

約束してしまったものはしょうがない。
破るのは心外だ。

久保さんの待ち合わせは19時。
まずパクウたちと会って、その後抜け出せばいいだろう。

告白に関しては…自分で考えるしかないな。
えーっと……

『俺、久保さんのこと、大好きやねん！』
……これじゃ伝わんねえか。

『俺な、受験頑張って良い高校・良い大学出るよ』
……『あ、そう』って言われそうだな。
う~~~~ん……

声に出し、形にしながらシミュレーションしてみる。
少し大きめのこの独り言は、心拍数の速さに焦っているから。
ソワソワソワソワして、太腿の内側がムズムズする。
早いとこ明日になってくれ。

そう思う反面、
明日俺死んじやうかもしれない。
そう考える自分。

玉碎覚悟なんて考えは、これまでの自分の頭には1ミリも存在しなかった。

全てにおいてシミュレーションを済ませ、準備を済ませ、骨組みから設計していく。

計画・準備・行動。

それらをクリアして、完成していた自分。
これまでの自分。

だけど今回は、違うんだよな。

……しかし暑いな！

これは一体誰のせいなんだよ？

直樹は早く明日になりますようにと思いつつベッドに潜り込む。

しかしなかなか眠れない。

乗り物疲れもあるはずなのに。

仕方なく父と顔を合わせないような時間に食事を済ませ、風呂に入り、明日の用意をすることにした。

制服もNGらしいし。

決め込んだりして『おいおいアンタ、マジやなー』なんてこと言われたら、立ち直れない。

明日はラフな格好にしよう。

クローゼットとタンスを開けて、物色する。

それから予備として買っていたコンタクトを取り出し、

明日は新品のこれで行こう。

そんなことばかりを考えている。

明日のシミュレーションが必要なことは重々分かっているのだが、
覚束ない。

『俺と付き合ってください』

そう言った後の紀子の返事が、またNOになった。

恐ろしくてそれ以上踏み込めない。

「~~~~~ッ」

…そんな、妄想シミュレーション…。

直樹は結局この日は朝まで一睡もできなかった。

眠くて堪らないのに、眠れない。

読書をしてみたり、問題集を解いてみたり、そんなことを繰り返している。

だけど、眠れない。

気がつけば、時計は午前10時を指していた。

…一体どうなってんだよ。

眠れねえじゃねーか。

睡眠は大事だぞ？

この後一体何が控えていると思ってんだ！！

いい加減にしろ。

無駄な時間を過ごし……

…いや、無駄な時間じゃない。そんなの俺が認めない。

この眠れない時間も必要不可欠。

数時間後に、あれも必要だったんだと思えるはずだ。

しかしまあ、俺がこんなに気が小さくて軟弱だったなんて、知らなかったな。

玉碎を覚悟するなんて、生まれて初めてだぞ。

ただ、好転して久保さんと付き合えるなんてことになったら……

……毎晩電話で話そう。

いらない、余計なことばかりかもしれないけれど、話したいことがたくさんあるんや。

きっと楽しいと思うよ？

……俺が。

覚悟を決めたこの日、直樹は午前11時を回ったところでようやく寝付くことができた。

次に目が覚めた瞬間、直樹は文字通り飛び起きた。
「ッ!？」

セツトしていなかった目覚まし時計、時刻は午後6時20分を指している。

パクとの約束の時間には完全に遅刻だ。

これまで遅刻などしたことのない直樹は、血の気が引いてしまう。しかしそんな直樹が向かった先は、何故か風呂場だった。シャワーを浴びているのだ。

落ち着け〜！落ち着け〜！

いや、落ち着いたらダメだ。

急げ〜！急げ〜！

急いで風呂を出、髪形を整えて準備をする。

寝坊なんて言語道断だ！

しかも夜の待ち合わせに！

直樹は新しいコンタクトを嵌め、家を飛び出した。

予定では4時前に家を出るはずだったのに、計画は始めから狂っぱなしだ。

紀子との待ち合わせは。。。町の。。。像の前。

この場所が分らない。

調べてから行くはずだったのに、それも不可能になってしまった。

ちんたらバスに乗っている暇はない。

直樹はタクシーに飛び乗る。

そして、まず向かったのは花屋。

かすみ草とバラの花束を購入して、またタクシーに乗り込む。

最低でも、久保さんとの待ち合わせには間に合わない。

この花、喜んでくれるかな……。

焦る気持ちとは裏腹に、口元から笑みが零れてしまう。

タクシーの運転手に、

「すいません、。。。町の。。。像前って分かりますか？」

そう尋ねると、

「何じゃ、ソレ」

という返事。

。。。町までは行くから、後は自分で探せと言われてしまった。

それならばと、直樹が向かったのはパクたちの待つ場所。

2人に。。。像がどこか聞こうと思ったのだ。

…また内腿のムズムズが始まった。

焦るな！焦るな！…！

自分に言い聞かせる。

やがて目的地に着きタクシーを降りると、そこにはタケシとパクがいた。

「おーい！ごめんよ！遅刻してもうて。あのね、」

しかし2人は直樹の言葉を最後まで聞かない。

「お前、どういふことや！？どんだけ遅刻しとんねん！暑い中よう

！大概にせえよ！！」

「あー、ごめん」

タケシはキレ気味でこっちに歩いてくる。

その時、パクが直樹の持つている花束に気づいた。

「お前、何やその花。…そういえば、お前昨日…」

そこでパクの目線が変わる。

「あ、」

直樹もつられるように振り返る。

そこには5人ほどの団体。

…マイティーだ。

「おいおい大林、岡崎。お前らコンビやったんちゃうんか。いつの間にトリオになったんや」

「ヘッ！何言うとんねん。お前の方こそ、いつもゾロゾロ下っ端連れやがって」

直樹はヤバイと思った。

コイツら、ケンカを始めるつもりだ。

「おい、やめろ！そんなことやってる場合じゃねーんだよ！」

そこでマイティーの顔を見た直樹、以前のことを思い出す。

マイティーにちゃんとお礼を言っただけじゃなかったな。

「あのさ、マイティー、この前は……どうもありがとう。ほんとに助かったよ」

「……………」

うまく思い出せないような表情をしているマイティー。

そこに、マイティーの手下であろう1人が叫びながら駆け寄ってきた。

「おいマイティー！アイツら見つけた！10人くらいおるぞ！川の

向こうにおる！」

それを聞いたマイティーは体勢を変え、

「よし、分かった」

それからタケシに向かって言った。

「おい岡崎、大林も。…お前の名前知らんな。お前も。暇しとるんちゃうか？」

今からな。〇〇高のヤツら相手にいつちよかましたらなアカンねん。10人おるってや。お前らどうする？」

ハツとする直樹。

タケシとパクの顔を見ると、すでに2人はニヤケ顔。

3人は同時に返事をする。

「行く！」

「行かねえ！」

「行く！」

それと同時に、全員が走り出した。

「おいパクウ！」

直樹の声にパクは振り返り、

「直樹！お前は来んでエエ！告白があんねんろ？頑張つて来いや！コツチはコツチで頑張るから！！」

そう叫んでパクは直樹に背を向け、走って行く。

…さすがパクウだよ。

全部話さなくても、分かってくれる。

そう。

今日は大事な日なんだ。

遅刻のことも怒らなかつたしな……。

…って、違うんだよ！！

道が分かんねーんだよッ！！

「おいパクウー！違うつて！。。。像の場所、教えて——
ッ——」

かすみ草とバラの花束を握り締めて、約10人の不良たちの後を追
いかける直樹。

何でこんな暑い日に、こんなに走んなきやいけないんだ。
せつかくシャワーまで浴びてきたのに！

ジイイーツ！

ジイイーツ！

賑やかな、セミの声。

「うるせーよセミ！！邪魔すんな！！」

八つ当たりもしたくなる直樹、皆に追いつけることなく、ひたすら
走って後を追いかける。

だが以前のように、息切れがして走れなくなるといったことはない。

道を聞きたいのと、

「ケンカなんかやめろ」

それを言うために、必死で追いかける。

「おい！お前ら！！ケンカなんかやめろ！！そんなことしたって
つまんねーぞ！？」

しかし前を走る彼たちに、直樹の声は届かない。

あっという間に川を越えてしまい、先頭では早速睨み合いが始まっ
ている。

相手は体格からして、正に高校生。

10人ほどがこちらに睨みを利かせていた。

見晴らしが良いにも関わらず、人気がないこの場所。

警察が駆けつけるなんて、ありえへんな、これじゃ…。

そう思い、目の前にいるタケシに話しかけた。

「おいタケシ。やめろや。ケンカなんて下らんぞ？」

おいマイティー！2人を巻き込むんじゃねーよ！お前らだけで勝手にやってろ！こっちは忙しいんだよ！

なあタケシ、帰ろうぜ」

マイティーたちは、すでに高校生たちと何やら言い合いを始めていた。

直樹の声にタケシは振り返り、

「アレ、秋月。ついて来たんかいな。お前はエエよ、来んで。ケガするからな」

「……………」

はつきり言うと、ムカツ！

そしてカチーン！と来た。

ボクシングを始めたのは、ケンカに強くなるためじゃない。

ただ、いろんな意味で闘える人間に。

そこを乗り越えて、勝てる人間に。

そう願ひ、始めたこと。

でも、どこかで自分の腕を試してみたい、そう思う自分もいた。今聞いたタケシの言葉に対して、直樹は考える。

俺のことを馬鹿にしてんのか？

タケシ、今なら俺、お前にも勝てるんじゃないかと思ってるぞ。そんなことを思ってしまう。

直樹は本当に、2人を止めるつもりでこの場所に来た。

しかし間が空きすぎた。

乱闘が始まってしまったのだ。

パクはすでに、その輪の中。

「タケシ、ほんとにするのか？」

「おう！面白そうやんけ！」

……止まりそうにない。

「もう！勝手にしろ！俺は知らないからな！」

またケガするに決まってるじゃないか！

…頼むから、大ケガだけはしないでくれよ…。

直樹は乱闘に背中を向け、紀子の待つ場所へ向かおうとした。

この段階で、もう完全に遅刻なのだ。

そして、そう。全くもって、油断していた。

歩き出そうとした直樹、いきなり服の襟ごと首根っこを掴まれ、強い力で後ろにグイッと引っ張られる。

ドンッ！

直樹はそのまま尻餅をついて倒れ込んだ。

間髪入れずに、腹の上に跨るように誰かが乗り上げてくる。

「ワレエ、ナニ大事そうに花みたいなモン持つとるんじゃ！？」

呆気にとられている直樹の腹に座ったその彼は、そう直樹に浴びせかけると、振りかぶった拳を直樹の顔面に振り下ろした。

ガッツ！

初めての感覚

これまで、こんな風に顔を思いつき殴られた事などない。
頬骨あたりを強打された直樹、メチャクチャ痛い。

そしてその瞬間、左目のコンタクトが外れてしまった。

激痛と、視界の悪さ。

現実のこととは思えていない直樹。

直樹を押さえつけている彼は、全く何もお構いなしに何発も何発もパンチを繰り出した。

俺が下らないと思っている行為の中でも、更に底辺に行くケンカなんてもの。

こんなことやってる場合じゃねえんだよな。

もっと大事なことがあるんだよ。

……俺の意志、

もう諦めてしもつたんか？

殴られながら、抵抗すらできないでいる直樹。

その直樹に馬乗りになっている高校生に飛び掛ったのは、タケシだった。

「何すんじゃワレエツ！！何シバイてくれとんねん！！コイツ、花持つとるのが見えへんのかあッ！！」

タケシは彼に怒声を浴びせながら、何発も何発も蹴りを見舞う。

「おい秋月！早よ行けって言うてるやる！！パクウからちよつと聞いてん！」

今度はタケシが彼に馬乗りになって、パンチを繰り出し、続けて言う。

「メツチャ大事な用事やるソレ！お前が行く前に、ちよつと顔見て冷やかしたろー言うとつたんや！

ごめんなあ、こんなことになって。っていつか、謝るくらいなら最初っからすんなっちゅーねんな！

…くそう！お前にそんな女がおったとはな！！」

直樹は屍餅の状態で、タケシの行為を見ている。

「……タケシ、…ごめんよ」

「ええ？ナニ謝つとんねん！？エエから早よ行けよ！」

そう言い終わると同時に、タケシはその高校生に上体を引つ繰り返され、立場が逆転。

今度は殴られ始める。

「喋ってばっかしてから、エライ余裕やのう！！」

体格の差は歴然。

直樹の目の前で、タケシが何度も何度も殴られ続けている。

……謝らんでいいよって、

そういう意味のごめんじゃないよ。

さっき、俺がお前に思った非礼を詫びたんだよ。

……俺の柔らかい意志、

何とか持つてくれよ！

直樹はバラの花束を持ったまま、その拳を大きく振り下ろし、高校生を殴りつけた。

「ワン・ツー・スリーッ！

ジャブ・ジャブ・ストレートッ！

俺だってなあ！何万回も練習してんだよッ！

ナメてもらったら、困る！！」

形勢逆転。

というよりは、タケシと2人がかりでその高校生を痛めつける。

直樹はバラの花びらを散らしながら、あのボクシングジムで習ったパンチの打ち方そのものを、相手に繰り出す。

パクの方も心配だ。

ちらと目を遣ると、パクがうつ伏せになり蹲っている。
それを見下ろす、パクの相手。

パクウ……負けちゃうのか？

他に視界を広げると、マイティー一味も何人かが地べたに寝転がり、
「痛いゝ、痛いゝ！」と暴れている。

……俺の柔らかい意志、

逃げるなよ。

ここで逃げたら、タケシとパクウに二度と会わせる顔がねえぞ。

……久保さんに会わせる顔はあるかなあ。

自分たちの形勢を確認し、ボーツとしてしまう直樹。

また高校生に殴りつけられ、地面に膝をついてしまう。

同時に、後頭部に思いつきりの回し蹴りが襲った。

ボクンツ！

…パクウは？

タケシは？

2人のことが気になってしょうがない。

この間だけは、痛い箇所も忘れている。

右肩がうまく動かない。

殴ったので肩がおかしくなったんだな……。

バラが茎だけになってるじゃないか。

攻撃で肩壊すなんて、まだまだだな。

死んだフリなら裏切りにはならないだろ？

キーンという耳鳴りを聞きながら、直樹はその場に倒れ込む。
気を失ったわけではないが、体がうまく動かない。

まだ粘っているタケシを見ながら、

何やってんだ、俺。

頑張っただろ、俺。

今、何時だろう？

この後、遅れてでも絶対行かなきゃダメだぞ、俺。

砂が唇にくつつくのも気にせず、直樹は横たわっていた。

これ以上の攻撃は堪らないと、死んだフリをすることにする。

そこへ、直樹の肩をくいツと引つ張る人がいた。

……パクだ。

「おい直樹。お前、何で来たんや。こんなコトしとる場合ちゃうやろ。途中まで気付かへんかったわ」

冷静なパクの声を聞き、この場がもうすでに焼け野原になったことを確信した。

おさまったんだな。

そう思い、体をくるっと引つ繰り返した。

……そこら中が痛い。

「……なあパクウ、これって負けてしもうたってことか？」

「せやなあ。向こうはササーッと帰ってしもうたわ」

少し、悔しい。

「また仕返しするのか？」

「どうやるうなー。またソコに寝転がってるアホマイティーと偶然会って、アイツらとまた偶然会ったら始めるんちゃうか」

喋っている間に、パクの顔はどんどん腫れ上がってくる。

「勝つまでやるわけじゃねーんだな」

「へへッ！どつかで勝ち負けの線決めとかんとお前、殺してしもうたら笑えんやないか。」

今回は俺らの負けや。なあ、マイティー？」

気がつくと、マイティー一味もこちらに近づいてきていた。

「おー、そやな。アイツら高校の柔道部やねん。勝たれへんもんやなー」

そう言つて、皆が笑っている。

「あーあーあー！直樹！お前、花メチャクチャやないか！茎しか残つてへんやん！

…あ、そうや、タケシ。お前、直樹に何か渡すモンあるんやろ？忘れとつたやんけ」

「あー、せやつた！」

パクの言葉に、タケシはポケットをゴソゴソしながら近づいてきた。そうして取り出したのは、裸の状態のネックレス。

「あんな、さっきも言つたけど、コイツからちよつと話は聞いとんねん。」

お前、今から女のトコ行くんやろ？

このネックレスな、前に俺が告白する前にフラれた女にあげよう思つて、バイト代と、パクウにちよつと出してもろつて買ったモンなんや。

効き目があるか分からへんけど、俺しばらく使う予定ないから、お前にやるよ」

そう言つて、タケシはそのネックレスを直樹の手のひらにチャラン、と落とした。

「箱はドコ行つてしもうたか分からへんねん。使えるんやったら使いや」

「……ッ」

ぐつと来るのを抑えようとする直樹。

「……俺、パクウにも詳しいことは何も言つてへんやんか。何で……」

「まあ、今日かどうかは分からへんかったけどな、渡しとこう思つててん、一応な」

もう一度、ぐつと来るのを抑え込んだ。

俺、もらつてばっかだな。

いつもいつも……。

「……ありがとう」

そう言う直樹の心境は何となく、夢見心地。

殴り倒されたのも初めてなら、自分が何かしようとしたとき、人にこんなに手を差し伸べてもらったのも初めて。

その時、直樹たちの遣り取りを見ていたマイティーが、声を掛けてきた。

「お前、ひよつとして彼女おんのん？何や、何の話やねん。」

もし俺のせいでエライことになったんやったら、めっちゃ謝らなアカンやんけ！どういうことや！？」

「おいマイティー、お前、氣イ早いんじゃ！直樹は今から彼女が出来に行くんや。」

ま、お前が邪魔したことはないけどな」

ここでもうやく直樹は思い出す。

行かなきゃいけない、と。

「そうだよ、パクウ！俺、こんなことしてる場合じゃないんだ！

ここまで着いて来たのも、パクウに……。像の場所を聞こうと思つたんだよ！7時までに行かなきゃ！」

するとマイティー一味の1人が、

「7時つてお前、もう過ぎとるで、15分も」

慌てて立ち上がるパク、

「お前、遅刻やんけ！！女性待たすなんて最低や！！こういう時は、ここぞとばかりに紳士ぶらなアカンもんや！

早よ立てエ！！

。。。像やったらすぐソコや！ここ真っ直ぐ行つて、あそこに信号見えたあるやろ？アレ左に曲がつて真っ直ぐ行つたらすぐや。

一人で行けるな？俺らみたいなんが着いてつたら、結果は目に見えたある。走れ！！」

「わ、分かった！！」

短く返事をして、直樹は立ち上がる。

片手に散ってしまった花束を握り、片手にネックレスを掴んで。

片足を引き摺り、直樹のものとは思えない腫れ上がった顔をブラ下げ、急いで向かう。

紀子の待つ方向へ。

告白 3

直樹はずるずると足を引き摺りながら考える。

形容し難いこの感情。

楽しかった。

痛かった。

無駄な時間だった。

手のひらのネックレスの感覚を思い出し、良かったんだと答えを出す。

以前とは違う、俺。

タケシもパクウもマイティーもその他も、皆イイ奴だ。

無駄なんて一つもない。

片方失くしたコンタクトだって、必然だろう。

こんなに腫れ上がったってんだ。

着いたままだったら大変だろ？

パクに言われた通り、信号を左に曲がり、真っ直ぐ進む。

その先に、目的の銅像はあった。

紀子が言っていたように、こっちに足を向けている銅像。

これで間違いない。

そこへ近づき辺りを見回すが、紀子の姿は見えない。

「……………」

…そうだよな。

随分遅刻した。

そりゃ、帰っちゃうよな。

ここは待ち合わせによく使われる場所なのか、たくさんの人がいた。茎だけの花束を持って顔を腫らし、流血している直樹を、皆が遠慮のない視線で見つめている。

こんな格好で目立っちゃってる俺に会わなくて正解だよ、久保さん。

直樹は人混みの中、立ち尽くす。

待っていても、いないものは、いない。

そろそろ帰ろうかと決めた頃、

「秋月くん！」

と、声がした。

間違いなく、紀子の声。

ハッとして周りを見渡すが、暗くなり始めたのも助け、人混みの中に紀子を見つけることができない。

キョロキョロする直樹に、後方からカラッコロツと駆け足の音が聞こえてきた。

振り返ると、そこにはいつもと全然違う雰囲気 of 紀子。

……着物着てる。

その姿を、直樹はポケットと見つめている。

「……………」

ジイイイーツ

ジイイイーツ

賑やかないセミの声。

…悪かったなあ、セミ。

さつきはあんなこと思っ

て。お前たちの声は、最高に夏場を演出してくれている…！！

紀子の姿を見ながら、セミの声を聞く直樹。

紀子は待っていてくれたのだ。

「ちょっとー、めっちゃ遅いやん。っていつか、ナニその顔！どしたん？」

その声に、直樹は現実に戻る。

そうだった。

こんな顔だった。

「…ごめんよ。ヤボ用ができちゃったんだ。それで遅くなっちゃった。

ケガしてこんな顔になっちゃうし。最高だね。……ごめんよ」

……最近俺は、よく人に謝る。

紀子の顔が目の前まで迫り、

「うわー、ちょっとメチャクチャ腫れてるやん。ちょっとあつちに移動しよ」

足を引き摺る直樹に気が付き、紀子は肩を貸してくれた。

そのまま水場まで行くと、紀子はハンカチを濡らして直樹の顔に付いた血の塊などを拭き落とし始める。

「腫れてるトコってね、実は冷やしたりすると治りが遅うなんねんよ。せやけど痛いもんねえ。ちょっと冷やしといた方がイイわ」

言いながら、濡れたハンカチを目にあてがってくれる。

「ありがとう。ごめんね、ハンカチ汚しちゃうね」

……俺は最近、お礼もよく言う。

人と関われば関わるほど、お礼と謝罪を繰り返す。

人は間違えながら、人の世話になる。

お礼も謝罪も、以前のペースを考えたら一生分しちまったくらいじゃないのか？

こうやって考えると、人と接しながらお礼を言えない奴ってのは最低なんだろうな。

「私ね、お兄ちゃんがおるんよ。お兄ちゃんもよう悪さして、ケンカして帰って来よったから、ケガの対処の仕方とかよう知ってんねん。」

他に痛いトコある？」

「ありがとう。でも平気だよ」

またまたまた、涙が出そうだ。
誤魔化さなきゃ。

「久保さん、その着物、普段着てねーだろ。俺と会うからわざわざ着て来てくれたのかい？」

「ええ?!……ちよつと秋月くん!人の心境、言わずにおりたいことをハッキリ口にせんといてくれる!?!
ちなみにコレは着物じゃなく、浴衣です!」

「……………」
「……………」

それから、照れたような沈黙がしばらく続いた。

やがて、紀子が口を開く。

「肩車、無理やりされへんように浴衣着て来たんやで？アツハハハッ！」

……秋月くんね、花火大会って実質、花火上がってるんは1時間ないんやで。知ってた？今から行く？」

俺は久保さんとお話できるなら、花火の大会なんてどうでもいい。そう思った。

「そうだよな、久保さん人混み苦手だもんね。ここでお話しようよ。まだ時間いいでしょ？」

何だか……泣きそうだ。

「俺、ジュースが何か買ってきて来るからさ、待っててよ。

久保さんが居れるギリギリまで夜更かししようよ。ちゃんと送るからさ」

そう言って立ち上がった直樹を、紀子が制する。

「イヤ、足引き摺ってる人に行かされへんよ。私が買ってくるから、ちよっと待っというて。

たこ焼きも食べるやる？アソコに店があったんや。

ちよっと待っててね」

紀子は駆け足でその場を離れていく。

カラコロと響く下駄の音。

見慣れない、浴衣姿。

……久保さんは、俺の遅刻に対して何もなかったかのように、怒らない。

逆だったら、俺にあの態度が取れるかな。
久保さんもまた、やさしい。

……とうとう、辿り着いてしまった。
もう、我慢できない。

直樹は、ぼろぼろ零れ落ちる涙を堪えることができなかった。
「……………」

いつ以来か、覚えていない。
泣いたことなんか、あっただろうか。

……記憶にない。

止め方が、分かんねえ…。

拭っても拭っても拭っても、次々と零れ落ちる涙を不思議に思い、
恥ずかしいと思い、必死に止めようとするが止まらない。
この暗さに乗じていれば、バレない、……かな。

何度も何度も、腕でゴシゴシ擦りながら、涙を拭う。
肩を揺らすほどに泣けて泣けて、涙が止まらない。
たくさんの人が行き交う中、他の人たちは一切視界にも入れず、ただ自分の世界を作っている。

泣いているのは恥ずかしい。
そう思いながらも、止められない。

しばらくすると、再び下駄の音を鳴らしながら紀子が戻ってきた。
「……………」

少しの間何も言わず、直樹の正面に立っていた紀子。
「……………冷めへんうちに食べようか」

そう言つて、直樹の隣に腰を掛けた。

「まだどつか痛いん？あ、別に子供扱いして言つとるんちゃうで？私、将来医者になりたいんや。」

ジャンルはねえ、何でもエエかな。医者にさえなれたら。

ほら、冷めるから食べようや」

紀子を買つてきたたこ焼きの上紙を剥がして、直樹に渡してくれた。

……確実にバレてるんだ。

今、俺が泣いてること。

久保さんは、咎めない。

直樹は泣きながら話し出した。

「……じ、実はさ……お、俺ッ、久保さんにわ、渡そうと思って買ったんだけど、ヒッ……メ、メチャクチャになったんだ……ヒック！」
花束は、何本かのかすみ草しか残っていない。

「……ッ、も、もう、ゴミになっちゃった……ッ」

紀子は直樹の手からぼろぼろの花束をそつと受け取り、

「ありがとう」

そう言つてはにかむように笑った。

「そ、それとさ……っこれも、久保さんにプレゼント。うっく……ッ
と、友達が、協力してくれたんだ……ッ」

直樹は左手に握ったままだった、すっかり温まってしまったネックレスを紀子に渡す。

「えー、スゴイやん！エエの？こんなんもらつて。こんなの着けたことないよ！

私、厚かましいから、くれる言つものすぐもらつよ？ありがとう」

この場所で、2回目の紀子の『ありがとう』

久保さんは、俺を否定しない。

そして、そこで踏み込んだ俺を、追い出さない。
さっき言った『ありがとう』が、返ってくる。

「く、久保さん、ツク、さ、…さっきの、医者になるっていうのは、
く、久保さんの夢かい…ッ？」

「うん、そうやで。夢やし、絶対現実にしよう思ってる」

「ス、スゲー…スゲーよな。もう夢を持ってんだ。きつとなれるよ
…ッ」

涙が止まらないまま、こんな会話。

上等な言葉を書き並べながら、自分には夢なんかなかったことを知る。

机上空論であれ、俺はこうあるべきなんだ、こうならなきゃいけないだ、具体的な形でただ、そう思っていただけ。
それを、知る。

「…く、久保さん、…うつく…ッ。。。建設。。。グループ
っていう、ふ、不動産を扱ってる会社、知ってるかい？」

「うん、知ってるよ。こないだ。。町にデパート建てたよね。有名な
やんか」

「お、俺は、ヒック…あの会社の、トップにいる人間の、息子
です。…ちょ、長男です」

これまで、同年代の人間にこの自己紹介をすると、必ず返ってきた
言葉。

スゴイじゃん。

金持ちなんだね。

そして、その度に思っていた言葉。

俺が金持ちなわけじゃない。

だが今回、紀子相手だと勝手が違う。

紀子は、そんなことは言わない。

「長男っていうのはさ、……う、ウチの商売を継ぐもんだろ？お、お、俺もずっとそう思ってた……っ」

一体何を言おうとしてる？

涙が止まらない。

止め方が分らない。

そのついでのつもりか？

「で、でも、俺ね、ふ、不合格になっちゃった。ツヒ……！もう、もう、合格したんだって、油断してたのかもしれない。

お、お父さんはもう、お、俺の前を歩きながら、後ろにいる俺を、き、気にして振り返ることは、ないみたいなんだ、う、う、……ッ
ク！

きつと、きつと、失敗作だって、お、思ってるよ……」

あまりにも脈絡がないな。

言ってることが。

説明しなきゃ。

「久保さん、お、俺ね、生まれて間もないとき、で、電。○社の前に、捨てられてたんだ。ヒッ……ッつつく

……電。○社の前に、捨てられながら、お、俺を拾ったのは、郵便配達員……っ

わ、ワケ分かんないでしょ。……フック……ッ

しかもさ、……うつくッ……お、俺、捨てられたこと、覚えてねえんだよ。

こ、こんな大事なことを、わ、わす、忘れちゃってんだ……ッ」

「……」

紀子は黙ったまま、ただ直樹の話を聞いている。

「そんな、大事なこと忘れてるのにさ、さ、……ッ3歳のとき、今の両親が、俺を引き取りに、来てくれたときのことは、は、ハッキリ覚えてんだよ……ッ。

ふッ……お、お父さんは、俺、俺に『厳選した結果だ。今度は私がお前を拾ってやる』って、言ったんだ……ひ・うーッく……ッで、でもさ、こっから覚えてないんだよ。うれ、うれしくて喜んだのか、どうか……

施設の居心地は、わる、悪くなかったんだけど、お、俺にお父さんと、お、お母さんができたこと、それに対して俺は喜んだのか、どうなのか……お、覚えてないんだよ……ッ

大事なことは、全部、忘れちゃってる……ッヒック……ううッ」

もう、止まらない。

「5歳くらいにはさ、お、お父さんが、大きな会社を経営してることを理解して、ウチはけ、結構なお金持ちだっってことを知って……お、お、俺、俺は結構幸運だっって、思ったんだ。

その頃には、……ッもう、家庭教師が付いてたから、毎日毎日、ッ日記を書いてたよ。

ハ……ック……

面白いこと、楽しいこと、……そ、そういうことがあった覚えもないのにさッ……

ま、毎日毎日、日記を書いてたよ。

字を書けるってことが、ひ、ひろ、拾ってくれたお父さんに、恩返

しできることだって、……そ、そう思ってた……ッ
まず、第一歩だって……」
「……………」

まだ説明は、終わっていない。

「く、久保さん、こないだ会ったじゃん、お、俺の弟に。あいつは、俺が拾われて、すぐに生まれたんだ……ッ
りよ、りよ、両親からしたら、予定がなかったから、俺をひ、拾ったんだろうけど。け、けい、慶也は生まれたんだ。
ひ、ひ、…っ

……ッあの頃はそれほど、気にもしてなかったけど、大きくなるにつれて弟が……ッく！最大のライバルだって、すぐに知ったよ。
ヒック！ウウ……ッ

い、椅子は、1個しかないって。
……蹴落とそうとは思わなかったけど、あ、あ、あいつはいい奴だから。

で、でもさ、久保さん……勝ってるって思ってたのに、15歳にして、早々に追い越されちゃったよ。ヒ・ヒ・ヒ……くッ！！
い、1+1がさ、2なら簡単だろ？

2-1が1なら、簡単でしょ？

そ、そういう風には、できてなかったよ……ッ
い、今、今となつては、俺の、俺の、椅子なんか、最初からなかったような気がする……ッ」

久保さんにこれを話して、何がしたい？

……こんなはずじゃなかった。

その時、それまで黙っていた紀子が口を開いた。

「ふーん……それで？秋月くんは家を追い出されそう、とか？」

「……いや、ま、まだそれはないと思うよ……ッ」
「ふーん……で？どうしたいん？」

どうしたい？

そこまで考えてなかった。

どうすればいい、ってことだよな。

「お、俺、頑張ろうと思うよ」

直樹はそう答える。

それに対し、紀子は

「よし！じゃあソレで行こうや」

そう答えるのみ。

そして紀子は首元にネックレスを着け始めた。

「ちよつと、コレ高いモンちゃうん？中学生がこんなモン着けとってかめへんのん？」

ちゅーか、似合うてる？」

まだ泣き止まない直樹、紀子の『よし！じゃあソレで行こうや』

その答えを乗せながら、答える。

「……うん、うん。すごく、似合うよ……ッ。」

そ、それは、きつとさ、久保さんが着けるために、つ、つく、作られたもんなんだよ。

それくらい、……っ似合うてる」

「アーハハハハッ！泣きながらようそんなこと言うねえ！関東人はキザで困るわあ」

紀子はしばらく黙った後、口を開いた。

「……秋月くん、泣きながらでエエから聞いてえな。

私ら、あんな進学校におって、勉強に関してはいつも競争やんか。

私ね、それだけじゃイヤでバレーやってたんよ。

だって、つまらんやん。あの人こないだ何位やった、この人は何

位に落ちたゝって、話しよんの。

そんな中でね、私ら2人、いつも1位2位やん。

これってね、しのぎの削り合いから生まれた戦友やと思わへん？

私ら、ウマが合うと思うよ？

秋月くんね、こんなこと言うてる私のこと、好き？」

「はい、そんなことを言おうが言うまいが、……僕は、久保さんが好きです。前から」

「ほんまあ。きつともっと話したら、もっと気が合うと思うよ、私ら」

俺も、もつともつと喋りたいと思ってた。
ずっと、そう思ってた。

「こんなエエもんもろうてな、こつなったら私ら、付き合うしかないんちゃうん？」

どう思う？秋月直樹くん？」

もつともつと、泣けてくる。

「はい……！僕も、そう思います……！！」
何故か敬語の直樹。

……もつともつと、泣けてくる。

俺の生い立ちについて、深く聞こうとしなかった久保さん。
追及されても、もう話すことはないんだけど。
聞かれたらきつと、答えはあったんだよな。
でも、彼女は聞かない。

「よし！」

そう言つて、紀子は立ち上がる。

「ここまで話が落ち着いたら、ケガしてる秋月くん、こんなにして外におらす必要ないよね。」

帰ろうや、一緒に。…あ、でもたこ焼きだけ食べて行こうか」

2人は並んで、たこ焼きを頬張った。

結構長く話したんだな。

そう思う。

たこ焼きが冷めてしまっている。

久保さんはバレーの大会では一回戦で負けて、これからは受験に専念するだけ。

結構時間あるよ。

そう言つた。

俺も、友達と遊んでるだけ。

だから、いつでも時間あるよ。

そう返した。

堀井キツカケで今回の行動に移った直樹。

でも、彼のことは思い出さない。

紀子と手を繋いで、暗い道を帰る。

その頃になつて、直樹はやつと泣き止むことができた。

誰の許可もいらず、手を繋いだり、2人で話したりできるんだよな？
これからまた、笑うことが増えるんだろうな。

そんなことを考える。

花火は見えないが、遠くからドーン……ドーン……！という音が何

回も聞こえてくる。

それを背に2人は手を繋ぎ、歩いて一緒に帰った。

理由 1

—— 夏休みというのが、こんなに楽しいものだとは知らなかった。

紀子さんとは結構なペースで会ったし、毎日のように話をした。勉強も、もちろんしましたよ。

でも休みが終わることに、かなりの怒りを覚えている。——

2人は『紀子』『直樹くん』と呼び合おうと決めた。

男はね、デンとしてちよつとくらいエラそうなのがエエんよ。

そう言う紀子だが、直樹には勇気がなく、決めた呼び名とは違う形で、『紀子さん』と呼んでいる。

—— 四季といえば衣替え。

そういう認識しかなかったですよ、俺は。

涼しくなると外に出掛けやすい。

知っていましたが、気づいていなかったような気がします。

俺は今後、潜行しながら生き長らえるものばかりだと思っていました。

そう、涼しくなると外に出やすい。

千古不易のこの俺と表していた以前、腹案しても意味がなく、独習し誤るところだったんでしよう。

この世界には、少なくとも俺にとっての先生が3人いた。

不協和音も自腹で練り合わせ、

そうですね、端的に言つと、これでいいんだということです。――

もつと涼しくなれば、紅葉を楽しむ紅葉狩りなるものがあるらしい。紀子さんを誘つて一緒に行きたいと思う。

料理が得意つて言つてたから、お弁当なんか作ってくれたりするんだろつか。

俺はお好み焼きがエエなあ。

でも秋を越えればすぐに受験や。

俺たちは同じ高校に進もう、そうやって決めたんやから遊んでる暇はないのかもしれん。

冬も春も夏も秋も、また来るんやから。

次に取つておくかもしれへんなあ……。

タケシとパク、そして紀子。

どちらも大事な直樹はクソ真面目に決めていた。

月・水・金・日は紀子と会う。

火・木・土はタケシとパクに会う。

そして相変わらず、夜はボクシングジムに通う。

生真面目にそう決めていた。

その日は土曜日。

相変わらず続いているタケシとの勉強会の後、パクの家で下らないことを話している3人。

タケシが言った。

「あ、ヤバイ！明日、甲子園最終戦やないか！ヤバイぞパクウ！すっかり忘れとつた！」

「アイタ〜！そうやったなあ！ヤベエ！！」

2人は大の阪神タイガースファン。

そのことは直樹も知っていた。

パクが言う。

「俺、あのダフ屋のオヤジに電話してみるわ。券残ってるかもしれないし」

2人の会話をポカンとして聞いている直樹に、タケシが、

「おい秋月、お前も行こうや。……ハッ！！まさかお前！東京出身ということとは、巨人ファンちゃうやろな！？」

それを聞いた直樹は答える。

「巨人のファンなんかじゃねーよ。ていうか、巨人て誰やねん」

「そうか。そしたら明日、一緒に行こう。甲子園で最後の阪神戦やねん。阪神側で応援するぞ！」

「……ハンシンセン？おいタケシ、お前ナ二言ってたんだよ？」

そこにパクが割って入った。

「タケシ、ちよつと待てエ。お前もエエ加減慣れる。

多分コイツは最初の段階から話踏み外しとるぞ。巨人のことは誰か個人のことやと思うてるし、阪神戦は何かの線のことやと思うとるぞ」

……まったくもって、パクの言う通りだった。

「あんな、直樹。プロ野球の話や。

明日、甲子園球場で阪神タイガースと読売ジャイアンツが野球の試合をするから、それを応援に行こう言うてんねん。分かった？」

「おーおーおー！野球の話か。分かった。理解した。……だけどなあ、俺、日曜はなあ……」

するとタケシが直樹に飛び掛るようにして肩を掴み、ブンブンと揺さぶった。

「お前は変わってしもつたのう！女ができたらしう言つか！……どの口が言うとんねん！？」

小さい時そんな子やなかったやないか！大きなたらその口がそんな事言うんか！！」

……お前は俺の小さい頃なんか知らへんやろ。

そう思っただけで、直樹は口にするのを止めておく。

「まーまー、タケシ。直樹な、たまにはエエんちゃうか？男同士の付き合いやんけ。明日は野球にしようや。」

3人で買ったらチケットがちよつと安うなんねん。な？」

うーん、と悩む直樹。

まあ、言ってることは分からないでもない。

「たまのことやんけ。紀ちゃんも許してくれるよ」

お前が紀ちゃんって言うな。

そう思いながら、これ以上紀子の話になるのは困ってしまうような気がした。

「じゃあ、分かった。明日は野球に行こう。応援すればエエんやろ？タイガースを」

「よっしゃ！そうこなアカン！！」

そう言うのと、パクは部屋を出て行った。

もうすっかりその気のタケシは、パクの部屋の家捜しを始める。

「確か、この辺にメガホン置いてあった……。3人で行くってことは、最低6本いるからな。確かあってんけどな……」

そうこうしていると、パクが戻って来て、

「……ヤバイな。おいタケシ、お前いくら持つとる？」

「俺、今月バイト出るまで500円しかないで」

「お前、5000円しかないクセに一番張り切つとるやんけ！5000円でナニができるつちゅーんや！」

ま、そう言う俺も2000円しかないんやけどな…。

3枚で1万円言いやがったから、アホボケカス言うたら8000円まで下がりよったんやけど、…くそー、あのダフ屋！」

そこまで言ったパク、直樹の方をチラツと見た。

同じく、タケシも直樹の方に向き直る。

「……あんなあ、直樹さん。こういう時の直樹さんいうんちゃうんやけどな。直樹さん、今ナンボ持ってます？」

頭の中で、机の引き出しに入っているお金を数えてみる直樹。

「……確か、1万円はあるハズやで」

「あんな、直樹さん。もちろん俺は2000円出す。コイツはバイト代が入ったら、ちゃんと直樹さんにお金を返す。」

だから、明日ちよつと多めに出しといてくれませんか…？」

「ああ、いいよ、全然。全然構わない。8000円いるんだろ？だつたらタケシの分は俺が出すよ」

「よっしゃー！ありがとう！！」

大喜びする2人は見ていて楽しかった。

何で他人がやつてる野球に、ここまで執着できるのか。

不思議に思ったが、ここまで熱中できる野球というものに、少し興味を持った直樹だ。

「じゃあ俺、もう一回ダフ屋に電話するから。3枚キープするから。明日、現地で受け取るってことにするからな」

3人は明日の待ち合わせ場所と時間を、その場で決めた。

明日は紀子さんと遊ぶハズだったのになあ…。
そんなことを考えながら、その日の夜、直樹は紀子の家に電話をした。

毎日大体決まった時間に電話するので、必ず彼女が出てくれる。

『あ、もしもし〜？私』

というあの声は、かなりホッとする。

毎晩聞いていても飽きない。

「あんねえ、紀子さん」

直樹は明日のことを切り出そうとした。

が、そこへ割り込む紀子。

『あ、ちよつと待った！テーマ決めてしもつたら長なるから、忘れんうちに先に言っわ。』

あのね、ウチのお客さんにね、動物園のチケットもらったんよ』

……動物園？

行ったことない。

『それがな、2枚あんねんやんか。直樹くんよう、コレ明日行ってしまわへん？』

ただ朝イチで行かんと……多分電車で2〜3時間かかると思うねん。

他県やからねえ、コレ』

「他県？泊まりで行くっていつんか？月曜日、学校やぞ？」

『……ちよつとアンタ、何イヤラシイこと言ってんねん。』

日帰りです！朝1番の電車で行って、昼から夕方まで十分遊べると思っんやわ。

それで、夜コッチに帰ってくる、と』

直樹は考える。

……イヤラシイ？

おこがましいってこと？

浅ましいってこと？？

何かは分からないけど、イヤラシイことを言ってしまったみたいだ。

そうやって少し悩んで、気づく。

その、明日の件で電話したことを。

「え、紀子さん、ソレ、明日やないとダメなの？」

『せやけど丸一日かけて遊びに行くってなったら、もうこの日曜しかないんちゃう？』

来週火曜日から、あの申し込んだセミナー始まるんやで？勉強漬けになるやんか。

明日がラストチャンスや思うんやけど』

直樹はまた考える。

何かに迷ったとき、それを天秤にかけて判断する。しかもその対象が人である。

なんてことは、これまでしたことがない。というより、俺にそんな技術はない。

そう思っていた。

しかし、今回はタケシ・パク、そして紀子。

双方の重量に重きを置き、今考えている。

……野球なんていつでもやってるよな。

そう思う直樹は野球のオフシーズン、最終戦の意味を分かっている。

だったら、動物園の方が大事なんちゃう？

何やったら、野球は平日だってやってるし。間違いなく。……テレビで見た。

やっぱり、野球よりパンダだと思うで？

俺は。

「……ねえ、紀子さん。その動物園ね、パンダはおるん？」

『え？パンダ？確かおるんちゃうかなあ？

イヤ、おったよ。実はね、私、何年か前に一回行ってんねん。でっかあて有名な所よ？

。。。ワールド。。。って、知らん？

直樹くん、シャチ知ってる？シャチで有名なんやで』

「シャ…シャチだつて！？海のギャングがいるのかい！？アザラシなんかを丸呑みにする、あの海のギャングが！？」

『そらそうよ』

この段階で、天秤にかけられていたタケシとパクは重量で負け、どこか見えないところにフツ飛んで行ってしまった。

「紀子さん、ちょっとだけ待つといて。5分後に電話するから！」
そう言つて、いったん電話を切る。

テンションが上がってしまった。

……パンダ

シャチ

パンダ

シャチ

パンダがシャチに……

……イヤ、それは違う。

それはかわいそうだ。

違う違う。

こりゃあ、動物園しかないよな。

パクウに電話せんと。

野球はいつだつてやってんだから。

すぐさまパクの家に電話をする直樹。

『はい、もしもし？大林です』

電話に出たのは、いつものようにパクのお母さん。

「あ、こんばんは、秋月ですけど」

『あー、秋月くんかいな。こんばんは。』

アレ、健と一緒にじゃないん？健に用事やったらまだ帰って来てへんで』

「あ、そうですか。じゃあちよつと伝言お願いしたいんですけど、いいですか？

健くんは、明日用事ができて行けなくなっただって言うといってもらえますか？」

『あー、分かった分かった。言っとくわ。』

しかし秋月くん、喋り方が丁寧で立派やわあ』

直樹は、パクのお母さんがここから話が長いことを知っていた。半ば強引に電話を切ることにする。

「じゃあすいませんけど、よろしくお願いします」

そうして電話を切り、再び紀子へ電話して、動物園行きのOKを出した。

待ち合わせは、駅に朝6時。

パンダやシャチもそうだが、そんな朝早くから待ち合わせをし、電車に乗って他県に出掛けるなんて初めての経験。

ワクワクしすぎて、遠足病とも言えるような体温の上がり方を覚える直樹。

この日は紀子との電話も早々に切り上げ、早く寝ることにした。

……でっかい動物園。

トラ

ライオン

アライグマ……

図鑑持つてるから、知っとなねん。

パンダ

シャチ

鳥

パンダ vs シャチ……

眠りに入りながら、いろんなことを妄想している。

翌朝、直樹は5時前に家を出た。

あまり眠れなかった。

だけど、寝坊もしなかった。

駅に着いたのは5時15分。

まだ早い。

だが、直樹はすでに紀子と何度か待ち合わせをした経験があるので知っている。

待っている時間も、なかなかオツなもんだ。

15分ほど遅れて、紀子も到着した。

昨夜の電話のあと、直樹と同じようにすぐに寝て、4時前に起きてお弁当を作ってくれたとのこと。

誰かにそんなことをしてもらった経験、記憶などは持ち合わせていない。

遠足のとき、運動会のとき、重箱に詰められた立派なお弁当。でもそれは、母が早起きをして作ったものではなかった。

業者に注文して作らせたお弁当。

あれが美味しいのはもちろんだが、

……だが、一味違うのだ。

朝、抜け出すように家を出てきた直樹。

早く起きたけれど、お弁当に時間を取られてしまった紀子。

2人は朝食を摂っていない。

時刻表を見ると、目的地まで約3時間ある。

2人は電車に乗り込むと、そのお弁当を目的地に着くまでの間に食べてしまった。

「お昼ごはんにしようと思って作ったのにねえ」

そう言いながら笑う、15歳2人。

紀子さんの作ってくれたお弁当は、さつき思った逆の意味で、二味は違ったな…。

とても美味しかった。

電車を降りるとバスを乗り継ぎ、動物園に向かう。

今日は日曜日のため、人は多め。

2人は人混みにお構いなしに、手を繋いで駆け足で園内に入っていく。

「ねえ紀子さん、まずはシャチやろ。そんで次はパンダ。俺はそう思うで」

「イヤ、ちょっと待って。シャチのショーってのは時間が決まったあるんや。時刻見てうまいこと回らんと全部見られへんで？」

「ちゅーか、私はまずトラとライオンやと思うで。」

シャチは時間を見てから。パンダは気が落ち着いたところで見んとアンタ、分かってないなー」

言っている意味は分からないが、言葉に説得力のある紀子。直樹は「ハイ」とだけ返事をして、紀子に従うことにした。

ここに来て、動物園なんてものは生まれて初めてだということを思い出す直樹。

動物がいれば、紀子さんもいる……。
ここは一つ、紀子さんに任せよう。

まずトラ・ライオンを見るべく、サファリカーなるものに乗る。
その車は結構車高のあるバスのような形で、車内にはもちろん、車の上にも乗ることができる。

「せっかく来たんやからねえ、肌で感じんと。あの剥き出しの2階へ座るで、私は。」

さあ直樹くん、アンタはどうするんや?」

「俺も2階!当然です!」

バスが走り出した。

天気が良いので寒くはない。

下を見下ろすとシマウマ、サイ、そういった図鑑でしか見たことのなかった動物だちがたくさんいる。

直樹は両手を使い、双眼鏡のようなポーズをとって覗き込んだ。

「紀子さん!こうやって覗いてみ?余分な風景を除いたら、まるでアフリカや!」

こうやって覗くべきや!」

「うーん、なるほど。視界の利点と盲点をつくわけやね?」

2人並んで同じポーズで周りを見渡している。

トラ・ライオンのコーナーに入った頃、紀子のテンションが急に上がった。

真下にいるライオンを見ながら、紀子が言う。

「直樹くん、知ってるか?ライオンってのはね、オスは何もせえへんのよ。エサ取るのとか、全部メスがすんねんで」

「へー、そうなんや。あ、俺ライオンがエサ食べてるトコ、見てみ

たいなあ。お食事タイムはないんかなあ？」

「直樹くん、ちよつと手エ伸ばしてみ？触れそうやん」

「あ、ほんまやね」

ライオンに向かって手を伸ばそうとする直樹。

「食事タイムが見たいんやろ？ちようどエエやん」

「へああああッー！」

直樹は急いで手を引つ込める。

大爆笑の紀子。

……こ、この人、コエエエ……！！

テンション上がりっぱなしの2人だ。

次に行ったのは大きなプールのある観覧席。

この動物園では、シャチのことをオルカと呼んでいた。
とにかく見事な大きさ。

見事なシヨー。

見事な水しぶき。

「なあ紀子さん、シャチって触ったらどんな感じなんだろうね。

アイツらサメやないから、ザラザラやないハズやねん。長靴みたいな感じなんかなあ？

今日家帰ったら、長靴触ってみよ」

「それより私は、上に乗ってるあのお姉さんが気になってしょうがないよ。

……ねえ、直樹くん。あの人、何代目お姉さんやと思う？」
「……………」

……紀子さんは、少し怖い人なんじゃないだろうか……？

「冗談やんか！冗談！！アハハハハッ！！」

笑いながら、直樹の背中をバンバン叩く紀子。

「アハハハハ……」

一緒に笑ってはいるが、このまま突き落とされるんじゃないかと、ふと思う……。

楽しい時間はあっという間に過ぎて行く。

目的だったシャチ、その他の変わった動物たち。

全て見て回った。

ついでに、設置されていたジェットコースターというものにも乗ってみた。

でも、アレはねえな……。

—— 思わず紀子さんのお弁当を、また紀子さんのお弁当箱に戻しちゃうところでしたよ……。

それともう一つ。
パンダ。

今まで写真と絵でしか見たことのなかった、パンダ。

可愛いのが取り柄だと思っていた彼・彼女たちは、近づいてみるととんでもない腕力で竹を割り、もっと近くで見るととても鋭い目つきをしていたのです。

何だったら、ガラス越しではあったけれど、近づきすぎた俺の顔目掛けて、飛び掛かってきました。

…… パンダ。

きれいな白と黒のツートンカラーだと思っていた彼・彼女たちは、何故か立ち上がるとお尻だけがグレーで汚かった。

パンダだけは、すっかり俺の期待を裏切ってくれた。

「パンダ、めっちゃ可愛かったねえ！連れて帰りたかったわあ！！」
そう言った紀子さんと少し口論になりましたが、ほぼ全てにおいて満点だった。

楽しくて仕方がなく、帰りたくありませんでしたが、紀子さんのご両親を心配させるわけにはいきません。

明日も学校だし。――

夜9時前と、少し遅くなったが、2人は無事に地元に戻り、家へと帰った。

家に到着した直樹、両親が留守にしていたのを良いことに、慶也をつかまえ熱弁する。

「あのなあ慶也！シャチがな、こうやって、ザバーン！って飛んでな、上空にぶら下げてるこういう玉にさ、頭突き食らわすんだよ！そんでまた、ザバーン！って水に落ちてな。」

パンダはな、……「ありゃあ色に誤魔化されてる！所詮クマだよ。見た目に騙されんなっちゅーことやな」

片手を長靴に突っ込み、それを触りながら熱く語っている。
とにかく、今日あった楽しかったことを話したかったのだ。

慶也はそんな直樹の話を、目を見張って「うん、うん」と、こちらも熱心に聞いている。

この日、直樹は一度もタケシとパクのことを思い出さなかった。

理由 2

次の日。

休憩時間になるたびに、直樹と紀子は昨日のことを話している。

余韻冷めやらぬ、そんな感じで動物についての知識を2人で話している。

この日は月曜日。

紀子と一緒に下校し、図書館に寄って勉強、そこで紀子と別れ、ボクシングジムに行ってから家へと帰る。

夜の勉強をする前に、少し紀子と電話で話をした。

また昨日の話だ。

いつもと変わらぬ月曜日。

直樹は覚えていた、というよりは思い出していた。

タケシとパクのことを。

スッポかしてしもうたからなあ…。

明日は2人で会って、一応謝らなアカンよな。

大ごとでもなく、流すようにそう考えた。

火曜日。

授業を終えた直樹は、いつものペースでいつもの待ち合わせ場所に向かった。

しかし、そこに2人の姿はない。

アレ？遅刻かよ…。

マズイなあ。今日からセミナー行かなきゃいけないのに。
全く、あの2人は…。

あくまで自分側の思考の直樹。

もう一つの待ち合わせ場所に行ってみることにする。

しかし、ここにも2人はいない。

公衆電話でパクの家に電話してみたが、まだ帰っていないとのこと。

…だんだん心配になってきた。

また警察の厄介にでもなってんじゃないのか？

アカンぞ、警察沙汰は。

そう思い、直樹は2人の学校に行ってみることにした。

バスに乗りながら、ドキドキしている。

待ち合わせ場所にいないなんて、絶対警察に捕まってるんだ。

しかし、バスに乗って流れる景色の中に見つけた、見慣れた2人の背中。

バスは2人を追い越していく。

追い抜き際に2人の顔を見ると、やはりタケシとパク。

慌てて停車ボタンを押し、次のバス停で降りて2人の方へ逆戻りした。

「おい！タケシ！パクウ！」

俯き加減に歩いていた2人は顔を上げ、そして立ち止まった。

直樹を見つけたパクは、いつものように、

「おい、直樹」

2人に駆け寄ると、直樹はまず謝る。

「おとといは、ほんまにごめんな」

「…お前な、ごめんなーじゃないぞ、お前。どんだけ待ったと思うとんねん。事故にでも遭ったんか思ってたやんけ」

いつもと変わらない様子のパクに対し、タケシが小さく呟く。

「ピンピンしとるやんけ。…ケツ!!」

タケシの様子が少し気になったが、直樹もいつものように話しかけた。

「そっちこそ、今日は待ち合わせ場所におらへんし、また警察にでも捕まったか思ってたやん」

「…」

……沈黙が流れる。

「…せやけどな、直樹。お前、おとこのアレはないんちゃうか？何しとつて来なんだんや」

そう聞かれて少しギクツとしたが、直樹は正直に答えた。

紀子と動物園に行ったことを。

「それならそれでよう、電話くらいして来いよ。コッチはずっと待ってるやないか」

「え、でも俺、お前ン家のお母さんに電話したで？伝言お願いします言ったんやけどな」

「ハア？ウチのババア信用すんなや」

そしてまた、いつもにはない少し重い空気が流れる。

「ま、次の日曜日、今度こそ野球に行こうで。チケット代は俺が三人分出すから。な？」

直樹の言葉に、タケシがズイツと前に出てきた。

「お前なあ、人の話聞いとんか、ちゃんと！ボケツラかましとんのもエエ加減にせえよ！？こないだのが最終戦や言っただやろ。もうやってへんわ！」

直樹はここで、初めて最終戦の意味を理解する。

「ああ、そうかあ……そういうことだったのか。タケシ、ごめんな。」

あんなに楽しみにしてたのにな」

そこでパクが間に入った。

「まあ、な、タケシ。直樹、謝つとるやないか。これ以上どないせえっちゅーんじゃ？これでおあいこや。貸し借りなし。」

なあ直樹。謝る以外、何もできへんわな」

するとタケシはそう言うパクを強く突き飛ばし、直樹に向かった声を荒げた。

「俺は別になあ！阪神戦行けなんだのどうこう言うとなっちゃうねん！

コイツ、裏切ったくせにしゃあしゃあいつもの顔して現われやがったから、ソレにム力ついとんじゃッ！！」

黙って、自分の失敗を反省しつつ聞いていた直樹だが、少しムツとしました。

「だけどな、タケシ。さつきも言ったけど、俺は野球は年間通してずっとやってるって思ってたんや。だから今週も行けるって思ってたんや。」

お詫びに2人の分のチケットも俺が出そう、そう思ってたんや」

「だから、そんなこと言うてんちやう言うてるやろ！！」

タケシは怒鳴り、直樹の胸倉をグツと掴む。

その親指が鎖骨の間にグリツと入り、痛い。

少しイラツとしてしまった。

「……何だ？タケシ。俺がお前ら放っぽって、彼女と遊びに行ったのが面白くねえのか？」

それを聞いたタケシ、今度は直樹の掴んだ襟をグイツと引き寄せた。

「だから、そんなん言うてんちやう言うてるやろ！？お前、俺にケンカ売ってんのか！？」

タケシは直樹の顔に唾を飛ばしながら、大声で叫び散らす。

直樹も冷静さを欠いていた。

売り言葉に、買い言葉。

本当に、心にもない部分だった。
ただ売られたから、買ってしまったのだ。

「別にケンカなんか売ってねえよ。何を張り切ってんのか知らんけど、そんな暇あったら勉強しとった方がエエんちゃうか、タケシ。まあ、今のままでも入れる高校はあるやろうけど、今のままやったら高が知れてると思うで。もっと頑張った方がエエんちゃうか」

「前に言うたよな？俺は高校へは行かん言うтонねん！いらんお世話じゃッ！！」

ますます激しくなるタケシの大声。

「だからそれが頭が足りないって言うてんだよッ！高校も出ねえでお前、何すんだ！？今日び、どこ行っても学歴社会やぞ！？」

俺は別にお前をナメてねえ。けどな、お前が世の中ナメてんのは事実じゃねえのか！？

高校行かずに働くつて、お前あのまま、あの家にこれからもずっとッ！！

ここで、直樹は我に返る。

…買いすぎて、いけないことまで言ってしまった。

タケシの形相が更に変わり、胸倉を掴んだ状態で拳が飛んでくる。

ヒュッ！

「ッ！！」

避ける直樹。

しかし急なことだったので鼻を掠めてしまった。

生温かいものが口にまで下がってくる。

……どこかで、俺たちは友達だから、コイツは俺を殴らない。
そう安心し、高を括っていた。

もう一発飛んでくる拳。

今度はスツと上体を反らし、完全にかわす。

そのまま直樹はタケシをドンツと突き飛ばし、胸倉から手を剥がした。

そして、パンチを繰り出す。

フッ！！

パチンツ！！

小気味良い、バネが弾む音がした。

直樹のパンチは見事にタケシの左頬にヒットし、彼は後ろへ引つ繰り返る。

何万回も練習した、このストレート。

直樹はそれを、タケシで試してしまったのだ。思わず手が出た、なんて言い訳はできない。

俺は今、タケシを黙らそうとして、落ち着いて、横っ面を目掛けて、殴りつけた。

たかが練習生ではあるが、ボクシングジムに通っている者のパンチは違う。

「……ッ」

面食らったタケシ、尻餅をついた状態から起き上がろうとするが、膝が笑い、うまく立ち上がることができない。脳が揺れてしまっている。

「フレエッ！！ゴラアッ！！」

無理やり立ち上がり、襲いかかるうとするタケシ。

「……ッ！」

ビクツとしてしまった。

自分には向けられることはないと思っていたあの形相が今、自分に向けられている。

黙らせるどころか、火を点けてしまった。

しかし、その思いとは裏腹に身構える直樹。

その時、それまで黙っていたパクが間にスツと入ってきた。

「よっしゃー！一発ずつ！これであおいこや！なあ直樹！なあタケシ！」

パクはすごい形相のタケシを、正面から抱くようにして動きを止めようとする。

「落ち着け、タケシ。ツレ同士でマジゲン力は厳禁や」

言いながら、パクは振り向き、こちらを見ながら言った。

「なあ直樹？」

パクの目もつり上がっている。

それを見て、冷静になれた。

「……あ、ああ。そうだよな」

まだ直樹に突つかかろうとするタケシの背中をバンバンと叩きながら、パクが続ける。

「これ以上になったらホンマにアウトになるんじゃ。まだまだ熱いんやったら、俺がお前を冷ますぞ。」

ちよつと落ち着け、タケシ」

「……ッ」

それを聞いて、タケシも振り上げていた拳を下ろす。

「よっしゃ。涼しゅうなった。1回ずつごめん言つて、終わりにしようか。それが一番エエやろ」

「何で俺が謝らなアカンのじゃッ!？」

そう答えるタケシ。

ちら、とこちらを見たパクの目を見て、思わず俯いてしまう直樹。

「…そっか。ほんなら、こりゃ宿題うちゅーことで、今日はバラけようや。なあ？」

ほしたらな、直樹」

そう言つてパクはタケシを連れ、元来た道を戻つて行く。

その背中に向けて、

「おーい！パクウータケシ！！俺、今日からセミナーがあるんや！だからな、」

そこまで言つたところで、パクはこちらに背を向けたまま、手を挙げた。

「……………」

ストップという意味なのか。

OKという意味なのか。

分からない。

鼻血が垂れてくる。

いつも持ち歩いているのに、今日に限つてティッシュを持っていない。

直樹はカバンを開けてノートをちぎり、鼻に押し当てる。

鼻血つてどうやったら止まるんだ？

……タケシなら知ってるよな。

そつ、自分の心配をしてみる。

―― 武器は、持つ人のことを選べない。

作る人のことを選べない。

板前さんや理容師さんは、普段から刃物を持ち歩いている。俺たちは、あの人たちのことを信用するしかない。

言い出したらキリがない。

普段俺が持ち歩いている鉛筆でだって、人は殺せるんだから。――

直樹も、帰る道は2人が歩いて行つた方向と同じ。

こんな気まずい思いはしたことがない。

今からでも駆け寄つてちゃんと謝ろう、ではなく、少し時間をズラして帰ろう。

直樹はそう思い、見えない背中を目で追いかける。

直樹はしばらくして、セミナーへと向かつて歩き出した。

……俺はきつと、また今から紀子さんに泣きつくんだろう。

甘え体質。

こんなものを俺が持ち合わせとつたなんて、ビックリやで、ほんま。ノートの切れ端を鼻に押し当てたまま、そう考える。

セミナー会場に着くと、紀子は入口で直樹を待っていてくれた。

「ハアッ！？ちよつと！ひよつとしてまたケンカしたん！？」

あーあーあーあー！ノートなんかあてがうから、張り付いてしもうとるやん！

直樹くん、こんなにケガする子やつたん？意外やわあ」

知らない間に鼻血は止まっていた。

洗い場まで一緒に来てくれる紀子。

途中、鼻血の止め方を教わった。

血が垂れてくるから上を向いていたんだけど、それは本当はいけならしい。

目頭のちよつと下を、摘むようにして押さえる。

一つ、勉強になった。

「今回は何なん？ちよつと教えてくれる？

こんなにケガされたんじゃ、心配でしょあないやんか」

その問いに対する答え、

……見つからない。

何故こうなったかを話すとすると、経緯まで話さなければならない。

それだけは、言えない。

嘘を吐こうかと思ったけれど、思いつかない。

「……転んでももうてな。手エつくの、忘れたんよ」

アホみたいな嘘。

これが精一杯だった。

「あ、そう」

言いながら、紀子は直樹の顔をきれいにしてくれる。

嘔吐してるの丸出しなのに、それ以上言ってこない。

本当に、尊敬するよ。

紀子さん。

……申し訳ないんだけど、俺はまた帰り道に、君に泣きつくことになるよ。

2人は少し遅れて授業に参加した。

直樹・紀子を含む、今日がセミナー初日の生徒たちは、まず5教科の小テストを受けさせられる。

直樹は始終ボーっとしている。

別に、鼻が痛かったわけではない。

ボーッとしていて、テストの空欄が目立つ。

直樹の席の列の一番後ろは紀子。

テストが終わるたびにそれを集める役目の紀子は、直樹の答案が白だらけなのに気づいたようだった。

このテストの結果で、明後日からのクラスが振り分けられる。

そう聞いていた2人は頑張ろうと、そう示し合わせていたのだ。

なのに、空欄だらけの直樹の答案。

この日は3教科のテストのみで授業が終わり、2人は一緒に帰路に就いた。

「なあ直樹くん、何か食べてから帰ろうか。お腹空いてへん？」

「…え、ああ、うん。そうやね」

何とも覇気のない、直樹の返事。

「何か、今回は私からちゃんと聞かんと、吐いてくれそうにないねえ。」

だつて直樹くん、テスト中、頭から煙が出て、その煙がドクロの形になつとつたで？」

「ええッ！？マジで!？」

「ハハッ！って笑ってくれんと。冗談やんか。」

でもね、そんな青白く、消え行くような顔されとつたら、こつちまで辛あなるわ」

「……………」

………そっかあ。

迷惑掛けてしもってんねんな。

「ま、ジュースでも買って、そこで話しようや」

公園を指差して言う紀子。

「……俺は、ここに来る前から、俺はそうするだろうって思ってたよ、紀子さん。」

でも今回は、泣きつき方が分からへんねん」

「うん、じゃあアソコに座って話してから帰ろうか」

「……ジュース、何がいい？俺が奢るからさ」

「フアントオレンジ」

直樹は自販機に駆け足で向かい、自分も紀子と同じものを買って彼女の元へと戻る。

そして嘘を吐かないようにして、紀子に経緯を話した。

「……実は、友達との約束を破っちゃって、2人をスッポかしちゃったんだ……」

「友達って、あの。。。中の人ら？」

「そう。2人おるんやけどね。1人が完全に怒ってしもって……」

「ん——……何かハッキリせえへんのやね」

「俺が悪いのは分かってんだけど、そこまで悪かったか？ちゅーか……」

何かスッキリせえへんねん」

「ごめんじゃ済まへんの？」

「うーん……だから、そのごめんがなかなか言いにくいというか……」

「ふうん。……それで、あんな青い顔しておったんやね」

ここまで言っで、直樹はまた悩みだし、黙ってしまふ。

「あのね、直樹くん。人の心の色ってどんなんか知ってる？」

「え？心の色？ピンク色？」

「それはアンタ、ハートマークのイメージのこと言うてんやろ。

そうじゃなくて、んーっとねえ……よし、じゃあ今回は私のテーマ

『人と生きるについて』話そうか。

どうする？直樹くん」

「うん、聞く」

「私だつてきつと、3年後5年後には考え方変わつてると思っんやけどね。

じゃあ聞かせよう。

うーん……納得いかん部分があつても文句はなし。認めません。これは命令です！」

「ハイ」

「直樹くんね、人と揉めたことがないから、悩み方がよく分かつてへんと思っんやわ。手助けになればエエとしようか。

さっきの話聞いただけやつたら、そらあ直樹くんが悪いよ。

ほんで、理由を私に言えんってことは、何か私にも責任があるような気がしとるんやわ」

紀子さんは別に悪くない。

悪いのは、俺や。

「さっきの話やけどね、人の心の話。

例えば悪い部分を黒と表して、良い部分を白と表そう。

こうした時、いい？人の心つてのは、ほとんどが黒なんや。

そして人は、少しの白い部分で生きて行つとるん」

……それを聞くと、おとといのこと。

あれはやっぱり俺が悪かったな。

タケシの言い分が理解できてきた。

「私はね、これまで直樹くんと一緒におった時、時間全部楽しかったからねえ。」

例えば私にも何か責任があるんやとしても、全く責任を感じません。つてのが、ホンマのところなんや。

ハイ、コレは白と黒、どっち？

正解は、黒！

大抵の人っていうのはね、『俺は・私は正しい』って思いながら、日々過ごしてるんよ。自覚がなくなっても、そうなんよ。

だって、そうやなかったら、人は人の間で何ができるん？そうじゃなかったら、人前とかに出れるん？

人前に出た時、自己主張するのもしないのも、その人の正義。発言をするんもしないんも、その人の正義。人の輪に入るんも入らんのも、そう。

結局、行動した段階で人はどうしたんか、どうされたんかが全てなんやわ。

人は迷って迷って、間違えるんや」

……パクのことを思い出した。

パクもよく難しい話をする。

「直樹くん、全てが多数決で決まるワケやないやんか。

これまでね、失敗とか間違いを人のせいにしたこと、あるやろ？」

「それくらい俺にだってあるよ！馬鹿にすんなよ！」

考えながら聞いている直樹。

返事が少しおかしい気がするが、理解はしている。

「ハイ、黒！」

それは本当に相手が悪かった？

…でもね、その黒い部分で共鳴できるんが、人間なんやで？

例えば今、私がエラツそうにアンタにタレてるこの講釈。これが正しいとも限らへん。

たとえば直樹くんが間違えたとき、ソレはキミが間違ってるよって正してくれた人。でも、その正しい方が正しいとも限らへん。

でもね、その時自分の心が動くかどうかは、全部自分で決めてることなんやで？

ほんでこの時、考えはどうあれ、自分を信じれないヤツはカスです。結局、人は自分で決めなアカンのやわ。

大体相談する段階になったときは、その相談相手に自分の都合のいい返事を求めてるモンやろ？

ハイ、この考え！

これは私の、黒！

…直樹くんね、今回その2人と揉めたこと、ソレをいろいろ加味して許してもらおうって思うか、許してあげようって思うか。

ソレは直樹くんが決めるんやわ。

人は迷って迷って、間違うんやから。

正解なんか、分からへんよ」

紀子の言葉がここで止まった。

後は自分で考えなければならぬ。

今、紀子が言ったこと。

初めてのことはかりで、少し難しい。

頭の中で、練って行く。

「……紀子さん、俺な、お金にモノ言わせたワケやないんだけど、俺がお金を出すから勘弁してくれよ、みたいな言い分だった……」

「あ、そう。だったら考えてみ？」

直樹の、頭を抱える仕草。

これは癖。

「だから言ってるやん。人は間違っんやって。こっとなったらその2人信じて、イチかバチかに賭けるしかないんぢやう？」

紀子さんも一緒に来て。

そう言いそうになった。

でも、言うわけにはいかない。

俺は間違っていたと思う、正義。

「……紀子さん、俺もう一回、ちゃんと謝るわ」

それを聞くと、紀子はその場に立ち上がった。

そして両手と両足を広げ、

「よし！抱いてやるから飛び込んでおいで！！」

……はあ？

何だソレ。

どういう行動なんか分からないし、抱きつき方も分からないけど。

直樹は紀子を抱えるようにして、抱きついてみる。

……女子っていうのは、やわらかい。

そう思った。

紀子の肩まである髪の毛が、頬に触れてくすぐったい。

「もしな、イチかバチかでキミが罰受けなアカンようになったら、取り合えず私がおるし。」

その時はまた、話してくれたらいいよ」

……その瞬間、両腕が太くなったような気がした。
足腰も、元に戻った。

直樹はそのまま紀子を抱え上げる。

「紀子さん！あの2人な、めっちゃエエ奴やねん！今度絶対に紹介するわ！」

そしてその場でくるくる回り、紀子を振り回す。

「ハハハハッ！！直樹くんアタ、ちょっとデカすぎるんちゃう？抱いてあげるつもりが、抱き上げられてるし！」

これじゃあ介抱してるつもりが、介抱されてるみたいやんか！」

迷うことは、そんなになかったような気がする。

このまま2人に会わないワケがない。

何かで読んだ『友は一生の宝』という文。

俺はまだ死なないから、『一生の』なのかどうかは分かんない。
だけど損得勘定なんか、いつの間にかしていなかったことを思い出したよ。

タケシ

パクウ

やな顔しても無駄やぞ。

俺は2人に会いに行きます。

次の日も直樹は頭を働かせている。

セミナーが本格的に始まるのは明日から。

今日はジムも休み。

タケシとパクに連絡するのは、ある程度頭を使ってタイミングを見

計らわないといけない。

また自分が間違えてこじらせてしまうのは、ナンセンスを通り越し、ほんまもののダメなヤツになってしまう。

その日は紀子と図書館で話をするだけだったので、久しぶりに家に早く帰ってきた。

そして、これもまた久しぶりに父と顔を合わせる。チラと目が合ったが、お互い気にも留めなかった。

今の自分の髪型を見ても、もう言うことは何一つ持ち合わせてはいないのだろう。

玄関から父の声がする。

「慶也！早くしなさい！」

その声を聞いた慶也が、直樹の部屋に飛び込んできた。彼は直樹のものとよく似た、余所行きの服を着ている。

俺は一応知っている。

今度はショッピングモールを造るんだろう。

それくらい俺だって知っている。

聞かされなくてもな。

着工前のパーティーだろう。

「なあ兄さん。僕、パーティーって退屈でイヤなんや。

何で僕なんだよ。兄さんも一緒に行こう！」

服まで着込んでいるのに、駄々をこねている慶也。

「俺は呼ばれてねえよ。早く行っておいで」

そう言つてニコツと笑ってみせた。

……慶也。

早く気づけ。

取って代わられた俺の立場に。

「……………」

慶也は縋るように直樹の顔を見、そして渋々と部屋を出て行った。

……あいつには他意がない。

知っているからこそ、辛い部分もあった。

だけど今はそれほどには感じていない。

別にいいや、とは違う、何か。

きっと俺は、ゆっくりと後ろを振り返りながら、棄権しようとしているんだろう。

……そんなことよりもだ。

タケシ・パクに対して次どのように接するか、その方が重要。

紀子さんの言ったイチカバチか。

正直に言くと、俺の中でそういう行動というのは、あり得ないんだよな。

出来うる限り確率を上げ、挑む。

ポジティブ・シミュレーション

ネガティブ・シミュレーション

出来うる限り、ポジティブの方向へ道が拓けるよう、考えてみるべきなんだ。

考えては止め、考えては間違え、それを繰り返すとどんどん時間は過ぎて行く。

昨日紀子にもらったアドバイスで揚々としていたが、5時間後にはイチカバチかなんて、愚の骨頂というところに辿り着き……

また、頭を両手で掻き回しながら抱え込む、いつもの癖。

時計は深夜1時を回った。
早く寝なきゃ、ではなく、紀子に電話したら怒られちゃうかなあと考える。

昨日をもう一度、振り返ってみよう。

そう思い、考え始めた中で一つ気づいた。

パクウはそれほど怒っていなかった……

パクウが何とかしてくれるさ。

そう俺が思うのは、非礼の上塗りであり、これまた愚の骨頂。

直樹はその骨頂に立ったまま、この日食事もとらず、お風呂にも入らず寝てしまった。

次の朝起きてまずしたのは、自分を叱咤すること。

何で寝るんだよ！

でも時間は戻らない。

ついさっき思った『何で寝るんだよ！』の頃の俺にも、戻れない。

…今日は学校を休みたい。

昨日の今日で、まだ何一つ行動を起こしていない直樹。

何となく、紀子に会わせる顔がなかった。

登校の用意をしながら、昨夜お風呂に入っていないことを思い出す。
が、そんなことよりも……

つらつらと考え事をしながら普段通りの時間に家を出て、学校に向かう。

しかし、いつもの時間になっても学校には着いていない。とぼとぼとぼとぼ、チンタラチンタラ歩いている。

やがて2人との待ち合わせ場所に差し掛かったとき、直樹は足を止め、その景色を見回してみた。寝不足ながら、目が覚める思い。

だーから！

このまま2人と会わないワケ、ないだろう？
紀子さんが言った、このままの俺の、このまま限りなく黒に近い俺のままで、きつと2人は分かってくれる。

直樹は頭を巡らせる。

……よし。

このまま、タケシとパクウの学校へ行こう。

理由 3

歩先を変えようとした、その時。

直樹は背中をドンツ！と強い力で突き飛ばされた。

「！？」

つんのめるようになりながら振り返ると、そこにはパクの姿。

「オイッス」

タケシの姿は、ない。

「……パクウ」

「……まー、何ちゅーか。こないだは悪かったな。ちよつとな、電話もしにくうてよう。」

お前、怒ってんちゃうかなーと思ってよ。顔見たら、ちったあ話すことあるんかなー思うてな」

「……あのな、パクウ。何をどうやって考えたって、悪イのは俺なんだよ」

「まーまーまーまー。思い詰めたら戻りにくくなる。」

ただなあ、タケシがなあ……。アイツ、ほら、大分アホやから。反省はしとるんやけど、お前の前に顔出しにくうてなあ。

アイツの家、電話もないし……」

「……………」

「しかしアレやなあ。お前、絶対遅刻なんかせえへんやろうから、俺ココで7時から待ち伏せしてたんやで。」

直樹、お前今日、金持つとる？」

以前は登校の際、お金を持ち歩くんてあり得なかった。

しかし人と接するとなると、何かとお金要る。

そう理解した直樹、それ以降は必ずいくらか持って、外を出歩くよ

うになつていた。

「あんまりはないけどな、いくらかは持ってるよ」

「お前よう、今日学校へ行く？」

：パクウが俺の答えを待っている。

「行かん」

「よっしゃ。今日は2人でブラブラしようや。

俺、腹減ったんやって」

「そうやな」

そうして、2人は学校とは違う方向へと歩き出した。

学校をサボるなんて、背伸びを通り越して何かを飛び越える行為だ。今の俺にとっては、そう。だけど、今日はいいんだ。

ゲームセンターに行き、バッティングセンターに行き、ウロウロウロウロ……。

2人で遊び回った。

楽しいのは楽しいが、タケシがいないと物足りない。

アイツは破天荒だからな。

無茶してるのを見ると、それだけで面白い。

チラホラと下校する学生たちが見え始めた頃。

「お、もうそがいな時間か。

お前、塾行ってるんやったよな。塾……イヤ、セミナーいうんか。大変やなあ、進学校行ってるヤツは」

パクの言葉に、直樹は一つ、思い出す。

「……なあパクウ。今回な、俺、パクウに関しては2回約束破つと

んねん。

野球スツポかしたのと、タケシの家庭のことを……」

2人は公園のブランコに、並んで座った。

「まあ、せやな。ああいうのは言わんといたって欲しかったんやけどな。」

まあ、ウチのババアが一番悪いんやけどな。

でもな、今日びのところ、タケシも謝りたい思いよんよ。

ただ何回も言うけど、アレは大分アホやからな。どんなにしてエエんか、分からへんのや。

お前から近づいてったら、また怒ったフリするかもしれへんしな」

「……………」

「……………」

2人とも、黙り込んでしまった。

直樹はその間、考える。

何か贈り物でもすれば……

あ、これじゃあまたお金にモノ言わせてる感じがな。

…プレゼント。

そういえば先日、慶也が友達の誕生日会に呼ばれていた。

プレゼントを買わなければならないと、母におねだりをしていた姿を思い出す。

「…なあ、タケシの誕生日っていつなん？」

「えー、アイツは5月やで」

5月……。

「パクウは？」

「え？俺は8月。何やねん」

パクウの誕生日聞いても意味がねえな。

うーん……

そこで直樹は思いつく。

「そうや！俺、この日曜、誕生日会するわ！俺ン家で。だからパクウ、タケシ連れて来てくれよ」

「ハア？誕生日会！？お前、この日曜、誕生日なん？」

「イヤ、違う」

「何じゃそりや！お前、誕生日っていつやねん」

「知らん！」

「ハア？」

思わず『知らん』と言ってしまった。

直樹は本当に、自分の誕生日を知らない。

ただ拾われた日、これを記念日として、10月8日。生年月日を記すときはこの日を記して、やり過ごしてきた。

自分の誕生日会。

我ながらナイスアイデアだと思い、直樹は話を続ける。

「一応、俺の誕生日は10月なんだけど、誕生日会なんかやってねえんだよ。

だから今週やったってエエねん。

パクウは、俺が謝りたいって言ってるって言って、タケシを連れて来てくれよ」

「うーん……でもその場合、普通に誕生日会って言った方がエエんぢやうか？」

「そういうもんなのか？俺は提案しながら相談してんだよ、パクウ」

「うーん……でもなあ、俺、お前んトコのオヤジさん、苦手やねん。

タケシも間違いないく、苦手やからなあ」

「それなら平気だって。この金曜から来週水曜まで、お父さんは東

京の本社に行くんだよ。

「ご馳走用意するしさ」

「なるほどな。…よっしゃ、分かった。じゃあ引き摺ってでも連れてくか。祝い事やしな」

そう言つて立ち上がるパク。

「……実はな、こないだのこと、ホンマのところは俺も相当頭に来てとつてん」

パクはブランコに座つたままの直樹を振り返つて続けた。

「スッポかされたからとちゃうで？ 彼女は大事やからな。

お前がタケシの家のこと、イジくつたのに対してな」

そうして直樹の顔にスイツと顔を近づけ、

「今日はホンマはな、お前の顔面に一発ブチ込んだらと思うとったんや。

せやけど、そがいにしてできへんわな。お前も悩んどつたんやもんな。

考えたら、最初俺らの都合にお前を巻き込んだんやったもんな。

せやけど、貸し借りゼロとかよ、そうやって計算して付き合うんは止めよ。

その言い分の元、今回の誕生日会や」

それを聞き、直樹もブランコから降りる。

「ああ、分かった。だったら俺も今日は来てくれてありがとう、とは言わない」

「よっしゃ、ソレで行こ。」

そうやな、お前もう帰らなアカンな。そんなら俺も帰るわ。アホのタケシが勘繰るからな。

ほいじゃな」

そう言つて走つて行くパクの背中を、直樹はしばらく見つめていた。

やがて自分も帰ろうと歩き出した時、後ろから駆け足の音。振り返ると、それはパク。

「悪い悪い直樹！考えたら俺、お前の家知らんやんけ！」

「ああ、そうだったよな」

「何か知らんけど、今日は俺もそれなりに緊張しとったみたいやな。らしゅうない、アカンアカン！アハハハハッ！」

自分の家はこのバス停を降りて、この通りを真っ直ぐ行けばすぐ分かる。

そう説明した。

「分かった。ほいじゃあな」

今度は公園のフェンスをひょいと飛び越え、帰って行くパク。

格好悪かった後に、格好つけてるんだな。

パクウのことも随分分かってきたよ。

あいつは随分とカッコつけだ。

そう思い、ニヤニヤしてしまった。

直樹はセミナーが終わるとすぐに家に帰り、早速日曜のことを土井さんに相談してみる。

「まあ！直樹さん、お友達を家に連れて来るなんて初めてでしょう。

これは私、頑張らないとねえ」

「タケシはお肉が好きだからさ、必ずお肉は用意してね」

ああだこうだと思案しながら、やっぱり普通にするのが一番だろうと思う直樹。

土井さんに言われるまで気づかなかったこと。
友達を家に招待するのが初めてだということ。

…いろんなことにかこつけて、家に招待しちまったよ。
後はパクウがうまくやってくれる。

紀子さんも……

イヤ、紀子さんはまた今度だ。

誕生日会っていうのは名ばかりだからな。

直樹は思う。

拾われた記念日が、功を奏しそうです。

『お父さん』

『お母さん』

その日の夜、直樹は紀子に電話で話した。

今日の出来事を。

『相手がオトナで、ほんまに良かったねえ』

そう言われた。

「そうだよ。だから全部うまくいきそうなんや」

一応イベント事なので、あれ以降パクにも電話していない。

金・土の2日間、日曜を待ち遠しく思い、過ごしている。

仲直り云々、それらを飛び越え、家に友達を呼ぶ。

このビッグイベントはもうすでに直樹のものになっている。

ソワソワと楽しみで、寝つきの悪い2日間はとても心地良かった。

とても天気の良い日曜日。

この日は母もオペラ鑑賞のため、留守。

お誂え向き。

打ってつけの日曜日。

朝から料理の準備をしている土井さんの様子を見て、慶也がゴネ始める。

しょうがないので、仲間に入れてやることにした。

パクにはあの日、昼前には家に来てくれよと伝えてあった。

自分で言ったにも関わらず、昼前っていつだ？何時なんだ？と待ち遠しくて、楽しみで、落ち着かない。

そして10時過ぎ。

チャイムが鳴った。

玄関前で待ち構えていた直樹だが、あまり早くに出ると何となく自分だけがマジなようで気恥ずかしく、2秒ほど置いて返事をする。

「はい！」

そしてまた2秒ほど待って、ドアを開けた。

「オッス、来たで」

そう言ったパクの後ろに隠れるようにして、タケシが立っている。

俺が謝るのはもうちょっと後にしよう。

2人の格好を見て、そう思った。

2人とも気を遣ったのか、いつものように前髪を上げていない。

パクに関しては金髪のまま、7:3に分けている。

服装も、ドコのおじさんに借りてきたんだよというような、ワニの小さなマークの入ったニットシャツ、ジーンズにスニーカー。

まずは笑ってやることにした。

「おい、何やねん、2人とも。その格好！」

すると後ろからタケシが答えた。

「せやろ！こんなんこつ恥ずかしくてしゃーないんやけど、コイツがよう、ちゃんとせなアカン！言うて」

「当たり前じゃ！郷に入れば郷に従え言うてな。俺らの素行で、後

で直樹が怒られるようなことがあつたらアカンやる！

「エエかタケシ、大人しゅうせえよ」

家に入る前に説教されているタケシ。

いつもの姿。

「そう言うパクウだつて金髪のままじゃねえか！」

「ハハハッ！イヤ、金がのうてな。染めに行けんかってん」

「まあ遠慮しないで上がってくれよ」

直樹は2人を招き入れる。

玄関には慶也も待ち構えていた。

直樹の友人というのがどういう人なのか、とても興味があつた様子。

タケシが慶也を見て、

「アレ。お前、弟か？弟がおるつて聞いとつたけど、全然似てへんな。

背もデカないし、兄貴と違ってちよつと野生っぽいニオイがするなあ。なあパクウ？」

「お前、デカイ声出すな！思ったことすぐ口にすな！」

…直樹はこの時、何となく思った。

パクウは勘がいい。

俺の家庭の事情について、気づいてるんじゃないか、と。

別に言うほどのことじゃないんだけど、2人にはいつかちゃんと話そう。

後ろに立っていた慶也が、2人を見て挨拶をする。

「いらつしゃい。僕、慶也って言います。僕も参加させてもらつてにしたから、誕生日会。

ねえ兄さん、食事の用意までまだ随分かかるつて、土井さんが言うてたよ？

何かして遊ぼうや！

玄関で話してるのも何だからさ、2階に上がってもらおうよ」

「ああ、そうだな」

こういう時、明るい慶也はいろんなことを弁えている。

ああしよう、こうしようが自然と出てくる。

……羨ましく思う。

靴を脱いだとき、パクが不意に気づいたように、声を上げた。

「あ、そうや！お父ちゃんおらん言うてたけど、お母ちゃんおるんやろ？まず挨拶せな。

タケシ、お前も来い」

「あ、お母さんもいねんだよ」

「ええ！？そうなん？！ハアアア……こんなん言うたらアレやけど、ホツとした。

お前の両親に会うつて、ほんまに緊張しとつてん」

そしてタケシの肩を叩き、

「コイツは一切、そんなこと考えてへんからなあ、ほんま」

そんなことを言われているタケシ。

キヨロキヨロと辺りを見回して、落ち着かない。

階段を上りながら、キヨロキヨロ……。

「……しかし、デツカイ家やなあコレ。メチャメチャ声が響くやん！」

そんな大したことねえよ。

そう言いそうになったが、止めた。

「ねえ兄さん、昨日僕、人生ゲーム買ってもらったんだよ。兄さんの友達が来るって言うからさ。一緒にできると思っで。お母さんに買ってもらったんだ」

「何！？人生ゲーム！？あの噂のヤツか！？慶也、早く言えよ！」
テンションの在り処が少し変わる直樹。

「なあタケシ、パクウ。人生ゲームやろうぜ！やったことあるだろ、2人は」

するとパクが答えた。

「おー、やったことあるでー。何や、慶也の方は兄貴と違って、そういう遊びもやっとなるんやなあ。

お前の兄貴はほんまにモノ知らんでな。いつもキリキリ舞させられるぞ。

こないだなんかな、街中で遊びよって、腹減ったなーって店入ったろう、『何となくフォルムと色がキレイ』言つて、お前の兄貴、マヨネーズ買いやがったからな！ソレ、どうするつもりやねんいう話やる！？」

「バツ！バラすんじゃねえよパクウー！」

「ハハッ！ まあエエやないか。人生ゲームやろ？俺は強いでー」
そうしてタケシの肩をポンと叩き、

「コイツは人生ゲームやったら必ず子供が4、5人生まれやがる。
貧乏子沢山を地で行つとるヤツや」

「ウツサイ！貧乏言うな！」

こんな遣り取り。

今日はまだまだ、ここから始まるっていうのに、もう笑ってばかりいる。

俺のこの日は、功を奏している。

まずは慶也の部屋に入り、慶也の勧めるまま人生ゲームをやってみた。

直樹も一度やってみたかったものなので、これは何の障害もない。

ただ、直樹の頭に常にあるもの。

タケシにちゃんと謝らないと。

できたら2人の時がいいんだけどな……。

パクは隣で、いつになくはしゃいで盛り上げてくれている。
…やっぱりパクは大人だ。

「よっしゃー俺、エエ仕事に就けた！
コレ、職業にプロ野球選手とかあったらエエのになあ。プロレスラ
ーとかよう。」

慶也、お前なかなかゼ二溜まんやないか。
タケシ、お前何でそんなに子供ができるんや！？車2台分になって
まうぞ？」

はしゃぐパクにつられるように、タケシも間違いなくいつものタケ
シに戻って行く。

タケシは妙に慶也との対話が上手だ。

慶也も『タケシさん、タケシさん』とタケシにえらく懐いているよ
うに見える。

兄弟は妹で慣れてるんだろうな。

俺はこれまでタケシのように、慶也に接することはできてないもん
な。

その時、部屋のインターフォンが鳴った。

『食事ができましたよ。少し早いですけど、どうぞ』

土井さんの声。

「よし、じゃ途中だけ下に降りて食事にしようぜ」

直樹が言くと、真っ先に部屋を出て行く慶也。

「おいタケシ、直樹。そーっと出るよ？今俺が一番リードしてるん
やからな。金が飛んでしまわんように頼むで。」

タケシ、その金チヨロまかすなよ？ちゃんと数えとるからな。その
金は使えへんぞ、実際には！」

「分かっとるわ！」

パクがいてくれるお蔭で本当に、いつも通りの間で過ごせる。

1階に降りて、まず声を上げたのはタケシだ。

「うーわ！何やコレ！こんなメシ、見たことないんやけど！！」
タケシのその声を聞き、パクも呟く。

「こりゃほんまにゴツイな…！」

テーブルの上にはいろんな料理が載っていた。

真ん中には塔になった、大きなチョコレートケーキ。

1人に1匹ずつの伊勢えびのカルパッチョ風。

サラダにさまざまなオードブル、フランクパン。

大皿に盛られたチャーハン、エビチリ。

その他、和・洋・中の色鮮やかな料理の数々。

奥では土井さんがステーキを焼いている。

「2人はソツチに座つてよ」

直樹と慶也が並び、向かい側にタケシとパクが座る。

「さあ、全部食べちゃう勢いで食ってくれよ、2人とも」

タケシは伊勢えびの甲羅をコンコンと叩きながら、

「コレ、殻もイけるんかなー…火イ通つてない感じやなー。

俺、こんなでつかいザリガニ、見たことないんやけど」

「アホッ！ザリガニとちゃうわ！ハサミがないやろが！

コレはお前……なあ、直樹。コレ、伊勢えびやんな？」

それには慶也が答える。

「そつだよ、伊勢えび。今朝届いてん」

「…伊勢えびなんて、言葉でしか聞いたことないなー。コレ、生で
食えるんや…」

タケシがそつ、ぼそつと呟いた。

ここで直樹はようやく2人に気を遣う。

「まあ、見物はいいから、好きなように食べちゃってくれよ。2人とも、チャーハン食べるだろ？金華ハムが入ってて美味しいんだよ。」

取り分けるから、ガツガツ行つてや」

そう言つて、直樹は4人分を小皿に盛つて渡した。

一心不乱に食べ始めるタケシ。

隣で冷静に、タケシの様子を伺いながら食事を進めるパク。

そこに、土井さんが最後の1品のステーキを運んできた。

「皆さん、いらつしやいませ。直樹さんがいつもお世話になっていきます」

そう言つてお辞儀をする土井さんに、慌てて席を立つパク。

「あー、えつと、…こん、今回はお招きいただき、本当にありがとうございます」

そうして、横で食事続けるタケシを叩き、

「おい！お前も挨拶しろ！」

しかし料理の凄さに周りが見えていないタケシは、

「こんにちは」
とだけ挨拶する。

その様子に、パクが頭を抱え込む。

それらが全て、面白い。

「あらあらあら、そんなに畏まらなくていいんですよ？どんどん食べてくださいね」

そう言つて、一人ひとりにステーキを配る土井さん。

夢中なタケシに、気が気じゃないパク。

全ての料理をスプーンで食べているタケシに向かい、

「おいタケシ！」

小声だけれど、丸聞こえ。

「行儀良うせえ言つたやろお前！スプーンでばかり食べるな！」

「あ、そうか」

そう言つて、タケシは土井さんに声を掛けた。

「おばちゃん、ごめんやけど箸貸して」

「……ッ!」

パクはもう、タケシの首を絞めるしかない。

首根っこを引っ掴みながら、

「お前……ッ!」

その時、慶也が声を上げた。

「あ、そつかあ。今日はお父さんもお母さんもないし、いいねソレ。」

土井さん、僕もお箸」

直樹もここで思う。

そう、誰も見てねえんだ。

楽しくって忘れてた。

そして立ち上がる。

「よし待ってるよ。俺が取ってくる。パクウも箸使うか?」

「ええ?」

隣のタケシの頭を平手でパシッ!と叩くパク。

「全く! コイツだけは!!」

「ごめんな、直樹。俺、一応マナーの本とか読んで来たんやけどな。つていうか、あの人お母さんじゃねえの?」

「あの人は土井さん。ウチで俺たちの面倒を見てくれてんだよ」

「ああ、お手伝いさんがおる言うてたな。ほんまにおんねんな。」

「そうか。じゃあもつとクダけてエエんやな」

そう言いながら、パクは首に着けていたナプキンをシュルツと外した。

「じゃあスイマセン。俺も箸、貸してください」

「よし、そうしよう」

慶也はタケシの様子を見て、それを真似するように顔を食器に近づけ、ガツガツと食べ始める。

「兄さん、コレすごいわぁ。すごい楽やよ」

「そうだな」

直樹も同じようにして食事を進める。

4人で、ほぼ完食した。

残ったのはケーキがほんの少しだけ。

「ハア……こりゃほんま、メツチャうまかったなあ。こらぁ一生忘れられんぞ」

そう言うタケシを、パクは無理やり土井さんの元へと連れて行き、2人でお礼を言っている。

その隣では、すっかりタケシに懐いている慶也が、タケシの袖をぐいぐい引つ張りながら、

「ねえ、タケシさん。キャッチボールしようよ！野球やったことある？」

「あるに決まってるやんけ！俺は三角ベースの名人やったんや」

「……ってことは、ないんだね？やったこと。僕が教えてあげるよ。外でさ、キャッチボールしよ！」

「よっしゃ、やるか！」

2人が外へ出て行き、直樹とパクもそれに続く。

キャッチボールを始めたタケシと慶也を見ながら、2人は玄関先に腰を掛けた。

「タケシって、年下扱うの上手だな」

「ええ？そうかな。そんな風に思ったことなかったわ」

タケシは慶也から放られるボールをグローブでキャッチし、そのまま右手に持ちかえることなく、ボールを返す。

それを見てパクが言った。

「おいタケシ！お前、阪神の選手がそうやってボール放ってるか？右手で投げるんやろが、ボールは！」

お前、ホンマのトコ三角ベースすらやったことないやろ！」

「あ、そつか。実はグローブ嵌めたのも初めてや！」

大笑いしている慶也。

それを見ながら、パクと会話する。

「実はな、さつきからタケシに謝るタイミングを見計らってんねん、俺。

できたら2人のときに謝りたいし……」

「ああ、そつかー。そういえばそんな話もあったなあ」

「ええッ！？何だよソレ！パクウ！重要なことだぞ！？何忘れとんねん！こつちはさつきから必死で考えとるのに！」

「へハッ！マジメやなー、お前は。」

エエこと教えたるか。アイツはな、500歩歩くたびに記憶が1個なくなっていくんや。

エエか、必ず500歩で1個や。

ようけ歩かせとったら忘れるんちゃうか」

「嘘つけ！そんな病気あるかよ！」

「へへへッ！そらあアイツも別に忘れてへんやろうけど、ここまで来たらもうエエんちゃうかって言う тоннねん。」

アイツもいつも通りやんけ。

ほいで謝るにしても、お前が言いたみたいになんて2人つきりになる必要はないんちゃうか。

変な雰囲気になってまうやろ。

お前が悪かったって思うてるんやったら、今回はタケシに借り作つとつたらエエんちゃうか？」

少し考える直樹、ハツとする。

「パクウ、こないだ貸し借りアリ、貸し借りナシなんて考えなくていいって言ったじゃないか！」

それに対して、返すパク。

「だからー、全部マジメに考えんな言う тоннねん。場合によりけりや。

こんなにして遊んでるのに、そんなことばかり考えよったらオモ口ないやろ。

あんな、『俺はタケシに借りがある』っていうのは、お前が思うとったらエエことや。別に口に出さんでエエ。

口に出さにはお前がそんなこと考えとるなんて、誰も知らへんよ」

「……じゃあ、俺は今回謝らない方がいいのか？」

「せやから、しゃっちょこばるな言う тоннねん」

そう言うのとパクは立ち上がり、

「よっしゃー！タケシ、今度は俺と交代や！」

そうしてタケシに投球のフォームを教えている。

紀子さんもそうだけど、パクウも難しい。

楽しいから、いいってことか？

……マジメ、か……。

直樹もスクツと立ち上がり、

「俺にもやらせてくれ」

3人に駆け寄った。

4人は庭で三角ベースのようなモノを始めた。

直樹にとっては初めての野球。

バットにうまくボールが当たらない。

物理的に悩んでみる。

直径約10センチの球が、時速約30キロで飛んでくる。

それをこの細い細い棒で打ち返す。

これだけでも、奥が深い！

顔は笑っているが、そんなことを考えている。
庭に響く笑い声。

…… 4人は、全く気がつかなかった。

大声で笑い飛ばす直樹。

…… 直樹はそれ以上に、気づいていなかった。

「……………」

パクが突然ボールを投げるのを止め、お辞儀をする。

何だ？

笑顔のまま、振り返る直樹。

…… そこにあつたのは、父の姿。
一瞬で顔が強張った。

流石の慶也も顔が引き攣っている。
直樹の知らないところで、何かを言われているのだろう。

まだ状況を掴めていないタケシの、
「よっしゃー！ 続き来ーい！」

その声が背中で響く。

そして続いてパクの声。

「タケシ、こっちへ来い！」

タケシはバットを置き、パクに近づいた。

2人は並んで頭を下げながら、

「こんにちは。今日はお招きいただき、ありがとうございます」

そう言つて直樹の父に挨拶をした。
……大人の対応。

普段俺は、あれくらいの挨拶は普通にする。
だけど、それ以上の大人の対応。
パクウだつて、あの警察署でお父さんに舌打ちをされたことくらい
覚えているはずなんだ。

2人の方に首をやり、凝視しながら父が口を開いた。

「これは一体、何の騒ぎだ」

説明しようとした直樹の間に、慶也が入る。

「今日は兄さんの誕生日パーティーだったんだよ、お父さん。
この2人はね、兄さんのお友達で……」

「慶也、黙っていなさい。」

お前に言っているんだ、お前に」

父は2人から目を離すことなく、直樹に強く問う。

「今、慶也が言った通りです。僕が2人を招待しました」

唾を飲み込む父の喉仏が見えた。
この行動の後、父は何かを言う。

「誕生日パーティー……」

誰が用意した」

「土井さんをお願いして用意……」

父はいつも、何か言いたいときは最後まで話を聞いてくれない。
割って入る。

「そんなことは聞いていない。その食料は誰が用意したんだ。
何で用意できたんだと聞いとる」

…父は以前からこうだったのか。
今、この状況。

俺は攻撃をされているとしか思えない。
一体この人は俺に何を言わせたいんだ。

「……………」

言葉を失い、直樹も黙り込んでしまった。

それを確認し、2人に歩み寄る父。

「まず右の君。君のお父さんとお母さんは、一体何の仕事をしているんだい？」

パクが答えた。

「あ、はい。母は家で焼肉屋をやっています。父はガラス関係の会社を……」

「君は？」

「ウチは……母ちゃんがスーパーでパート。父ちゃんは蒸発しておらん」

よくは見えなかったし、よくは聞こえなかった。
しかし父の背中が揺れたように見えた。

「うちはね、そんな君らとは関係のないところで生きとるんだ。
うちの者の時間を割かんでいただこうか」

重たくて重たくて、どうしようもない空気だった。

……最悪だ。

ここまであった純粋なものを、全て有機的なもので固められた気分。

後ろから飛び掛ってやろうかと思った。
でも、俺にはできない。
勇気がない。

「……………」

「……………」

俯いてしまった2人。

やがてパクが顔を上げ、

「……………あ、そうですね。じゃあ僕ら、そろそろ帰りますんで。
お邪魔しました」

そしてバットとグローブを拾おうとする。

それを見た父、

「触らなくて結構！」

そこまで出す必要のない大きさの声で、確実に恫喝した。
パクはビクツとして、伸ばした手を引っ込める。

そして、もう一度父に、

「……………お邪魔しました」

そう言って庭を出て行こうと背を向けた。

玄関を開けながら父が言う。

「慶也、早く家に入りなさい。勉強はどうしたんだ。
お前はまだ、私の望むレベルに達していないんだぞ。
早く入りなさい！」

……………父は俺を素通りする。

さっきは名前すら呼ばれなかった。
そう気づくが、そんなものは5%。

生まれて初めて、殺意を持った。

心臓を握り潰すような、この思い。

誰のためでもない。

タケシとパクの後姿に、そう思った。

慶也はもう半べそ状態。

しかし彼もまた、泣いて構わないという教育は受けてきていない。
だから泣きはしないのだ。

黙って自分のグローブとバットを仕舞い始める。

直樹は家に背を向け、2人に駆け寄った。

「なあ！ちよつと！ねえ！ねえって！待ってくれよ！！」

足を止め、振り返る2人。

表情から、怒っている様子には見えなかった。

今一番怒っているのは、俺なのかもしれない。

俺が俺に対する怒り。

許せない。

この許せない俺、2人を呼び止めて掛ける言葉があるのか。

駆け寄りながら口を開こうとする直樹に、パクが笑顔で言った。

「直樹、何か悪かったな。この後お前、怒られるんちゃうか？」

……怒られすらしねえよ、俺なんか。

「やっぱり俺らみたいなんには、限界があるんかもしれないな。

大人から見たら、俺らみたいなんゴミやからな。

限界かもしれないな。

特に、お前んトコのおっちゃんからしたら、それ以下かもしれないな。
もう、お前に迷惑掛けたらアカンような気がするわ」

「……………」

身に詰まされる思い。

神経を耳に集中して、言葉を聞く。

ひよっとしたら、謝るタイミングは今なのか。それとも最悪のタイミングなのか。

そう考えていると、タケシと目が合った。

「タケシ、あのな、」

直樹のそれに被せるように、タケシが口を開く。

「秋月よう、俺な、分かつとんねん。こないだのヤツもよ、お前が心配してくれて、俺に言うてくれたんや。分かつとんねん。

だけどなあ、お前も一回ウチ来とるから知つとるやん。

ウチ、めっちゃ貧乏やねん。

高校行くとか行かんとかな、それ以前に俺が働いて稼がなヤバイんや。

分かつてくれ。

ほんで、ありがとう。

お前のお蔭で妹がな……あ、コレはまあエエか」
「……………」

何か言わなきゃいけないが、言葉が出ない。

あくどい俺

卑怯な俺

弱い俺

2人はそのまま何も言わず歩き出し、行ってしまった。

直樹から掛ける言葉は何一つなく、直樹の正義は自分を悪だと信じ、そしてそれを止めようとはしなかった。

これが、3人の決別の時。

払暁 1

—— この、間の悪さ。

間違いない。

俺の持つて生まれたものなんだろう。

慶也は必死に俺に謝った。

水曜まで父がいらないという情報は、慶也から得たもの。

水曜までの出張は、来週のこと。

当然ではあるが、俺が慶也を責めるなんてことはあり得ない。

ただ、一つ気になったこと。

慶也は一体、父のことをどう思っているのだろう。

どう感じているのだろう。

俺が、お前たちの空間から外されたこと。

そろそろ気づいたか？

生まれたことに嫌悪感など感じない。

それどころか、俺はその真逆に念頭を置き、生きるために必死なんだ。

俺を生んでくれたお母さんに、何度お礼を言っても感謝しきれない。

自分の意識の中、2万回までは覚えてたんだけどな。

お2人の血は俺の中で波を打ち、熱を持ち、今も生きています。

まだ見ぬお2人がどんな人たちなのか、俺は知らない。

だから、果たして俺は天才なのか、秀才なのか、凡人なのか、それ以下なのか、それ以下と評するのもおこがましいのか、

自分の中でまだ決めかねていますよ。

そのどれかの才能を持ち合わせているであろうこの俺は、
努力で10、努力で20、努力で30……

100が完成だと、そこに旗を立て、進もうと思います。
いつか、その日が来たときのために、混濁したマール模様
の俺であつたとしても、お会いして恥ずかしくない態勢でいるために。

お2人なら理解してくれますよね？

俺と一緒に、そこまで育ててくれた今の両親に、お礼を言
つてくれますよね？――

次の日から直樹は、何もなかったかのような顔を作り、日
々を過ごした。

紀子さんに心配をかけてはいけない。

彼女が言った、イチかバチか。

俺はそうに動かなかったんだ。

井の中の蛙であろうとなかろうと、彼女の言う通りにしな
くって、このザマ。

でも彼女は、俺がイチかバチかに賭けたと思っている。

その結果の、報告。

「ああ、大丈夫、大丈夫！紀子さんのお蔭やわ。

やっぱりね、分かってくれた。『許したるよ！』って

それを聞いた彼女は、

「ほんまに良かったね！」

と笑ってくれた。

—— 手厳しい。

嘘を吐いた俺が悪いんだけど。

嘘は嫌いだと、今回知りました。

一度嘘を吐いてしまうと、少なくともあと2、3回は嘘を吐かなければいけない状況になる。

今、大事さで言うと、俺より随分上の位置に存在する紀子さんに対して、この状況というのは……
でも、本当のところは言えません。

だってあれ以降……

『だって』？

やはり、と言うべきか、パクから電話はありません。

『パクから電話がありません』と表する俺に、厚かましいと思う。

卑劣な俺

汚い俺

卑怯な俺

嘘吐きな俺

こうやっている中でも、時間は流れていくんだと実感しました。
すっかり寒くなり、受験まであと少し。

セミナーの実力テストをあんな形で終えてしまった俺は、紀子さんとは別のクラスになっている。
これは逆に良かったのかもしれない。

とにかく勉強に集中できている。

集中したあとに考え事をし、放心する。

あの放心を除けば、ほぼ完璧なんじゃないか？

別れ際に「バイバイ」と言うのと、何も言わないのと、「さようなら」って言うのとじゃ、随分意味が違ってくるんだな。

幼稚園の頃教わった「みなさんさようなら」

あれって結構重くねえか？

何も言わないのはもっと重い。

「バイバイ」は逆に挨拶なんだ。

「バイバイ」じゃなく「またな」でも良い。

溜息は連発しない。

だけど1日に50回はしてるな。

紀子さんの前でだけはやらないように……

昨夜は彼女と『ハリガネムシの存在意義』について話し合った。

今日もあれの続きを話そうか。

それとも先日議題になった『この世に人間がいるのに、何故サルがいるのか』

こっちを話そうか。

俺は今、四六時中彼女の声を聞いていたいんです。

誰のためでもない。

俺のエゴであり、俺のために――

セミナーで同じクラスの人たちと、少し話をするようになっていた。ほとんどの人間が、自分と同じ学校の生徒であることを知る。

以前から耳に慣れていたあの会話。

「。。。が1番、。。。が2番、。。。が10番……」

この会話は皆、人のことばかりを気にしているものだ気づく。
別に構わないのだが、全く楽しくない。

中には学校で同じクラスの人もいる。

これまで、学校で紀子以外と話したことはなかったが、最近ではそこそこ話をする。

つまらないわけでもないのだが、誰かに話をするほど楽しいわけでもない。

……誰かにつて、誰だ？

俺はもう、ごめんなさい、許してくださいとさえ、言いに行けない……。

紀子に嘘を吐いている直樹は、その後も月・水・金・日を紀子と会う日と決めている。

冬休みまであと1週間となった頃、授業の合間の休憩時間に紀子が言った。

「なあ、早うあの友達って会わせてよ」

直樹はイラッとしてしまった。

また嘘を吐かなければならない。

口数を少なめにするために、短く応える。

「ああ、今度な」

そしてその話題に触れないよう、捲くし立てた。

「それよりもな、冬休み2人でどっか行こうや」

「え？どっかってどこよ？」

「どこでもエエよ」

「どこでもエエって言うても、冬休みってアンタ、缶詰にならなア

カンのちゃん?」

この頃にはもう、何となく目指すところが違っているような気がしていた。

一緒の高校に行こうって、決めていたのに。

「大丈夫やって、1日や2日。

そうや、またあの動物園に行こや。今度は泊まりがエエやん。近くにいっぱいホテルがあったやん」

「……ちよつとアンタ、何言ってるの?無理に決まってるやん。

私ら中学生やで。一泊してどっかへ行くなんて、聞いたことないわ。お父さんとお母さんに何て言ったらエエんよ」

「えー?そんなん言うたら俺だつて15歳やし。お父さんとお母さんもおるよ?」

「……………」

少し黙る紀子。

直樹の天然はごく稀に、紀子を黙らせる。

「……男と女は違うんやって。そんなん無理、あり得へん」

直樹は伸びをしながら、頭の後ろで腕を組む。

「ふーん……男と女じゃ違うんかー」。

何か汚エなー。逃げられた」

「別に逃げてへんわ!」

こんな会話。

以前からしていたような気がする。

だけど、何かが違うのだ。

コレってよう……あの2人がおらへんからや、絶対。

もし仮にあの2人がおつて、紀子さんが目の前から消えたとしても

……

ああ、きつとこの虚無感は襲うんやろなあ。

… 決定的に何かが足らへんのや。

…… 俺が悪いんやけど。

この日、家に帰った直樹は気づいた。

最近、父が家に帰って来ている気配がない。

仕事が忙しいのか、それともまたあの女か……。

そんなことばかりを考えてしまう。

毎日電話の前に立っていたが、パクの家には電話できない。

その内、そのために電話の前に立つこともしなくなっていた。

日課のシャドウボクシング。

3分10ラウンド。

最近、これを上半身裸でやっても恥ずかしくない程度の体になった。

そろそろこのシャドウボクシングを慶也に見せてやろうかな。

なんてことも考えるが、いつも見せずじまい。

意味がないからな。

もう、いろんな種の威厳を振りかざす必要は、ない。

何となく1階に降りてみると、リビングには母がいた。

いつものように、いつもの椅子に座り、ヘッドフォンで音楽を聴いている。

…… シュバイツァーのオルガン。
『トツカータとフーガ 二短調』
漏れる音からそれを確認する。

何年も、母とちゃんと話をしていないような気がした。
そう考えてみると、これまで母とちゃんと話をしたことなんかあつたか、とも思える。

直樹は母に近づき、話しかけてみた。

「お母さん」

目を閉じ、ヘッドフォンで音楽を聴いている母。
五感の2つを遮っている母は、応答しないと思っていた。

が、

母はスツとヘッドフォンを外し、

「何ですか、直樹さん」

と応えを返す。

ここで慌ててしまうのもどうかと思うが、少し泡食った。

「今日もお父さんは、また帰らないんですか？」

すると母は体勢を変えないまま、

「そうねえ、最近遅いわね、ずっと」

…… 今、分かった。

したことがあつたか、ではなく、俺はお母さんとロクに口なんか利いたことがない。

「…… 仕事で遅いんですかね？」
そう言ってみた。

「それはそうでしょう。お父さんは忙しいからね」
「……………」

以前、暢気だと表した母。

この時、ただ単に落ち着き払っているようにも見えた。

父には聞けないこと。

……今ここで聞いてみようか。

何故、たくさんいる中で、俺だったんですか？

顔を見ながらだと聞きにくいと思い、直樹は母の後ろに立ってみる。
その背中を見て、驚いた。

……俺がデカくなりすぎたのか。

お母さんはこんなに小さかったでしょうか。

もちろん、負ぶってもらったことなど一度もない筈。
知っていたようで知らなかった、母の小ささ。

「……お母さん、肩なんか凝りませんか？」

何と返事が返ってくるだろう。

そう思いながら聞いてみる。

「あら直樹さん、どうしたの？私の肩凝りなんか心配してくれるの？
最近凝っちゃって凝っちゃって……マッサージしてくださいさる？」
やったことはないけれど、大体は分かる。

「もちろん、いいですよ」

そう言つて、直樹は母の肩を揉み始めた。

何故俺を選んだのか。

あの女の存在。

……この母に話すなんてことは、あり得ないと思った。

「どうですか？気持ちいいですか？」

「直樹さん、上手ねえ。前に慶也さんにもやってもらったけれど、直樹さんの方が上手ですよ」

直樹は母に耳打ちをする。

「実は僕、最近鍛えてるんですよ」

「あら、そう。道理で。良い力加減」

このまま少し、母と話をしようと思う。

「お母さんは本を読んだり音楽を聴いたり、同じ体勢で居すぎるんですよ。だから肩が凝るんです」

「あら、そうなの？」

「だってお母さん、他に肩が凝る要素なんかないじゃないですか」

「うふふふ。そうよね、家事は全部、土井さんがやってくれてるんだもんね。」

直樹さんの言う通りよ。ふふふふ……」

「そうですよ、お母さん。行儀が悪いと思うんなら、部屋でゴロゴロしながら聴いた方がいいですよ」

おそらく、初めて笑いながら話をした。

俺が覚えていないだけかもしれない。

覚えていないのなら、初めてだ。

お互い元気でいましょうね。

直樹は何となく、そう思った。

—— 2人と会わなくなつて、話さなくなつて、どれくらい経

った？

数えてねえから分からへん。

紀子さんが居るから平気だろう。

そう思っていたんだけど、俺はそれを許さない。

結局思い出す。

電話の前には立たなくなっただけ、まだまだまだ、かかってくるのを待っていたりする。

母と喋ったこと。

あれはタイミング。

何かを感じたけれど、それが不快なものなのか、常日頃から目にしていることなのか、理解しきれずにいる。

でも、良い時間だった。――

次の朝、登校していると後ろから聞こえてくる、駆け足の音。

直樹ももう慣れたもの。

それが紀子のものだと、すぐ分かる。

笑顔で「おはよう！」と言う紀子に、こっちも笑顔で「おはよう」と返す。

よし、いつもと変わらない。

「あんなあ直樹くん。昨日の話やねんけどな、私あの動物園の近所に住んでる親戚のお姉ちゃんがおるんよ。」

ほんでな、26日泊めてくれるって言うとなねん」

一瞬、何の話だと思ったが、思い出した。

「お父さんとお母さんにな、嘘を吐くことになってしまっけど、どうする？行く？」

それを聞いて、冷静ではいられなかった。

四六時中聞いていたと思うている、この声。

学校帰りに別れるとき、電話を切るときなどに味わっているもの。その日はそれを、放棄できるんだ。

「え、じゃあ何か、紀子さん。26日はずっと一緒に居れて、27日に帰って来るってこと？」

「そう。そういうこと。ほんまは気が引けるんやけどねえ。お父さんとお母さんに嘘吐くの」

……嘘は気が引ける。

「そこまで決まっとるんやったら、何で26日なんだよ？休みに入ってすぐ行ったらエエやんか」

「それはアカン。24日はクリスマス・イブやから。親と過ごすのがウチのルールです」

……クリスマス。

「何言うとんねん、紀子さん。クリスマスって、君ん家ってアレ？キリスト教か？クリスマスに一体何すんだ？」

「え、ケーキとか食べるやん」

「ケーキ？」

ここで紀子は少し黙った。

きつとこの問いは、紀子さんに気を遣わせるものなんだろう。

そう思い、話を切り上げることにする。

「よし、分かった。OK、OK！じゃあ26日にしよう。タダで泊めてもらえるんかな？」

「当然よ」

別に2人つきりじゃなくてもいい。

とてもありがたい話だった。

「なあ紀子さん。俺たち、遠く離れた土地でお互い生まれてんのに、

こうやって出会ってな、こうやって仲良うしてな。

これってスゴイと思わへん？奇跡やわ。

俺は紀子さんみたいに夢とかないんやけど。

何回も何回も言うてるけど、俺、紀子さん大事にせなアカンなあ」

「別に夢なんなくなつて生きていきます。

せやけどなあ……全く、東京人はキザで困る」

「キザかあ。まあいいじゃん」

2人はそんな会話をしながら教室に向かう。

途中、直樹は先ほどの紀子の少し重い咳が気になって尋ねた。

「なあ紀子さん、風邪か？」

「え、ああ、ちよつとね。のどが痛いんやわ」

以前なら「おいおい、冗談じゃねえ。移すんじゃねえぞ」と考えた。

「あつたかくして早く寝なきゃダメだよ。だから今日は道草止めよ？」

こんなことをスルツと言える、今の俺。

そして、これに他意はない。

「うん、分かつてるって。受験前に最後にもう1回、遊びに行かなアカンからね。

……アレ？前もこんなこと言つてたね」

そうそう。

風邪なんかに邪魔されてたまるか。

待ち遠しい日が、もうすぐ来る。

早く寝なよと言つた手前、この夜直樹は紀子の家に電話をするのを遠慮しておいた。

昨夜は『約150キロで飛んでくる約10センチのボールをバットで打ち返すのに最も効率の良いスイングの軌道について』の話の途中だった。

今晚は一人で図にして、きっとこれが正解だろうという案を出してみよう。

直樹は寝る前に、そんなことをしている。

次の日、学校に行つてみると、紀子の姿がない。

朝のホームルームで教師が言うには、風邪で休むとのこと。

嘘やろ……。

今、風邪なんか引いて、26日大丈夫なんやろな？

その後のセミナーにも、当然紀子の姿はない。

直樹は家に帰ると、真っ先に紀子の家に電話してみた。
しかし何度コールしても、誰も出ない。

こりゃ、重症みたいだな……。

26日、平気かな。

このソワソワは、もう抑えることができねえぞ。

その次の日。

この日も学校に紀子の姿はない。

まあ、風邪を引いたんなら、1日なんかじゃ治らんよなあ。

大丈夫なんやろな。

肺炎とか……えっと、何やったかな、アレとか、……病気……。

ほんまに風邪なんやろな？

……違う病気……

そこまで考えて、止めることにした。

その日の夜も、直樹は紀子の家に電話をしてみたが、誰も出なかつ

た。

22日。

2人で計画した旅行まで、あと4日。

でも直樹の中で、それはもうどうでも良かった。

もし明日、彼女が学校に来ていなかったら、帰りに家へ寄ってみよう。

紀子さんはお父さんとお母さんに、俺のこととか話してるのかな。行っても怒られへんやろな…？

でもそんなことより何より、心配になってきた。

直樹は眠る体勢に入っただまま、拭いきれない想像を繰り返す。

一度始めると、止め方が分からない。

もし彼女が休んでいる原因が風邪じゃなく、変な病気だったら……

変な病気だったら、俺はどうすればいい？

そんなことを考えるから、辛くなる。

……昔っからそうなんや。

俺には良い噂も悪い噂も、絶対に耳に入って来ない。

周りに人がいなかった俺が悪いんだろうけど。

絶対入って来おへんねんって。

今日紀子が登校していなかったら、お見舞いに行こうと決めていた日。

学校へ行くと、そこには紀子の姿があった。

とにかく、何よりも嬉しかった。

旅行の話はついで。
体調が悪かったらナシにしようや。いつだって行けるんだから。
そう言うつもりだった。

直樹は紀子に駆け寄り、彼女の顔を見た。
自分は笑顔で駆け寄ったつもりだったが、紀子の顔につられてサー
ツと血の気が引く思いがした。
彼女の、沈んだ顔。

「紀子さん、まだ調子良くないん？」

「……………」

「顔色良くないよ。休んだら良かったのに」
しかし直樹の言葉に紀子は返事もせず、姿勢を変えて前を向いてし
まった。

……ハア！？

何だよ、ソレ！！

想定外の反応に、直樹は困惑と同時に怒りを覚える。

先ほどのようなとした旅行の話、聞かなくていいのか？
そう思うのに、朝の彼女のあの態度が脳に焼き付いて、直樹は休憩
時間も紀子に近づくことができなかった。

他のクラスメイトとは話している紀子を見つめながら、
こっちは心配してやったのに、とすら思っている。

放課後まで待とう。

どっちにしても、話はしなくっちゃいけねえんだから。
紀子さんだってそうだろう？

しかしその日の授業が終わり、帰り支度をしている直樹の隣を紀子は無視するようにスツと通り過ぎて行く。

……嘘だろ。

まだ怒ってるんかいな。

直樹は慌てて教科書をカバンに詰め込み、紀子の後を追いかける。先々と歩いて行く紀子に向かって、

「ねえ！ちよつと待ってよ！待ってって！！何怒ってんだよ！？」

そこで紀子は立ち止まり、振り返った。

紀子はじーっと直樹を見つめながら、1つ深呼吸をし、

「…別に、怒ってないよ」

そう言つて、いつもの笑顔を見せてくれる。

この時点で、朝のあの態度は直樹の中で帳消しになった。

払暁 2

直樹はいつもの調子で、

「じゃあセミナーの時間まで、あの店行って時間潰す？一旦帰る？」
そして紀子と並んで歩こうとした。

いつものように。

しかし紀子はその場に立ち止まったまま。

直樹は不思議に思い、振り返る。
すると、

「ごめーん！今日はセミナーには行けへんのよ。

ほいでね……あのー、26日、アレ行かれへんようになった。ナシ
ってことで。ごめんね」

そう言つて、紀子はツカツカと歩き出す。

「……………」

……この場の空気、事情。

そういったものが一切把握できない。

ついついポカンとしてしまった。

「な……やっぱり怒っとなっちゃうん？！どうした？俺、何かした？」

あの時味わった不安がまた、直樹を襲う。

が、今回は事情が違うのだ。

泣きつきたい相手が、直樹に泣きつきたい思いをさせている。

立ち止まっている直樹から少し離れると、紀子は振り返った。

「ほんまにごめんね。今日は一人で帰って」

「……………」

—— 朝覚えた、ほんの少しの怒り。
あんなものは帳消しなんです。

俺は事情の読めない名人。

自分の言動に責任を持てない名人。
記憶力散漫の名人。

今日、家でいろいろ振り返ってみて、心当たりのある箇所を全て謝ろう。

この動悸。

もう失敗は許されない。

きつと、俺に何かが……
きつと、俺が何かをやってしまったんだ。——

セミナーでの授業を終え、家へと帰る。

紀子が言っていた通り、やはり教室に彼女の姿はなかった。

電話の前に立ち、一度は我慢する。

まだ謝るべきことが思いつかない。

お風呂に入りながら、もう一度考える。

ここ数日あった出来事。

そのもつと前。

その、もつと前。

……パクウとタケシのこと、嘔吐してるのがバレたのかな。

それ以外に思いつかない。

お風呂を出てもう一度、電話の前に立ってみる。

イチかバチかに賭けてみよう。

俺はここで、彼女の言葉に甘えるぞ。

帰ってすぐにはできなかった電話を、イチかバチかで掛けてみた。
ドキドキしながら、指先が完全に記憶している紀子の家の電話番号
を押す。

コールされるたびに、心音が早くなるような気がした。

そこまで昂ぶってしまったが、昨日・一昨日と同じように、電話に
は誰も出ない。

ここで少しホッとするのが、俺の悪い癖。

先延ばしになっても、何も良いことなんかない。

明日、とっ捕まえてでもちゃんと喋るぞ。

俺には君に、あの2人に教わって、刷り込まれたものがあるんだ。
ここでホッとするのは、全然違うんだ。

そして、昨夜の母の姿を思い出す。

今日俺が思ったアレは、

タイミング的に……っていうのは嘘だろう。

誰に対しての嘘？

俺は、お母さんに泣きついたんだよ、きつと。

だって今もまた、昨夜のようにお母さんと話そうかな、なんて思っ
ている。

何て都合のいい話なんだろう。

今日は絶対にしない。

そんなことをしていたらほら、

……自分の歩先を見失うぞ。

だから今夜は我慢して、明日紀子さんとちゃんと話そう。

そして何が何でも、許してもらおう。

俺の甘え体質は、もう取り返しのつかないところまで来ているんだから。

次の朝。

いつもとは違う朝。

足取りは重いが、勇気を持って前に出る。

そう念じながら登校した。

……強く逞しい右腕よりも、変化に対応する術を知る者。

俺は紀子さんと話し、またステップアップしてやる。

……緊張してきた。

だけど俺は怯えない。

これほどの決心が要った今回の出来事。

しかし学校に着いても、そこに紀子の姿はなかった。

……また、今日も休みなのか。

俺はもう、絶対にホツとしない。

このまま学校を抜け出し、彼女の家に向かおうか。

そんな特別なことを考えているこんな日に限って、クラスメイトた

ちは直樹に話しかけてくる。

協調性というものを持ち始めたここ最近の直樹は、自分の意思とは裏腹にそれらを邪険にすることができない。

この日は終業式。

昼まで学校に居れば……

帰りに寄ればいい。

席に着いて考え事をし、俯いている直樹。

そこに担任が入ってきた。

顔を上げて教壇を見ると、教師の他に立っている人がもう一人。

……紀子だ。

「えつとなー、急遽決まったことで、今日報告することになってしまったんやけど、久保がな、転校することになった。3学期からは別の学校や。」

久保、何か皆に言うことあるか？」

……驚きすぎて、頭の中が真っ白になった。

涎が出てきた。

拭う気にもなれない。

教壇に立って挨拶をしている紀子の姿。

凝視しながらも、何を言っているのか全く聞こえて来ない。

……転校なら俺もした。

……ん？転校？

新幹線で、何時間だっけ？

向こうの学校の人たちとは、夏休みに一度会った。

会ったというより、俺が会いに行った形だ。

転校……？

……聞いてねえ。

理解を固めた直樹がまず取った行動は、勢い良く席を立つこと。
ガッツ！という音に反応し、紀子もこちらを見る。

一瞬目が合った。

しかし紀子はすぐに視線を元に戻し、何かを喋り続け、最後に頭を下げた。

そして自分の席に着く。

それに合わせ、直樹も座り込む。

「……………」

強く逞しい右腕？

……漠然としすぎやろ。

変化に対応する術？

……そんなのあるのか？

それを知る者？

……そんな奴おるんか？

重すぎる現実だった。

直樹は考え事すらできないでいた。

辛うじて呼吸をし、皆と列をなし、同じ行動を取っている。
そのレベル。

意識の向こうに置いてあったもの。

『人に迷惑を掛けてはいけません』

それをこっち側に持ってきた、直樹。

この日はずっと、紀子を避けるように行動していた。

下校時間。

教室を出たところで、直樹は女子たちが集まっているのを目にした。輪の中心にいるのは紀子。

また一瞬彼女と目が合ったが、今度は直樹から目を逸らす。

彼女たちの横を通り過ぎ、校舎を出てグラウンドを歩いて行く。とぼとぼと。

重心をふくらはぎの間に溜め込んだまま。

もうすぐ校門に差し掛かろうとしたところで、後方から駆け足の音。しかし直樹はそれに気づかない。

と、後ろからいきなり、勢いよく腕を組まれた。

驚くこともなくゆっくりと首を横に向け、視線をずらすとそれは紀子。

「……直樹くん、ごめんな」

……言葉が出ない。

「今日な、ウチの近くまで送ってくれるかな。歩いて帰ろうか」

……返事が思いつかない。

何も答えない直樹を見て、紀子は組んだ腕を離す。

そして直樹に並んで歩き始めた。

「……」

落ちる沈黙。

しばらくすると、紀子が口を開いた。

「……あー、やっぱり私、やることキチャナイなー。うん、キチャナイー」

……言ってる意味が分かんねえよ。

頭の中で処理できないことばかりだが、直樹もようやく口を開く。

「……ね、転校つて、どこに行くのさ」

「それは言われへん」

頭に来た。

「何で言えねんだよ！？何だソレ！自分勝手すぎねえか！？」

「女なんてのはそんなモンやで？覚えとった方がエエよ」

「…ッ」

何じゃソレ！！

朝、誓った思いは何処へ？

とも思う。

話をしないと。

とも思う。

少し前を歩く紀子を見ながら、一択しかないこの状況の中、2人の姿がばやけて見えて……

自分の力ではどうしようもないと、諦めていた。

沈黙の時間が、長く長く……

あつという間に、紀子の家の近くまで来てしまった。

裏口から家の中に入っていく紀子。

何の言葉も掛けられず、見送る直樹。

最後だけ

一つだけ確認を

そう思つて声を上げる。

「ねえ、引つ越すつて、いつ引つ越すのさ？」

扉を開けかけていた紀子は直樹を振り返り、

「明日」

とだけ答え、家の中に入ってしまった。

以前慶也のグローブを買いに立ち寄った、この店。
紀子の家。

店の正面を見ると、先日とは明らかに様子が違っている。
看板は剥がされ、店中は真っ暗。

店の前のショーケースに飾られていたスポーツ用品は全て、なくなっている。

そして気づいた。

……店が、潰れたのか。

直樹は自分の家の方に足を向け、歩き出した。
バス停で立ち止まり、そのままバスに乗る。

……店が潰れてしまったんやな。

彼女、悪くないやん。

俺、何であんな態度やったんや……。

中古品。

ワンユーザー、ツーユーザーを経て売りに出されている商品なんて、俺の中ではあり得ない。

購入する価値もない。

だけど俺は、古本屋にはよく行くんだ。

あの何とも言えない匂いの中、いろんな本を読んでみる。

破れている箇所。

何か食べ物のシミが付いたようなページ。

中でも目を引くのは、濡れたようにヨレヨレになったところ。

俺はそのページを見逃さない。
前後を読まず、文脈がどうであれ、そのページだけは読んでみるんだ。

これがもし涙の痕であるならば、前の持ち主は何を考えたのだろう。涎の跡であれば、何が退屈で寝てしまったのだろう。――

バスを降りた直樹は、すぐそこにある自宅へと向かって歩く。

―― そんなことを考えながら古本屋で本を漁ると、面白いんだ。

俺の知らない誰かの、俺の知らない深いところ。

でも、これは何の勉強にもならない。

あくまで俺の想像であって、答えなんか聞きだせないんだから。片思いでしかない、コミュニケーションなんです。

俺はいつも、こうだ。

求めるばかりで、何も与えていない。

紀子さんに対し、彼女がどういう意図を持って俺に冷たくしたのか。考えようともしていなかった……。――

家に入ると、すぐ横の廊下を珍しく母が掃除していた。

「あら直樹さん、お帰りなさい。今日は随分早いねえ」

「何言ってるんですか。今日は終業式です」

「あ、そうでしたねえ。」

私、ドライフラワー落としちゃって、廊下を汚しちゃったのよ。直樹さん、ちりとり持ってくださいさる？」

「あ、いいですよ」

そう言っで、散ってしまったドライフラワーの花卉を箒で集めている母の手伝いをする。

そしてそのまま2階に上がり、自室に閉じ籠った。

ベッドに横たわり、白い天井を見つめながら。

……俺がこの地にいるのも、あと3年くらいなんや。

どっちにしても大学は東京。

大学に行く頃にはもう随分大人やし、例えば彼女と同じ高校に入っでて俺が転校するってなつたとしても、大学でまた一緒になれる。そんな時はもう大人やし、何とかできる。

……そう、想定してたんや。

せやけど、今回は違いすぎるやろ。

俺じゃなく、この地を出て行くのは彼女の方。

俺の中で、あの人しかおらんと思っでいる彼女がいなくなる……。

胃がキリキリし始めた。

こんな感覚はもちろん今まで一度もない。

直樹は布団を被り、包まる。

早く時間が経つてしまえ！

そう思っ。

少し眠つていたような気もするが、実際はどうだったのか。

外を見ると、もうすっかり暗くなっていた。

こんなときでも腹は減る。

直樹が1階に降りると、もうすでに食事の用意はされていた。

そして、このタイミング。

テーブルを見ると、父の姿。

こちらをチラと見た父。

それに気づくということは、俺も父を凝視しているということだ……。

直樹は自分の席に着き、食事を始めた。

慶也もいる。

母もいる。

父もいる。

俺もいる。

久しぶりの4人の食事。

以前は普通の光景だったが、最近はこういう形を取っていなかった。いつもなら自分から時間をずらす。

しかし今日の直樹は、その馬力すら奪われていた。

とても静かな時間。

慶也の方からする、食器とナイフが当たる音のみが耳に入ってくる。

「慶也」

父の声。

「野球は小学校までだぞ。分かっているな？」

その約束をしたから大目に見てやっていたんだぞ。分かっているな？」

父が喋りだしたところで、直樹は食事を止め、席を立つ。そしてそのまま外に出た。

自転車に跨り、走り出す。

立ち漕ぎで、全速力で自転車を走らせる。

上着を着て来なかったので寒くて仕方がなかったが、そんなことはどうでも良かった。

さつき時計を見た。

19時20分。

直樹は自転車を走らせる。

母への甘え。

紀子さんへの甘え。

タケシへの甘え。

パクウへの甘え。

みんな、そういったものでバランスを取りつつ生きてるんだろっな。やって良いことなのかもしれないな。

直樹は自転車の全速力を止めない。

先日した、母との会話。

父がその場にいるだけで散漫させられる。

母は俺の味方なのかもしれない。

もちろん慶也も。

それが、嘘か幻のように思えてくる。

……父の重圧にかかると。

そんなのはお前の思い過ごしだと、決定付けられた気がする。

この際だから言わせてもらうと、うちにはやはり俺の椅子はない。でも外に出ると、3人がいた。

タケシ

パクウ

2人は今、この町のどこかにいる。
だけでもう、会いに行けない。

俺の存在自体が、2人を大きく傷つけた。

全速力の自転車が向かう場所は、もう決まっていた。

……紀子さん

君はまだ、この町にいる。

直樹は全速力で、紀子の家に向かっていく。

何度も見た、この商店街。

昼間通ったときは気づかなかったが、まだこんな時間なのにシャッターが閉まっている店が多すぎる。

営業している気配のない店がたくさんある。

……全然気づかなかった。

紀子さんの店もまた、この通りの景気の悪さに吞まれてしまったのか。

我々15歳の力のなさ。

親に従うしかない。

……思い知るよ。

彼女だって転校なんかしたくない筈だ。

俺と一緒に高校へ行く。

ずっとそう言っていたんだから。

直樹は紀子の家の真ん前に立った。

ここまで来たが、どうするか、そこまでは考えていなかった。

ただ、思った。

俺はちゃんとした彼女の声を、聞いていない。

直樹は紀子の店の真向かいにある、シャッターの下りた店の前に座り込む。

正面の店は真っ暗だが、奥の方からは光が差している。
紀子はまだ、この家にいる。

俺は何をするつもりだ？

彼女が出てくるのを待つのか。

1人で時間を潰すのは得意中の得意だった。

でも、それは以前の話。

手慰みをしながらここににいる心境でもなく、眠気もない。
少し寒いだけ。

直樹はひたすらその姿勢のまま、じっとして動かないでいる。
やがて知らない間に、先ほど差していた光が消えていた。

もう寝たのかな。

今もしも彼女が外に出てきたら、俺は変態扱いされるんじゃないか。

そんなことも考えてみるが、それ以上に大事なこと。

……彼女の声。

考え事もなくなった。
する内容がなくなった。

ひたすらひたすら直樹はその場を動かず、時間が経つのを待っている。

腰の痛みを覚え、横になってみたり、また座ってみたり、空を見上げてみたり。

都会の夜には慣れている。

以前いた家と同じく、こっちも夜空が少し明るい。

星なんか一つも見えない。

……紀子さんは星に詳しくったな。

旅行に行ったとき、星座について教えてやると言われていた。

きっとあの辺りは星がよく見えるんだろ。

……そういえば旅行に行くんだったな。

やがてライトによって照らされたものではなく、空が明るくなり始めた。

夜明けた。

牛乳配達員や新聞配達員が、あんな暗い時間から仕事をしていると初めて知った。

一人、声を掛けてくれた新聞配達のおじさんがいたが、

「旅行に行くので待ち合わせです」

と嘘を吐いた。

迷子・家出だと思われる、ここから引き剥がされるのは俺の思うところではない。

そんなに長いとは感じなかった、この時間。

空に加え、道路も少し明るく見え始めた頃。

紀子の家の扉が開いた。

と同時に、家の前に止まるタクシーが1台。

直樹は立ち上がる。

腰が少し痛い。

家から出てきたのは3人。

お父さんは以前顔を見たことがあるから知っている。

お母さんを見るのは初めてだ。

その後ろ、家を最後に出てきたのは紀子だった。

兄がいると言っていたけれど、お兄さんらしき人の姿は見えない。

3人がそれぞれ、それほど大きくはないカバンを1つずつ持っている。

しかし、今からこの家を後にする光景であるということは、容易に想像できた。

タクシーに荷物を積み込む3人。

そこで、紀子がこちらに気づく。

「あ、」

紀子の声。

直樹はその姿を、ただじつと見つめている。

彼女はお母さんと何やら遣り取りをして、こちらに駆け寄ってきた。

「……もう、何やねん。あのままね、行っただろうと思ひよったんやんか、私。何で顔見せるん」

「当たり前だろ。何がどうでどうなってるのか、俺は何も聞いてねえよ」

「……………」

紀子の声。

紀子の姿。

「……新幹線の時間があるからね、あんまりゆっくりできへんねん。あんな、」

そこまで言ったところで紀子の声は沈み始め、震え、絞り出すような音に変わる。

「店が、潰れてしまつてな。どうしようもないねん。この店、土地、売ることになつてんや。」

「しょうがないねん」

「ハア！？売れたんならまたこの辺で家を買えばいいじゃねえか！何で余所へ引つ越す必要があんだよ！？」

「知らんよ、そんなこと！他の場所に土地・家買つて、そんな簡単な等価交換あるん！？」

「ウチは直樹くんトコみたいにな……ッ」

紀子はその続きを言わなかった。

怒っているとも取れ、悲しんでいるとも取れ。

自分も悲しんでいるのだが、何の力も持ち合わせてはいない。

ただこの状況に、従うのみ。

紀子につられて泣きそうになるが、ぐつと堪える。

これで完全なお別れではない筈。

そう信じる。

「あんな、直樹くん。私ね、アンタにめっちゃ嫌われてから行つたらう思うてたんや。」

人と別れる時つてな、とことん悪者になつて嫌われてやつた方がエエと思わん？めっちゃ便利やんか、ソレ。お別れなんやし」

「急すぎるんだよ！俺が紀子さん、嫌うわけじゃないじゃないか。何なんだよソレ！便利つて、フザけんなよ！」

ここで、紀子はようやくいつもの笑顔をを見せてくれた。

そして直樹の肩をポンポンと叩きながら、

「フザけてないんやつて。本気で言つてるんやつて」

紀子は続けて言う。

「私、直樹くんめっちゃめっちゃ好きやったで。
何か、直樹くんに言わすばかりで、私一回も言っへんかったけど」

そういえば、聞いてなかった。

何故このタイミングで言うんだ。

一生のお別れじゃあるまいし。

向こうから「紀子ー！」というお母さんの声。

「あ、もう時間みたい。行かなアカンわ。

直樹くん、受験頑張つてな」

そう言つて、紀子は直樹から離れる。

「頑張つてなとちゃうやろ！お互い頑張ろうな、やろ？

向こうに着いたらさ、電話ちょうだい。絶対だぞ。俺、ちゃんとさ、

自分でお金貯めて会いに行くから」

紀子はもう一度直樹を振り返り、笑顔を見せた。

そうして彼女はタクシーに乗り込み、行ってしまう。

……もう、ここにいても何の意味もない。
ため息しか出てこない。

夢でも何でもないんです。

俺は寝ずにここにいたのだから……。

思えばいっぺんに友人ができ、彼女ができ、
いっぺんにいなくなった。

これからも長い間、同じ時間を共有すると、
……信じていた。

直樹は歩くのを止め、走り出す。

あの場に、あの光景に、自分を置いておきたくはなかった。
全速力で走る。

途中、自転車を忘れていたことに気づいたが、あの自転車はいらない。

もう、いらない。

そう思い、走り続けた。

この商店街一帯は、2年後には立派なショッピングモールに姿を変える。

直樹の見た、シャッターの閉まったたくさんの店。

あれらは全て、地上げの煽りを受け、閉店に追い込まれた店たち。

その大きな力のトップにいるのは、直樹の父だ。

通りに店を構えていた久保スポーツも、例外ではない。

スポーツ用品店に限って説明をするならば。

以前、直樹の父が建てた大きなデパートの中には、有名なスポーツ用品店が店舗を構えている。

まず直樹の父がしたこと。

商店街の、地上げに対抗する体力を奪うため、その通り周辺の学校・体育館・スポーツクラブなどの施設に圧力をかける。

そうして、そこから流れる用具の修理・仕入れ、そういった収入口を全て吸い上げた。

この商店街に何店かあるスポーツ用品店は営業の仕事を全て取り上げられ、各施設は政治的な力も交えたその圧力に従うほかなく、これまで築いてきた付き合いを反古にする以外なかったのだ。

店舗販売でのみの商売しかできなくなった商店街の各店。

しかし、そのデパート内にあるスポーツ用品店は規模の大きさを利

用して商品を大量入荷し、安く販売するというシステムを取っていた。

結果、客足はほとんどそちらへ流れて行く。

店舗販売すらままならない状況に追い込まれた店は、どんどん閉店に追い込まれる。

久保スポーツも漏れなくその流れに属し、地上げに対抗する体力・術を奪われ、この事態に陥ったのだった。

全てを知り、理解していた紀子。

直樹がこの事実を知るのは、まだ先の話。

そして今後、紀子から直樹に電話がかかってくることは、二度とない。

全速力のまま家に帰った直樹。

大きく開いてしまった穴に埋めるものは、何一つ持ち合わせていない。

帰宅してすぐに電話の前に立ってみる。

夢でもなければ何かの間違いでもないことは、よく知っていた。

……だけど

直樹は紀子の家に電話を試してみた。

ここ数日、コールはするけれど一度も通じることがなかった電話。

……パツツという音がした。

「――」

誰か出た！！

「あ、もしもし！？」

勇んだ直樹の耳に入ってきたのは、聞いたことのない、一方的な声。

『おかけになった電話番号は、現在使われておりません……』

「……………」

……繋がらない電話番号にかけたとき、こんな声がするなんて知らなかった。

「へへッ!」

笑えてしまう。

……このキーホルダー、俺が持ってもいいんだよね？
紀子さん。

急流 1（前書き）

暴力描写があります。

急流 1

—— 君の未来を七色と表するならば、三色くらいは僕の細腕で補うものだと思っていました。

約束したわけじゃないけれど、そう信じていました。

ここに記すほどの落ち着きを取り戻したわけでも、取り戻したつもりもない。

もう、かれこれ何冊目だ？

3歳からの付き合いである、僕の系譜。

自分に過失があったと思うと楽になり、また元の位置に降り立つ日
昼夜。

我執したつもりがないところが過失なのでは。

そう問うてくれる人がいるわけでもなく、またぐるりと一周して降り立つ。

蔓のごとく張り付いてでも執着すべきだったのか。

そこまで自分に自信がないのは、僕が一番知っている。

ストレスとは自覚症状がないものの積み重ね。

だから蓄積するもの。

完全無欠というものがこの世に存在するのか。

彼は、俺の家は貧乏だと言った。

彼は、誰にだって少なからず背中と腹に傷があると言った。

もし僕がこれであれば……

一度も失敗しなかったということなんだ。

虚妄は罪とも思うが、そこに憂いがあれば、とも思う。

麒麟児という単語を口に出している人を、見たことがない。
だけどその単語に憧れた。
自分はそう表されたいと。

才能とは持ち合わせているもの。
努力でどうこうなるわけではなく、ギッコンボタン。
僕の身は思考・妄想よりも軽いと知り、ギッコンボタンする。

その憧れの単語を、僕は彼女に託したんだ。
彼女こそ、その人だと。
憧れ、凝視し、好意を抱き、夢中になった。
でもそんな彼女にも、自分で弱点と表するものが……

暗闇

一つの明かりもない場所

真っ暗闇

そこに身を置くと、過呼吸になり、眠れなくなるという話。

彼女は言っただけです。

これは内緒だと。

トラウマなんてのは、人にあだこうだ言うものではない。
というより、これをトラウマと表していいのかどうかも分からない。

過去に自分の身に何かあったのか。だから暗い場所が苦手なのか。
覚えていないんだと言った。
これをトラウマと表するには早すぎる。
そう言いながら、自分の弱点をこの僕に。

虎、馬の話だと思った。

普通にその単語を用いて話をする彼女の前で、その単語を知らない。

言えなかった、僕の愚。

辞書に書かれている内容を見て、知るところ。

…… 幸せだと思った。

僕はそんなものを持ち合わせていない。

僕にはそんなものはない。

完全無欠とは妄想であっていいんだと、知った。

3歳の頃、両親が仕事で僕は留守番。

夜になり、自分の家に帰ろうとする土井さんの腕を引っ張った思い出。

4歳の時には、新幹線の乗り方を覚えた。

思えばあの頃、時刻表などではなく、場所・色・形で覚えていた、新幹線の乗り方。

父の呼び出しに応じるために覚えた、新幹線の乗り方。

酔っ払った大人2人がケンカを始め、それに巻き込まれ、足の骨を折ったことがある。

あの時、足の怪我よりも、乗るはずだった新幹線に乗れなかった不安・恐怖の方が大きかった。

初めて両親に会った時のこと。

学校での班での集まり。

流行りものの、俗物。

思い出せばキリがない。

それらを引き合いに出してみる。
思い出すと、ゾツとはするが。

それらが全て、そのトラウマというものの要素であるのだとしたら、
僕は今頃生きてはいないだろう。

これらを要素にするのは、大変厚かましい。
彼女が僕にそつと教えたというのは、大変厚かましいと表したここに理由があるんだろう。

そして、僕に過呼吸などの事実はない。

彼女はそつと、僕にだけ話してくれたんだ。

人に自分の弱点を言い回れる奴が羨ましいと言ったのだから。
よっぽど味方がたくさんいるのか、相当のアホだろうと。

僕にそつと、教えてくれた。

あれは彼女の黒だったのか。
白だったのか。

混じり合った部分だったのか。

もしそんな風に暢気に生きられるのであれば、僕にも弱点があると表して生きたい。

僕の周りには人がいないから……
そのアホになれたらな。

……また人に迷惑を掛けてしまうのだろうか。

でも、そうやって生きてみようか。

僕のことを見ている人はもう、いないのだから……

もう俺は期待なんかせえへん。
だから俺に期待させるな。

直樹はある学校の屋上にいた。
何人かの他校の生徒を引き連れて。
そうしてこの学校の生徒たちと、一方的な乱闘を繰り広げている。
直樹の右手は、自分のものとも相手のものとも分らない血で、赤く染まっていた。

「オイオイ、何やねん。ホンマにお前がココで一番強いんか？そがいなこと言われるの、10年早いんちゃうか？」
直樹はそう言いながら、膝についている相手の前髪を左手でワシッと掴み上げる。

「代表して俺が言つたるかー？」
口からダラダラと血を流している彼は、直樹に哀願する。

「わ、悪かった！ホンマに悪かった！！か、勘弁してくれ！！」
か細いその声を耳にした直樹はしかし、一つニヤリと笑みを浮かべ、次の行動に移るのだ。

「10年早エんだよッ！！」
言うが早いかするが早いか、直樹は彼の前髪を掴んだまま、顔面に膝をめり込ませる。

グシャッ！！

首を力チ上げられ、吹っ飛ぶ彼。

直樹の左手にはたくさんの髪の毛が残っている。

「キツタねえから、こういうの勘弁してくれるかー」

そう言つて、顔面を押さえのた打ち回る彼に歩み寄った。

苦しみ、暴れ回っている彼を気にすることもない直樹。

胸倉を掴んで、

ガシャガシャンツ!!

屋上のフェンスに押し付ける。

とてもよく晴れた涼しい日。

快晴

青空

……ゲシャツ!

フェンスがきしみを上げた。

彼の上体はフェンスの外へ、押し出される。

「ツギヤ——ツ!!」

直樹に胸倉を押さえつけられた彼の叫び声が、青空に響き渡った。

「なあ、お前の脳天の下に車がスラツと並んであるわ。

俺、噂で聞いたんやけどな、車のフロントガラスってな、事故したときに乗ってる人間に突き刺さらんように、粉々になるようにできとるって聞いてん。いっぺん試してみてエエか？」

「アアアアア——ツ!!——もう、勘弁してくれ!!——ごめん!

ごめん!!——ごめん!!——」

「謝んなつて。謝ってもらおうなんて思つてへんねん。こっから落ちて一発、お前のエエとこ見せてくれんかー？」

ここでプチツといくか、細川つてどれか、教えんかい。

ツレか何か知らんけど、楽になるぞ。ドツチ選んでもな」

「……ツ」

するとその彼はされるがままであった首を少し起こし、周りにいた同じ学校の生徒1人を指差した。

「チッ！」

直樹が胸倉から手を離すと同時に、彼はズルズルとその場に座り込む。

指差された生徒はその場から慌てて逃げようとするが、直樹と一緒に乗り込んだ他校の生徒が彼を取り押さえた。

「オイオイオイ、せっかくここまで来たんやからよう、逃げんてや」

「……ヒッ！」

押さえつけられているその生徒は言葉も出ない。

震え上がっている。

そんな彼に直樹はニコツと笑い、いきなり

ズバーンッ！！

その彼に、首が吹っ飛ぶほどの張り手を一つお見舞いした。

1発だけで彼の口から滴り落ちる、血液。

それを確認した直樹はもう一つ、反対から同じような張り手を食らわす。

ズバンッ！

彼は、今度は反対側に張り飛ばされる。

「なぐんで最初っから名乗り出エへんのや？お前が正直に言っとつたら、お前一人で済んだんやぞ？」

「すびばせん！すびばせん！！」

そう叫ぶ彼の両耳を掴みながら、直樹は言う。

「これなあ、ちょっと下へ向けて力入れたら、簡単にちぎれよんや。知っとったか？耳つてのはな、骨で繋がってへんからな。

どうするんや？ゼニ返すか、耳なくなつて男前になるか。俺、優しいやろー？オノレントコのボスにもちゃんと選択肢あげとるからなあ。

俺は別に、オノレの片耳1万5千円でも構わへんで」

以前の直樹とは思えない形相。
その学校の生徒は誰一人、仲裁には入らない。

「分かった！返す！返す！！」

それを聞いた直樹は耳から手を離し、その彼から手を離すよう周りに指示を出した。

ポケットに手をつ込み、ゴソゴソして彼が差し出したお金は2万円。

「おい、ちょい待てエ。こっちは3万つて聞いとるぞ。1枚足らへんやないかい。使ったんか」

「イヤ！ちゃうねん！ちゃうねん！！」

そう言ってもう片方のポケットを探る。

そうして取り出したのは、ステッカー2枚。

「何や、こりや。ハア？」

「イヤ、ツレにな、暴走族やつとるヤツがおつて、1枚5千円で買わされたんや。だから1万はないねん」

直樹は指先でそのステッカーを取り上げた。

「ほならお前、俺をそのゾクントコに連れてけ。1枚5千円で買い取ってもらっわ」

「イヤ！勘弁してくれ！！そんなことしたら俺、後でどんなッ！」
そこまで言ったところで、直樹の蹴りが顔面にめり込む。

ゴリッ！！

吹っ飛ぶ彼。

「アレもできへーん、コレもできへーん言つてお前、話が前へ進まへんやないか。オイ！オイッ！！」

直樹は倒れた彼の髪の毛を引っ掴み、振り回し、煽る。

その時後ろから

「おい、ちょっと待ってくれ！！」

声を上げたのは、先ほど相手にしていたこの学校のボスだ。

「ここに2万ある！せやからコレで勘弁してくれへんか！！」

四つん這いになって2万を差し出す彼。

直樹は振り回す行為をやめ、彼に近づきその2万を受け取った。

「…ほんならこのステッカー、2枚お買い上げやな。ほんで釣りの1万円や」

言いながら、ステッカーと1万円札をハラハラと落として一言、
「拾わんかい」

直樹と、一緒に乗り込んできた仲間たちは、そうしてその学校を後にする。

「おいおい直樹！お前、やっぱりメチャクチャ強いやんけ！

お前がハッ倒したアイツ、強うてメチャクチャ有名なんやぞ？相手にならんやんけ！」

それを聞き、返す直樹。

「ハア？あんなモンが強いってか。しょうもない。

もうちょい力入れとったらあのボケ死んどったぞ。余裕じゃ、こんなモン」

……期待して、期待されて、
また期待する。

求めだすとキリがないので、願いは半分になっていた。

直樹17歳。

高校2年生。

次の日、登校すると1人の生徒が直樹を待っていた。

「秋月くん、どうやった？何とかなった？」

校庭を歩きながら、校舎に向かう2人。

「おう、全然余裕や。ほら」

そう言っただけ直樹は財布から3万円取り出し、彼に渡す。

「ほんまにいつもゴメンね。ありがとう。秋月くんのおかげで、お金が返ってくるようになったわ」

「別にかめへんよ。俺はお前らと違って暇やからな」

「暇って、よう言っわ！そんな言いながら、テストでいつも必ず30番台には入ったあるやん！

俺なんか勉強しかやってへんのに、100番台にも入ったことないわ。

カツカゲで対抗する……ケンカする力も持ってへんし」

「そんなん別に持たんでエエんちゃう？」

そうして直樹は先々と教室の中へと入っていく。

昨日の大乱闘は、クラスメイトがカツカゲに遭って奪われたお金を、直樹が取り返しに行ったものだった。

この頃の直樹は、友を作ろうと一生懸命なのだ。

しかしこの学校には放課後、直樹と連れ歩き遊び回るような生徒はいない。

昨日一緒に乗り込んだ生徒たちは、全員他校の生徒。

以前直樹と揉めて、手籠めにされた者たち。

『どうせ俺は暇やからな』

これが最近の直樹の口癖だ。

頭の中で言葉にせずとも、いつもそう考えていた。

直樹はこの日、3日ぶりに家へと帰った。

玄関に入ってまず会ったのは、慶也。

「ちょっとー、兄さん！ドコ行っとなん？3日も帰らへんで」

慶也もかなり大きくなった。

中学2年生の彼は父の命令通り、野球を止めた。陽に焼けて真っ黒だった彼の肌は、今では青白くなっている。

「お前、こないだのテスト、どうやった？」

「あー、…32番だった。アカンわ、まだまだやわ。兄さんみたいにはなられへん」

「何言うとんねん。すぐソコに見えてるやん、俺なんか」

直樹は階段を上り、自室へと入る。

直樹が高校に進学すると同時に、父は単身赴任という形で東京本社に戻って行った。

直樹の思うところ。

父は、慶也が勉強を頑張り始めたこのタイミングで、学校を変えることはない判断したのだろう。

母、慶也、土井さん、直樹はこの地に残ることになった。しかし父はそろそろ家族を東京へ呼び戻そうとしている。世間への体裁を考えて。

父が自分の目の前からいなくなった。

そのお蔭かどうか、俺は自由に、望むようにやっている。

そんな俺は、何て小さいんだろうと思う。

……ビビリやがって。

ある程度の大学には行かないと、とも考え、大学に行かせてくれるんだよね？とも考える。

この折半された思考の中、備えがあればと、以前のようにとはいかないが勉強は続けていた。

その他。

俺はケンカをやったらどのくらい強いのか。
そんなことにはそれほど興味はないのだが、暴れ回っていればその内、……

この身長と、見立ててもらったこの髪型は、あの頃から変わらない俺の目印。

もう、あの疎外感。

あれだけは勘弁してもらいたい。

頼むから俺の周りに誰か、人が居てくれ。

学校では中学時代とは違い、いつも直樹の後について回る者が何人もいる。

学校を出れば、他校の生徒たちを引き連れ、街中を練り歩いている直樹。

確実に違うのだ。
以前とは。

学校が終わると、自然と皆が集まる場所がある。
街の喫茶店。

そこで1〜2時間大勢でダベツてから、街中を練り歩く。
賑やかなのが良いことで、もう静かなのは勘弁なのだ。

「おい直樹。こないだよう、。。高のヤツがな、メンチ切ってきやがったからボッコにしたったわい。」

お前の名前出したらビビり上げとったわ」

「……………」

そんな言葉を耳にする、こんなことになるとは思っていなかったけれど、これは良い調子なのだ。

あの時から変わらない髪型とこの身長は、目印。
更に名前が知れ渡ったとなれば……

—— そのうち、出会っだろう。

そんな目論見を持ちながら、もう2年になる。
いまだに会えない。

静かなのは困るので、周りが賑やかなのは良いことなのだが、以前とは違う。

……前は、たったの3人だった。

いろんな学校の生徒で、こうやってグループを作っている。
いろんなヤツがいると知った。

だけど違和感があり、何か違うのだ。

「俺、今日は先帰るわ」

そう言っつて、集団から抜け出す直樹。

直樹はまだ、ボクシングジムにほぼ毎日通っていた。

しかしこのことは誰にも話していない。

話していいのかわかからない。

プロテストを受けようと考えていたが、視力が原因で諦めることになった。

こんなことも、誰にも話していない。

今日は会長が何か用事があるとかで、早い時間にジムが閉まった。
このジムの近くには、慶也が通っている塾がある。

あいつ、確か今日は塾だったな。

普段はこんなこと思わないが、ただ何となく、時間があつたのも手伝って直樹は考える。

迎えに行つて一緒に帰るか。

直樹は塾へと向かつて歩き始めた。

直樹はずっと、塾なんてモンは、という考えだった。

だが今、大好きだった野球もやめ、勉強を頑張っている慶也を少なからず応援している。

帰りにたこ焼きでも奢つてやろうか。そんなことも考える。

塾に近づき、建物を見上げると教室にはまだ明かりが点っていた。どうやら早く着きすぎたようだ。

直樹は道路を挟んだ向かい側の駐車場に座り込み、慶也が出てくるのを待つことにする。

しばらくすると、ゾロゾロと生徒たちが出て来た。

それを見て直樹は立ち上がり、建物へと近づいて行く。と、彼らの集団の向こう側に、ある人の輪を見つけた。

街灯に照らされた、数人の男子生徒たち。

ゆっくりと近づく直樹。

そして彼らの顔が判別できるほど近寄ったとき、その光景の真ん中にいるのが慶也だと気づいた。

5人の同級生らしき中学生が慶也を取り囲み、小突いている。

正面の彼が慶也を突き飛ばす。

よろめいた慶也を、今度は背後の彼が突き飛ばす。

「……………」

……知らない者ならば、無視もできる。
そんなことは容易いが、しかしその真ん中にいるのは間違いなく慶也。

イジメに遭っている。
そう思った。

彼らは何かを喋っているが、直樹には聞こえてこない。
こんなとき、どうすればいいのかわからない。

俺は慶也の味方をして、あのガキたちを一網打尽にしたいのか。
俺は強いぞ。

見て見ぬフリをして、このまま帰るか。
何となく声を掛けてみるか。

……正解は？

足を止め、その光景をじっと見つめている直樹。
思い、考えながら、時間が過ぎて行くのをただ待っている。

……やっぱりわからない。

そのうち慶也は1人にドンツと強く突き飛ばされ、尻餅をついた。
それを見て、彼ら5人はゾロゾロと自転車に乗って帰って行く。
たった一人残され、座り込んでいる慶也。

……どこまでもどこまでも、
つくづくや。

……俺はなあ。

イラッとしたが、これは慶也のせいではない。
見守っていて正解だった、とすら思っている。

……相変わらずのクズや。

そう思いながら、自分で二面性と表するようになった、次の態度。いかにも今通りがかりました、という態度。

「おい慶也、何しとんねん。道端に座り込んで」

……クズめ！！

「ああ、兄さん。どうしたん？こんなトコで」

「イヤ、遊んどってん。ほんでたまたまな。お前、今日塾やっての知ったからよう、寄ってみてん。」

俺、ちよつとゼ二持つてるけど、何か買い食いしてくか？」

……しゃあしゃあと！

慶也の態度はいつもと変わりなかった。

「ちよつと暗あて躓いてしもうてん」

普段通りの慶也の顔。

前から思っていたけど、こいつは本当にたくましい。

感じるところも、見るところも、俺とは全くちやうんやろう。

格好が良いと思う。

今のがもし、逆の立場だったら。

……アホか。あり得るか。

直樹は慶也の汚れをパンパンと払ってやる。

俺がイジメなんか遭うか。

あんな5人、踏み潰したる。

「よっしゃ、ほんなら俺がいつも行くお好み焼き屋へ行こうか」

「おー、いいねえ。兄さんの奢りやろ？」

「エエよ」

……俺は前とはちやうぞ。
必死で必死で、
変えたんや。

……どもならん。

何故父は、家族を置いて一人で東京へ帰ったのだろうか。
少なくとも、慶也だけは連れて行くものと思っていた。
女なんだろうな、と思う。

あと数ヶ月で自分たちもこの地を後にすることになるが、慶也の今回のこと。

そのあと数ヶ月、我慢すべきなのか。

あれは、俺にはイジメに見えた。

アイツがやり返すタイプではないのはもちろんだが、相談する相手がいないとは思えない。

いつそ俺にでも言ってくれば……

中学生相手だろうと、やれることはある。

この際、あの父は関係ないことだろう。

こんな相談をあの父に持ちかけたところで、慶也にだって舌打ちで返事をするに決まっている。

直樹は、自分には関係ない、そう思えずにいた。

それと同時に、同じ頻度で、俺に期待するなとも思う。

次の日も、次の日も、どうしていいのかわからず、そのまた次の日もただ心配をしている。

直樹の学校の生徒はやはり以前と同じく、勉強を本業、糧として生きてきた人たちが多く、話はすれど込み入った話はしない。

そんな仲を保ちながら、直樹はこの学校での日々を過ごしていた。ある日の昼休み、自分の席に座り外の景色をボケーツと眺めていると、背後から声を掛けられた。

「ねえ、秋月くん」

話しかけてきたのは菅井だ。

あの墨汁事件の彼。

彼は直樹と同じこの進学校に進み、また同じクラスになっていた。

その声に振り返る直樹。

「あんな、秋月くん。カツアゲされたお金とか、そんなん取り返して来てくれるってホンマなん？」

「誰がそんなこと言うとなんや？」

「あ、イヤ…学校中でな、そういう噂になってるで」

「……………」

自分の中では正しいことをしているつもりだが、正しいやり方だとは思っていない。

更に言うと、目的を果たすためのキツカケ、手段だと思っている。

「何や、誰かに金奪られたんか。ドコの学校のヤツや？名前は？名前まで分かんか。ドコの学校や？」

黙ってしまう菅井。

「何やねん、お前。黙られたら分からへんやろ。取り返したるよ。制服見たら学校くらい分かるやろ？」

「…………えっと、…えー… 高校」

「ふーん。そうか。で、ナンボ奪られてん」

俯いた菅井は小さな声で応える。

「それがもう……覚えてへん」

「ハア？」

菅井から事情を聞くと、彼からお金を巻き上げているのは小学校のときの同級生。

彼らと菅井は違う中学校に進んだが、通行手形料とワケの分からないイチャモンを付けられ、毎月3万円ずつ巻き上げられているらしい。

それを聞いた直樹は驚愕する。

「おい、確か中学時分も同じ学校でイジメられとったよな。

何？ひよつとして小学校のときもソイツにイジメられとったん？」

「……………」

返事なく、菅井は肯くのみ。

……ある意味、感心してしまった。

「変な意味ちゃうで？変な意味ちゃうんやけど、お前の親父さん、仕事何やってんねん。

こんな学校へ来てるお前が、アルバイトしてるとは思えへんねんど」

そこで、菅井は完全に黙り込んでしまった。

……多分コイツは、今まで俺が出会ったどの人間よりもマヌケや。そう思う直樹だが、その方法が、それを防ぐための方法が見つからなかったその気持ちも分かる。

「よっしゃ、菅井。じゃあな、今日の帰り、俺に付き合えや。俺の仲間と一緒に取り返しに行つたるから。そん時詳しくう話聞くな。放課後、一緒に行こうか」

「え！？秋月くんの仲間！？……僕、前に街で秋月くん見かけたこ

とあるんやけど、あの他校のヤンキーの人らやる？」

……ヤンキー？

仲間と評しながら、ヤンキー……

コイツから見たら、俺もやっぱリヤンキーなんかな。

「……ちよつと僕、怖いんやけど」

……こういうヤツはもし次に何か選択肢を与えても、無理と言う。
アレもコレも、できんと言う。

分かってる。

「よっしゃ、分かった。じゃあ俺一人で行ったるわ。

高校のヤツやったら、つい一週間くらい前にインネンつけて来たから張り倒してやったんや。

俺一人でも余裕やる。そんな代わり、ついて来てもらわなアカンで。どんなヤツか分からへんからな。

今日早速行こうや。放課後早めに抜け出すでー」

ようやく顔を上げる菅井。

「ほんま？取り返してくれる？」

「うん、エエよ」

すっかり関西弁も板についた直樹。

今の自分にとつては、こんな形でも構わなかった。

俺に期待するなと思いつながら、期待されると喜んでしまい、そしてそれと等しく期待もしてしまう。

そんなことを考えながら、俺はこんなに便利なヤツだったのかと思う。

都合が良すぎるんちゃう？俺。

直樹と菅井は放課後のホームルームを前に、学校を出た。

高校はここからそう遠くない。

自転車で向かう2人。

「なあ菅井、あの学校って。。。郵便局前のバス停の傍やったんなあ？」

「うん、そう」

「じゃあ15分くらいで着くな。ソイツがおるかどうか分からへんけど、見つけたらお前はすぐに逃げるんやぞ？足手纏いやからな、おつてもろうても」

「うん、分かった」

交差点に差し掛かり、信号待ちをする、

横断歩道の向こう側で、同じく信号待ちをしている数人は2人が目指す 高校の生徒だ。

「おい菅井、アイツらとちやうか？」

直樹は彼らを指差しながら尋ねる。

しばらくじつと見つめ、

「あの中にはおらへんわ」

菅井がそう答えた直後、直樹の横で彼の自転車が大きく音を立て、倒れた。

ガシャンッ！

それと同時に菅井は道路に倒れこむ。

ハア！？

そう思った直樹。

瞬間、自分の自転車も強い力で横に倒されそうになった。

何や？！

直樹はサッと自転車から飛び降りる。

振り返ると、ソコには 高の制服を着た生徒が3人。

直樹の後ろに立った1人が大きな声で叫んだ。

「おーい！！コイツや！コイツが秋月や！！コッチから出向かんで

も、わざわざ自分から来よつたで!!」

それに反応したのが、横断歩道の向こうの生徒たち。

赤信号に構わず、こちらに向かつて駆けてくる。

「おいコラ、ワレか、秋月いっくんは。こないだウチのツレ、エライ目に遭わせてくれたらしいのう」

言いながら、1人が直樹の胸倉を掴み寄せ、グツと押し上げた。

……えつと、えーつと……1、2、3、4、5、……7人か。

相手の人数を数える、冷静な直樹。

「おい、おい! お前!」

直樹はここで菅井の名前を呼ばないようにと気を遣う。

「こん中におるか?」

尻餅をついたままの菅井は声も出ず、ただ首を横に振って答えた。

「何や、おらんのかい。ほんならお前らには用事ないわ。早よ帰れ」

直樹の言葉に、彼らは頭に血を上らせ、

「お前、エエ根性しとるやんけ!! ちよつとこつちへ来いッ!」

菅井をスルツと通り抜け、移動を始める8人。

直樹は4人に引き摺られながら、振り返る。

「こりゃあまた明日やな。今日は帰った方がエエで。ちゅーか早よ帰れ」

急流 2（前書き）

暴力描写があります。

急流 2

7人にされるがまま、直樹は近くの神社へ連行された。
人気のないこの神社。

直樹を掴んでいた4人が手を離し、直樹はやっと解放される。
同時に、改めて辺りを見回してみた。

全く、こんな神聖な場所で……

何や、あのイチヨウの木……でツカー……！

……人気はないみたいやな。

「おい秋月、お前一人でこんな所プラプラしやがって、どこまでナメとんや！今からお前んトコ行ってイテこましたろう思うとったんや。

こっちは7人おるで。どないするんや。

持つとる金全部置いて、明日10万持つてワシらんトコへ来るか、ここでボテ繰り回されるか、好きな方を選べ！」

「……………」

黙っている直樹。

ちらりと神社の入口を見ると、そこに菅井の姿が見えた。

「おいコラーツー！帰れつちゅーとるやろー！」

直樹の叫び声を聞いて、彼はサツと走り去る。

それを確認し、直樹は7人に向かって口を開いた。

「どっちも選べへんなー。そこに答えはない。何で俺がお前らみたいなブスにゼニあげなアカンのや。

誰をボテ繰り回すって？俺は今、ちょうどエエ機会やと思うとるよ。いっぺん1人で多人数相手にしたいと思うとったからなあ。

7人でエエんか？ブスをちょうどええハンサムにしたるよ」

顔を真っ赤に染めて震えている　高の生徒たち。

号令はなかった。

一斉に飛び掛る。

人気のない神社。

神主もいない。

そこでの大乱闘。

砂利を踏む音と、打撃音だけが何度も響く。

それは10分ほどだった。

最後にそこに立っていたのは、直樹1人だけ。

垂れてくる鼻血を拭いながら、直樹は一度、大きく鼻を吸る。

「しかしアレやなー。何回やってもケンカっちゅーのは止めどころがよう分からへん。

殺してしまつたらオモロないやんけって習つとるからよう。

この辺で止めとくかー？なあ？」

腹を押さえ蹲っている者。

顔を手で覆ってジタバタしている者。

一応全員が、血まみれになっている。

「おいお前。ソレ、アバラ折れとるからな。内臓傷ついとつたらア

カンから、ちゃんと病院行けよ？」

お前もや。ソレ、鼻折れてもうとるからな。ちゃんと病院行かんと、この先ずーっとハンサムのままやぞ」

「ウ……ッ……ッ……ッ」

とりあえず返事は返って来ない。

「フ——……ッ」

直樹は大きくため息を吐く。

「ほんなら帰るわ」

……脇腹が痛い。

足首が痛い。

手首も痛い。

鼻も痛いし、目も痛い。

7人いうて、結構イケるもんやな。

……せやけど、あんな人気のない所で、あんまり意味ないな。
アイツらがその辺で触れ回ってくれるの待つか。

足首を痛め、うまく歩けない直樹。

ソーツと、ソーツと歩きながら、神社を出る。

そして呼んでみる。

「おい……おい……」

……静寂。

帰つとるんやな。

……うん、

それがいいよ。

誰の姿ももう、そこにはない。

交差点で倒れている自分の自転車を起こし、それに跨る。

明日もつかい、こっちへ来なアカンな。

その辺までちゃんと話詰めといたら良かったな。

直樹は痛い足でペダルを漕ぎ始める。

何処に行こうかなあと思う。
どうせ俺、暇やし。

垂れてくる鼻血で、……思い出す。
鼻の付け根を摘み、直樹は自転車で何処かへ帰る。

次の日の朝、直樹はいつもの時間に起きることができなかった。
昨日殴られすぎたようで発熱し、目が覚めなかったのだ。
慌てて学校へ来たが、授業はもう2時間目が終わっていた。

まあ、まずそんなことよりも。
直樹は菅井の元へ近づいた。

「おい菅井、昨日何かメンドイことになって悪かったな」

「え、あ、イヤ……」

ドカッと前の席に腰を掛け、

「今日はよ、邪魔入らへんようにルート変えて行こうや。」

うーん……そうやなあ、お前授業サボらすワケにいかんから、どうしようか。

1人とおっ捕まえて呼び出すか。

せやけどな菅井、これまで奪られた金全部取り返すっちゅーのは、
ちよつと難しいかもしれんぞ?」

俯いて直樹の話を聞いている菅井。

「まあせやけど、ナンボかは取り返したるわ。」

お前は昨日の要領でヤバなったら……」

そこへ、かぶせるように菅井が話し始めた。

「あのね、秋月くん。大学どこ行くん?」

「え?…イヤ、まだ決めてへんけど」

「何か目的があるん?」

「目的?」

「こないだ僕ね、模試で秋月くん抜いたの、知つとる？」

「え？あー、イヤ、ごめん、知らん」

直樹は会話が成立していないことに、少し慌てる。

「僕ね、将来、絶対弁護士になるんや。ほんでね、ああいう連中がのさばれんような、そんな世の中にしたる。」

僕は絶対、弁護士になんねん」

—— 私、医者になりたいんや。

頭を過ぎった、あの言葉。

素直に、何の疑りもなく菅井の言葉が耳に入ってきた。

……俺は何もない。

目的も、

目の前にエサも、ぶら下がっていない。

「あ、そ、そうか。スゴイな。今からそんな目標あつて」

「……………」

沈黙が落ちた。

直樹は何となく、自分が居た堪れなくなつた。

何かを思い出したように席を立ち、

「ま、放課後ちよつとだけ付き合つてくれや。とっ捕まえて聞き出すにしてもよ、別人呼び出してしもうたらアカンからな。頼むで。校門で待つとるからな」

そして直樹は自分の席に戻る。

考えてみる。

医者

弁護士

目標について

……菅井の中で、ああいう連中の中に俺も入ってんのかな……。

授業が終わり、直樹はホームルームに出席せず早めに教室を出た。
直樹がホームルームに出ないのはよくあること。

菅井を待たせてはいけない。

そう思い、この日も早めに教室を出る。

校門の前に立ち、菅井が出てくるのを待っていると、車のクラクシ
ヨンの音がした。

顔を上げると、道路を挟んだ向こう側に白い車が止まっている。
その車に近づき、窓をコンコンと叩くと、中から顔を見せたのは女
性。

「おい、学校へは来るなって言うてるやんけ」

運転している女性は、今の直樹の彼女だ。

「えー、何で。今日は休みやから迎えに来たたんやんか」

「だから学校へ向かえに來んでエエっちゅーとんねん。俺、今から
用事あるし。意味ないって言うたやろ」

「そうなん？ほんならしゃあないね。今日もウチ、泊まるやろ？
夕飯、またシチューでエエかなあ？昨夜の、まだいっぱい残ったあ
るねん」

「分かった分かった。分かったから早よ帰れや」

「給料出たら寿司でも連れてったるから」

「うん」

「じゃあ先帰ってるわ」

そう言って、彼女は去って行く。

直樹の彼女は社会人。

直樹自身も失礼だとは思っている。

だが、ただ何となく。

週の何日か、ただ何となく彼女の家に居る。

…… 毎分ごとに、今のこの感情を謝りたいと。
彼女に、そう思っていた。

そのうち、生徒たちが下校し始めた。

直樹は菅井を待っている。

10分…… 20分…… 30分……

えらい遅いな。

直樹は、校門を出ようとするクラスメイトの1人を捕まえて尋ねた。

「なあ、菅井知らん？ 見なんだ？」

「えー？ 知らんで。もう帰ったんちゃうん？」

おかしいな…。

直樹は教室に戻ってみる。

そこにはもう、誰もいない。

そしてまた、校門へ。

菅井の姿はやっぱりない。

…… あ。

アイツ、逃げやがったな。

くっそー…

直樹は歩き始める。

しゃあないな。

一人で行くか。

せやけど、名前聞いてへんからどうしようもないな。

……全く、自分のことやる。

逃げんなよ、ほんま。

ブツブツと独り言。

……弁護士になる、か。

偉いよな。

邪魔したらアカンような気がしてきた。

明日、相手の名前だけ聞いとくか。

こんなんやったら、車で帰るときや良かったな。

直樹は今日も、家に帰るつもりはない。

しかし彼女にああ言った手前、すぐに彼女の部屋へ帰るのも気まずい。

よっしゃ、遊んでから帰るか。

そして仲間とタム口っている店へと足を向けた。

目標について。

……考えだしたらイライラするから考えるな。
目標を持つのが夢やる？

……そんな上等なモノ、今の俺にはない。
だから、考えるなつて。

バカ話でもしに行こう。

アソコには、アイツらが居る。

店に入ると、いつものメンバーが直樹に声を掛ける。

直樹はいつものようにレモンスカッシュを注文し、いつものように自分の席にドカッと座った。

「おいおい直樹、お前どうしたんや、その顔」

その声を掛けたのは正彦。

「イヤ、何でもないよ」

「ソレ、何でもないことないやろ。聞かせてくれや、武勇伝」

正彦はいつも俺と話をするとき、何とも言えない顔でいる。

笑顔の口と目が、正比例していない感じ。

「イヤ、昨日な、高のヤツら張っ倒したってん」

「ええ？お前にそんなに食らわすなんて、どんなヤツやねん」

「どんなヤツって…7人おったからなあ」

それを聞いて声を上げたのは、このグループの一人、木村。

「おいちよつと待てエ。秋月お前、ウチの高校のモンに手エ出したんかよ」

直樹は、木村が 高校の生徒だということをすっかり忘れていた。

「せやけど、ウチの学校のモンにやなあ、先に手エ出して…。イヤ、ケンカ売ってきたんは向こうやで。」

…ん？ちよい待てエよ……ちやうわ、先にボッコにしたったの、俺や。うーん……」

「そんなんでもエエねん。どんなヤツやってん」

「どんなヤツって……そんなん覚えてへん」

「2年、1年にケガしたヤツおらんかったぞ……ってことは3年か。おい秋月、お前無茶すんなよ」

無茶……

無茶？

……確かにしてるな。

「何やねん、アレお前んトコの学校の3年か。
この時期に3年が暴れ回つとるって、お前の学校どうなつとんねん。
高3にもなつて」
進学・就職があるやる……。

直樹はここで、皆が黙っていることに気づいた。
空気が悪い。

その中で、木村が直樹に返す。

「そんなんお前の学校の都合やんけ。3年になつてもタチ悪いヤツは悪いねん。」

わー、どうしよう。俺、お前らとツレとるって知られたら狙われるやんけ！」

それを聞いた直樹は、思わず席を立った。

「おい待てエ、木村。何やねんソレ。お前は狙われたら…助けたるよ、俺が」

「エエ加減なこと言わんといてくれ。お前、ちゃう学校やないか。とにかく俺は帰る。しばらく来おへんから」

そう言つと、木村は店から出て行つてしまった。

「……何やねん」

直樹はまた、ドカツと席に座り込む。

そして何となく周りを見回す。

と、いつもより人数が少ないような気がして、そして気づいた。

「なあおい、テツは？」

「今日はテツ、来てない」

皆は先ほどの空気を引き摺り、黙つたまま。

その中で一人、正彦が、

「テツはなあ、入院しとんねん」

「入院？何で？」

「ヤ、一昨日な、工業のヤツらにヤラれてな。全身バキバキで

よう、入院中や」

「どこの病院やねん」

「。。。病院」

「ほんで、工業にやり返したんか？」

正彦はハハッと笑って答える。

「おいおい直樹、勘弁してくれよ。アソコに手エ出すヤツはおらんやろ。」

あんなモンお前、ヤ。ザ予備軍が揃うとるんやぞ。

アイツらに手エ出したらアカンぞ、絶対。お前だって分かっとるやろ？」

「何やそら。ほんなら何かい、テツやられたままで黙っとけっちゅーんかい」

再び、おいおいとでも言いたげな正彦の顔。

「まーまー直樹、落ち着け。7人相手にどうやってケンカしたんや。スゴイヤんけ。聞かせてくれや」

「ええ？どうやってって……こうやって、こうやって……」

「イヤイヤ、動きはエエねん。こういう戦略で行ったんや。スゴいな」

「戦略って……」

今日はコイツのこのニヤケ顔が妙にイラつくな。

……何なんやコイツ。

俺の太鼓持ちか？

「なあ直樹、お前が強いのは分かったからよう。でもな、工業だけは……」

そこまで聞いたところで直樹は立ち上がり、正彦をドンッと突き飛ばした。

「何や、胸糞悪い。帰るわ」

直樹はそのまま、店を出る。

工業……アソコにはアイツはいねえ。

あんな偏差値の低い学校に、アイツがいるワケないからな。
揉めても意味ないな……。
もう時間がないっちゅーのに。

……エミコのところへ帰ろう。
腹減ったし。

直樹は彼女の部屋へと足を向けた。

「おかえり」

彼女はそう言っただけで迎えてくれる。
本当に本当に、嬉しいことなのだ。
だけど、居た堪れなく思う。
彼女が笑顔であればあるほど、辛くなる。

……俺は、この人を騙している。

この人は立派に自立しているのに、こんなクソガキに騙されている。

食事をしながら、直樹は彼女に合わせてニコニコしながら話を聞いている。

「ねえ直樹、アンタほんまに来月東京に帰るん？」

「うん、そういうことにはなってるね」

「直樹やったら、コッチで。大とか余裕なんちゃうん？コッチへ残りなよ」

俺なんか一人で生きて行けるわけがねえ。
黙る直樹。

「ねえ、どうしてもアカンのん？エエやんか、この部屋で一緒に暮らしたら」

こういう話は初めてではないが、彼女はいつになく粘った。
直樹が黙ると、部屋にはスプーンが皿を叩く音しかなくなる。

これ以上この話を続けたら、キレてしまいそうや。

そう考えている直樹に、エミコが口を開いた。

「直樹ねえ……私もう、2ヶ月生理来てへんのよ。これ妊娠やで」
瞬間、直樹はピタリと手を止める。

瞬きも忘れ、呼吸もしない。

そつと、彼女の顔を見た。

この間、間を作ってはいけない。

……子ども？

俺にか？

間を作っちゃいけない。

彼女に失礼や。

俺に、子ども……？

……育てられるワケがない。

俺は手本を知らない。

きつと、お父さんのように……

アレはきつと間違いだ。

俺はきつと、間違う。

「……………」

「……………」

黙ったまま時間が経ってしまう。

少し笑顔のままの彼女を見つめながら、考える。

「……あ、あのね、あのな……えっと……」
さっきした、イライラが忘れ去られた。

これって、俺にほんまの家族ができるってことか？
それは……それは全然悪くない。
俺だって頑張れば……

「あのね、」

言い掛けたその時、エミコが直樹の思考に割って入った。

「とか言つて、冗談やんか、冗談！真顔にならんといてよ。間あ空
いたら傷つくやん」

「……………」

直樹は彼女の顔を見るのを止めた。

そして俯く。

「……ほんまに、ほんまにただの冗談なん。子ども、おらへんのん」
「おらへんよー」

笑いながら続けるエミコ。

「高校生のお父さんじゃあマズイやん、今日び。こんなん言つたら、
コツチへ残るかなあ思つてん」

そこまで聞いて、直樹は立ち上がった。

持っていたスプーンを思いっきり畳に投げつける。

それは勢い良く跳ね返り、テレビのブラウン管に当たって大きな音を
立てた。

直樹は大きく息を吸い込み、

「ワレエ、ナメとんか！！おいッ！！」

……疑ってしまった。

「冗談でもな！言つてエエのんと悪いのんがあるんちゃうんかいッ
！！」

女性を殴りそうになった。

直樹は膝を付き、エミコの胸倉を掴んで前後に揺さぶりながら、
「オイ！何とか言えや！！冗談やないぞ、ほんまに！そがいな冗談
な！」

エミコは体を激しく揺さぶられながら、叫ぶ。

「ごめん！ごめん！ごめん！！」

しかし直樹には聞こえない。

「無責任にな、悪うない思ってもうたやないか！お前一体どうい
つもり…ッ！！」

「……ッ！！」

そこで気づいた。

エミコが直樹に向けている、恐怖の目。
恐れ、慄き、怯えている目。

……冷静にはなれない。

だけでもう、ここには居られない。

俺は女性を殴りそうになった。

男だろうが、女だろうが……

……関係ある。

そのまま玄関に向かう直樹の後を、慌ててエミコが追ってくる。

「ごめん直樹！ほんまにごめん！悪い冗談やったね、ごめんね」

直樹は靴を履き、彼女を振り返った。

「……冗談やなかった方が、良かったかもしれん」

…高校なんか、辞めてしまってもいいと思った。

「エミコ、……イヤ、エミコさん。クソガキの俺を世話してくれて
ありがとう。」

俺、あともうちょっとでアンタのことを殴るとこやった。もうアン

タの前にはおられへん。

ごめん。ありがとう。

……ごめん」

「……ッ」

直樹は静かに部屋を出て行く。

エミコももう、直樹を追いかけては来ない。

家に帰ればエエもんを。

俺は一体何やっとなねん。

次は、何探したらエエんや。

……どつかにあるやろう。

俺が行くトコくらい。

まだ7時にもなっていない。

アイツらのところには戻りにくい。

誤魔化したい。

誤魔化してしまいたい。

彼女の部屋、出て来なんたら良かった。

誤魔化したい……。

……そやな。

テツの見舞いに行こう。

直樹はタクシーを拾い、今の自分を誤魔化するため、テツが入院したという病院へ向かった。

途中、目に入ったケーキ屋で手土産を買って。

面会時間、間に合うよな。

受付で尋ねたテツの病室は、個室だった。

ノックをして部屋に入る。

と同時に、直樹は目に入ってきたベッドの上のテツの姿に驚いた。

全身包帯だらけ。

眠っているのかどうかもよく分からない。

直樹はベッドにそっと近づく。

すると、彼の方から声を掛けてきた。

「アレ、秋月？」

「お、おう」

何とも小さい声。

口を開くのも辛そうだ。

「おいお前、コレどういうこっちゃ。えらい大袈裟なんちゃうん？」

「……………」

「あんな、来るときにケーキ屋があったから買って来たんよ。イケるかコレ」

「……………」

「正彦から聞いたんやけどな、そんなに大袈裟に言うてへんかったんやけど……………」

そこで言葉を切り、直樹はじつとテツの姿を見つめた。

沈黙が流れる。

彼はなかなか口を開かない。

やがて、

「…………… あんなあ、死ぬ思うたわ。

頭蓋骨、アバラ、腕、足、…………… 9ヶ所骨折しとる。

車に轢かれたんか言われたわ」

「何でそこまでされなアカンねん」

「知るか、ンなこと！アイテテテッ！！」

「おい、無理すんなよ。喋らんでエエわ。俺、すぐ帰るし」
「イヤ、ちよつと待てエ秋月。お前に言いたいことがある。

工業のヤツらがな、お前の名前言うたってん。お前、アイツらに狙われてるんか」

工業に関しては身に覚えがない。

……ただ、俺が知らないだけかも。
返事ができない。

「秋月、その引き出し開けてくれるか」

そう言つて、テツは枕元にあるサイドテーブルに顔を向ける。

「おう」

直樹は立ち上がり、引き出しを開けてみた。
中にはゲームのソフトが入っている。

「お前、ソレやりたい言うとったやろ？俺、お前にソレ貸したろう
思つて……。

ソレ、持つて行きよつて、こんなことになった。

お前、俺らの知らんトコでムチャクチャしょんちやうか？

何で俺がこんな、死ぬような目に遭わなアカンねん」

「いやテツ、ちよつと待つてくれ。俺は」

「せやから、もうエエつて！俺はあのグループ抜ける。もうこが
いな目に遭うのはたくさんや」

テツは小さな、しかしはつきりとした声で続ける。

「そのカセットもな、早うお前に貸さなつて……弟がまだ遊びたい
つちゅーのに無理やり持つて来たんや。

お前怒らせたらアカン思つてな」

「おい！ちよつと待つてくれや。俺は別に」

しかし、テツは直樹の言い訳を最後まで聞こうとはしない。

「お前、変に怖いねん。我がのこと全然喋らへんし、暴れだしたら
無茶するし。

そのクセに、どエライ進学校行つとるし。得体が知れんのや。

みんな、そがいにして言うとするぞ」
「……………」

何が何だか分からないうちに、そんなことになっていたのか。
……知らないかった。

ビビられていた。
いや、ビビらせていた。

何も喋っていないのに、ビビらせていた。
……何も喋らないのがいけないのか。

サイドテーブルに置かれた時計の秒針の音だけが、病室に響く。
沈黙の時間。
考えるには打って付けの、静かな時間。

……俺は、この場から消えるべきだろう。
直樹は片手にゲームソフトを握っていたが、それをまた引き出しに納めた。

……謝らへんぞ。
事実と違う。

「……テツ、済まなんだな。俺のせいで。
顎イカレとつてもケーキくらい食えるやろ。コレ、置いてくから」
謝らへん。

「イヤ、いらん。持って帰ってくれ」
直樹はその言葉に八つ当たりをする。
「エエから食えエや、これくらい！お前が食わんのやったら弟にや

れ!!」

そう吐き捨て、病室を出た。

落ち着かなければ。

そう思い、トイレに入って手を洗う。

何故手を洗っているのかは分からないけど…。

目の前の鏡で自分を覗き込む。

……俺はこんな顔しとったっけ？

メガネからコンタクトに変えとるからなあ。

確かに髪型は変わったな。

以前っていつや？

いつから変わった？

「……くそッ!!」

直樹はその鏡を思いっきり殴りつける。

何ヶ所か、這うようなヒビが入った。

「ハハッ……」

鏡……ガラス……たかが液体もどき風情を、ヒビ入るのが精一杯か。

弱い。

自覚せんと。

直樹は病院を出たが、どこに行ったらいいのか……

行くところ

行く場所が、ない。

しかし、家しかないな、とも思っている。

父のいないあの家は、何時だろうと、どのタイミングだろうと、行き来しやすいハズなのに。
一人じゃ帰りにくい。

望めば望むほどに、同じ大きさかそれ以上のものが返って来ているような気がする。

ここまで俺は、俺のことが可愛いとは、知らなかったよ。

……退屈やなあ。

退屈？

皆に、それすら求めるなって言われそうやな。

最近とにかくイライラと、ムシヤクシヤとしやすくなった。
これがまた、どこに向いているのやら。

直樹は顔を上げ、今から帰る場所を模索する。

……帰る場所はもう、一個しかねえだろ。
そんなことは分かっている。

今日見たニヤケた顔。

引き攣った顔。

包帯だらけの顔。

あれらは全部、俺に向けられた顔……。

慶也を迎えに行ってみようか。

今のあの家の格差なら、俺は慶也にだって泣きついたって構わないだろう……。

考え事をしていると、もう時刻は8時前。

今日も慶也は塾のはず。

直樹は近くのバス停からバスに乗り込む。

今は自分のことで頭がいっぱいで、先日あの塾の前で繰り広げられていた光景を、思い出せずにいた。

やがて塾に程近いバス停で降りると、直樹は慶也の元へと歩いて向かう。

途中、見つけてしまった。

道端に座り込む、工業の生徒2人。

彼らは道路の端にしゃがみ込み、何やら楽しそうに談笑している。

その道はすれ違うには十分な幅がある。

しかし直樹はその2人の正面に立つと、

「スイマセン、お2人さん。通れんですわ。退けたってくださいませんかね」

直樹を見上げる 工業の2人。

「ハア？何やワレ」

「何やワレとちゃうねん。文句あるんやったらな、秋月直樹個人に言うて来てくれるか。」

今度は俺が、個人的にお前らを狙うとるんじゃ。その制服着とつたら無条件で襲うぞ」

まだまだ人通りの多い時間帯。

往来する人は皆、3人の半径2メートルを避けながら通って行く。ちらちらと視線を送りながら。

「何じゃお前。先輩に言われとつてな。無碍にケンカは売らんのじゃ。アッチへ行け！」

それを聞いた直樹は2人を、肩を組むように抱きかかえた。

「お前らの意見なんか聞いてへん。ここには俺の自立がかかるとる。付き合えや」

直樹はその体勢のまま、2人を路地裏へと連れ込んだ。

全然本調子ではない。
そこら中が痛いまま。

昨日も流したからだろう。
鼻を掠めただけなのに、とめどなく鼻血が流れ出す。

直樹は2人を相手にしながら、
大したことないやんけ
そう思う。

自分の拳が相手の顔面にめり込む。
この感覚。
もう慣れてしまった。

相手が知らないヤツなら……。

相手の腹にめり込む爪先。

……これは痛いんやねえ。
するのはエエが、されたくはない。
ごつつー痛いからな。
でも、慣れてしもうた。

正彦。

工業、全然大したことないぞ。

「アア——ッ……！」

直樹は2人を相手にしながら叫んでみる。

こんなことに意味があるのか。

それは分らないが、ストレスみたいなものが散漫してくれれば、
そう考え、暴れるついでに叫んでみる。

やがて、その路地裏から先ほどの通りに出てきたのは直樹1人。

もう一回、念押しで言うといたぞ。

俺は秋月直樹や。

忘れやせんやろ。

これで今日は、遣り残したことはないような気がする。

急流 3

慶也の塾が見えてきた。

デパートの大時計を見上げると、もう9時を少し回っている。

塾の教室には明かりが点いているが、人の気配は感じられない。
帰ってしまったか。

そう思いながら駐輪場の方へ顔を向けると、2人の人影。

直樹は慶也のことを聞いてみようと2人に近づき、暗がりの中話しかけた。

「あのー、ちょっとごめんね。キミは何年生？」

その2人は女子。

ビックリしたように振り返る。

「え、3年生」

もう一人は、

「2年生」

2年生がいた。

慶也と同級生だ。

「あ、キミ2年生？慶也って知ってる？彼、もう帰ったかな？」

それを聞いた彼女が返事をするまでには、少し間があった。

「……秋月くんの友達ですか？」

「え、う、うーん……そんなトコかな」

「あのね、」

言い掛けた彼女を、3年生の女子が

「ちょっと、止めときなよ」

そう言つて制する。

「イヤ、でもね、やっぱりアレはアカンよ。言つとかな」

その遣り取りを見て、直樹はようやく思い出した。

先日の光景——……

本当に、心底ハツとした。

俺は、俺がどれだけ可愛いんだ!?

「え、何!? 慶也に何かあった? 聞かせてくれる?」

尋ねた直樹に、彼女は一呼吸置いて話し出す。

「私、秋月くんとこの塾で同じクラスなんですけどね。

ちよつとイジメられてるっていうか……何か嫌事されてるっていうか……席が近くやから聞いてしもうとってね。

鈴木くんっていうのが、秋月くんのお兄さんにカツアゲされたりし
いんやわ」

「……………」

また、直樹の知らない、事実ではない出来事に翻弄されている者が
いる……。

カツアゲなんか、したことがない。

膝に力が入らなくなる。

「それでね、イジメられてる感じなんですよ。

塾の先生に言おうかって思うてんだけど、何か怖くて」

「それで? 慶也は? 今日もイジメられてた?!」

「今日なんか、終わったらすぐにどこかへ連れてかれよつた。つい
さっきのことやけど」

「アイツは、慶也は学校でもイジメられてるの?」

「私、秋月くんとは学校が違うから。でもイジメなんかどんどんエ
スカレート……」

その時、離れたところから、

ガシャ————ンッ——!

自転車が倒れたような音がした。

直樹はバツと振り返る。
そちらから、人の気配。

「ありがとう！もう十分やわ。ありがとうね！」

直後、直樹は走り出す。

音のした方向へ、全力で走り出す。

まさか

まさか

俺が原因でアイツがイジメられているとは、万に一つも思わなかった！

路地裏を一つひとつ覗いて行く直樹。

走り続ける。

今日は一体、何て日なんやろう。

これまでもいろんなことがあったけど、こんな1日は見たことがない。

走りながら何ヶ所もの路地裏を覗き込む。

何度目かの行為のあと、漸く直樹は見つけた。

奥の方で慶也の声がする。

「取り消せって言ってるだろ！！兄さんがそんなことするハズないんや！！それは絶対絶対、間違ってる！！」

「うるさいッ！変な大阪弁使いやがって！大体が気に食わんのじゃ、お前のこと！！」

何のものとも分らない物音が聞こえてくる。
とにかく、慌てた。

直樹は路地裏に駆け込んで行く。

走りながら確認した。

ヤラれているのは間違いなく、慶也！

直樹は今出る一番大きな声で、

「おいゴラ——ッ！！何しとんじゃッ！！！」

こちらに向かって走ってくる直樹に気づいたそのグループ、何人かは慌てて自転車に跨り大慌てで逃げて行く。

全員を逃がすわけには行かない。

直樹は自転車に乗り遅れた一人の首を引っ掴み、そのまま壁に押し付け、叫んだ。

「俺が、その噂のコイツの兄貴や！俺にゼニ奪られたって！？アアッ！！？」

直樹に掴まれたその彼は、今にも泣きそうな顔でジタバタしている。
「俺とちゃう！俺とちゃう！！福井くんが、福井くんが——ッ

！！」

必死で仲間を売る彼。

「何や、フクイクんが俺から金、巻き上げられたんか」

彼は涙をポロポロと流しながら、懸命に頷く。

「そーか。ほんならたった今から、お前がフクイクンや」

「……ッ！！」

彼は大きく口を開け、声も出ない。

「コイツが食ろうた分、そっくりそのままお前に返させてもらうで。一括がエエか、分割がエエか、ドツチャ！？」

その直樹の迫力に、慶也もしばらくただ呆然と見つめたまま。

しかし、そこでまず動いたのは彼、慶也だった。

「ダメだ兄さん！！それは絶対にアカン！！それじゃ意味がない！

「ハアッ！？お前、何言うとんねん！イジメなんてのはな！どつかで打破せんと永遠に消えんのじゃッ！！」
原因が俺やつちゅーんやつたら、黙つとれるワケないやろ！！」
「だから兄さん！ここで打破しようとしてるんやんか、僕！殴られて殴つてつてしてたら、終わらへんやろ！！」
「…ッ」

直樹は慶也の言葉を聞き、力んだ腕を下ろした。
それから、彼を掴んでいた手を離す。
彼は慌てで自転車に乗り、一目散に逃げて行く。

…慶也の言葉に、消化される思いがした。

「…慶也、俺のせいでごめんな」
「イヤ、何言つてんだよ。これは僕の問題だよ。謝るなんておかしいよ。」

つて、兄さん！何や、その顔！まさか兄さんまでイジメられてるんちゃうやろな！？」

…そんなワケないか」
いつもながら、ハキハキと物を言う。
こんな状況で。

…慶也。

「せやけどな、お前。俺のせいで」
「だから、兄さんのせいじゃないって。」
…うーん、でも今回のコレはドツチに転ぶかなあ？これで僕は小突かれなくて済むのか。
でも恐怖政治でそうなっても、意味がないんだよな。うーん……

見られちゃったからさ、言うけど、実はね、もう随分前から続い
んねん」

あっけらかんと、淡々とそう言う慶也。

「全く、兄さんがカツアゲなんかするワケないやんか。ねえ！全く、
どんな言いがかりやねん！」

……自分を、試したくなった。

「お前、そんな言うてるけど、俺ほんまにカツアゲやってるかも
しらんで？」

この状況で俯いているのは、直樹の方。

その直樹の言葉に、慶也はすぐさま返事をする。

「ハハッ！やるワケないやん！それに兄さんが自分のこと、。。。か
もよ？なんて言うハズないやん」

「……………」

2人は路地裏から出て、歩きながら話を続けた。

「僕ら、もうすぐこの街引っ越すやんか。それまでにね、ちゃんと
誤解解いときたかったんや、実は。」

兄さんだって、自分の知らんところで自分がいろいろ言われてる思
うたら嫌やろ？

言われたまんまにしてるのは僕だからさ。何とか説得しようとして
たんだよ」

コイツの方が随分と大人だ。

コイツの言っていることに、間違いなく裏はない。

何となく、何となくだが、ゆっくり話そうと思った。

示し合わせたわけではないが、バスにも乗らず、2人は歩きながら
話をする。

「まあ、火のないところで煙は立たないって言うけど、兄さんがそんな格好してるからって、人のお金を巻き上げるなんて絶対せえへんわ。」

誤解誤解！絶対誤解！

ごめんね兄さん。言われるばかりで。僕に力がないから」

……謝るなよ。

どんだん、自分が虫けらに思えてくる。

今まで、慶也ともこんな時間は持ったことがなかった。

そして、このタイミングしかない。

そう思った直樹。

自分の出生や、これまでの成長の経緯をここで慶也に話して聞かせた。

自分が拾われた子であること。

3歳まで施設で育ち、お父さんとお母さんに救い上げてもらったこと。

慶也と血の繋がらないこと。

それらを含めて、はつきりとした口調で話をした。

腹を決めて話したつもりでいた。

しかし、慶也の答えは直樹の思うところではなく、実に……。

慶也は言った。「そんなの知ってたよ」と。

そこには何の負もなかった。

「小学校の6年のときに、お父さんから全部聞いたよ。」

僕ねえ、頑張らなアカンって思ったんや。その話聞くまで、全然自覚がなかった。

面倒なこと、辛いことって、全部兄さんトコ行っとったんやね。どんだん我慢したんやろって、思ったわ。

僕も頑張らなつて、本気で思ったから、だから野球も止めれた。塾へも通えた。

お父さんって、あんな人なんか。だから、今はこんな感じなんよ。だったらこうしよう思ったんが、まず僕が頑張るやる？ほんで僕がお父さんの会社の人間になつて、ほんで兄さん呼び寄せるんよ。そらあ僕だつて頑張るけど、これまで積み上げてきたものが違うからね。兄さんの方が優秀なんやわ。

だから兄さんがね、トップに立つて、僕が兄さんの手助けをするんや。

絶対この方がエエと思うんや」

……説き伏せられている感じがした。

名案かどうか、そんなのは分からない。

だけど、これが本当の慶也の考えなんだろう。

言いたいことはあつたけれど、まずは認めようと思う。

「多分ね、兄さんが警察沙汰になつたヤツあつたやん。アレをお父さんがいまだに怒ってるんやわ。

そのうち誤解は解けるよ。

兄さんがやらなアカン、僕がやらなアカンっていうんじゃない、2人でやつたらエエやん。

1回も間違えへん人なんか、おらへんやん。

2人でな、もつともつと力付けて、お父さん説き伏せようよ。ちゃんと説得しよ。

ほんでそんな時にね、2人でお父さんのこと、許してあげようや」

この岐路の最中、慶也ばかりが喋っているような気がした。

慶也の声を辿りながら、直樹は考える。

俺がもし慶也と逆の立場なら『2人で許してあげようや』なんて言えるか？

俺だったらこう言う。

『お父さんを許してあげてね』って。

慶也は続ける。

「兄さんと僕が血が繋がっていろいろがいまいが、そんなの関係ねえよ。」

だってさ、僕の生まれる前の話だろ？僕は知らんもん。

生まれたときからお父さんとお母さんと一緒に、兄さんもあったもん。

僕の兄さんは、兄さんやろー。何回聞かれても、他に答えなんか持ち合わせてないで」

その言葉にも裏はないと信じられた。

……俺は、お前を疑うばかりだったのに。

「まあ兄さん、今そんな格好してるからね。いろんなトコで誤解されるんかもしれんね」

慶也は笑いながら、そう付け足した。

今日起こったこと。

俺が良かれとも思わず、ただやってきたことは、一周して俺に返ってきただけなんだ。

久しぶりのこの感覚。

ちゃんと謝ろう。

素行を見直そう。

慶也は『あと約2ヶ月を我慢しよう』ではなく『あと2ヶ月でどうすればいいか』と考えていたんだ。

軽々しく言うわけではないが、俺は慶也を尊敬する。

ねっとりとした俺のこの陰湿な感覚は拭い去ることはできないが、真似ならできる。
そう思う。

2人の会話は途中から笑い話へと姿を変える。
夜道を並んで談笑しながら。
2人が向かうのは、同じ家だ。

甘い考えだとも思っているが、一つ一つ謝って回ろうか。
慶也の言葉、リアクションで随分楽になった。
俺は恐らく、多分、他の人たちと家族に求めるものが違うのだろう。
慶也は「そんなの関係ねえよ」と言ったが、アレはあくまで慶也の意見であって、俺にはちゃんと関係あることなんや。

だけど、楽になった。
助かったよ。

小者で貧弱な俺は相変わらずコソコソするだろうが、それはそれでアリなような気がしてきたんだ。

次の朝、直樹はまずエミコのマンションへ行ってみた。
昨日の自分の態度を、謝るだけ謝ろう。
そう思いながら。

まずそんな確率はないが、また仲良くできれば…。
そんな曖昧な希望を思う。
学校には遅刻でも構わない。

彼女の部屋は、外からでも分かるほど静かだった。
ピンポン

……無反応。

仕事は11時からなので、まだ寝ているのかもしれない。そう思った直樹はポケットの中にあった合鍵を差し込む。

これって、今の俺がやるともう犯罪になるんなあ。

一瞬そんな考えが頭を過ぎるが、もう開けてしまったものはしょうがない。

謝りたいという衝動でソワソワしている自分を、早く押さえつけてしまいたいのだ。

ドアを開け、

「入りますよー」

と声を掛ける。

リビングに敷かれた布団は盛り上がっている。

予想通り彼女はまだ寝ていた。

直樹はしばらくその場に立ち尽くし、起きてこないかなと期待する。

昨日起こった、あの出来事。

あの、間。

あの、俺の出来の悪さ。

それらを考えると、今日話さないともう話す機会はないだろう。

だからといって、部屋に不法侵入した拳句、彼女を叩き起こすわけにはいかない。

また沸々と彼女に対する思いなど、どれだけ自分が悪者だったかを思い出す。

彼女はなかなか起きて来ない。

直樹は合鍵を返して帰ることにした。

そーっと布団の傍を忍び足で歩き、テーブルの上にキーを置く。
その時、いきなり布団がガバツと捲り上がった。

ヤベエ！起こした！

何て言おう。

振り返る直樹。

そして、更に驚いた。

布団を捲り上げ、起き上がったのはエミコではなく、男。

「何じゃー！お前！？おいコラアツ！」

その声に、エミコも目を覚ます。

直樹がじつと見つめるのは、彼女の方だけ。

…道理で、布団の盛り上がり方が大きいと思った。

起きぬけに何が起こったのか分からないような顔をしている、彼女。

立ち上がり、直樹の胸倉を掴みながら突っかかってくる、男。

これはこれで、ベストな状況な気がした。

直樹は男に向き直り、自分の胸元を掴んだ彼の顔をじつと見つめる。

その彼が喚いている言葉は聞いていない。

胸倉を引き寄せられた状態のまま、直樹は首を仰け反らせ、

「ちようどエエと思うとるよ。良かった」

そう言つて、自分の頭を大きく振り下ろした。

メキッ！ともいうような音を立て、直樹の額は彼の顔面にめり込む。

「いつまで掴んどんじゃ、このボンクラ！！ワレには文句あるんじや！」

ま、この一発で気張つたるけどな」

そう吐き捨てる。

もうエミコの脅えた顔は見たくない。

直樹は彼女を見ないようにしながら言った。

「合鍵、ここに置いてるから。ありがとう」

そして粘ることなく、部屋を出る。

「……イタタタッ！」

その声と、ジタバタしている物音が耳に入ってくるが、エミコの声は一つも聞かなかった。

直樹は部屋を出て、今度は学校へと向かう。

……しもた。

お礼は言うたけど、謝罪はせなんだ。

でももう二度と会わないから、エエか。

そう思い、

彼女はもう、二度と会ってはくれないのだから。

そう結論付ける。

この日の学校での直樹は、妙に明るい。

菅井には「一応、一応な」と言いながら、例の高の相手の名を聞き出した。

これはあくまで、一応。

菅井には迷惑を掛けられないから…。

この24時間は、人生の中で稀に見るものだった。
いろいろありすぎた。

昼休み、いつものように直樹は屋上で昼食を済ませ、教室に戻った。
教室に入ると、直樹の机の前に見知らぬ2人が立っている。

その2人の姿を見て、また心臓の走る鼓動音を味わい、少し脅えてしまう。

彼らの頭や腕には、包帯が巻かれていた。

いくら何でも、また更に…？

そう思いながら、直樹は自分の席に着く。

2人の視線は直樹の姿を外さない。

……やっぱり、俺に用事か。

「なあ、秋月ってキミやる？」

「え？…あー、ああ。ちゅーか、お前ら誰や？」

直樹は相変わらず、自分と話をする者以外の顔は覚えていない。

「俺らは3年の浜田と下村っていうもんやけど」

「先輩が何の用事やねん。ここ、2年のクラスやで」

無然としながらそう答える。

……できれば、カツアゲされた金を取り返してきてくれ。
と、言ってくれ。

「今朝なあ、秋月直樹って知ってるか言われて、知らん言ったらドツキ回された。」

俺ら2人の財布まで奪られてしもうたわ」

たくさんのクラスメイトがいる中、教室の空気がピーンと張り詰める。

「……どこの学校の生徒でした？」

「えっとー…あれは、工業やる。なあ？」

「そうや、工業や」

もう一人が大きめの声で直樹にそう言う。

「昨夜ウチの学校のモンが秋月直樹に襲われた、正直に言っ差し

出せ言われたぞ。

キミは一体、この学校に通いながら何をやってるんや？何で俺らがこんな目に遭わなアカンねん。

僕らはもうじき受験なんやぞ。キミとは違うんや。巻き込まんといてくれるか」

その先輩がそこまで言うのと、クラスの誰かが声を上げた。

「ウツソやろー！俺らも襲われるんちゃうん！？」

それは直樹にも聞こえてくる。

また聞いた、この言葉。

……何で俺がこんな目に遭わなアカンねん。

言葉はなくとも、付随するもの。

……お前のせいで。

直樹はガタツと音を立てながら席を立つ。

ビクツと驚く2人。

「先輩、どうもすみませんでした。僕のせいで。

何とかしますんで、どうかアイツらに見つからんように家へ帰ってください。本当にすみません」

そう言つて、直樹は頭を下げる。

いったん身構えた2人だが、少しホツとしたような顔をして、

「イ、イヤ、そんな風に謝られたら何とも言えんのやけど。

まあ、お金も2人合わせて8千円やったから、それくらいやったら別にエエんやけど」

そんな風に、直樹の詫びに返事をする。

しかし直樹は途中から聞いていない。

俺はもう、学校辞めて、ちゃんと働いて……

アイツらに話しても、工業には一緒に行ってくれへんわな。

……何とかせなアカンな。

墓穴を掘るって言うんか。

昨日今日で一体どがいになつとるんや。

俺の良き運は、もう燃え尽きたんかもしれん。

……何とかせなアカンな……。

直樹はずっとそんなことを考えながら、この日の授業を全て受け終えた。

アホになろうと思っていたが、こんなアホでマヌケになろうとは……。

あの時、人に迷惑掛けるかなあって考えてみただろう。

こんなのは安易に予想できたハズや。

マヌケが付いたらアカンやろ。

許してもらえるハズがないと思うけど、俺1人の中に閉じ込めておくにはあまりにも大きすぎる。

家に帰ろうと、とぼとぼと校庭を歩いている直樹。

溜息を吐いて校門を出たところで、呼び止められた。

「おい、秋月」

ギクツとして振り返る。

そこには正彦と、グループの一人である新田の2人が立っていた。

正彦は直樹に駆け寄り、肩を組む。

「昨日あんな感じやったからよう、迎えに来てん」

「……………」

正直なところ、かなり嬉しかった。

工業に狙われているなんていう事実、恐れることはない。

新田が言う。

「茶店行って、ゆつくりするか」

そう言ってもらえるこの状況で、やはり怖いのはコイツらに迷惑を掛けること。

……やはり相談はできない。

一人でやらないと。

狙われるのは俺一人で十分やろう。

「…せやな。昨日、何か悪かったな。

ハハッ！ちよっとイラついとってん。厚かましいこととしてしもうたわ」

3人は並んで歩き出す。

コイツらは皆、腕力を競い合いたくて、揉めてナンボだということ
で集まった連中だと思っていた。

だけど違っていたんや。

いつの間にか俺が核になり、恐怖政治で慄かせ、無言の号令を掛けていた。

…テツの言葉は身に沁みた。

「せやけど、まあアレや。ちよっと柔らかい感じでよ、俺も行くことにするから」

「は？何やソレ」

別に、通じなくても良かった。

自分の中で理解をしておけば。

3人で並んで歩く。

この時ばかりは本当に、とてもとても嬉しかったのだ。

いつもの喫茶店に近づくと、店の前にいつものメンバーが並んでいるのが目に入ってきた。

「アレ？ 何やアレ。何で皆、外におるん？」

直樹が尋ねると、正彦が答える。

「あー、まあ……。まあエエやないか。皆、お前待ったんよ」

「あ、そう」

いつもと違う雰囲気、出迎えられるように、招き入れられるように店の中に入る直樹。

いつもの席に座る。

皆も同じように店に入って来るが、何故か座ろうとしない。

「アレ、どうしたん？ 座らへんのん」

「……………」

返事も何もなく、皆が顔を見合わせるような仕草をする。

何が何やら、さっぱり分からない。

皆の様子がおかしいと思いだした頃、店のドアがキーツと音を立てて開き、ゾロゾロと人が入ってきた。

彼らの制服に目を遣ると、

……………工業。

「……………」

「ハハッ！ お前か、秋月言うんは。

売った売った！ ちよつと脅したったら、すぐに皆でお前を売りよつたわい、このボンクラら！」

そう言った 工業の1人は、新田の髪の毛を掴み、クイツと引き寄せる。

「ビビリが揃うてイチビツとっても、どがいにもならんわな！

秋月、お前昨夜、ウチの1年ヤツてくれたらしいのう」

直樹はそこで、ようやく状況を掴んだ。

スツと立ち上がる。

いつものように冷静ではいらなかった。

コイツらが、一体何人いるのか分からない。

「……オイ、お前か。テツやツてくれたんは。ウチの学校のモンから今朝、金巻き上げたんもお前か」

「テツう？誰やソレ。金巻き上げた？知らんな。それより何より、誰が喋ってエエ言つたんや？

黙ってついて来るか、ここで半殺しにされて簀巻きにされて連れて行かれるか、どうするんや」

直樹は正彦の顔を見ている。

正彦はサッと目を逸らす。

多勢に無勢と言うけれど、一体何対何なんや。

お前らは一体ドツチ側なんや。

「フハッ！」

直樹は噴出してしまう。

直後、すかさず判断した。

逃げる！

直樹は振り返り、いつもの直樹の席の後ろにある窓の鍵を開ける。それと同時に、そこから飛び出した！

一連のその動作が何秒間のことだったのか、その行動は素早かった。窓から地面までは結構高さがあったが、躊躇はない。

飛び降りた瞬間、先日から痛む足首に響いたが、一切迷わない。

直樹はカバンも店に置いたまま、全速力で走り出す。

一体何人で来たのやら。

後ろを振り返ると、大勢の人間が追いかけてきた。

…その中に、正彦もいたような気がした。

前を向き直すと、前方にも 工業の生徒が。

完全包囲、いうヤツか。

こんだけやってくれたら、悲しゅうもないで。

直樹はそのまま全速力で、前方の集団に突っ込んで行く。

ザッ！！

倒れこむ　工業の連中の中、直樹も転んでしまっ
が、すぐに起き上がり、走り出す。

直樹は逃げるのを止めない。

細い入り組んだ路地裏を、ああだこうだと考えず、
倒してしまった自転車に見向きもせず、

ぶつかったおばさんに詫びもせず、
一心不乱に逃げてみる。

「ハー、ハー、ハー……ッ！」

やがて抜け出した場所は、直樹の来たことのない場所。
車1台分が通れるほどの土手。

広がる河川敷。

直樹は息を切らしながら土手の斜面に座り込み、ここまで来れば安
心だろうと高を括る。

「こっちは、ほぼ毎日、走り込んで、鍛えとんねん！ナメんなよ！」
ハア

……ハア

ハア

……ハア

独り言を言ってしまう、このテンション。
いっぱいいっぱいまで、反り返っている。
これ以上力を入れると、軸より先が折れてしまいそうだ……。

やっぱり走るっていうのはいい。
何も考えんで済む。

しばらくして、直樹は草むらから立ち上がった。
タクシーを拾って帰ろうと、辺りを見回してみる。
遠くに鉄橋が見える。

国道だ。

直樹はまた、走り出す。

迷うことなんか、一つもない。
もう俺が帰るところは、家しかない。
走りながら、後ろから車が近づいてくることに気づき、直樹はスピードを落としながら少し左に寄った。

タクシーかな。

そう思って振り返ってみた。

違う。

白い車。

直樹は向き直り、国道を目指す。
と、

次の瞬間

——
ドンッ……!!

鉄橋が、逆さまに見えた。

スロウ。

舞い上がる。

顔面が地面に辿り着くまで、少し時間がかかったような気がした。

ダンッ！！

直樹は咄嗟に手をつく。

受身を取ることもできない。

体は土手の斜面に思いつきり打ち付けられ、ズルズルと下へ下へと滑り落ちて行く。

顔に草が擦り付く。

青臭い匂い。

摩擦が止まると、目の前に靴。

―― 折れ曲がった？足？

しかしそれは、靴のみ。

拾おうと、腕を伸ばそうとするが、体は思うように動かない。

何とか、どうにか体勢をひっくり返す。

土手に視線を上げると、車から降りてくるのは 工業の生徒。

…… また、笑ってしまった。

コイツら、マジか。

車で轢きやがった。

「…… ハハハッ！」

…もう、行かれん。

これまで一度だけ、足の骨を折ったことがあるが、どういふ感覚だったかは覚えていない。

この痛みは骨が折れてしまっているのか。

よく分からない。

体の痛みと反比例して、妙に頭ははっきりしとるもんやな。

工業の生徒が3人、直樹を見下ろしていた。

「逃げられるワケないやろ。目エ開いとるな。死んでへんな」

頭だけは、妙にはっきりしている。

落ちたところが柔らかくて、それが幸いしたのか、それとも不幸なのか。

俺はこの後、どうなる？

3人が直樹を抱え上げた。

体に力が入らない直樹はされるがまま。

そのまま直樹はトランクに押し込まれ、間もなく車は走り出す。

真っ暗な中、直樹は呼吸を整えることに集中し始めた。

急流 4（前書き）

暴力描写があります。

急流 4

車は走り続ける。

とにかく、お尻辺りと左足首が痛い。

直樹は車に揺られながら思考を巡らす。

さっき見た、逆さまの鉄橋。

その向こうの夕日。

車に轢かれにやらんほどのことを、しでかしたか。

……やっぱりな。

つべこべ考えずに、やることをやれ。

そう考えた。

そのやることは、間違っているだろう。

そう、大体の予想は付けていた。

何もしないのは、俺がやってないだけだと、俺にはできないと、そう決定付けていたまで。

アホになるのも難しい。

天井が分からへんわ。

真っ暗な中、随分と時間が経ったような気がした。

何も見えないので、今が何時なのかも分からない。

トランクの中つてのは随分揺れるんだな…。

そんな感想。

これから自分がどんな目に遭うのか。

俺は完全に攫われたんだ。
命を落とすかもしれないし、落とさないかもしれない。

直樹はトランクに寝そべった状態で、手を開いては閉じ、開いては閉じを繰り返す。

肩も動かしてみろ。

間違いなく、両方とも動く。

右ひざを曲げるようにして上げてみる。

これも間違いなく動く。

3本の手足、これだけあれば十分だろう。

メチャクチャ痛いので、頭に来た。

トランクが開くと同時に……

我ながら恐れ入るのは、こんな状態の中、俺が、俺に対する、俺の生への執着や。

俺はどこかで、死ぬなんてことは無縁と考えている。

死への思想がない俺は、生への執着が人一倍なんだろう。

いくら枯れてしまっても、こればかりは変わらないと見た。

だから、決めた。

トランクが開いたら飛び出して、そこにいるヤツを手当たり次第潰してやる。

そして逃げてやる。

俺は生きていて、

死にたくないんだ。

長い間走っていた車は、やがて止まった。

ブレーキの勢いで、トランクの中を転げまわった直樹、何かの角で頭をぶつけた。

…イラッとする。

ボタンッ！

ドアを閉める音。

外で話し声が聞こえてきた。

声の種類を聞く限り、…4人はいる。

この間は7人相手に、結構余裕やったからなあ。

左足とケツの痛みを引いてみて、

…上等じゃ！！

カチャッと音がして、トランクが開く。

直樹はそれと同時に、外へ飛び出した！

「…ッ！？」

しかし、自分の取った行動は、想像したものとはあまりにも違うもの。

飛び出すつもりが、巻くれ落ちる。

「何じゃコイツ！！」

連中の声も無視し、直樹は自分の左足を見てみた。

道理で痛いワケや。

立たれんやんけ。

直樹の足首は内側に90度以下に曲がり込み、くるぶしが2つつあるような形になっている。

車に手を置き、一人で立ち上がる直樹。

周りを見回してみた。

どうやらここは街からかなり外れた、野球のグラウンド。

かなり広い敷地だ。

辺りは暗い。

小さな建物：トイレなのか、その街灯に照らされた人数を数えると、相手は全部で8人。

人数と力を確認しながら、この期に及んで考える。

……予想より大分多いな。

でも、行ける！

連中の中の一人が喋り始めた。

「逃げるからアカンのやぞ。お前、しかし丈夫にできとるな。足折れとるだけかいな」

その言葉に、直樹が答える。

「こりゃあケツも折れとるで。見てくれるか」

余裕を見せるが、満身創痍。

ただ自分の中で幸いだと思っているのは、恐怖心がないこと。

「ウチのボスがなあ、今から来るんじや。その足じゃ逃げられへんやろうが、一応縛らせてもらうで」

「アホか。どんな趣味しとんねん。言うこと聞いて縛られる思うか。それ以上近づいてみい、潰すからな」

車に手をついて、やっと立っている。

そんなヤツが言うセリフではないと、自分でも感心している。

……この後、自分はどうなるんだろうか。

直樹の目の前で、相手は車からロープを出して近づいてきた。

恐怖心はない。

だけど、余裕もない。

直樹は右拳をギュツと握り締め、大きな右ストレートを繰り出す。

彼はそのパンチを余裕でひよいと避けた。

勢い余った直樹の体は、そのまま地面に倒れこむ。

しかしすぐに立ち上がり、次の攻撃。

前を出す拳。

避ける彼。

左足が痛いのに、慣れてきた。

そう、自分に言い聞かせる。

直樹は左足を地面に着き、ファイティングポーズを取る。

8人いるうちの何人かが、それを見て身構えた。

そんな彼らを、ロープを持った彼が制する。

「お前、そんな状態でまだ粘ろうっちゅーんか。エエやろ、俺が大人しゅうさせたる」

その言葉に、外野の何人かが反応した。

「オイ！何でや！フクロにしたったらエエやないか！！」

「アホウ！無傷で連れて来い言われとるんやぞ！？

大人しゅうせんから車で引つ掛けたったが、これ以上ケガさせたら何言われるか分からへん！

まあ、せやけどコイツはコイツで言いたいことあるみたいやからな。コッチは聞く耳ないし、大人しゅうさせなアカンやろ」

言い終えると、彼はすごい勢いで直樹に突っ込んできた。

それほど速いとは思わなかったが、そのパンチはガチンツ！という音とともに直樹の顎を捉える。

かわせなかった。

すかさず、逆からも。

…気が付けば、直樹は尻餅をついていた。

たった2発。

たったそれだけで、もう立てない。

「くそッ！！」

広いグラウンドに、直樹の声が響き渡る。

あっと言う間に後ろ手に縛られ、髪の毛を押さえつけられるように地面に座らされてしまう。

「ウチのモンに手エ出したらどうなるか、知つといってもらわなアカンからな」

直樹に掛けられた言葉は、これが最後だった。

何かを考える余力はない。

そんな直樹の周りで、連中たちは談笑を始めた。

……随分待たされる。

何で待つてもないヤツを、こんなに待たされなきゃいけねんだ。

直樹は自分の左足を見つめながら、ただただ時間が流れるその空間を過ごしている。

やがて、遠くの方から車のライトが近づいてくるのが見えた。

全員が一斉に黙る。

直樹も顔を上げる。

やって来たのは2台の車。

中からは4人の影と、

「おい、いつまで寝とんねん。着いたぞ、起きろや」

そんな声が聞こえてきた。

「何で俺がこんなトコまで来なアカンねん！ほんま、今日は見たいテレビがあつたんやぞ！

何回も言うてるやないか！1年がどうこうとか、俺は知らん！」

「何言うとんねん！いつまでグズツとんじゃ！ナメられたら終わりやで、健！

バチツと締めとかんとナメられるんじゃ！」

…また更に4人がこちらに近づいてくる。

「まったくよう！面倒クサイなあ！お前らで勝手にやっつけや！」

そう言つて、頭をグシャグシャと掻き毟りながら近づいてくる4人のうちの1人に、直樹は目を奪われた。

「……ッ」

頭を振つて、自分を押さえつける手を払いのける。

目を見開き、視線を外さないまま。

後ろ手に縛られた状態で、立ち上がった。

そこにいたのは、間違いなく……

——
やっとか。

会わせる顔がないから、こんな手段で通してきた。
まさか、こんなタイミングとは。

「……は！」

なあ、何と呼べばいい……？

ニヤケそうになる。

それをグツと堪えながら、

恫喝するように、

全身の力を込め、

叫ぶ！

「お・おおばやしィィィ——ッ！——」

その声に、彼はフツと顔を上げ、足を止めた。
一瞬、ニツと笑ったように見えた。

しかしその口は、すぐに真一文字に閉じられる。

後の3人は目に入らない。

後の8人も気にならない。

彼は隣に立つ仲間に問うた。

「アイツか」

「おう、みたいやな。俺もよう知らんねん」
更に近づいてくる彼。

随分と、背が伸びたな。

……パクウ。

「まあ何や、こんなに大勢でみつともない」
連中は誰も口を開かない。

直樹が喉元で感じているのは、逸る鼓動。
押し出した声は、ともすれば震えそうだった。

「……おい大林。俺はな、このまま将来は無頼漢になるか思ってたで」

「無頼漢？ハハッ！お前、高校生の段階で何言つとんねん」

やっぱりコイツは少し違う。

こんなことを言っても、そんな風に返ってくる。
いい感じのレベル。

が、……とりあえず、今しなきゃいけないこと。

「おいお前ら、コイツにこんなことして、知らんぞー？」

そうパクが喋り始めた。

「何て聞いているか知らんが、コイツの名前はな、狂国狂心丸。狂った国の狂った心の丸や」

パクの隣で、誰かが口を挟んだ。

「何や健、知り合いか！？」

「知り合いも何もお前、俺は中学のとき、1回コイツに殺されとる。まあ俺の場合、その後すぐに雷に打たれて生き返ったんやけどな。

コイツはな、磔拷問受けたる母親から産み落とされたんや」

パクのその演説を、黙って聞いている連中たち。

「コイツはアレやぞー？あのアンドレ・ザ・ジャイアントに『おい、スプライト買って来い』言うて、使いッ走りに使うようなヤツや。そんな時200円渡して『お前も好きなん買ったらエエ』言うてやんねん。

ほしたらあのアンドレが『えー！？ほんまにエエん！？』言いながら、ちゃんとスプライト買って来やがる。

そんな男や。

おいコラ、早うそのロープ解かんかい。殺されるぞー？」

その声に、それまで直樹を押さえつけていた連中が、慌てて後ろ手のロープを解きだす。

……とりあえず、済ましとかなきゃいけないこと。

直樹の声はいつもより大きい。

「おいコラ！！今回のコレは、全部お前の命令か！！」

パクの反応を待つ。

彼はしばらく黙り、やがて、

「おう、そやな。まあそんなところや。アンドレの兄貴分をとっ捕まえるんやからな。人数は要るやろ」

嘔吐けッ！！

さつきゴネよつたやないか！

今度は直樹の方から、足を引き摺りながらパクに歩み寄った。

「ほんならお前は知つとるんやな！？こん中に、俺の先輩の金を巻き上げたヤツがおるんや！

そのカツアゲもお前の命令か、大林！！」

瞬間、パクの顔がクツと締まったように見えた。

パクが連中に向かって言う。

「おい、ツツちゃん！」

塊の中の一人がパクに近づいた。

「今回の話、ツツちゃんから出とるんよな？」

そう言つて、パクは彼に向かって手を差し出した。

「奪つた分、全部ここへ出しや」

—— パクは、直樹を疑わない。

「お、おい！ちょっと待ってくれや健くん！ゼ二なんか奪つてへんつて！

何やねん、こんなヤツの言うこと信用するんか！？」

そこまで言い終えた彼に、パクは近づいた。

無言のまま。

そしてイキナリ、彼の腹部に膝蹴りを

ボクッ！！

すかさず背中に、肘打ち！

ドカッ！

もう一度膝蹴りを、

ドゴッ！！

「ウゲエッ！ウヘッ！ゲエエッ！！」

彼はその場に嘔吐して、倒れ込む。

無言のままの、パク。

そのまま直樹に向き直った。

「ほら、今度はお前や。ウチの1年ヤツてくれたそうやないか。どがいにすんねん」

「……………」

その状況を見ながら、直樹は思う、
……………何も、考えられ
ない。

とにかく、長かった。

直樹はそして、テツのことを思い出す。
詫びるわけにはいかない。

「それがどうしたんだ！？アアッ！？」

そう叫び、パクに詰め寄った。

パクもこちらへ詰め寄ってくる。

2人は額を引っ付け合いながら、押し合う。

「おい、随分背エ伸びたんちゃうか？」

パクはあの頃から、見た目が変わっていない。

背が伸びて、

…ん？少し後ろ髪が長くなったのか。

相変わらずの金髪のオールバック。

直樹は自分の額でパクの額を押さえつけながら、

「まあ背エ伸びた言うても、俺には勝たれへんけどな！」
それを押し返しながら、パクが言う。

「おおい、虎の皮被つとるキリンに身長で勝つたらアカンやる！」

別に、せえの！とは言っていない。

パクが喋り終わったのを合図に、お互い大きく仰け反り、力を溜め、頭を振り下ろす！

ゴツンッ！！

重い音。

お互いがその痛みと勢いで体を後退させる。

「「イダダダッ！」」

2人で同じ感想を言い合う。

直樹は思う。

少し話そうか。

そして拳を握り、身構えた。

どうやらパクも同じ考えのようだ。

この感覚に陥ったのは、どれだけぶりだ？

まだ動いてないのに、リズムを刻む。

聞こえるのは、ドヴォルザークの『交響曲第9番 新世界より』

「おい健！一体どうなつとんや！お前何やつとんねん！！」

外野がうるさくって、黙れと思う。

「ウツサイ！！黙って見とれ！！」

パクウにはいつも、助けられる。

今のも、そうなんだ。

「ほんなら、俺から行くでエ！！」

パクの右拳が直樹の顔面を捉えた。

ボクッ！

痛い。

だけど我慢できる。

今度は直樹の右拳がパクの顔面を狙う。
バクッ！

「何じゃそら！全然痛うないぞ！」

それを聞いて微笑んでしまった。

パクの顔にも薄い笑みが浮かんでいる。

……忘れたいことがたくさんあるから、話すときに思い出してみよう。

間に合って、良かった。

お前ら2人なら、話を聞いてくれるんやろ。

2人は、喋った後に1発、

喋った後に、1発。

それを繰り返す。

「なあ！タケシは、元気・かッ！」

ゴッソッ！

「おう！アイツ、印刷会社で、働いとる・でッ！」

バキッ！

パクウのパンチ、こんなに軽いはずがない。
足が折れとるのに、立ってられるからな。
もっと、思いつきドリツイてくれていいぞ。
俺にはできんけど……

……なあ、俺の弱点を知ってるか？

「タケシは社会人か！スゴイ、なッ！」
ゴンッ！

「おう！立派にやつとる、でッ！」
ドスンッ！

……俺の好物、話したっけ。

「妹さんはッ！」
パチンッ！

「あんまり、話せんけど！取り合えず、元気みたいや、ぞー！」
バンッ！

「ハア、ハア、ハア……ハア……ハア……ッ」

……俺は、パンツはトランクス派やぞ。

朝は、食事の後に歯磨きするぞ。

「2人とも、元気やったら、良かった・わッ！」
ガツンッ！

パクの口から血が流れている。
自分も。

口の中を舌でモゾモゾ探ってみた。
「ペッ！！」

…折れてもったな。
糸切り歯か。

「おう！元気元気！元気や！お前も元気そつやな！」

ドスンッ！！

パクの拳が直樹の胃の辺りにめり込んだ。
そこで膝をつく直樹。

……なあパクウ。

タケシは俺のこと、覚えてるかな……。

膝について俯いた直樹、

「おいおい何や！もう終わりか！？」

パクのその言葉に、声を上げた。

「あ——ッ！！しもた！パクウ！コンタクトが……ッ！！コンタクトが片方、落ちてしもた！！！」

「ええッ！？何やて！？マズイやないか！！！」

2人は急いで地べたに張り付き、コンタクトレンズを探し始める。
喋っているのは2人だけ。

周りを囲む連中には、2人の会話やこの状況がうまく飲み込めない。
黙ったまま、ただ見ている。

「……おい直樹、こんなに暗かったら探すの無理ちゃうか」

「そうやな……」

2人は胡坐をかいて向かい合った。

「……パクウ、……ごめんな」

そう言った直樹。

当然、今回のことではない。

「イヤ、お前が謝るなよ。俺らも悪かったんや。

お前ンとこのオヤジさん、俺らみたいなの嫌いなもの知ったのにな。
な。

お前は悪ないんやから謝るなよ。

どっちかいうたら、その後ビビッてもうて連絡できんかった俺らの方が……なあ、せやろ？

俺の方こそ、ごめん」

2年ほど前の、あんなこと。

昨日のことのように、パクには通じた。

「なあパクウ、コレ見てくれよ」

右拳をパクの前に出す直樹。

「俺なあ、昨日……？一昨日？ドツイたったヤツの齒アに当たってな、穴開いてもうたんや」

「うわッ！エグッ！バンドエイドくらい貼っとけよ！」

……もう少し、話をさせてくれ。
そう思う。

ここを目指しとったんやから。
詳しいことは、また今度にしよう。

この約2年。

わざと目立つような行動を取り、
髪型を変えず、

目印

旗を立てて、やってきた。

そう告げた直樹に、パクは言った。

「ほんまに、わざわざそんなことせんでも……。
お前は前から、変に人間臭いからなあ」

人間臭いと言ってもらった。

俺は特殊なんじゃないか。

頭がおかしいんじゃないか。

そんな風に思うことが何回もあった。

人間臭いんなら、それはとっても良いことだ。

何だかよく分からないが、まだまだ生きて行こう。

そして間に合って良かったと、もう一度直樹は思った。

再び 1

直樹はパクに、あれやこれやと質問攻めをしている。
あれから3週間。

日曜日も含め、2人は毎日顔を合わせていた。

この間パクは二度、直樹の家に遊びに来た。

「親父は転勤で東京やから、おーらん！」

そう何度も言っただのに、2回ともパクは頭に黒いスプレーを振りかけ、ピチピチのカッターシャツと学生ズボンでやって来た。

パクにはやつぱり、笑わせられる。

直樹はずっと不思議に思っていたことを尋ねてみた。

「なあ、お前何であんなアホ高校行ったんや？もつとエエとこ行けたんちゃうん？」

「イヤ、俺はホラ、卒業したらすぐ親父んとこで働くし。勉強でしんどい思いする必要もないねん」

「お前の学校つて、ヤ。ザ予備軍なんやろ？」

「アホウ、そんなモン噂や。そんなワケないやろ。ヤ。ザ専門学校なんて聞いたことないやろ。嘘じゃ、そんなモン」

そして、会ったら確実にしなければいけないことがあった。

中学生時分に借りていた学生服を、パクに返すこと。

その際、パクは

「えー、返してもらってエエんか？」

と言った。

とても大事なものだろうということは分かっていたし、クリーニングに出していいかすら迷った。

「当然やろ、借りとったんやから」

そう言おうとも思ったが、何かに反するようで言つのは止めておいた。

ようやく会えてから3週間。

いまだにタケシとは会えていない。

彼の勤め先は2交代制になっているらしい。

「何かなー、日曜休みつちゅーのも月に1回あるかないかくらいなんやなあ」

パクは、相手が社会人だと気を遣うとも言っていた。

高校くらい出とかねえと。

そんな風に考えていたが、今はそんなこと思わない。

詳しいことは聞いてないが、タケシは今や家族の柱になっているのだ。

タケシは高校に行っていないと思っていたのですとパクを探していたが、もちろんタケシもそれに等しい。

あと2週間しかないから、やっぱり会いに行かないとな、と考える。

正彦たちのグループに関しては……

直樹はわざと、もう解放したるよ、という言い方をした。

どういう風に回り回っているのか、直樹は何とも思っていないのに、パクはいまだに正彦たちのことをブツブツ言っている。

直樹は本当に、もう別に構わないと思っている。

工業の連中とやり合ったときの怪我は、足首の骨折と尾てい骨のヒビ。

尾てい骨に関してはどうすることもできないので、薬を塗っている。足首は、しばらくは松葉杖だ。

この怪我を見てパクは謝りもしなかったが、別に謝ってもらわなくても良いのだ。

パクに、2週間後には俺、東京に引越すんや、と告げた。

彼はその日、黙ったまま家に帰り、次の日直樹にこう言った。

「。月。日土曜の夕方から旅行に行くぞ。タケシも来るからな」

「3人で行くんか？」

「当然やろ。お前もフラれとるんやろ？」

……パクも2カ月前、彼女にフラれていた。

3人で行く温泉旅行。

当然3人やと、言われた。

楽しみで楽しみで

タケシに会えるのが。

2人と旅行に行くというのが。

とにかく楽しみだ。

――俺はたまに間違える。

俺は頭の中で言葉を発することを頻繁にする。

これが勘違いをして口から出てしまうことが、多々あるんだ。

確認すると、深いなあ、という答えと、

そっいえば頭の中で言葉にはせんかもなあ、という答えが返ってくる。

自己分析なんて面倒だから、これはこれでいいと思う。

ただ、人と違うということが一周して自分に返ったとき、俺はまた、人にナニを贈呈することやら。

『コレが醜聞となりました』

……また、身の毛がよだつんだよ。

早いのはいいが、拙速では話にならず……

鍛錬しなければ。

単比例して、自分だけ置いていかれるのは怖いと見た。

……さて、どんな顔で会おう。

まだまだ下手クソな自分を見つめ、微弱ではあるが、振舞おう。

いつまでも非常数でいられると思つては、ダメなんだ。

びしょ濡れになるといふよりは、浸す感じ。

並んでへんぼん翩翻へんぱんするのが、今の俺の好みなんだ。

久しぶりに書いているなあ。

『お父さん』

『お母さん』

お元気でしょうか。――

温泉なんていうのは、オッサンが行くものだろう。

直樹は今もそう思っている。

ただ、そう思っているだけで、温泉に行くなんて生まれて初めての
こと。

張り切って用意した直樹。
カバンもパンパンだ。

行き先は、あの動物園のある場所。
直樹はどうしても、と言い、以前行ったあの動物園の近くのホテルに泊まることにしてもらった。

予定していた安旅館よりかかる費用は、自分が負担するという条件の下で。

あの動物園を、長い時間使って回りたい。
そう思ったのは俺の我儘。

でもあの2人は気にすることはないと思うよ。

足のギプスにも慣れてきて、松葉杖なしでも歩けるようになった。

……が、一応杖も持って行こう。
当然医者にはアカンと言われたが、そんなことは関係ない。

タケシが有給休暇を取ってこの土曜を休みにし、2連休にしたという話を聞いて、直樹とパクも学校を休むことにした。

朝早くの待ち合わせ。

何年か振りの、だ。

また、早く来すぎてしまった。

人気もなく、まだ真っ暗な駅の前で、揚々すると共に、少し緊張している直樹。

……やっと、タケシに会える。

しばらくすると、駅前のロータリーに車が1台入ってきた。
その車から降りてきたのは、パク。

「何やねん。メツチャ早いやんけ！」

「おう、まあな」

と答えると同時に、パクを乗せてきた車が小さくファンツ！とクラクションを鳴らした。

直樹の前をゆつくりと通過する車を運転しているのは、先日 工業と揉めたときの連中の一人。

彼は直樹をじーっと見つめながら、通過する際にスッと直樹に向かって手を挙げた。

手を挙げ返す直樹。

パクウにはパクウの、ツレがいる。

こうやって広がるのか。

友達100人何たらかんたら〜っていう歌があったな。

……こないだ俺を監禁しやがったヤツが。

手エ挙げてしもうたやんけ。

まあ、悪くない。

「タケシはまだか。アイツ、寝とんとちやうやろな？一発電話しとかー？」

「イヤ、エエやろ。家族起こしてもうたらアカンしな。ちゃんと来るって」

「そうか？アイツ、変わってもうたぞー？見たらビックリするんちやうかなあ。

……ああ、それとな直樹」

そう言つて、パクはタケシと会う前に教えてくれた。

今から1年くらい前、タケシの母親が蒸発してしまったことを。

今はあの家を引越し、マンションを借りて妹と2人で暮らしているということ。

俺が『母ちゃんも元気か？』って言うかもしれないと思ったんだろ
う。

……恐らく俺は聞いていた。
挨拶がてらに。

タケシのお母さんは、男と一緒にいなくなったらしい。
でも、直樹にとってはそんなこと、どうでもいいのだ。
ただただ、すごいと思った。

自立し、自分の稼ぎで城を持っているんだ。タケシは。
すごい事実だ。

17歳の直樹はそう思う。

考え事のスイッチが入ってしまった直樹。

パクがいるにも関わらず、ボーッとしている。

ハツと我に返ったのは、パクに肩を叩かれてから。

道路の先の暗闇の中、こちらに歩いてくる人が、1人。

……おいおい。

教えてもらわなんだら、誰か分からへんやんけ。

彼はあのトウモロコシのような頭を止め、前髪を下ろしていた。

何だか少し、痩せたというよりはやつれたように見える。

ただ、顔つきが自分と同級生の人間の顔とは思えないような、締ま
ったというか何というか……

——
タケシ。

最初に俺から声を掛けようと決めていたんだが、

……失敗した。

彼はもう、自分の目の前にいる。

タケシは直樹の抱えているパンパンのカバンをパンツ！と叩き、

「何や、お前。コレ、何が入っとるんや？一泊でエエんやろ？俺、明後日仕事やで？」

秋月、久しぶりやな」

と、言った。

久しぶりやなあと声を掛けようと思っていたのは、俺の方なんやで？
出鼻を挫かれた。

「……お、おう」

とだけ返事をし、何かないかと模索する。

「おいタケシ、虫歯治ってるやん。その、ホラ前歯、前なかったやんか。」

何や、異性の目を意識して、歯アくらい治さな思ってたんか」

「ア、アホウ！変なこと言うな！アレは虫歯やったんちゃうわ！ドツかれて折れとったんや！ハハッ！」

試してみたら、社会人といってもそんなに変わらない。

楽しくなりそうだと、確信した。

パクの「朝飯食ったか？」の問いに誰も済ませていないことが分かり、駅内の喫茶店で食事をする3人。

ああだこうだ、ああだったこうだったと朝早くから盛り上がる。

温泉はオッサンの行く所だと言った直樹に、2人が怒鳴った。

……行ってみて確認すればいいんだろ？

とにかく楽しくなりそうだ。

3人は電車に乗り、一泊二日の温泉旅行へと出発した。

○時間の電車の旅。

こんなところでどうかとも思ったが、直樹は当然タケシにも話をする。

そして、謝罪の言葉。

タケシは少し黙って、

「いつの話しとんねん。そんなのお前、1時間後には忘れとったわ。うーん……何ちゅーか……」

タケシはそこで一旦言葉を切り、言った。

「この間、俺も済まなんだ」

彼は、怒ってたらこんなトコ一緒に来おへんやろー、とも言った。

直樹はやっと、ホッとできた。

あの時やってしまったことは取り返しがつかないが、話してやっとホッとできた。

そしてもう一つ、気になっていたのはタケシの妹のこと。

聞くと、病院へは通わせている。でも手術しなければならぬ、と。今日は一人になるから、パクのお母さんが家へ泊まりにきてくれているらしい。

更にホッとした。

きつと楽しいだろう。

いや楽しむべきだ。

そう思っていたこの旅行。

あとは存分にソレを遂行するだけ。

3人は目的地に到着すると、まずホテルへと向かった。

部屋でゆっくりしてから出掛けよう、そう思っていたが、
「まだチェックインのお時間ではございませんので…」
と断られてしまった。

こんなとき、タケシなら必ず「エエやんけ!!」と言っていたハズだ。

しかし言わない社会人……。

見た目と正比例して行っただんな。
と、そう思う。

しょうがないので3人は荷物だけを預け、直樹がどうしても行きたかったあの動物園へと向かう。
しかし、直樹は入場のゲートをくぐったと同時に後悔をした。

走馬灯のように、思い出す。

走馬灯のように ————— ……

俺が死ぬとき、本当にこの映像を思い出すんじゃないか。
そう思えるくらい。

2人に合わせてテンションを上げながら、
以前、2人を裏切って来た場所だとは絶対に言えねえ…
そう考える。

「直樹は一回ここに来たことあるって言うてたな」
パクのその言葉にギクツとした。

「おう、あるで。任せてくれよ」

… 一体何を？

任されても困るな。

「おいタケシ、パンダやって。お前、パンダなんか見たことないや

る」

「おう、テレビでしか見たことない……っていうか、お前もないやろ！」

久しぶりのこの遣り取りだから、いろいろ考えるのは止めにしよう。

シャチのショーを見てテンションMAXの2人。

「スゲエな、オイ……！」

「おお、スゴすぎる！こんなテレビでも見たことないわ！」

直樹は一度見ているので、違う部分に着目していた。

そしてホツとする。

……良かった。

前のときと同じお姉さんだ……。

3人は次は何を見ようかと相談しながら、構内を歩き回る。

「しかしアレやなー、パンダは可愛かったなあ！連れて帰りたいなあ」

そう言ったパク。

それに対し、タケシは

「パンダなあ……俺はせやけど、見た感じの倍は可愛い思うとったよ。想像でな。」

実際見てみると50%減や。

お前も見ただろ？ あの竹をバキバキいわしてるあのツメ！

ほんで、何であんなにケツが汚いんや！

所詮クマやな」

……タケシと同意見、同じ感想を持った、俺……。

でもそのことは言わないでおこう。

「そうかー？」

と言うパクが、歩く足を速めた。

2人もそのパクの後について行く。

「……オイオイ、フラミンゴって、コイツのこと言うんか」

そこには池のようなものが広がっており、囲いがしてある中には、たくさんピンク色の鳥。

「へえ！フラミンゴなんかおったんやなあ。知らなんだ」

キレイな、とても変わった鳥。

パクがそれを見ながらブツブツと言いつける。

「コイツのアレやな、ほんまに1本足で立ってんな。まったくよう！」

「何やお前、フラミンゴの立ち方に文句があるんか」

「アホか！お前アレ見て思いつくさへんのか！王よ、王！我々の敵・巨人の王やないか！」

フラミンゴ打法、1本足打法ってこつから来とんやろ！？」

「あー、ナルホドねえ。でもよう、お前も俺も王貞治の活躍、知らんやろ。世代が違うやろ。」

俺らが知つとる巨人に王はおらんかったやろ」

「……チビん時に見とるわ。覚えてへんけど」

「ほんなら言ふなや！」

何か、違和感を覚えていた直樹。

この会話で気づいた。

「なあ、お前ら2人な、前と立場が逆になつてらんちゃうか。」

前までタケシがバカ言つて、パクウが注意してたやないか。しばらく見てなかったら逆になつてらんやな」

それを聞いたパク、

「直樹、お前もコツチ長いんやから、それを言うならボケとツッコミつて言え。」

別に前と変わってないよ。今も昔もコイツがヤッさんで俺がキー坊や」

するとタケシ、

「アホウ！何でお前がキー坊や！キー坊は俺やろ！」

2人は何故かそこで、ヤッさんのなすりつけ合いを始める。

やすしきよしの話だろう。
それくらい俺だって知ってる。

「……ちよつと待て」

争いをそう制したのは直樹。

「この中できよしさんは俺しかいねえだろ。やすしさんはお前ら2人だよ。Wやすしや」

「……ッ!!」

その言葉は火に油を注いだのか、3人の小さな小さな、とても小さな口論が始まった。

……そして、口論とジャンケンの結果。

キー坊はパク

ヤッさんはタケシ

そして直樹はヘレンさんということで、話が落ち着いた……。

3人はワイワイと昼食を済ませ、

再びワイワイと回る。

ジェットコースターは直樹が断った。

この日は土曜なので、午前中ハイスピードで回り回った3人は、昼過ぎには全て見終えていた。

2人は早く温泉に入りたいと、うるさいほどに言う。

オッサン臭いなーという意見は通用しない。

この動物園の従業員に聞いてみると、この近くに何時でも入れる温泉があるらしい。

チェックインにはもう少し早いので、3人はそこへ行くことにした。

途中、地元の学生らしき連中とパクが一触即発の場面があったが、直樹は

「ほらほら、俺、足痛いんやって」

と断りを入れた。

以前なら真っ先にタケシが出ていたのに、そのことをタケシに言つと、

「まあな」

という答えだった。

しかしそんなことよりも。

2人があれほど言う温泉というのが、ナンボのものなのか。

教えられた場所はホテル。

温泉だけはいつでも入れるように開放されているらしい。

ホテルの従業員が3人を脱衣所へと案内してくれる。

ギプスを濡らしたらアカンよな、やっぱり…。

俺も鍛えてるからな、もう人前で裸になっても恥ずかしくないぞ。そんなことを考え、服を脱ぎ始める。

「直樹、早よ来いよー」

2人は早々に温泉の方へ行ってしまった。

直樹も急いで服を脱ぎ、2人の後を追いかける。

引き戸を開け中を覗くと、庭にある池のような形の温泉が広がっていた。

このデカさだけでもエエかもしれんなー…。

2人はすでに湯に浸かっている。

そして何故か、直樹の一点をじーーーーっつと見つめているのだ。不思議に思う直樹に構わず、パクが口を開いた。

「……体積で言つたら、オトナの猫一匹はあるんちゃうか？」
タケシも言う。

「俺はセントバーナードのしっぽを挟んどるんやと思ったぞ」

直樹は2人の言葉に、

「ハア？何の話や？」

「何の話ややないやろ、直樹！隠せ隠せ！お前のソコから出とる熱気でガラスが全部曇ってもうとるやないか！」

そこまで聞いて、直樹は2人がナニを言っているのかようやく気づいた。

「アホッ！じつと見るな！！」

そう言つて、直樹も温泉に飛び込む。

ギプスに気を遣おうと思つていたけど、飛び込んでしまった。

「……………」

そして、何故か無口な2人……。

パクがぼそぼそと呟く。

「……………」しかし直樹が、あんな武器を持ち合わせてるとはな……。

秋月直樹という商品があるとしたら、アレは確実に取っ手やんなあ。

一番丈夫そうや」

「そうや、そうや」

そう答えるタケシ。

もう恥ずかしくないだろうと思つていたのに、こんな話になるとは……。

結構ハズカシイ。

でも、温泉というのはとても気持ちがいい。

パクが言っていた。

「たまには心臓を洗うとかんと」

その意味がよく分かった。

このまま寝てしまいたいと思うほど、気持ちがいい……。

再び 2

3人はお風呂から上がると、そのホテルがやっているレンタル自転車に乗って、観光地を巡ることにした。

土曜日の昼からともなると、連休でもないのにやたらと人が多い。

前も思ったけど、めちゃくちゃイイ所だ、ここは。
何よりも、海がいい。

直樹が特に気に入ったのは、何枚もの皿のような形をした岩とも砂とも言えないものが広がったところへ、激しい波が打ちつけられる光景。

それを見ながら、少し黄昏る。

一週間後には、更に離れたところに引つ越さなきゃダメなんやなあ……。
焼きつけところ。

パクが言った。

「ココ……夜来た方が面白いかもしれんなー。波ザッパーンなってるし」

「そやな。もつかい来ようや」

3人は岩場に立ち、潮混じりの風を浴びている。

そこに、見透かしたようにタケシに言われた。

「秋月、お前ほんまに向こうへ帰るんか」

「…そういうことになるなあ。俺は自力がないし」

「そうか」

黙ったまま、しばらく海の方を眺めている。

その後、もう2〜3箇所ほど観光地を回り、3人は本来泊まるホテ

ルに戻った。

もう一度温泉に入ろう。

そう言ったのは直樹。

自分の意見を曲げるつもりはないが、オヤジ臭くても結構！
そう思っていた。

お風呂から出る頃には、外はもう随分と暗くなっている。

さつき見たあの景色をもう一度見に行こう。

直樹はそう提案した。

……思い出したけど、今回のこの旅行は、俺の送別旅行ってことなんやなあ。

2人は俺が言うままに付き合ってくれる。

日も暮れかかった頃にそう思い、そして気づいた。

直樹がこうしよと言ったことに対し「よっしゃ、そうしよっ！」
という返事を、今日は何回も聞いたことに。

昼間のあの場所は風が強く、この季節だとかなり寒い。

「ほら見てみる、上着がいるだろ！俺のカバンにはコレが入ってたんや！」

そう言つてカバンの中からジャンパーを2枚出す直樹。

「用意いいねえ！さすがボンボンや！」

2人は直樹が取り出したジャンパーを着込む。

また3人で、並んであの景色を見た。

3人で、まだ昔とも言えない昔話に花を咲かせる。

「せやけど直樹は、あの時初めて人ドツいたんやろ？」

「おう、そうやで」

「アレびっくりしたなあ、ほんまに！ずーっとタイガーマスク被ってるし！ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ！」

「あ！そついや思い出した！あん時よう、ほんまお前ら2人先々帰つてくし！」

片っぱはオヤジがオヤジでボンボンやゝ言つて、片っぱは在日やゝ言つて！結局朝までおつたの俺だけやつたんや！」

「ハア？あん時パクウも先帰ったんか？」

「おう、コイツ一人置いて帰ったで！」

ありやお前が悪いんやろ。ポリに『死ね！』言つたら、そりやお前……」

「イヤ、ちよつと待つて。在日で早く帰れるって何やねん」

「まーまー、いろいろあんねん。変に氣イ遣われたりするんやな」。俺、日本人なんやけどな」

パクはああ見えて、結構ナイーブだった。

高校では日本の名前を名乗っている。

「俺はイジメられるタイプちゃうから、氣イ遣われんねん」

やっぱり誰にだって悩みがある。

望まなくても、周りが与えたりするんだ。

「ところでな」

と違う話を始めたのはタケシ。
女の話だ。

「ああ、俺はついこないだフラれるまでずーっと女がおつたで。直樹もそうやんなあ？」

「あ、ああ。俺もおつた」

「……………」

タケシは黙ったまま聞いている。

「こないだフラれた彼女っていうの、高校生か？」

「イヤ、社会人やで」

そこまで言つたところで、タケシのいつもの大騒ぎが始まった。

「お前ら、アホウ！！ちょっとは氣イ遣え！！誰がソコまで俺に説明せえ言つた！？」

一人だけ立ち上がっているタケシ。

「ハハッ！直樹、コイツはいまだに童貞である！ロソリー童貞、頑なに守ってんで！」

「おいちよつと待てエパクウ！秋月は女がおつたつていう事実があるだけでな、童貞じゃないつていう保証はないんちゃうか。ひとつ聞いてみようやないか」

その問いに直樹、

「イヤ……とづくに済ませたよ」

途端、タケシはキャ————ッ！！と発狂した。

「くっそう！おまいら、ちつとばかりツラがエエと思って！裏切りモン！裏切りモン！アホウ！肥溜め！！」

「…肥溜めって何やねん」

辺りを見渡すパク。

観光地だけあつて、この時間になつてもまだ人がチラホラいる。

「タケシ、あそこに女子2人発見。声掛けて来いや」

「エエッ！？」

「ホラ見てみい。な？コイツは目の前にしたら途端にこうなんねん。お前、人のこと肥溜め呼ばわりしてる場合とちゃうぞ？」

…この年頃は、こういう話題に熱くなるモンなのだ。

「コワイもんしゃーないやんけ！そうや！こん中で一番男前は秋月、お前や！お前、声掛けて来い！」

俺は待つといてやるから！お前が声掛けて来い！！」

「えー、ナンパか？やったことないぞ」

大騒ぎの3人の声は、その静かな場所に響き渡る。

2人は

「エエから行け！！」

「イヤじゃッ!」
を繰り返している。

その観光地の駐車場のすぐ傍の岩場で喋っていた3人。
何かあったのか、それまでチラホラいた人たちが大慌てで車に乗り込み、出て行くのを見た。

「あーあーあーあー、ホラ! チンタラしてるから帰ってまうやないか!

秋月、まだ間に合う! 追いかけて来いッ!」

「……………」

……タケシはマジだと、悟った。

まあこれも勉強か。

そう思った直樹、

「しょうがないな! 一体何て声かけりやエエんだ……」

ぶつぶつ言いながら一人その岩場から飛び降り、駐車場に停まっている車に向かって歩き出す。

しかしその車は、直樹を待つことなく出て行ってしまった。

振り返ると、項垂れるタケシの姿。

そんッなに女に飢えとるんか、アイツは……。

直樹がそう思っていると、またその駐車場に車が入ってきた。

お。女だけの車だったらいいなあ。

が、その車は直樹が声を掛けるにはたじろぐ、というより掛ける必要もない車種。

ベンツだ。

女の子がベンツに乗って来おへんわなあ。
直樹は2人のところに帰ろうと歩き出す。
その背中を車のライトが煌々と照らした。

振り返ると、何台ものベンツが連なって入って来る。

何や一体……？

何でベンツばかりやねん。

直樹は不思議に思いながら、しかし気にすることもなく元の岩場へと足を向けた。

その時、直樹の後ろから、

「オイ！ワレじゃ！オイツ！！」

その声に先に気づいたのは、パクとタケシ。

こちらに視線を向け、すぐに岩場から飛び降りて直樹の元へと近づいて来た。

そこでようやく、声を掛けられたのが自分だということに気づいた直樹。

振り返る。

1台のベンツから降りてきたのは『いかにも』な人。

夜にも関わらずサングラスを掛け、短いクルックルの頭。

……ヤバイ。暴。団だ。

その男はこちらへ歩いてくる。

「オイ、ワレら、こがいな時間にこがいな所で何しよんや。

今からワシらの会議があるからのう、早よ家へ帰らんと見たないモン見ることになるぞ」

辺りを見回してみると、さっき急いで帰って行った女性たちはおるか、人っ子一人いなくなっている。

その場所にいるのはベンツから降りてきた連中のみ。

「何ボサツとしとんじゃコラ！！足痛いんやつたら早よ帰らんかいッ！」

そう言っつて、そのパンチパーマは直樹の足をギュツ！と踏みつけた。さっき、調子に乗って岩場から飛び降りたとき少し響いた左足。

「イタツ！！」

思わず声を上げてしまうほどの痛み。
それを見てパクがズイツと前へ出た。

「オイコラ、何するんじゃッ！公共の場で俺らが何しようとして勝手やる！知ったげな顔でピーチクパーチク言うとんやないぞコラ！！」
その言葉に、パンチパーマは「ハアッ！？」と言いながら、更に歩み寄ってくる。

足を踏まれてイラッとしたが、いくら何でもこれは止めなきゃいけない。

相手が悪い。

そう考え、直樹は手を伸ばそうとしたが、それより先に動いたのはタケシだった。

「やめエ、パクウ！」

その声に直樹は伸ばしかけた手を引っ込め、タケシを見遣る。

「イヤ、ほんますいません！僕ら観光客で、事情も何も知らなんだんですわ。ほんとに申し訳ないです」

タケシはそう言って、深々と頭を下げた。

それを見て、パクは少し温度が下がったのか、握っていた拳の力を抜く。

だが、相手が相手。

ボクッ！

頭を下げたままのタケシの腹を、パンチパーマはいきなり蹴り上げた。

タケシはその勢いで尻餅をつく。

「こっちゃああのう！売った買ったで生きとんじゃ！冷とうならんうちに帰れ言ったのドツチャ！？」

クソガキが！調子に乗っとんちゃうぞ！！」

タケシが蹴り上げられたことで、パクの体にまた力が入る。

直樹も同じように拳に力を込める。

「ハハハッ！エエ大人が上等やんけ！ハッ、カッペヤ。ザが田舎でひっそり暮らしとってから、社会の常識知らんみたいやのう！都会のガキがいつちよ揉んだるか！！」

パクはそう言うと同時に、パンチパーマの胸倉を掴み寄せた。

こちらの騒ぎに気づき、何人かが歩み寄ってくるのを目の端で捉えながら、しかし直樹は危ないと思う以上に、頭に血が上っていた。

「おい！何しとんじゃ！？」

少し離れたところから声がする。

直樹はパクのすぐ後ろで身構えながら、冷静な頭の隅で、この後どうなるんだろうかと考える。

しかし、そんな直樹を遮ったのもまた、タケシ。

タケシはパクとパンチパーマの間に体を挟じ込み、その体勢からパクの横っ面を思いつき殴り飛ばした。

バキッ！！

横に吹っ飛び、倒れ込むパク。

「ほんまにすいません！」

そう言つてタケシはまた深々と、そのパンチパーマに頭を下げる。

「オイオイ、服シワツシワやないか。コレ、どないするんや」

それを聞き、タケシはすぐにポケットから財布を取り出し、中にある札を全て差し出した。

「これで何とか堪えたってください！」

札を受け取ったパンチパーマを確認して、タケシは今度はその場に膝を付き、額を地面に擦り付ける。

「この2人は普段からアホでもなんなんです！よう言つときます！鎖付けて地元へ帰ります！だから勘弁してください！」

その光景に、直樹とパクは言葉も出ない。

パチパチと音をさせながら、パンチパーマは札の数を数えている。

「……まあエエやる。コツチも忙しいからな。
分かったんなら、早よこつから去ね。今度見つけたら、確実に埋めるぞ」

そう言つて背を向け、歩いて行つてしまった。

タケシはそれを見てすぐに立ち上がり、2人の腕を引っ張る。

「オイ何しとんねん、早う来い！ホテルに帰るぞ！」

「……」

2人は声を出すこともできない。

タケシに腕を引っ張られ、その場を後にする。

3人は並んでゆつくりゆつくり歩きながら、ホテルへと向かった。
誰も何も喋らない。

15分ほど歩いたところで、ようやくパクが口を開いた。

「あー、痛いわあ！おいタケシ、本気でシバかんでもエエやるお前
！」

そうにこやかに言いながら、タケシの肩を突つつく。

タケシの顔はまだ、沈んだまま。

「そ、そうやな、見事に入ったな。パクウ、齒ア折れてへんやるな？
タケシやるなあ、まだまだ現役やんけ！」

そこでタケシは俯いたまま、少し声を張った。

「あのだ……ワリイ。俺、何か問題起こすワケにはイカンねん。
今の職場も無理やり擦じ込んでもろうたし、クビになったらアカン
ねん。」

母ちゃんおらんし……美奈子がよう……俺が稼がなアカンからよう
……。

こがいなこと言つて、セコイか……？ハハハッ！
俯いたまま。

直樹は何か声を掛けようとした。

が、先に大声を張り上げたのはパク。

「セコないよ！！！」

3人はその場に足を止める。

「タケシ、ワリイ。ありや俺がドアホ通り越えてドマヌケやったわ。お前のこと考えんでな。悪りかった。スマン。

ヤ。ザと揉めてどないするんやってなあ。なあ直樹！」

「お、おう！そうだよな。ごめんな、タケシ」

……俯くなよ。

「イヤ、そんなにして謝られたら、俺も困んねんけど……」

「ハア？何やソレ！じゃあ3人とも気にするなっちゅー話やな。

そういえばホテルの2階にゲーセンがあつたな。ホテル戻ったら遊ばや。

あがいなカツペパンチパーマにゼニ全部くれやがってほんま！俺が奢つたるからよ」

さっきまでの雰囲気に戻った。

……良かった。

直樹も何か言おうと思い、

「なあ、ホテル戻ったらもう一回温泉入ろうや」

その言葉にタケシとパクは振り返る。

「……俺はもう、お前とは風呂には入らん。なあタケシ！所詮俺らはスズメとツバメ。

○ン。が独立して『一人でできるモン！』って言うてるヤツと一緒に居れません！」

そう言つて、2人は駆け足を始める。

「何じゃそら！！喋るワケないやろ！！」

走れない直樹、早歩きで追いかける。

……一週間後にはこの2人と、遠く離れて暮らさなきゃいけないことになる。

そう思うと、いろいろ言わなきゃいけないことがあったような気がする。

パクウもタケシも、何かにまみれて生きてるんや。

体に良いこと全て試してみるのもいいかもしれないが、あの頃の俺は生きているのやら死んでいるのやら。

……一週間後には、2人と離れなきゃいけない。

それ以後、誰も昨夜の出来事に触れることはなかった。

楽しい出来事ではなかったからな…。

次の日の昼過ぎにはその地を離れ、地元へと戻った3人。

前回もそうだった。

逸る気持ちといきり立った心境の中で移動した行きはとても長く感じたのに、帰り道の何と早いこと。

昨日待ち合わせたあの駅に、もう着いてしまった。

「あんよう、有給休暇取ってしもつたから、また日曜につてワケにはいかへんねん」

当初は、余分にかかった金額は直樹が負担するという話だったのだが、その分はタケシが全て出してくれた。

奪られてしまったお金とは別に、カバンに忍ばせていたお金。まぎれもないタケシのお金で払ってくれた。

「あー、構へんよ。お前は将来おエライさんになるんやろうから、そんな時また奢ってくれや」

俺がエライさんになるかどうかは知らないが、タケシの言う通りなんだ。

負担しようとしていたあのお金は、俺が稼いだものではねえんだよな。

自分の限界に、身をつまされる思い。

それと等しく感謝し、感心し、……寂しかった。

俺も向こうに行ったら、アルバイトをしよう。

「多分、見送りには来れへんねん。悪いな。

今回の家にはよう、電話もあるからよ。向こう着いたら電話番号教えてくれよ」

そう言つて、タケシは小さな紙に自宅の電話番号を書き、渡してくれた。

「じゃあな！バイバイ！」

そして去つて行くタケシ。

『さようなら』ではなく『バイバイ』で良かったと、いまだに思つてしまう。

この場で『家まで送るよ』はおかしいんだろう。

そういえば、俺はタケシの言葉に返事もせなんだなあ……。

「俺はお前、メツチャ暇やからよ。直樹、明日何するー？」

パクはそう言う。

あと一週間、付き合ってくれるんだ。

ホテルでタケシの支払いをする姿を見て、確信した。

ここから東京までの新幹線の往復代。

これは今の俺にとって脅威的な数字なんや。

毎週末こつちに遊びに来るよ、なんて言つたら、タケシに怒られそうやな。

そのあと一週間の放課後を、直樹とパクは何をするでもなく共に過ごした。

これはこれでちゃんと意味がある。

そんな風に思う。

—— 数年の我慢と、当初は思っていましたか……

いざこの地を後にすると、今度は違う我慢が身を包む。
108つのいくつか、俺の神経を邪魔しているんだろう。

土井さんは元々こっちの人なので、あっちには一緒に行かないらしいです。

こっちに残るそうですよ。

向こうに帰ると、今度は新しいお手伝いさんです。

土井さんがいいんだけど。

そう思うのと、

土井さんが羨ましい。

そう思う。

逆算なのか何なのか、俺がもう少し早く生まれていれば、今この瞬間、もう稼ぎがあつて引越しなくて済んだんじゃないかと思つてしまいます。

身も蓋もなく、あっちが立たないのは分かっていますが、そう思つてしまいますよ。

『お父さん』

『お母さん』

最低でも一月11万丸々必要な感じで、今の俺には到底追いつけない金額です。

だったらこうしようと思つたこと。

気丈に振舞おうと思います。

独活という木の大木で、握り拳も柔らかく……

ですが、自分を呪うにはまだ早いような気がします。
違いますか……？――

その日、。時の新幹線に乗るといのはパクに教えていたが、気がかりばかりの直樹。

朝から母親を質問攻めに行っている。

向こうで住むのは以前住んでいた家なのか。

向こうで通う高校は何て高校なのか。

こっちの高校の手続きはもう済ませているのか。

すると、編入手続きは向こうに着いてから、という答えが返ってきた。

俺は別に、そんなことはどうでも良かった。

未練があるから聞いていただけ。

会話というには少しレベルの低いもので、直樹は珍しく母と新幹線のホームに来るまで喋り続けている。

「僕はもうコッチに慣れちゃったからさあ。言葉遣いも変になってもうたし。ほんまは引越したくないなあ」

はつきりと言った慶也のその言葉に、直樹は心の中で肯きはするが、俺もお前も……と考える。

新幹線に乗り込もうとしたその時、パクが見送りに来てくれた。その後ろには、タケシの姿も。

「悪い！遅なっただ！」

パクが言う。

「何やタケシ。仕事は？」

直樹のその問いに、

「イヤ、ちょっと時間もろうつたんよ。やっぱりな、見送りくらい来んな」

タケシはそう言ってくれた。

少しは社会人のルールを知っているつもりだ。

有給休暇を取った翌週に抜け出す時間をもらうなんて、どれだけ難しいことだったか。

俺だって知ってるつもりや。

直樹は何と言っていていいか分からずにいた。

言葉が出ない。

新幹線の開いたドア越しに、2人の顔を見つめながら。

やがてタケシが、何かの包み紙を直樹に差し出した。

「これなあ、餃子やねん。こんな小っちゃいやツ。お前の家がこんなん食べるか分からんけど、一応な」

「マジかよタケシ。ありがとう、頂くわ」

直樹はそれを受け取る。

そのタケシの隣で何やらモジモジしているパクも、後ろ手に風呂敷の包みを持っている。

…もうエエ加減、諦めろよ。

「ひょっとしてパクウ、ソレも土産？俺にくれるヤツちゃうん？ちようだいや」

するとパクは、その風呂敷を前に持ってきて言った。

「イヤ、何ちゅーか…コイツの後に出しにくいんやがなあ。コレも一応食いモンやねん。

ウチのババアがよう、直樹が今日引越す言ったら、新幹線の中で食べてもらえ！言うて。焼肉の弁当やねん。

お前の母ちゃん、こんな食わへんよなあ。まあでも、もろうつてや」

そう言つて、直樹の前に風呂敷包みを差し出した。

…ヤバイ、と思つた。

いろんなことを思い出してしまふ。

もう少し大人になれば、これくらいのこと難なくクリアできるようになるんだろう。

直樹はその風呂敷を受け取るために、一歩前へ出た。

体が半分、新幹線からはみ出す。

そして受け取り、もう一歩前へ出る。

タケシからもらった紙包みと、自分の荷物を脇に抱え、新幹線から外へ出る。

それほど時間はなかったが、……悩みに悩みに悩み抜いてみた。

「……なあパクウ、これはよう、持つて帰つてくれよ」

「え？何で？」

「お前んトコの焼肉つて、あのゴムやる？前から言おう思つてたんやけど、アレつてめっちゃマズイやん」

「……………」

パクは結構な秒数黙り、そして、

「……え……な……え・え……？！」

ちよ、ちよつと待つてくれや。お前、てっちゃんキライ……キライやった？コレ、イヤ、コレはな、てっちゃんとちやうぞ？

ええ………いらんのか？」

この遣り取り。

「ブ——ッ！——！」

まず嘖き出したのはタケシ。

それにつられるように、パクも直樹も笑い出す。

「アッハッハッハッハ！お前、どういっつもりやねん！ココで言うかー！？」

氣イ遣わせたら悪いけど、氣イ遣え！！

ハアッハアッ……ほんま、腹痛いわ！笑わしやがる！

ウチのオカンもビックリするぞ！」

「秋月、お前のボンボン体質、もうちょっと揉んだりたかったけどなー」

トウルルルルルルルッ！

新幹線の発車を知らせる合図が聞こえてきた。

3人は同時にホームの天井を見上げる。

そこで、直樹は思ったことを口にした。

「決めた！！何とかなるよ！！」

「おい直樹、お前何やっとなねん。早よ乗らんかい。ドア閉まるぞ？」

パクの声もちろん、アナウンスも聞こえはしたが、直樹は動くのを止めた。

……これまで一度も、我俣なんか言ったことなかったな。

絶ッッ対にアカン！！っていう答えが返ってきたとしても、粘らせ
てくれよ。

コレに乗ったら、従うしかないやろ？

プシュウウウウッ！

新幹線のドアが閉まっていく。

「「あ——ッ！！」」

大声を上げる2人。

それに対して余裕の直樹。

新幹線は走り出す。

直樹をその場に残して。

呆気にとられているパクとタケシ。

「……おいお前、何やっとなねん……」

「……エエ~~~~ツ……!？」

別にびつくりさせてやろうとは思ってなかった。ただ、びつくりしている2人の顔が心地いい。相談は後からだ。

あと1年、別にいいだろ…？

直樹は2人の肩を抱きかかえ、歩き出す。

「パクウ、その弁当、何人前あるの？」

「……あ、イヤ、……3人分。お前の母ちゃんと慶也と、お前の分」

「だったら今から3人でソレ食おうや。なあタケシ、マズイ弁当皆で食べようや」

「イヤ、だからコレはマズないって……!」

直樹はそれから高校を卒業するまで、こっちで一人暮らしをするこ
とになる。

誰の意見も聞いていないが、賛成してくれるであろうこの2人が7
0%。

反対してくれるであろう母と慶也が20%。

その方が都合がいいんだろ?と思う、直樹の中の父が、10%。

これは俺の、他人を巻き込まない我侭だろう。
だからいいんだろ？

『お父さん』

『お母さん』

剥離 1

—— 俺の悩みは折り良く今日も、俺の足を行き過ぎないように止めてくれる。

顔を窺いながら、少しずつ少しずつ進めてくれる。

やっぱり俺は強運の持ち主なのだろう。

何とかなりそうですよ。

帆を張れば進むしかないご時世を、満遍なく往ければ良い。

へんぼん
翩翩が理想だつて言っただろう。

それはそれで、難しいんだぜ？

——

直樹は高校卒業までのあと1年ちよつとを、一人で過ごすことになった。

高校の編入手続きがまだ受理されていなかったこと。

土井さんのためのアパートの契約を切っていなかったこと。

それらがこの時の直樹を助ける。

土井さんの住んでいたアパートは直樹の家が借りていたものだったので、そのまま直樹が使うことになった。

慶也は泣いていた。

一緒に暮らさないのはおかしい、と。

1年が長く、重要だということは重々承知の上で、直樹は

「たった1年だろ？」

と、慶也を宥めた。

母は

「そんな無茶な話はありません！」

と直樹を叱った。

「無茶は承知です。お金も余分にかかることも知っています。だから食べる分くらいは、アルバイトで稼ぎますよ」

と言ったら、更に叱られた。

「余計な苦勞です」と。

母に怒られたのはこれが初めてで、多少の驚きはあったが、直樹は少し、ほんの少し、それに喜びを感じる。

「ちよつとお母さん。アルバイトで稼いで自炊をするっていうのは、余計なことじゃないですよ。大丈夫ですから」

そう言ったら、母も泣いてくれた。

電話での遣り取りだったので確信はないのだが、自分のために泣いてくれていたような気がしたのだ。

一人暮らしというのは、直樹にとって結構快適なものだった。

もう以前のようなバ力をする必要はないのだから。

パクも3年になると同時に「俺はもう引退やねん」と言って、ケン力などは一切しなくなった。

「引退って何や？」

直樹の問いに、パクは教えてくれた。

工業は代々ケンカの強いヤツのNo.1を決めていくらしい。そのNo.1は3年になると同時に1、2年のNo.1と勝負をする。

それに勝とうが負けようが、その称号は下級生へと受け継がれて行く。

「何じゃそら」

という直樹の感想に、パクは、

「俺もそう思う」

と答え、下らないがルールなんだ、とも言った。
直樹にとって理解しがたいものではあったが、一つ心配事が消えるのは良いことだと思う。

一人暮らしのこのアパートを、溜まり場だけにはしないようにしている直樹。

たまにパクが泊まりに来る。

タケシも休日の前夜には泊まりに来て、程よい空間を過ごしていた。

1日といえばそれほど早くは感じないが、アレ、もう金曜日？と思うほど一週間は早く、1年ともなると振り返る間もなかったほど、見事な速さで過ぎ去って行く。

この1年は程よく遊び、必死に勉強した。

環境が助け、ある程度の悩みで済まされているこの期間は確実に直樹に味方し、直樹は。。。大学法学部の受験に成功する。

春を待つ前に、直樹は家族の待つ東京へと帰った。

その際の別れは、前回のようには踏ん切りがつかないものではない。

「俺、バイトも向こうで続けるし、コッチに遊びに来るよ。だからたまには遊びに来てくれな」

その挨拶で十分通い合えたと思う。

1年間の一人暮らしを始めるとき、父の言葉は一言も聞かなかった。終えてしまったその時になり、あの時父はどう思ったのだろうと考えてみるが、それは取り合えず隣に置いておこうと思う。

そしてまた、家族4人で過ごす時間が流れ始める。

2年後、秋。

直樹は20歳になっていた。

こちらの生活も慣れたというよりは、思い出したという感じ。
大学の進級も難なくクリアしている。

土井さんの代わりに来たお手伝いさんはとても良い人ではあるが、直樹は以前のようにお手伝いさんにあまり手を掛けさせないように気をつけている。

1年間の一人暮らしはこういう部分でも無駄ではなかったと、自分に言い聞かせるための意味もあった。

更に上乗せした形で、できることはなるべくやろう、そう考え、大学関係者の紹介でとある弁護士事務所でアルバイトをしている。別に弁護士になろうというわけではないのだが、誰かの真似をしたわけでもない。

興味が無いよりも、興味があることの方が良いと思ったから。

弁護士事務所に通うに当たって直樹がほのかに期待していたことは、テレビドラマでよく見る金銭トラブルなどを抱えた人を助ける正義の味方の図。

こういうことができるんだと期待していたのだが、現実随分と違っており、仕事といえばほとんどが書類関係。

机の上で済ますもの。

会社間の仲介人、株、そういったものがほとんどだった。

更に直樹は、仕事に関して驚愕の事実を目の当たりにしていた。

小さな個人店から大きな会社までの、破産手続きの多さ。

どこの誰かも知らない、そんな人たちが、構えた城を崩壊させて行く。

それが、この紙の上で行われている。

そして当然のように思い出し、忘れてはならないこと。

―― 紀子。

直樹は高3の夏、ようやくと言っていいのだろう。紀子の家族が何故あの地を離れなければならなかったのか、その全てを知った。大きいものが小さいものを、強が中込みの小を呑み込む様。これが自然の摂理であると学んでいた自分がもどかしく、腹立たしい。

紀子さんの家が中や小だったのか。

そんなワケがない。

たとえそれは贖罪だと言われても、覆すつもりはない。

そして、アンタは本当に強なのか？

一緒に暮らしている俺には、そうは見えねえが。

そんな風に思う。

父とは一人暮らしをしていた1年なども含め、一体何年話をしていないんだろう。

許すとか許さないとか、許してくれだとか許してくれなくていいだとか、そういうことではなく。

本当にもう覚えていない年月、疎通の何たるかということがない。

直樹は、紀子の姿を思い出せば噛み締めるものがあり、そしてあの頃思い描いていた将来を思い浮かべる。

到底取り返しなどつかない、彼女にとつての自分の存在。

考えれば考えるほどに血迷いそうになり、痛感するのだ。

こちらに越してからの2年間、あの2人とは何度か会った。

こっちにも招待したし、向こうにも何度も行った。

電話で話をするのは、2人合わせて月4、5回というところだろうか。

年月を重ねると、付き合い方というのもそれに見合ったものに変わっていく。

あの2人はもうすでに就職していて、こちらは学生。

ある程度気を遣い、同じように気も遣われているのだろう。

18を越えて高校を卒業してから、お金を使う遊び方でないと楽しくなくなっているように思う。

以前のように部屋に集まり、ダベツているのもいいんだが、それだけじゃ済まないようになっていく。

確実に変わるんだろう。

俺の眉間のシワと一緒になのさ。

全く気づかなかったが、俺の眉間には顔の力を抜いても消えない、縦の溝ができていく。

寝ているときまで力んでいるのか、どうなのか。

覚えていないということは、もうこの溝は形状記憶されて、元に戻ることはないんだろう。

まあ、それでいい。

年輪ってやつがあるからな。

俺はあと2年で確実に学校を卒業し、あっちで就職する。そう決めている。

この日、直樹は大学の講義を昼までで終え、アルバイトに行っていた。

家に帰るとすぐに、新しいお手伝いさんの島尾さんに言われた。

「直樹さん、大林さんて方からお電話がありましたよ。帰ったらすぐに電話してくださいとのことですよ。」

いつも電話がかかってくるのは夜遅くなのに、どうしたんだろう。

「分かりました。後でかけます。ありがとう」
それほど気にすることもなく、直樹は食事を済ませる。

島尾さんは気を利かせてくれているのか、父が帰宅し食事をする時間とズラして、直樹の食事の用意をしてくれる。

何だか逃げているようで微妙ではあるが、あの人なりの気遣いなのだろうと何も言っていない。

…が、もしかしたら、父の命なのかもしれない。

食事を終え、自室に戻る。

アルバイトの関係で、株式について少し勉強しなくてはいけなかった。

机に着き、買ってきた本に没頭する。

必要な箇所をノートにまとめ、暗記するために何度も何度も、繰り返しその部分を書いていく。

と、廊下で電話の音が鳴り始めた。

時計を見ると、23時を過ぎている。

ああ、島尾さんはもう帰ってるな。

直樹が腰を上げて部屋を出ると、それとほぼ同時に慶也の部屋のドアが開いた。

電話に近い慶也が受話器を取り、

「……あー、パクさんですか。こんばんは」

部屋に戻ろうとしていた直樹だが、再び向き直り、電話に近づく。

「ハイ、元気です。……はい、……あ、すぐソコにいますよ。ちょっと待ってください」

と、慶也は受話器を押さえながら、

「パクさんから」

そう言って直樹にそれを渡した。

そしてすぐに自室へと入って行く。

慶也もよく頑張った。

今は有名な進学校に通っている。

あの頃の明るい性格そのままに、父に言われるまま勉強に勤しんでいる。

あの時2人で話したことは、今でもたまに思い出す。

アイツはとても立派だ。

直樹は、今となっては両手を広げてそう思えるのだ。

「あ、もしもし、パクウ？」

『おい直樹！お前何やねん！帰ったら電話してくれ言ったやんけ！』

「あー、悪い悪い。ちよつとバイトのね、ことでね……」

忘れていたのに言い訳をしようとする直樹の言葉を、パクは待たない。

『そんなんエエねん！お前、今週末ヒマか！？』

「イヤ、ヒマじゃないよ。バイトがある」

『休め！ゴツツイ大事な用事がある！というより相談や！』

「相談？」

結構長い付き合いだが、相談があると言われたことは多分……初めてやな。

パクの剣幕とそのセリフで、何となくだが大ごとなんだろうと悟った。

「おう、分かったよ。じゃあ俺、今週末そっちに行こうか？」

つていうか何や？何か問題が起こったんか？まさか美奈子ちゃんか？」

『イヤ、まあ、美奈子の関係したら関係なんやけど……ちよつとな、アホを説得してほしいんじゃ』

「アホを説得……」

よく分からない。

『タケシも休まずし、俺も仕事休むから、土曜にこっちに来てくれ。電話代かかるから切るで！会ったとき話す！』
そう言つて、パクは一方的に電話を切ってしまった。

……アホ？

タケシも、つて言つてたからタケシのことか？
中途半端に聞いてしまったおかげで、不安が募る。

この日は水曜日。

直樹は次の日、バイト先の弁護士事務所に電話をして休みをもらい、その日のうちに新幹線に乗り込んだ。
内腿のムズムズが治まらないのだ。
しょうがないのだ。

目的地の駅に着いたのは、予定より二日早い夕方。

何度か行ったことがあるのでパクの勤め先は知っているが、突然訪ねて迷惑を掛けるわけにはいけない。

直樹はそのまま駅を出てタクシーに乗り、パクの家へと向かう。

途中、タクシーの中で財布を広げてみた。

ヤベー……帰りの新幹線代しかないやんけ。

そう思うが、それよりもこの心配事の方が先に立つ。

やがて、タクシーはパクの家の前に着いた。

まだ家には帰っていないことは分かっているので、パクのお母さんのやっている焼肉屋の方に入ってみる。

「こんにちはー」

店の中を覗いた直樹に間髪入れず、

「アラッ！！」

という、いつもの声。

「秋月くん、久しぶりやんか！東京でエエ大学行つとるんやろー？
やっぱりアンタ偉いなあ！」

初めて会ったときからな、顔つきがちゃう思うとったんや、おばちゃん！

まー、久しぶりに見ても相変わらずハンサムで、おばちゃん口から心臓出そうやよー！」

俺はまだ「こんにちは」しか言ってるねえのに。

思わず口元から笑みが零れた。

「お久しぶりです」

その直樹の声を遮るように、

「何してんの秋月くん！早よ入っておいで！まだお客さんも来んから、おばちゃん暇やねん。話相手して！」

そう言つて、直樹を店に招き入れる。

直樹とパクのお母さんは、テーブルに向かい合つて座った。

聞いていいのかわからないが、この内腿のムズムズ感を何とかしてしまいたい。

そう思い、直樹は尋ねてみる。

「健くんに呼び出されて来たんですよ。何か用事がある言つて。健くん、何かありました？」

それに対してのお母さんの答え。

「健はねえ、秋月くんのおかげでホンマに性格柔らこおなつて！おばちゃん全部、秋月くんのおかげや思うとるんよ！」

ん——……話が逸れる。

だがこの時、パクのお母さんが話したことは、以前から直樹がパクに聞いたかったことが多く含まれていた。

「あの子にはなあ、お兄ちゃんがおつたんやわ。3つ上のな。それがなあ秋月くん、勉強もするんやけどゴンタクレいうヤツでなあ。

秋月くんと同じ中学校行つとったんやで。

せやけどケンカもようやって、いつもケガして帰って来よったわ。

健はな、そがいなん見てずっとおったから『俺は兄貴みたいにはならへーん!』言つて、勉強ばかりしててんやけど。

中学の2年のときにな、交通事故でな……。

これが轢き逃げで、まだ轢いたヤツも捕まっていっていう状態なんやわ。

その車に轢かれる前の晩に、健はなあ、お兄ちゃんと大ゲンカしてから。その後に交通事故で死んでもうたやろ。

その後あの子、変わってもうてな。

自分の生んだ子おに、何でこんなに恐れ慄かなアカンのやって、ずっと思つとつたわ。

秋月くんと会いたくらいから、ちよつとずつな、柔らこおなりだして、店も手伝うてくれるようになって。

おばちゃんホンマ、秋月くん尊敬しとるんやよ。ありがとうな」

…… 本当は、目を閉じながら聞いていたかった。

でも失礼なので、お母さんの目をちゃんと見ながら聞いた。

誰にだって、大きかろうが小さかろうが、やっぱり何かある。

そう確信した。

俺なんか、気楽なモンや。

「あの、おばさん、」

ここまで言つた直樹。

本当は、

『パクウのお兄さんが亡くなったとき、悲しかったですか』
そう聞きたかった。

しかし、聞けない。

「イヤ、僕は何もやってないですよ。健くんは僕が会つたときから、同級生と思えんくらいオトナやったし」

そう答えてはみるが、直樹はこの時とても嬉しかった。

優等生の期間が長かったわりには、人に褒めてもらったことなどなかったから。

本当のところは、俺の影響なんかないんだろうけど。
あったとしても微々たるものなんだろうけど。

これは素直に受け取って、折に詰めて自分の中に仕舞っておこうと思った。

「えーっと、秋月くんは健と同級生やから、もう二十歳超えとるわな。ビール飲むか？ビール」

「イヤ、僕、お酒飲めないんですよ」

「じゃあお腹空いてるやる。用意するからちよっと待ってな」

「イ！？」

思わず声が出てしまった。

「イヤ！氣イ遣わないでください！僕、どつかで済ませますから！」

「何言うてんねん。焼肉屋に来て何も食わんってないやるー、アンタ！」

おばちゃんも仕事の前にごはん済ませるんやわ。おばちゃんの手をしてやー」

…ダメか！！

遠慮じゃないのが通じない！

パクのお母さんは、テーブルにどんどん肉を運んでくる。
従うしかねえか……。

時計を見ると、17時を回ったところ。

パクの仕事が終わるのは18時。

直樹はパクのお母さんの話を聞きながら、食事を始めた。

あの、変なゴムみたいなアレを除けば、おいしいなあ。

…そつえば、あの時の弁当もおいしかったな。

パクのお母さんはよく笑うので、つられて自分も笑ってしまう。知らないうちに、直樹の内腿のムズムズは消えていた。

最初はどのようなかと思っていたこの場の空気だったが、だんだんと慣れてきた。

直樹はパクのお母さんと同じ網に向かい、肉を焼きながら談笑している。

やがて外から、車が砂利を踏む音が聞こえてきた。

「ああ秋月くん、健が帰ってきたで」

それを聞き、店の入口を振り向く直樹。

出迎えようとも思ったが、あとこれだけ食べちゃおうと、網の上に置かれた肉と野菜を一気に頬張る。

そうこうしているうちに、入口が開くガラガラという音がした。

直樹はもう一度、振り返る。

肉を箸で掴んだまま。

入ってきたのは、作業着姿のパク。

彼は直樹に気づかない。

「ちょっとアンタ、秋月くん遊びに来とるんやで」

冷蔵庫からビールを取り出そうとしていたパク、その声に顔を上げて直樹を見た。

「ありや！お前何やとんねん。土曜日言っただやんけ！ビックリしたわ！」

ナニ仲良う顔合わせてメシ食うとんや。お前ら付き合ってたのか？」
まだ必死で肉と野菜を口の中に放り込んでいた直樹、

「ほう、はんはいいははえはは、ひーはふはほ！？ほっほーへひははいは！！」（パクウ！あんな言い方されたら気になるやろ！？速攻で来たわいや！！）

「……ちゃんと飲み込んでから喋ってくれるか。何言ってるのか分からへんよ」

パクは出しかけていたビールをまた仕舞い、直樹と向かい合ってテーブルに着く。

口の中のものを急いで飲み込み、直樹はヒソヒソと囁くように言った。

「ハ——……ッ今日はコレ、めっちゃうまいわ、パクウ」

「イヤ、そんなんでもエエねん。土曜日言うたのに、速攻やなお前」

「電話じゃ何やからってことやる？何があつたんや？」

「まあ、話しながら行こうか」

手招きされ、直樹はパクについて行く。

「おばさん、ごちそうさまでした。すみません、片付けもせんと……」

「ああ、エエよエエよ。また来てな！」

2人は店を出て、パクの父の車である軽トラに乗り込む。

「行くところがあんねん。ついて来てくれや」

車の中で、今回の経緯の大体を聞いた直樹。

そんなことで呼び出されたのか、とは思わないが、パクの剣幕から察して自分はパクの方に乗るべきなんだろうと思った。

しかし自分の意見としては、別に……タケシの勝手だろうと。

話の内容は、タケシが勤めていた印刷会社を辞めたということ。

そして再就職を決めたということ。

が、その再就職先というのが、極。の世界。

いわゆるヤ。ザ。

直樹は頭を捻らせる。

わざわざあっちから呼び出されて、……俺に何か話すことがあるの

か？

そんなことをいろいろと考えているうちに、パクは車を停めた。

現在タケシが住んでいるマンション。

以前住んでいたマンションには何度か行ったことがあるが、これはまた。

直樹は

「へ〜〜〜〜〜」

と言いながら、そのマンションを見上げる。

随分と立派なマンションだ。

ヤ。ザっていうのは、そがいに儲かるんかいな。

「アイツ、今日は家おるハズやねん。来いや！」

カリカリしているパク。

言われるがまま、後をついていく。

「なあパクウ、そんなにイライラすんなよ。怒っとつたら話にならんやろ？」

「アホ言え！！イライラせずにおれるかコレが！！」

まったく！ドカーンって儲かる話がその辺に転がってるワケないやろ！

まったくアイツは！どこまでもどこまでもアホで！！」

……この温度差といたらない。

タケシが決めたことやろ？

そう思いながら、そう言い出せずにいる。

2人はエレベーターに乗り、10階で降りた。

逸る気持ちを抑えられない様子のパク。

早歩きでタケシの部屋の前に向かう。

そして、

ピンポーン、

ピンポッピンポッピンポッピンポッピンポッピンポッ

「止める、パクウ！」

制する直樹だが、パクは聞いてない。

玄関のドアはすぐに開いた。

出てきたのは、妹の美奈子。

「あー、パツちゃんと秋月くん！」

「おい、兄貴おるか」

「いや、今出掛けてるんやけど」

「上がらせてもらうで！」

そうして、パクはズカズカと部屋に上がりこむ。

直樹はその調子に合わせられないでいる。

「美奈子ちゃん、体調どう？」

「今はちよつといい感じなんやけど、これから寒なったらしんどなんねん」

美奈子は直樹が最初に会った頃より、随分と顔色も良くなっていた。年を重ね、体が大きくなることで以前のように寝たきりの生活は送らなくて良くなっているようだ、この病気は手術をしない限り、完治することはない……

直樹は美奈子の顔を見るたび、

頼むから、死ぬなよ。

兄ちゃんが何とかしてくれろぞ。

そう思っている。

「美奈子ちゃん、寝とかなくていいんか？」

「うん。ちよつとくらい動いてる方が調子いいから」

「そっか」

できることはしてあげたいと思うが、今の自分は無力である。

「おい、美奈子！兄貴、何時ごろ帰って来るんや！？」

お構いなしのパクの声。

「えー…予定全部聞いてるわけじゃないから、分からへんよ。今お茶入れるから、ちょっと待つといて」

そう言つて、美奈子は台所に行つてしまった。

部屋に入つて、キョロキョロする直樹。

随分と立派なマンションだ。

直樹はテーブルを挟み、パクと向かい合わせに座つた。

「なあパクウ、極〇の人つてそんなに儲かるんかな」

その問いに間髪入れず、

「知るかッ！！」

部屋には立派なテレビやビデオも置いてある。

聞いた話では、パクもタケシの転職を知らなかったらしい。

タケシはもうかれこれ3ヶ月、あの世界で生きているらしい！

うーん……スゴいな。

直樹はそう感じる。

どうやら埋まりそうもないパクとの温度差を無視するように、直樹は部屋の中をキョロキョロ見回していた。

部屋を見回し、やっぱり大したもんだと思った。

以前住んでいたあのボロ家を考えると、あの殺風景だった家を思い出すと。

家具の立派さが今のタケシの生活を映しているとは限らないが、住む環境が良いに越したことはない。

直樹はパクに向き直り、

「なあ、今からタケシに文句言つつもりやろ？そんなん言つてエエんかなあ」

「……………」

美奈子がお茶を持って部屋に入ってきた。

「パツくん、何怒っとるん？」

「……………」

どうやらタケシもパクも、今回のこの件を美奈子には話していないようだ。

それはパクの顔色と、口元を見て察した。

「おい美奈子、俺は今から直樹と話があるから、お前は部屋に行つときなさい」

「ちよつとー、パツくん。ココ、誰の家やと思うとるんよ？何でパツくんになんか言われなアカンの」

「エエから！部屋へ行つときな！」

「コイツ、やってること・言ってることがメチャクチャやな。そつ思つた直樹、

「美奈子ちゃん、ほんまにごめんなんやけど、部屋借りといてな。

ちよつとパクウと話があるんやわ。2人じゃないと話しくくつてね」

「ん……………じゃあ分かった。宿題があるから、それやつとくわ」

美奈子はそう言つて席を立つた。

彼女は今、高校の通信教育を受けている。

通信教育だつて立派な学校だと言つて、直樹が勧めたのだ。

「とにかく、パクウ。頭ごなしに言うのはエエことないつて」

「おいお前！一体どういふつもりや！？なあお前！ドツチの味方なんや！？

……………っていう考えやないんや、俺もな。せやけどな、こんなんエエわけないやろ」

それから、パクは自分がどれだけ暴。団、極。、ヤ。ザなどが嫌いかを語り始めた。

その中で最も大きな要因として、彼の父が経営している工場、パクも勤めているあの工場が、今現在地上げに遭つていふことを

聞いた。

この場で「そつかあ……」と言っしかなかった直樹。
言いたいことは結構ある。

その地上げ屋はタケシがやってるワケじゃねえだろ、を含めて。
でも取り合えず、何も言わずにパクの話を聞いておく。
パクに言いたいだけ言わせようと、そう思った。

声が枯れるほどに長く、大きめの声で喋ったパクはいったん息を吐いた。

「……なあパクウ。お前、腹減ってるやる。ごはんも食べてないしな。
何か買って来てやるよ」

そのタイミングで、直樹は口を挟んだ。

「お、おう。……あ、そつか。俺も行こうか？」

「イヤ、一人で行くよ」

そう言つて、直樹はパクの前に右手を差し出す。

「お金。お金ちょうだい。俺、帰りの新幹線代しかないから」

「えー？何や、奢りとちゃうんか」

パクは財布を出し、千円札を何枚か直樹に渡した。
それを受け取り、玄関に向かう直樹。

喋るだけ喋ったら、ちよつと落ち着いたみたいやな。

次は腹いっぱいにしてやろう。

腹減つてるとロクなこと考えねえからな。

そう思い、玄関で靴を履こうとした、その時。

ピンポン、というインターホンの音と同時にドアがガチャッと開いた。

次の瞬間、顔を突き合わせた、直樹とタケシ。

「うわッ！秋月！？どうしたんやお前！」

「あ、ああ。おかえり。ちよつとコッチへ遊びに来たんやわ」

「ふーん、そうか…」

返事をしながら、タケシの視線は直樹の背後へと向けられる。
直後、タケシは慌てた顔をして、何故か再びドアを開け、外に出ようとした。

何だ？と不思議に思い、振り返ろうとした直樹だが、それが及ばないほどの速さでパクがタケシに飛びかかる。

「オイコラ、タケシ！！とうとう捕まえたぞお前！！散々逃げやがって！！」

背後から腕を回し、タケシの首を絞めるパク。

その体勢のまま何も言わず、ただ外へ逃げ出そうとするタケシ。

「コラ！！逃げんなや！！」

「に、逃げる！！」

この2人の遣り取りを美奈子が気づかないか、直樹は心配だ。

「おい、ちよつと待てつて。ケンカすんなよ」

そう言つて、2人を眺める。

パクもタケシを引つ掴むのをやめ、タケシも逃げるのをやめた。

「今日はな、話を聞きに來たんやつて。だからパクウも熱うなるなよ。なあ？タケシ。奥で話しようや、な？」

「ほんまじゃ！！タケシ！聞きたいことが山ほどあるんや！こつちへ來いッ！！」

そしてパクは先々と部屋の中へ戻つて行く。

「……………」

俯いたままのタケシ。

まったく。

このタケシを見れば、何か考える部分があるのは分かるやろうに……。

「ほらタケシ、早く上がつてくれよ。な？奥にお茶用意してるから。遠慮せずに入つてくれよ！」

「あ、……………うん」

ココ、俺の家やろ！？っていうツッコミが入ると思ったのに。
タイミングが悪かったのか、タケシに冗談は通じなかった……。

剥離 2

3人はリビングのテーブルで向かい合っている。
直樹とタケシ、その向こうにパク。

しばらく沈黙が続いた後、直樹が口を開いた。

「それにしてもタケシ、このマンションすごいやんか。テレビとかも大きいし、部屋も何個あんな。

ヤ。ザってそんなに儲かるんか？」

するとタケシは即座に

「シッ！！秋月、美奈子は知らんのや！」

そう言つて、辺りをキョロキョロと見回し、美奈子を探す。

そこへ、相変わらず不機嫌そうなパクが言った。

「美奈子には部屋に入るとき言うとするよ。聞いてへん」

「あ、そ、そうか……え、えーっと……ここな、まあ先輩っていうか兄貴っていうか、その人のマンションやねん。

このテレビとかも全部、その人のヤツやねん。貸してもらうつとる」

タケシは少し斜めに体の向きを変え、直樹に向かって続ける。

「実はな……恥ずかしい話なんやけど、金が貯まらんでな。

前の印刷会社、アソコに文句があつたワケやないねん。

せやけど、金が貯まらへんのよ。

梶さんつて言うんやけどな、あ、このマンションの持ち主。

前からちよつと知り合いでよう、何となく話したら、今の仕事をな、紹介してくれたっちゅーか……」

タケシはとても話し辛そうに、現状を直樹に説明している。

だが、ここで声を荒げたのはパク。

テーブルをバンッ！！と叩き、

「だからよう！！俺もゼ二貯めてる言うたやんけ！！ほんでソレはあげるんやなくて貸す言うとなねん！！」

「だから、そういうワケにはいかん言うてるやんけ。何回言わすんや」

……美奈子の手術代のことだと、確信した。

パクは腰を上げ、タケシの胸倉を引つ掴む。

「美奈子の手術がどうでもエエ言うтонちやうねん！急がなアカンのも知っとる！

せやけどなあ！ヤ。ザみたいなモンになってゼニこしらえたとして
もや、お金貯まりました、じゃあって抜かれるモンちやうやる！！
お前がやってることはごっつい安易な、軽率な行為やぞ！！

ちよつと頭使えや、タケシ！！」

「……………」

しかし、ああ言われてもこう言われても、タケシは一切攻撃的な面を見せない。

……タケシだつて、そんなこと分かつてると思うよ。

直樹はようやく、言っておくべきことを言うことにした。

「パクウ、そう頭ごなしに決め付けるなよ」

そう言つてパクを制し、少し考える。

本当は、あまり言いたくない。

「2人とも、俺の親父と親父の会社、知ってるやろ？」

直樹の言葉にパクも直樹に向き直り、腰を下ろす。

直樹が家のことを話し出すのが珍しいからだ。

「ウチの親父の会社もな、表に出てるクリーンな部分と、外には出せれんブラックな部分があるんや。

俺、子供のときからヤ。ザモンの人らに、結構知り合いがおるんよ。

…あー、知り合いつていうか、まあ、お小遣いもらったりね、遊んでもろうたりしたことがあるんや」

2人は少し驚いた様子で、直樹の話を聞いている。

直樹は2人に説明した。

ああいう人たちの中には本当に悪い人もいるが、そうでもない人も
いる。

「必要悪っていうワケじゃないんやけど、あの人たちがおること
でな、うまく社会が回ってるっていう部分も少なからずあんな。

パクウな、。の駅前にゴツツイでかいホテルあるやん」

「。おう。ホテル。。。。やろ？」

「そう。アソコの経営者ってヤ。ザヤぞ」

「。……………」

2人は一瞬絶句する。

「。嘘吐け直樹！お前、エエ加減なこと言っな！俺らが知らん思っ
て！ヤ。ザがそがいなフツウの商売しとらへんやろ！」

こんなに頑固なパクも珍しいと思った。

直樹は続ける。

「ほんまやって。何やってたら。。。。って全国チェーンの飲食
屋あるやろ。アレもそうやぞ。

嘘やと思うんやったら、調べてみたらエエよ。。。。って名前の
人やから。あの人。。代目。。。。会の会長なんや」

直樹の話は10分ほど続いた。

パクもタケシも半信半疑の表情だったが、途中からは呆気に取られ
たような顔をして聞いていた。

「タケシが何か悪いことをしでかすなんて、決まったワケやないや
ないか。そやろ？タケシ」

「イヤ、先のことは分からへんねんけど……………」

「俺はまだ学生やから…………バイトやってるけど高が知れてるし。

あんまり力になれんかもしれんけど、美奈子ちゃんの手術は確かに
急ぐもんやからな」

ここでいったん俯いたパク。

「あ——ッ——！直樹！お前に理詰めで来られたら勝てるワケないやんけ！！お前、東京くん dari から一体何しに来たんや！！
くそーッ！！こうなったらタケシ！将棋盤出せエ！いつものヤツで決めるぞー！！」

将棋盤……？

「何やパクウ、将棋すんのか？」

「そうか、直樹は知らんのやな。俺らはいつも、意見が分かれたときは将棋のへこまわしじゃ！」

「へこまわし？」

その直樹の問いにパクは、

「知らんで結構！」

「……おいパクウ。お前、俺の人生、何や思うとんや。何や、俺はへこまわしで負けたら、足洗わなアカンいうことか？」

「おう、そうや！今から賭け事決めるぞ！」

もし俺が勝ったら、お前はその後すぐに直樹と東京に行ってもらう。しばらく東京暮らししてもらうぞ。そうでもせんと逃げられへんからな！

美奈子はウチで預かる。

ほんで俺が負けたら、今後一切お前のやることに文句は言わん。これまで同様の付き合いで行く。

どうや！乗らんって言わさんぞー！！」

タケシは

「よし、分かった」

と静かに答えた。

そして将棋の駒と盤を用意する。

「直樹、お前は中立で頼むぞ。コイツがイカサマせんか見とつてくれや」

パクにそう言われたが、
イカサマも何も、本将棋のルールもよく知らないが、このへこまわ

しってヤツ、何だ？

スゴクみたいなものか？

どうなったら終わりなのかもよく分からない。

その、子供がするような将棋遊びに、2人は真剣そのもの。
直樹もつられて手に汗握る。

一体何時間やったのか分からないが、そのへこまわしで勝負はついた。

タケシが勝ったのだ。

「よっしゃーッ！」

や、

「俺の勝ちやー!!」

そんな勝ち名乗りはなかった。

スムーズにそのへこまわしは終わり、それと同時にパクはスツと立ち上がった。

「せやけど腹減ったな。タケシ、お前この後仕事か？」

「イヤ、今日は休みや」

「そうか。直樹は今日、コッチへ泊まってくんやる？」

「う、うん。……でもホテル代がないんよな……どうしようかな」

「じゃあ俺んトコへ泊まれ。」

メシ行くぞ。帰りに美奈子に何か買って来よう」

そう言つて、パクは足早に部屋を出る。

「何しとんねん。早よ行こうや」

「お、おう……」

2人は返事をして、パクの後について行く。

その後も随分夜遅くまで2人とは話をしたが、パクは一切今回のことについて話をしなかった。

……納得なんかしてへんよな。
分かるよ、パクウ。
心配なんやな……。

どっち付かずで宙ぶらりん、そんな自分の立場で、今回何かの役に立ったのか。

タケシの選択ってどうなん？

そう言われても、分からない。

分からない、で正解だと思う。

パクの笑顔でのお喋りを聞きながら、そんな風に思った。

直樹は次の朝、一番早い新幹線に乗り込んだ。

この日も夕方からバイトが入っている。

今回の件で、更に働かなければならないと思った。

パクは納得していないだろうし、タケシも納得の上のことではないのだろう。

考えることが多すぎた。

考え事をやめないクセのおかげで、新幹線での移動は随分と早く感じた。

駅に着くと、直樹は家方面ではなく、病院へと足を向ける。

母は約1年前から、入退院を繰り返している。

病名は胃ガン。

一度手術をしたのだが、転移があり、もう手遅れの状態だった。

一月前、あと1年持てば……と宣告されていた。

このことは母には伝えていない。

おそらく父も、伝えていないだろう。

慶也と直樹は照らし合わせるでもなく、可能な限り病院へ行っている。

父がどうしているのかは、知らない。

直樹は病院への道すがら、花を買った。

白やピンクが入った、清楚な花束。

エレベーターに乗り、慣れた匂いの廊下を進む。

そして、病室へ入る前に直樹が必ずすること。

顔の筋肉を上下左右に動かし、解すこと。

カチャリ。

「お母さん、どうですか？調子は」

言いながら部屋に入った。

母は直樹が訪れるといつもベッドの上に座ってぼんやりと外を眺めている。

「ああ直樹さん。さっき慶也さんが来てたんだけど、会わなかった？」

「いや、会いませんでしたよ？いいんですか、寝てなくて。お加減は？」

「体調は悪くはないんだけど、やっぱり退屈でしょうがないわ。

直樹さん、今度来るときウォークマンとテープを何本か持ってきてくださる？」

「いや、そのことなんですけど、今日は良い知らせですよ」

先日、医師と話をした直樹。

これからしばらくは自宅療養という形で、調子の悪いときだけ来てくださいと言われていた。

「この水曜から家へ帰れますよ、お母さん。随分良くなったみたいですからね」

「え？それは退院していいってことなの？」

「そう。そういうことです。良かったですね、お母さん」

直樹はここで、ニコツとした笑顔を母に見せる。

「僕、この後バイトがあるんで帰りますけど、この花だけ花瓶に入れますから。」

また明日来ますよ」

そうして花瓶を手に取り、部屋を出た。

……今の母、俺にとっては、嘘が最大の味方。

告知に関してはいろいろなことが言われているようだが、言わずに済むならそうしていたい。

直樹は花瓶に花を生けて戻り、サイドテーブルの上に置いてもう一度

「また明日来ますからね」

そう言っ、病室を出た。

エレベーターで降り、エントランスを抜けて病院の前のタクシー乗り場に行くと、そこには慶也の姿があった。

「おい、慶也」

「アレ、兄さんも来てたのかい？今から家に帰るの？」

「うん。いったん家に帰るよ」

「じゃあ一緒に帰ろうよ。兄さん、昨日どこ行ってたんだ？」

慶也に、タケシのことを話すことはないと思った。

だから、遊びに行っていたわけじゃないんだけど、と向こうに行っていたことを説明する。

「兄さん、アッチの人とまだ付き合いあるんだもんな。スゴイよな。僕なんか、もう連絡も取ってないよ」

「お前はほら、社交性がさ、あるから、どこに行っても馴染めるしな。それはそれでエエんちゃうか？」

「えー、僕は広く浅くより、狭く深くの方がいいと思うけどな」

慶也は高校での成績も上位に食い込むほどの頑張りを見せていた。いつもニュートラルに置いて、いざとなったらどこにでもギアを入れられる状態。

お前の方が良いに決まってるよ。
直樹は他意なく、そう思う。

この時、母の退院の日には何時にここに迎えに来ようと、2人は約束した。
お互い、母のその後については一度も話をしていない。

—— 彼は俺たちの前で愚痴を言わない。
両親のことを、悪く言わないのです。

一度捨てられ、二度までも……
それに関しては五感を失っているかのように、本当に、まるでなかったかのように振舞います。
今回のことも確実にそれに付随し、延長線上に起こったことなのに。

俺が言い、思うまでもなく、あの2人はお互いの言い分を理解しながら断じていたんです。
俺だって3歩離れているつもりはない。
少しは理解しているはずだ。

だが彼らの思想を見ると、俺の中枢は何と段だら縞なんだと、恥じて思う。
色に合わせてガタガタで、断層すらできているんだ。

茶渋のようにこびりつき、色づいている俺の部分。
沖積されて出来上がってしまった俺のその部分は、もう方法を厭わなくてもこびりついたままなんだろう。

だって、聞いてください。

俺はずっと、母を暢気でどこか間の抜けた人だと思っていました。
いつも椅子に座っているこの人は、そのうち歩き方すら忘れるんだろうと思っていました。

でも、やさしい母さんなんです。

俺が贅沢三昧し、学び、居座り、ああしてこうして、こうやって来れたのは、母のお蔭。

そして、父のお蔭なんです。

『お父さん』

『お母さん』

俺のお母さんが、もうすぐ死にます。

俺は何をすればいいのでしょうか。

どんな刃物を使おうと、どんな角度から切ってみようと、俺はこの世は生きるものの物だと考えるんです。
どの角度から見てもらっても結構です。
それは最果てまで行っても、変わらない。
そして、俺もその生き物の一点です。

それと同時に思うこと。

もしかすると、あんな風に悲しみ事を考える俺を、俺が愛おしいのではないのだろうか。

どうですか。

俺は、そのようにできていますか。

こう見えても、人に死んでほしくないと考えているんですよ。母なら尚のことなんです。

丁重に、丁重に、時間が過ぎて行く。

このまま何も変わらずなのか、そして、いつまでなのか

下劣な自分が愛おしいのではない。
疎ましいのです。

どんな刃物を用いて、どんな角度から切ったところで、今の俺は何も持ち合わせてはいない。

こういうのはどうでしょうか。

いつそ蓋を開けてみれば、

「俺は煮え湯を飲まされた」

過ぎてみれば何もなく、こんなことを俺は笑って言わないですか。

「心配して損したで、まったく」

続けて笑って言いませんか。

お父さんの話は聞いていないんです。
意見もです。

ただ俺は、生きていてほしい。
そう願っている。

宣告されたその時期まで、もうそれほど時間は残っていません。
彼らのことも心配ですが、こっちの方も心配です。

……もうすぐ、お母さんが死んでしまいます。――

母は家に戻り、以前のような生活を送っている。

「お母さん、痛いですか？」

そう聞きたいが、聞いていない。

変に気を遣うのも、少し違うような気がした。

父は以前と変わらぬ対応を、母にしている。

意図する部分

本当の箇所

そついったものは俺には分からないが、俺もそつしよう。
なるべく普通に、だ。

慶也にもそつ伝えよう。

俺だってここの一員なんだ。

間違っちゃいない。

いつも母が座っている椅子は今、母が座ることによって以前よりも
大きく見える。

いつもの体勢なのに。

母は週に一度通院することになっている。

いよいよ悪くなったときは、また入院してもらうということを医師
から言われていた。

通院は慶也と直樹が順番で付き添うことになっている。

それ以外は、何も変わらない日々。

学校が終わればバイトに行く。

帰って勉強する。

そんな日々が淡々と続いていくものだと思っていた。

…… 一月後を迎えるまでは。

その日、直樹は徹夜明けでアルバイトに来ていた。

眠い目をこすりながら、デスクワークをこなしている。

最初の頃は何が書かれているのかすら分からなかったこの書類も、大分理解できるようになってきた。

書類を繰りながら、直樹はふと昨日・一昨日のことを思い出す。

先日の三連休を利用して、直樹はパクとタケシに会いに行っていた。その際、タケシのマンションに泊めてもらう代わりに、仕事を手伝わされたのだ。

仕事といっても単純明快なもので、商品の箱詰め梱包。

「おい秋月、頑張ってくれよ。ここにあるの全部、朝までに詰め込んでしまわなアカンからな」

「これを朝までかよ！？こりや寝ずにせなアカンな…。せやけどタケシ、こんな商売になるんか？」

「アホやなお前。何も分かってへん。

コレ、ついこないだ発売されたスーパーファミコン、知らんのか？みんな、欲しても手に入らへんのやんけ。転売したらウハウハや」

「転売？ああ、価格操作してんねや。付加価値つけてるワケ？」

「そうそう！コレ1個売るだけで。千円の儲けや」

「へえ…ファミコンがねえ…」

「ファミコンちゃう！スーパーファミコンや！」

世の中には、いろんな商売があるということを知った。

「……あれ？」

そこまで思い出した直樹の手が止まる。

おいおい、アレは違法じゃねえだろうな！？

そう思い、調べようとしたその時、後ろから声を掛けられた。

「秋月くん、この案件、先生のところへ通しといて」

その男性は向井さんといって、ここの社員。

直樹の先輩に当たる人だ。

彼はもう、この事務所に勤めて4年ほどになる。

「あ、はい、分かりました」

返事をして立ち上がろうとした直樹の肩を、向井はガツと押さえ、もう一度椅子に座らせた。

「秋月くん、今日残業OK？どう？手伝ってほしいことがあるんだよ。ダメかな？」

別に予定もない直樹、OKを出そうとしたそのタイミングで、また横から口を挟む人がいる。

「ダメダメ！」

そう言って会話に入ってきたのは、弁護士資格を持っている洋子さん。

「アルバイトの一月の勤務時間って決まってるんだから。残業はさせちゃダメだよ！」

それに今日は秋月くん、私と飲みに行くんだから！ねえ秋月くん？」

「え？」

そんな話は初耳だ。

直樹はちらりと向井の顔を見る。

……今にも舌打ちしそうな顔。

直樹は知っている。

向井が洋子に想いを寄せていることを。
そんなのは見ていれば分かる。

「あ、イヤ……そんな約束、してないツスよね？」

「いいじゃん、行こうよ！それとも先約がある？秋月くん、モテそうだもんね」

「イヤ、そんなことはありえないツスよ」

直樹は、洋子よりも向井を立てる必要があった。
変なトラブルはご免だ。

それに、飲みに行くくらいなら寝てしまいたい。
そして寝てしまうより、残業でお金を稼ぎたい。

「イヤ、向井さん大変そうなんで、今日は残業させてもらいます」
そう言つて、何とか洋子の誘いをかわす。

と同時に、にこやかになる向井。

……とても分かりやすい。

直樹はこの事務所にバイトに来るようになり、自分の中で約束した
ことがあった。

司法試験を受けること。

タケシが何かヤバイことになったときに、助けられるように。

それとタケシのように自分で部屋を借りて、一人暮らしをしたかつ
たから。

母があの家にいるまでは、というよりも、母がいなくなってしまう
たら……

とにかく早くお金を貯めて、一人暮らしをしたかった。

この日、直樹は珍しく9時すぎまで残業した。

…今日の徹夜を含めて、新幹線の時間を除けば、何時間ブツ続けで仕事したんや？

さすがに疲れている直樹だが、向井はお構いなしに

「よし！俺も終わった！秋月くん、今から飲みに行くよ！」

「え！マジっスか…」

「何だよ、イヤなのかよ？もちろん俺が奢るよ？」

「…あ、ハア…」

当然、こういう付き合いも必要だと思う。

こんな機会の時はなるべく参加するようにはしている。
だけど今日は……

「……じゃあ1時間だけ」

「よし！そう来ないと！じゃあ行こうか」

2人はそうして事務所を出た。

向井と一緒に飲みに行くのは、これが初めてではない。

何度か経験があるので、大体のパターンは読める。

この人は時間を決めてやらないと、最後まで行くタイプなんだ。
そしてお酒も強くない。

30分もあれば、グデングデンになっている。

直樹は相変わらずお酒が飲めないため、素面のままそれに付き合っている。

「ところで秋月くん、仕事は慣れた？」

このセリフが、酔い始めた合図。

「もう随分慣れましたよ。でもやっぱり難しいですね。

知識があってから、それを応用する仕事ですからね。とても難しいです」

「秋月くん、それはね、この仕事だけじゃないよ。全部そうだよ。
人付き合いだってそうだろう？君は学校に友達がたくさんいるのか？」

「まあまあ、ぼちぼちというか…。あんまり時間がないんで、付き合いができないんですけど。」

僕、ちよつと前まで関西の方に住んでたんですよ。ツレっていうのなら、向こうに2人いますかねえ。」

「関西？それで変な関西弁使ってるんだな。言葉遣いがおかしいと思ったよ。」

この会話も、もう何度したか分からない。

そして次に必ずこう来る。

「秋月くんは学校で随分とモテるんだろうねえ。」

この質問に対しては、どう返事をして向井さんは声を荒げるのだ。

「イヤ、そんなことないツスよ。」

「嘘吐け！！君イ！背が高くてその顔で！モテないわけないだろう！俺なんかね！俺なんか……フラれた回数で地球一周できそうだよ！」

「まあまあ、向井さん。ところで、洋子さんってイカしますよねえ。」

資格持つてるし、見た目もキレイだし、最高ですよな。」

これが合図で、いつも2人の飲み会は終わるのだ。

「だろ？だろう、秋月くん！彼女はいいよ、本当に！」

「明日も仕事ですよ。二日酔いで洋子さんに会っちゃっていいんですか？」

「あ、そ、そうだな。じゃあそろそろ帰ろうか。」

ここまでで、ざっと1時間。

直樹にとっての向井。

こういう人は嫌いじゃない。

というより初めてだろう、慕える先輩というのは。

ほどほどの先輩の威厳、力というものを振りかざし、その3倍ほど直樹に優しくしてくれる。

いつものように、直樹は向井に肩を貸し、店を出た。

向井も司法試験目指して頑張っている。

いつも奢ってくれて、いろんな話を聞かせてくれる。
直樹にとって、初めての先輩。

……それにしても重たいな。

向井は隣で何かブツブツ言っているのだが、よく分からない。
こういう形も、愛おしく思う。
とても良い環境なのだと思う。
テレビで見たことのあるような、こんなシーン。
自分も社会に参加できているような気がして、とても心地いい。

「向井さん、もう今から家に帰るんですね？」

「おー、帰るよ」

「じゃあタクシー拾いますよ？」

「あー、ヨロシク」

直樹はタクシーを止め、向井を後部座席に乗せる。

屈んで挨拶をしようとしたその時、向井の手が直樹の頭をポンポンと叩いた。

「お互い頑張ろうな。僕も君には負けてられないからなあ。

司法試験、どっちが先に取るか競争だぞ。お互い頑張ろうな」

「……はい」

直樹はそう返事をする。

走り出したタクシーの窓から顔と腕を出し、笑ってこちらに手を振る向井。

お辞儀をして、手を振り返す直樹。

……これが、向井との最後の遣り取り。

直樹が尊重し、気を遣い、立ててきた、向井との最後の遣り取り。
直樹はもう二度と、あの事務所に行くことはない。

やって来たタクシーを拾い、直樹も帰途に就く。
この時間になると、もうバスがなあ…。
そんなに遠くでもないし、自転車で来ることにしようか。
今からお金を貯める練習をしておかないと。
いろいろ必要だからな。

運転手が何かと話しかけてくるが、それに軽く返事をしながら考える。

向井のクダの巻き方を思い出し、噴き出してしまふ。
遣り取りは目を見張るほどに、驚くほどに順調だった。

窓の外、寒さで澄んだ空気と合わさった街灯の流れは賑やかで綺麗だ。
メーターを気にして、直樹は少し家の手前でタクシーを降り、そこから歩いて帰ることにした。

…そういえば、しばらく走ってへんなあ。
ズボンのポケットに両手をつ込んだまま、歩く速度を少しずつ速め、駆け足に変えて行く。
白い息を早らせ、急ぐ必要のなかった帰宅を済ませようとする。

その角を曲がればすぐに家というところで、直樹はふと足を止めた。
夜道に赤い光がくると回っているのが見える。
パトカーだ。

「……？」

何台も停まり、周りに人がたくさん集まっている。
直樹は何気なく首を伸ばし、その光景を見遣った。
そしてまた、駆け足を再開する。

頭を過ぎったのは、何かあったのかな…程度。

家の門に差し掛かったところで、玄関の前に誰かが立ち、うろろろしているのが見えた。

そのシルエットは、お手伝いの島尾さんのもの。

直樹は慌てることもなく、駆け足しながら近づいて行く。

足音に気づいたのか、こちらを凝視する島尾さん、直樹だと気づいた途端にすごい勢いで駆け寄ってきた。

「お兄さん！直樹お兄さん！」

その時の彼女の顔は、尋常ではなく目を見開いていた。

ここで、何かあったと直樹も悟る。

…お母さん！？

「ど、どうしたんですか！？」

事態は飲み込めていないが、直樹は慌てる。

そして彼女が言った言葉は、

「け、慶也さんが…ッ！！」

まず、頭の中の収集はつかなかった。

島尾さんが言い間違えた、とも思わない。

直樹は母のことだと決めつけ、家の中へ駆け込む。

そのままリビングへと飛び込んだ。

「お母さん！！」

だが、その光景は母云々のものではなかった。

慶也がソファに横になり、毛布を被せられている。

頭にはタオルが巻かれており、その白いタオルは鮮血で真っ赤。腕にも巻かれている、大袈裟な包帯。

「!？」

直樹は一瞬でそれを確認し、落ち着くことなく少し視線を変えた。

隣には父が座り、向い合うように母が座っている。

震えている母。

おろおろ、おろおろと、何故か手に持ったティッシュを千切っては丸め、千切っては丸めしている。

2人ともこちらを向かない。
考えるのは後にした。

「慶也!!」

慶也の元へ駆け寄る直樹。

毛布を剥がすと彼はほぼ裸で、至る箇所に包帯が巻かれている。

「…ちよつ…ちよつと!何ですかこれ!?お母さん!何ですかこれ!!」

ひどい怪我だ。

包帯に血が滲み出している。

直樹は怒鳴った。

「お母さん!!こういうときは救急車を呼ぶんですよ!!」

急いで電話に駆け寄ろうとした直樹を、そこで制したのは父。

「直樹!」

と、久しぶりに名前を呼ばれた。

「何ですか!？」

直樹はそう振り返る。

「慶也はバイク事故を起こしたよ
父はそこから始めた。」

何を思ったか、慶也はキイの付いた原付を見つけ、それを盗み、乗り回したということ。

先ほど何台も停まっていたパトカー。

慶也はそこで、人をはねた。

その拍子に自分も塀に激突し、体を引き摺りながら家まで帰ってきたと言う。

それが、つい先ほどの出来事。

「慶也！お前何やつとんねんッ！？」

直樹はそう叫びながら、電話の受話器を取った。

もう唸り声しか上げていない慶也、こちらの声が届いているか定かではない。

「えっと、救急車は……」

まず頭に浮かんだのは110だったが、気を持ち直し119を押そうとしたそこで、また父が直樹を制した。

「待ちなさい」

その言葉に、直樹の手が止まる。

何を待てって言っただ！？

そしてもう一度、振り返る。

直後、父が直樹に向けた言葉。

それは直樹が取り合えずと表し、培ってきた骨組・骨格を確実にうねらせるものだった。

「お前はこれまで、誰のお蔭で育って来れた」
「……………」

—— 誰のお蔭で育って来れたのか。

そんなことをしている場合ではない、それしか頭になかった直樹、
「生んでくれた父母のお蔭だと思っています」

そして続けて、お二人の、と言おうとしたその言葉を、父は遮った。

「誰がそんなことを聞いた！誰のお蔭でこれまで順風満帆に來れた
と思っている！」
「……………」

……それを 深く 考える必要がないと、 思っ

お父さん

お母さん

慶也と

接してきました

だから、深くは……

「…………それは、深く考える必要がないと、これまで考えてきました」
その答えに、父が自分の考えと照らし合わせたかどうかは分からない。
い。

大きく息を吸い、鼻から出し、次に続く。

「じゃあまず考えなさい。お前がここで何をすればいいか」
いつもなら、ここで思うこともあるだろう。

だが直樹は一刻も早く、救急車を呼びたかった。

「救急車を呼んで、慶也の手当てをしてもらうことだと思いますよ」
急ぎ、面倒臭いように直樹はそう答える。

しかし、父は受話器を持っていて直樹の腕を掴み、それを下ろさせた。

「そんなことをしたら、慶也が事故を起こしたことがバレてしまうだろう！」

この人は……！！！！

「何言うとんねんツ！！あの頭見てみい！あの出血、尋常やないやろ！！見て分からねんのか！！」

お父さんの面子は、取り合えずどっかに置いて下さい……！！」
そう言うのと同時に、直樹は母の顔をちらりと見てみた。

相変わらずおろおろと手を震わせている。

状況を読みきれない直樹、それを確認して舌打ちが出てしまう。

その直樹に、父はいつもと変わらず静かに言った。

「直樹、慶也の代わりにお前が出頭しなさい」

直樹はいったん、その言葉を聞き間違えたと思った。

強張らせていた血液が、下へ下へと流れていくのを感じる。

——
笑って誤魔化せ。

直樹はそうしてみようとするが、笑えない。

父の目を直視しながら、今の言葉を聞こえなかったことにすることもできない。

「直樹、お前がバイクを盗み、乗り回し、人を撥ね、慶也も撥ねたことにしなさい。」

これは命令だ」

下に流れていったはずの血液が、また逆流する。
すすくと肥大するものにつられ、頭をもたげ始める。

「……………」

「これは取引ではない。これまでの分を私に返しなさい。
お前が誰のお蔭で生きて来れたか、考えなくても分かるはずだ」

体の中で熱いものを感じながら、直樹は力むことができないでいる。
頭を垂れ、父の胸に手を置き、寄りかかるように。

「—— 貴方、一体何を言ってるんですか……？」

この時のために、俺はここにいたんですか。貴方の先見の明は、こ
こに届いていたって、……そう言っんですか」

膝が折れ曲がって、どうしようもない。

貴方、と言った直樹に対し、父は君、と返す。

「君の自由にさせた覚えはない。

君の全ては以前からずっと、私が握っているんだよ。
認めなさい」

膝をついてしまった直樹は、もう何も言い返せない。
何も言えないが、そこで振り絞る。

「…… だったら、今ここで、殺してくれませんか、…… お父さん」

その瞬間、父は顔を硬直させ、テーブルの上の急須を鷲掴んだ。
それを、膝をつき自分を見上げる直樹に、思いつきり投げつける。

ガシャンッ！という音と共に、急須は直樹の額に当たる。
直樹は避けなかった。

息を切らせながら、その場を去る父。

直樹は額を庇おうともせず、父の方を見つめたまま。

半永久的に続くとは、決して思っていなかった、あれら。

確信した。

俺は、拾われたんだ、と。

もう、慶也のことは考えられないでいた。

母の横に座り込み、顔を見ることもなく、話をするでもなく、
時間が流れる。

そこに、父専属の弁護士がやってきた。

入念な打ち合わせ。

あくまで、あくまで冷静に、弁護士は直樹に言った。

「明日の朝には帰って来れるようにしますからね」

打ち合わせの内容も、その言葉も、直樹はこれ見よがしに自分の中
に刻み込む。

そして一言も発することなく、直樹はその弁護士に連れられ、警察
署へと向かった。

どんな気持ちかなんて、形容し難い。

幾千万と交わしてきたであろう、いろんな事柄の中で……

その弁護士と2人、車で移動する中、

誰のお蔭で生きて来れた

これについて、深く深く考えてみた。

自首する形になった直樹。

警官の尋問、質疑応答。

それらを打ち合わせ通りに済ませていく。

おそらく多額のお金を積み、慶也が轢いたその人に支払うのだろう。
幸いその人は生きているということだから。

これが夢なら……などとは思わない。

違和感なぞを通り越したその空間を、直樹は紛れもなく肌で感じている。

1時間前まで、自分の旗を夢見ていた。

直樹はそのまま留置されながら、自分の旗の柄・色・形などを破り捨てる。

……言われた通り、全てこなした。

直樹は次の朝一番で、釈放された。

迎えに来た弁護士を素通りし、走って家へと向かう。

「あれ、直樹くん！家まで送るよ。

お父さんにそのように言われてるから、乗ってくれなきゃ困るよ」
直樹はそれを無視した。

よく晴れたその日、直樹はまた白い息を吐きながら、以前ジムに通

つっていた頃の、あの走りを思い出す。

「ハア、ハア、……ハア」

息をすることだけに努め、あと100mくらいかな、
そう思ったところで、全力疾走を始めた。

そして迷いなく玄関のドアを力強く開け、階段を駆け上がり、自分の部屋へ飛び込む。

昨夜考えた、必要最低限のものをまとめながら、

多勢と無勢

人選

間引き

…… 最初から間違っていたのは俺なんかもしれんな。

それは、生まれたときから……

大きめのカバンに全てを詰め込み、一度部屋を見回してみる。

そしてバンツ！と力強くドアを閉めた。

階段を下りようとしたところで、その下に母が立ってこちらを見上げていることに気づいた。

直樹は一段飛ばしで階段を駆け下り、母とすれ違い様ニコツと笑って見せる。

そしてそのまま通り過ぎ、玄関で靴を履く。

「直樹さん……直樹さん……」

か細い母の声は、確かに直樹の耳に入ってきている。

「どこ行くんです、直樹さん」

靴を履き終え、頭を上げた直樹、

答えた。

「どこかへ行きます」

家の雰囲気から、父が会社に行っているということが伺い知れた。

「どこかって……どこへ？」

その問いに答える必要はないと思った。
なるべく笑顔でと努めている直樹。

それに対し、母は言った。

「行き先が分かったら、教えてちょうだいね」

……涙が出そうになったが、直樹はそれをしない。
明るく笑いながら、

「ちよっとお母さん、止めてくれないんですか？これって家出ですよ？」

手を前で組む、見慣れた母の姿勢。

直樹は笑顔をやめ、口を閉じた。

クツと唇を噛み締める。

——これが、育ての親 母との、今生の別れ。

最後の言葉は、先ほどのそれ。

慶也の姿は、あの時が最後。

直樹はそのまま家を出て、歩き出す。

一瞬タクシーで駅まで行こうとして、やめた。

よく晴れたその日。

直樹は目を閉じて、天を見上げる。

目を閉じたまま、太陽を探す。

そして、自分の赤を凝視する。

ヤバイな、俺……

俺は目的の、どの辺りから……

もう一度振り返り、我が家だった家を見つめ、

……そうして、歩き出す。

試 1

新幹線代が高額であるということを、また改めて認識した。
もつと安い移動手段があるのは知っていたが、一刻も早く
あのじゅうつたんやスリッパやカーテンや

あの窓から見る邪魔な電柱や

それらのものを、とにかく早く払拭したかった。

自由席に座り込み「会いに行くよ」と一人呟く。

……そういえば、一昨日も昨夜も寝てないだった。

忘れてたよ。

あつちに着くまでの数時間眠ろうと思ったが、案外人が多く、発車
して1時間もしないうちに直樹の隣には見ず知らずのおじさんが座
っていた。

眠れない。

この眠れないのは、このおじさんのせいにするのが都合がいい。
そう思い、窓から外を眺めることにする。

「あの時」とか「その日」とか「明日」とか。

「もし」とか「たら」とか「れば」とか。

「しかし」とか「それじゃあ」とか「違う」とか。

……思い起こせば、言うことがたくさんあったよな。
そんな気がする。

そうやって頭の中で揉みくちにし、ぎゅっと握り締め、一箇所に
寄せて……。

……いや、特別やない。

心配するなつて。

俺はそこまで愚かじゃない。

誰のせいでもない。

「もし」と言い、「たら」と言い、「れば」と言い、
握っては広げ、握っては広げ……

直樹はこの移動中、そんなことばかりをしている。

……現実のものとし、今後一体俺は、

それを取り越え、更にその先にあるもの……

父に急須をぶつけられた額がずっと痛む。

風景を凝視していたはずの視線は、いつのまにか窓枠に固定される。
自分の今後についてはまだ考えられないでいたが、ようやく慶也の
ことを考えるタイミングを見つけた。

一週間ほど前、慶也は話していた。

何だか疲れてきた、と。

頑張れば頑張るほど、成績で上位へ行けば行くほど、周りの人間が
離れて行く、と。

「テストなんて、勉強すればするだけ点数に表れるだろ？何で、頑
張って嫌味を言われなきゃいけないんだ。

妬みっちゅーか嫉みっちゅーか……みんなスゲエよ、そういうのが」
直樹は、それは無視するしかないと考えていた。

だが慶也の性格を考えると、無視することはできないだろうとも思
った。

「勉強のできるヤツが集まった学校でも、1位から最下位があるからな」

それは永遠のテーマだとも言えず、慶也のことを考えてそう言ったのだ。

「なあ慶也、しばらくグローブとボール、触ってないんじゃないか？ キャッチボールでもするか？ 俺に教えてくれよ」

一週間前の遣り取り。

たった、一週間前。

……そうやねん。

誰も彼も、みんな必死なんや。

直樹が向かうのは、当然パクとタケシの住むあの街。

行つていいのかどうなのかは分からないが、もうあそこしか行くところがない。

直樹はパンパンになったカバンを抱いたまま席に座り、

まだ着かないか

まだ着かないか

そう思いながら、目で追えない景色を見つめている。

寝不足が祟ったのか。

乗り物酔いした、そんな気分だ。

やがて新幹線が停まった。

ようやく着いた。

取り合えず、タケシの勤め先を直樹は知らない。

直樹は電車を乗り継ぎ、パクの元へと向かう。

なるべくお金を遣わないようにとそう思い、駅からは見慣れた街を歩いてパクの職場へと向かう。

そう。

俺はもう、こっちの街の方が詳しいんや。

迷わないんや。

ちようど良いと思えばいい。

直樹はこの時、自分を勇気付ける必要があった。

向こうの天気も良かったが、今日はこっちも良い天気だ。

フットワークを軽めにし、パクの元へと急ぐ。

徒歩でも20分。

急いだので15分。

その間、考え事はせずに向かった。

その場所を、直樹はまずいろんな角度から眺めてみた。

それから開きつ放しのシャッターの中を覗きこみ、作業をしている

おじさんに声を掛ける。

「お仕事中すみません。健さんお見えになりますか」

騒音の中、それは一発でそのおじさんの耳に届いた。

おじさんは振り返り、

「けん？けん……坊か！ちよつと待つとれよ」

そう言つて、パクを呼びに行つてくれた。

実は、とても居た堪れない気分なのだ。

仕事中に仕事の邪魔をする。

そして続ける思う。

今日は勘弁してほしいな……。

5分ほど待っただろうか。

向こうから駆け足で作業着姿のパクが近づいてきた。
直樹は、堪えろ、と噛み締める。

「おい、何や直樹。忙しいやつちゃんー！すぐ来るんやつたらお前、こないだ帰らんで良かったんちゃうんか？何や、学校休みか」

学校……！？

学校のことなどすっかり忘れていた。

学校は一体どうなるんだろう。

……どうもこうも、……もう行けない。

「おい、ほいでお前、何やねん、そのでっかいカバン！何企んどんじゃ……」

そこまで言つて、パクは直樹の顔色に気づいたようだった。

そして、

「よっしゃー！折角なあ、遊びに来たんや。俺も上がるわ！」

そう言つた。

「え、何言つとんねん、そういうわけにはいかんやろ。……ごめんな、仕事中に」

「せやから謝るなつて。待つとれ、親父に言うて来る」

パクが感じたもの、それは直樹の顔色に加えたものなのだろう。

そんな馬鹿な話はない。仕事が終わるまで待つよ。

そう思いながらも、しかし直樹は止めるのをやめた。

次にパクが姿を見せるまで、10分ほどしか待たなかった。

「タケシに電話したら、あいつも来るつてよ。ドコ行くかー？サボツてドコ行くー？」

笑いながらそう言うパクに、直樹は素直に従う。

説明をしなきゃいけない。

そう思うが、まだまだ腰は重い。

2人はいつもの軽トラに乗り、タケシとの待ち合わせ場所へと向かう。

タケシはすでにその場所に立っていた。

「何や秋月、学校休みかいな。こんなにすぐ来るんやったら、いっそおりゃあ良かったやないか、コツちに」

タケシにはちゃんと説明しないと。

パクは何かを察してくれている。

タケシにはちゃんと言わないと……。

……頃合を見計らおう。

「まあ、休みみたいなモンやな。タケシも仕事中やったんと違うの？」

「イヤ、今日は夜からやねん。取り合えず何か食いに行かんか？腹減つとんねん」

……そこで話そうと決めた。

「待てエ、タケシ」

そう言ったのはパク。

「腹減つとんやったら買い食いするぞ。今日はよ、今から行くんはバッテリーセンターじゃ！」

なあ直樹、思いっきり思いっきり、イテこますでエ！」

パクの意図するところは、完全には分からない。

でも完全には腹が決まっていなかったもので、とてもありがたかった。バッテリーセンターで打つのは初めてだし、俺は下手クソだろうし、絶対に持て余す。

考える時間はあるだろう。

「よっしゃ！タケシ、お前は荷台へ寝っ転がれ！こりゃあ2人乗りやからな。ポリに見つかんなよー？それと立ち上がるな」

「な！何で俺が荷台や！？」

「当ッたり前やろ。お前はついでや」

「この場合、運転手・助手席・荷台決めるジャンケンやる！」
「全くグダグダうるさいのう！しゃあないな、ほんならジャンケンじゃ」

……結果、助手席がパク、荷台はタケシ、運転手は直樹に決まった。
直樹は大学合格後、すぐに普通免許を取っていたが、完全なペーパードライバー！。

すつかりと、2人の空気。

「……よし！じゃあ走るからな！パクウ！見いてよ！？ちゃんと見いてよ！？」

「うわッ！！めっちゃ怖いやんけ！お前、大丈夫か！？」

後方からは何やらタケシの声もするが、よく聞こえない。

軽トラは、ユラユラと蛇行しながら走って行く。

運転中、何度もゴツン！ゴツン！という音が聞こえてきた。

おそらく荷台で横になっているタケシが、どこかにぶつかっている音だろう……。

車を運転するのは教習所以来。

まっしぐらに、ただただ運転に集中できる。

パクの言う通りに進み、バッテリーングセンターに着いた。

集中は解けるが、憂鬱は消えない。

タケシは車を降りた途端、

「お前、何回ノッキングすんねんッ！何回も頭打ったわ！帰りはまたジャンケンやからな！」

と言ったが、

……謝るのを忘れた。

話すタイミングを見計らっていた俺は、それを話して一体どうしょ

うってんだ。

2人にだって生活があるんだ。

「よっしゃー！ほな行くで！110キロの真っ直ぐのヤツや！」

パクは明るく振る舞い、やはり直樹に気を遣ってくれている。
タケシはいつも変わらず。

表立って何か窺える、そんな様子はない。

俺も明るくしないとな。

そう思うのだが、すぐに椅子に腰を掛け、膝に肘を置く体勢。
そして、俯いてしまう。

アピールではないのだが、そうなってしまう。

「おいパクウ！早よ代われ！」

カーン！カーン！と、いい音をさせているパクの姿を見る。
平日の真昼間ということもあり、このバッティングセンターはガラガラ。

パクだけがいい音をさせていた。

……間違い探しを試みよう。

そう考えると、

追って 追って 追いかけて、戻って行くとどうしても

生まれた

と、そこに辿り着いてしまう。

降り立ち、思案と銘打ち、悩んでみるのだが、何も覚えていない。

忘れたのが罪なのか

無知であることが罪なのか

それに対する罰だと考えたら、
俺の責任というのは、一体――…

そりゃあ思い出せば、顔が青くなったり、身の毛がよだったりする
ような恥ずかしい失敗は何度もあるよ。

だけど、これに関しては俺は悪くないでしょう？という問いに対し
て、誰かに、

お前は悪くないよ、と

……言ってもらいたい。

「やっぱりカレーは、母ちゃんのが一番美味い思ってたねん」
と、パクが言っていたのを思い出した。

俺にも、そういう、……なあ、似てて等しいものが、1個か2個か
3個か、あってもいいやないか……。

「おい、直樹」

パクが呼ぶ。

ネットを上げて、手招きをする。

「タケシは後、後！お前もやってみ。スカーン！と何発かなあ！」

よし、と重くて重くてしょうがない腰を上げる。

まず、早速バットの持ち手を注意された。

……なるほど、左手が下で、右手が上ね。

「おいおい直樹、手と手の間に隙間があったら振りにくいやろ。そ
れも引っ付けんねん」

「ああ、なるほどな」

時速110キロ・ストレートのみのバッティングマシン。

これがなかなか、うまくバットに当たらない。
バットをブンブン振り回す直樹。

……無心で挑戦したはずなのだ。

20球ほど経過した頃には、手のひらが痛くなった。
左手の親指の第一関節当たりが擦り切れたした。

「おい秋月！早よ代われや！」

そのタケシの声に、

「ちよつと待つてくれよ。まだ1球も当ててねえ！っていうか、隣空いてるじゃん！っていうか、ガラガラやん！別のヤツで打てばエヤん。」

悔しいねん、俺は」

バットを振るという行為が、こんなに体力を消耗するということを知らなかった。

40球くらいになると、息が切れ始める。

親指の皮がめくれ、とても痛いのがまた悔しい。

「くそうッ！！」

思わずそう叫んでしまい、バットを地面に打ち付けた。

……悔しくて、しょうがない。

タケシの催促がなくなったことにも、パクのコーチがなくなっていることにも気づかず、ひたすらボール目掛けてバットを振り続ける。一度、球切れになってしまった。

無駄遣いはやめよう、そう心に誓ったのも忘れ、財布の中をまさぐり小銭を探す。

「おー、エエでエエで！俺が用意する。好きなだけやれや！」

パクのその声に返事をするのもなく、身構えた。
大きくバットを振る。

そのバットがボールを掠めた。

パクのような、カーン！とかキーン！とか、そういう音ではなく、パスツという音。

「おー！ 当たった当たった！！」

後ろから2人の声がする。

……何球目からだっただろう。

悔しいのは最初からだっただ。

涙腺ってというのは、とても厄介だ。

「……やったでー…当たったで！見た？2人ともちゃんと見とった！？当たったぞー！！」

流れる涙を制御することができず、ボロボロボロボロと泣きながら、直樹は2人を振り返る。

あの時と同じで、止めることができない。

……だっただら、喜んでるように見せよう。

「次振ったらホームランちゃうかなあ！？なあ！？なあ！」

そんな直樹を、パクとタケシはじっと見つめている。

この空気、固まってしまっていない。

2人の目線も、悲壮に満ちたものではない。

ネットを潜って2人が入ってきた。

「直樹、危ないからちよつとこっちへ寄れ」

パクの言葉を最後に、しばらくバシュン！バシュン！というボールの音だけがそこに流れた。

止まらない涙と、何も言わない2人に戸惑ってはいるが、近づいて来てくれるだけで嬉しい、そんな気がする。

「……悪イ。俺、オトナやのにな、……また捨てられた」

顔をこしこし擦りながら、直樹は2人にそう言った。

3人はそこから場所を移し、ファミレスに入った。
そこで直樹は話し出す。

自分は捨て子である、と。

3歳のときに、あの両親に引き取られた、と。

直樹はそこから事細かに約30分間、覚えている限り、思いつく限り、自分のことを話した。

それを聞いて、まず最初に答えたのはパク。

「うーん……あの慶也がなあ……」

タケシは直樹の話を聞いて明らかに不機嫌になり、まだ手を付けていなかった目の前の料理をガツガツと食べ始める。

まずは何も言わなかった。

「せやけどよう直樹。お前、ほんならこれからどうすんねん」

実を言うと、まだそこまで考えは至っていない。

少しの間、沈黙が流れた。

タケシの鳴らす、食器の音だけが響く。

「俺、どうしたらいいと思う？」

そう聞きたかった。

決めてくれ、というのではなく、あくまで参考に……

……イヤ、ちやうな。

直撃してほしいと思ったんだ。

こっちにいろ、と。

そう言ってもらいたかった。

しかし、パクの意見はそれとは真逆のもの。

「……直樹、お前やつぱり向こう帰れ」

それを聞いたタケシの、ナイフとフォークの音が止まったのに気づいた。

「だってお前、あと2年やる？。。。大学。アツコ出てんのと辞めてんのとじゃ、雲泥の差やぞ？」

手足首引つ込めとつてもエエやんけ。

まあ、オヤジさんはよう分からんけど、母ちゃんと慶也は心配してるぞ？」

……帰れねえ。

あそこにはもう、俺の居つく場所はない。

あの冷たい夜に、俺はそう決めたんや。

そう考え、直樹は俯く。

期待していたものと違う答えに空かされた気がするのと同時に、パクの言い分ももっともだと思った。

パクは続けて言う。

「何するにしても金いるやん。お前が援助を受けるっていう名目で、こっちにおる言うんやったら分かんて。

でもちやうやん、お前……」

と、そこで

ガチャガチャンッ！！

タケシが皿にナイフとフォークを叩き付けたのだ。

同時に、

「パクウッ！！！」

怒鳴るようにタケシが言う。

「秋月のよう！今の状況でなあ！こうなったら、今一番ボンボンなんはお前じゃッ！！捨てられて！見捨てられて！お前に分かるワケ

ないやんけ！

秋月が今、何言ってるか、お前には分からへんよ！！」

「ハアッ！？今そんな話してへんやろ！俺を持ち出してくるってのは次元が違うやろがッ！！」

ここで2人の小競り合いが始まった。

2人は俺の両親のことも……あの2人のことも悪く言わないんやな……。

確かに、そんな気分じゃない。

直樹は伏し目がちなのをやめ、顔を上げる。

デカ過ぎる怒声で、2人が何を喋っているのかよく分からなくなってきた。

直樹はそれを止めるように、

「決めた！……悪イ、2人とも。俺、あっちへ帰るわ。悪イ、ほんまに」

「……」

それを聞いて2人は言い争いをやめ、同時に直樹を見る。

タケシが唇を噛み締めた。

そしてはつきりと分かるほどに怒りながら立ち上がる。

「秋月！ソレ本気か！？もしコツチにおるんが、コイツが言うみたいに何ぞ問題があるつちゅーんやったらその問題、俺に言え！！

ゼ二金の問題やったらなあ！俺がお前の面倒見る！！住むトコないんやったら、俺んトコで一緒に住めばエエ！！

2回捨てられたんやったらなあ！3回目には捨てるヤツがおったらエエんじゃ！！今度は俺がお前を拾う！！

学校なんか休んどきやエエやないか！よう知らんけど、休学ってあるんやろ？

気が済むまでこっちにおればエエやないか！俺がお前を拾う！何か問題があるか！？」

滲む目でタケシを見上げた。

直樹は思わず、思ったことを口に出してしまっ。

「……もんだい、ない」

しかし、それは直樹の望むもの。

あの話の後、直樹はタケシのマンションに厄介になることになった。

自分が思ったところ、考えたところで、

……家には帰りにくい

果たしてそんなレベルなんだろうか。

パクウが俺に「帰れ」と言ったのは、そのレベルで考慮し、考えてのものだったと思う。

タケシはというと、そのもつと先にあるレベルでの、今回の対応。

俺はというと、……よく分からない。

それが正直なところ。

敢えて、

敢えて言うのであれば、俺の中で30%くらいだろうか。

捜しに来てくれないか、という部分。

母と慶也が俺を心配し、考えた結果「あそこじゃないか？」と、連れ戻しに来てくれないだろうか。

……でもあの人は、そんなものは必要ないと言っのだろう。

だから敢えて、

敢えて言うなら30%。

この頃はまだ、学校を辞めたという意識は皆無に等しい。

しばらく厄介になるよ、そんなつもりで居座っている。

これは真意であり、そうするというよりは、そうなると考えていた。

直樹も一週間ほどは、ものの見事に呆けていた。
タケシが自宅に持ち帰る仕事を手伝う程度。

あとは美奈子がやっていた掃除・洗濯・食事の用意などを取り上げて、やっていた程度だった。

いくら貯金はあったが、これでは心配だと考え始めたのは、この暮らしを始めてから一週間ほど経ったその日。

経緯から考えてパクには相談しにくかったが、タケシは朝から晩までどころか夜中もない日が多い。

直樹は仕事の面での相談を、パクに持ちかけた。

パクがあの時言った「帰れ」という言葉は、少なからず自分の中で理解できている。

直樹の相談に対して、パクの返事は投げやりなものではなかったが、

「お前なあ、この期に及んで仕事選ばうって考えとんちゃうんか。

やろう思ったら何でもあるやろ、お前。

ほら、アソコのコンビニ見てみい。アルバイト募集いうて貼っとるやないか」

……どこかで甘い考えがあったのかもしれない。

というよりは、満々だった。

ウチで働くか？

そう言ってくれるんじゃないかと、パクの顔を見ながら思っていた。

俺のこの、染み付いた体質。

この際、体臭も含めておこつ。

根絶やしにしないと。

そう思う。

直樹はまず、コンビニのバイトから始めることにした。

夜の方が時給が高いのだが、直樹は昼間の勤務時間に決めた。
なるべく美奈子を家で一人にしないように。

夜、留守にしないように。

そのコンビニのバイトを一週間も続けていると、考え出す。

俺は一体……

時給何百何十円 × 時間

1時間おきに、そんな計算をしてしまう。

体質や思考の改善と銘打ったにも関わらず。

この俺の性根の腐り具合。

なのに

俺は一体何をやってるんや。

そう考えてしまうのだ。

職業差別をするつもりはない。

そう思いながら、はつきりとそうしている自分。

弁護士事務所に勤めているのがこうで、アルバイトはああで……

そんなことを言っている場合ではないのが今の俺なのに、俺はまだ
まだ以前の生活が諦めきれないでいるんだろ。

捨てたのではなく、捨てるしかなかった。

いや、……捨てられた

捨てるしかなかったにも関わらず —— ……

この日、直樹は美奈子と2人で夕飯を済ませ、後片付けをしていた。
美奈子の食器をシンクに運ぶ際、彼女が随分と料理を残しているこ
とに気づいた。

彼女の場合、好き嫌い云々以前の問題なのだ。

食べてはいけないものがたくさんあり、自分はコレが食べたいとい
う欲が通らないことが多い。

当然それらを考慮して、美奈子の食べられないものを作っではないな

いのだが。

皿を見ると、ほとんど手の付けられていない料理もあり、少し心配になる。

直樹がこの部屋に来てまだそれほど日にちは経ってはいないが、その間だけでも日を追うことに彼女が部屋に閉じこもっていることが多くなった。

この日も食事を済ませると、美奈子はすぐに自室に入り、ベッドに横になっている。

洗い物を済ませ、リビングでテレビを見ていた直樹。

美奈子の部屋からガタンッ！という大きな音に、考えることなく駆け出す。

部屋のドアをノックしながら、

「どうした！？何かあった？美奈子ちゃん！？」

……返事がない。

直樹は勢い良くドアを開け、部屋の中へ飛び込んだ。

床にうつ伏せになって倒れている美奈子の姿。

「おい、大丈夫か！？どうした？調子悪い？」

美奈子は左胸を押さえていた手を離し、少し笑いながら、

「……えー、何もないよ。寝てただけ」

そんな嘘を吐く。

「あのなあ、君の場合、氣イ遣って体調が良いフリしたら、逆に周りに迷惑掛けるんやぞ？どうした、心臓痛いん？」

「……痛いっていうか、ちょっとひきつけみたいになっただけ」

そう言っで自分で立ち上がり、布団の中に潜り込む。

初めて会ったときの、吐血した美奈子の姿を思い出した。

それ以来目の当たりにしてきた、彼女の体調の悪さ。

……手術すれば、良くなるはずなんだよ。

丸くなってベッドに潜り込んでいる彼女を見つめながら、直樹は考
える。

俺には何ができる……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2369ba/>

正道の系譜

2012年1月9日22時51分発行